
剣製を継ぐ者

緋の獵犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣製を継ぐ者

【Nコード】

N0776W

【作者名】

緋の猟犬

【あらすじ】

テンプレのように死んだ龍士りゅうじは神に出会い、転生する

フェアリーテイルの

二次創作です

チート系が嫌いな人は読まないことをお勧めします

十一月六日、キーワード追加

プロローグ

「……………何処だ此処？」

それが俺が目を覚まして最初の言葉だった。

眼が覚めた様じやの

「！……誰だ!?!」

突然頭に声が響いたから叫んじまった

どうやらちゃんと成功した様じやな

?? 何言ってるんだ？

「何だかわからんがとりあえず姿見せやがれっ!!!」

おおっ、スマンの……………

「ほれ、これでどうじや？」

そう言っ出てきたのは一人の老人だった。

「まあ急に出て来たことは無視するとして…アンタ誰だ？」

「まあ大雑把に言っとお前さん達の所でいう『神』みたいなものじや」

かみ…………『髪』？

「『髪』じゃない!! 『神』じゃ!! アイアムゴッド!!」

!!?!?心を……読んだ……だと?

「神なんじゃからできて当然じゃろう」

「どうやらマジで神っぽいな……」

「漸く信じて貰えたか……さて、本題に入るぞ……」

「お前さん、今自分の現状分かっておるか?」

「は? どういう……ッ!!!?」

「そうだった……俺死んでたんじゃん……」

「そうじゃ……ナイフ持った男に胸刺されてほぼ即死じゃった」

「やっぱりか……」

「前からこうだったんだよな……」

「親父は俺が物心つく前に仕事帰りに事故死」

「母さんは俺と妹を育てる為に働き詰めた結果過労死」

「妹は学校の火事で焼死」

「そして桜……俺の幼馴染は俺との待ち合わせ場所に向かう途中に通り魔の無差別殺人の被害者に……」

「それで偶々お前さんのことを見てたんじゃが……」

「??? どうした?」

「如何にもおかしい……そう思ったのじゃ」

「……………如何いうこつた!？」

「ああ…儂等の世界…つまり天界じゃの…その天界ではお前さん達下界の生き物たちの寿命やその他諸々を書き表した物があるんじゃないかなあ……………お前さんの異常じゃった」

?……………異常?

「うむ、本来なら不幸なことが起こればその分良いことが起こるようにしてるんじゃないかな……………」

お前さんの場合それが逆に反比例のようになっておるんじゃない」

…つまり悪いことが起きた分だけ良いことが起きなくなるってことか?

「そういうことじゃ…おぬしの身近な人物の死もそれが原因じゃろうな……………」

じゃあ親父も母さんも悠美いみも桜ひらも

俺の所為で死んだのか

「……幸い霞城桜は別の世界じゃが転生することに成功した
……本人も望んでおったしな……」

「ツー！桜が！？」

「そうじゃ……そしてお前さんもそこに転生することになる」

「……その世界の名前は？」

「『フェアリーテイル』といったかの？」

確かマガジンだったか……参ったな桜が隣で読んでたが俺は読んだ
ことが全く無い

「何か能力も付けるとしようか……」

好きなのを言ってみなさい……ただし二つ、三つだけじゃぞ？

因みに『フェアリーテイル』は魔法がある世界だった筈じゃ」

「何だ？えらく気前がいいな？」

「原因不明とはいえこちらの不手際に変わりは無いのじゃ
それぐらいして当然じゃよ……」

二つあれば十分だな……

魔法か……ならやっぱりあれがいいな

生前俺が大好きで最も憧れた男の能力

それに少しおまけを付けて……

「……め」

「相分かった……ではこの扉を潜るがいい
お前さんの師がおるからの………」

「ああ、言ってくるぜ………」

そう言っつて俺は目の前の白くて大きな扉を潜った

プロローグ（後書き）

つい書きたくなつて書きました
他に連載あるのに……

誰かに見送られて旅立つというのは何処かむず痒いものだな…

「じゃあ、行ってくる」

「ああ行つて来い…くだらん失敗して戻つて来るようなことはするなよ」

師匠…エミヤシロウ《アーチャー》（最初に師匠と呼ぶことをアーチャーが拒否してきた）はそう最後まで嫌味なことを言ってくる。

「ふふつ、シロウ、そんなこと言つて本当は嬉しいのではないですか？

自分が最も望んだことを龍土がしようとしていることが…」

「なっ!?!?……バカなことを言うなアルトリア!……」

私は唯……気まぐれで態々指導した男がつまりらん所で死なんようにだな……」

「とか言いながら嬉しそうに指導してましたよ?こんなに物覚えがいいから教えがいがあるのは分かりますが……」

そうもう一人の師匠…アルトリア《セイバー》がアーチャーを笑いながらからかっている。

……あつ、拗ねた。

「そろそろ準備できたかの?」

そう言いながら神がこちらに寄ってくる

どうやら転生の準備は出来てるみたいだな

「ああ、出来てるぜ」
「……………行くんですね」

少し寂しそうに笑いながら俺の頭に手を置いてくるアルトリア師匠

……………今の俺は肉体年齢を向こうの時代に合わせて小さくしているらしい

くそっ 恥ずかしいじゃないか……………っ!!

そんな俺に気づいたのか微笑みながら手を放すアルトリア師匠

俺は息を一つ吐き、神の方を向き

「準備できたぜ」

俺の目を見た神は笑った後、真剣な表情にする

「今からお前さんをかじり霞城桜がひらく転生した時期と同じ時期に転生させる」

無言で頷いた俺に頷き返した後、

「おお！そう言えばお前さんに言伝をするように頼まれていたのじやった」

「言伝？桜から……………か？」

何だ？追って来るなどか言っんじやねえだろうな!？

身構えていると神は微笑みながら

「『早く迎えに来てね!!』っだそうじや」

!!!!!!!!!!!!!!

「……………気を付けて行けよ（ボソッ）」

小声ではあったがしつかりと聞こえた言葉

「ああ！行ってくる」

そう言っアルトリアて今度は師匠に向き直る

「私からは『ペンドラゴン』の名とこの鞘を……………」

そう言っエクスカリバーて俺の手に『約束された勝利の剣』の鞘、

『全て遠き理想郷』アヴァロンを持たせてきた

「えっ？でも……………」

「不死性はありませんがその分魔力消費量は下げてもらいました。これでああなたの大切なものを守るように」

俺の手をぎゅっと握アルトリアってそう言う師匠
見ると師匠エミヤも頷アキいていた

「……………ありがとう」

二人にお礼を言うと二人は笑って頷いてくれた

「……………ふむさながら『リュウジ・E・ペンドラゴン』エミヤといったところ
かの？」

「……………そうだな」

「では……………行くぞ？」

「ああ……………頼む」

そう言った直後、俺の視界は光で一杯になった。

師匠が師匠なら弟子も弟子（前書き）

暫くオリジナルだと思えます。

時系列は原作のおよそ八年前です

それと今回若干グロテスクな描写（になるか不安だが）が出てきます
ご注意ください。

師匠が師匠なら弟子も弟子

閉じていた眼を開けると一面緑の世界

つまり森のど真ん中に立っっていた

「やれやれ、もう少しマシな場所へ送ることは出来なかったのかな？」

その場で一人その場にいない神に愚痴る

師匠の影響か俺の口調もこんなことになってしまっている。

まあ比較的軽い方だがね……

「……とりあえず、歩いてみるか……」
そう呟き、前に向かって歩き始める

「むっ？」

歩き始めて数時間何度か思ったがやはりおかしい

物音一つしない上に気配も……何？

「気配が四つ……」

俺の『覇気』にかかった者達がいた

……おそらく人間だな

「しかもこれは……」

どうやら三人が残りの一人を追っている様子

「……やれやれ、急いだ方がいいな」

そう呟き、その場で跳躍して木の上を進んでいった

そのおよそ5?程先では

「はあっ、はあっ、はあっ」

息を切らしながらも自分が今出せる最高のスピードで逃げる少女と

その後ろにはその少女を追う影があった

「回り込め!!挟み撃ちにするぞ!!」

「「応!!!!」」

そう言って左右から二人の人影が少女の斜め前方を陣取っていた

「追い詰めたぞ……………」

ジャリッ

そう砂を踏みしめ、十字架を模したような鏝に何か宝石が埋まって

いる剣を構えながら少女に話しかける

少女はとつくに体力が尽きているため抵抗することが出来ない

「観念するんだな……『化け物』め」

化け物

その言葉で少女は俯き、抵抗が止む。

男は掲げていた剣を一気に振りおろし「グルルルル………ッ!!」
はしなかった

突然響く唸り声に三人は警戒し、少女はまだ俯いていた

そこに

ぐしゃっ

「「ッッッ!!?!?!?!」」

先ほどまで剣を掲げていたにそれが襲い掛かってくる

男は悲鳴を上げる暇もなく体から血を撒き散らし、絶命した。

「ひ、ひいつ」

「に、逃げる」

少女は呆然とし、残った二人の男は武器など放り捨て、逃げだした

その二人に狙いをつけ、襲い掛かっていく

「ぎゃああああつ……！！」

「た、助け……」

その生き物は一気にジャンプし、距離を詰め二人に牙を向けた

男たちは断末魔の叫び声を上げ、先ほどの男の後追って行った

少女はいまだに呆然としていた

普通なら少女が見たら発狂するか卒倒するものだが目の前の状況が分かっていないのだろう

そんな少女の前にモンスターは姿を現した

漆黒の毛で覆われている体は2m半はありそうな巨体

尻尾は無駄な作りが無く、滑らかな鱗で覆われていた

そして、こちらに振り返って向いた眼からは赤い光が漏れていた

「やれやれ、やはり厄介事だったな」

ぐわっ

「ぎゃああああっつー!!」

何かで刺す音とさっきのモンスターの叫び声が聞こえてきた

いつまで経っても衝撃が来ないで変わりに男の人の声が聞こえてきた

「大丈夫かね？」

その声が聞こえてきたと思ったら頭に手が置かれる感覚がした

その手はとっても暖かくて、優しい気持ちを感じた。

ゆっくりと目を開けるとそこには赤くてロングコートみたいな服を着たやや白みがかった黒髪に普段は鋭そうなめ優しくこちらに向けてた男の人がいた

私は男の人の姿を見た瞬間安心したのか意識が止みに落ちていく

「おっと、気絶したか……まあこの光景を見たら当然か……」

俺は三人の男の死体に目を向ける

おそらく先ほどの三つの気配はこの男たちだろう

こいつ等が騒いだのを『こいつ』が察知したということか

……やはり厄介事か

俺も師匠と同じで幸運値はEなのか？

「むっ？」

一人悶々と考えていると先ほどの生き物が立ち上がり、こちらを睨みつけてきた

………というかあれ完全にナル○クルガじゃないかっ！？
なぜこんなところに、しかも怒ってるし

つい○r zの姿勢を取りかけた俺に向かってナルガ○ルガが襲い掛かってきた

「おつと危ない」

それを実際危なくはないがそんな声を出しながら後ろの木の陰まで跳躍する

「ここなら大丈夫だろう」

俺が惹き付けておけばいいしなと考えながら少女の体を木に立て掛ける

「やっ」

気持ちを切り替え、ナルガク〇ガに向き直る

これが俺の最初の実戦、ということだな

「まあ、不足はないがね」

少し笑い意識を集中する

「トレース
オン
投影、開始」

創造の理念を鑑定し

基本となる骨子を想定し

構成された材質を複製し

製作に及ぶ技術を模倣し

成長に至る経験に共感し

蓄積された年月を再現する

「トレース
投影、完了」

投影したのは師匠が好んで使った夫婦剣『干将・莫耶』

それを両手に構え目の前の敵を睨む

「さあいくぞ迅竜、狩られる覚悟は充分か」

師匠が師匠なら弟子も弟子（後書き）

このモンスターですがもろナルガクルガです（笑）

それと龍士は基本的にエミヤシロウと投影するものは同じと考えて下さい。

…まあオリジナルも出しますが（ボソッ
感想など戴けるととても嬉しいです

V S 迅竜 初戦闘が人外とは如何なものか…（前書き）

先ほど確認しましたがお気に入り登録が5件も！！

こんな駄文を読んでもくださって有り難うございます

これからもよろしく願います

今回は迅竜戦です

と言ってもあまり長くはないですけど・・・

V S 迅竜 初戦闘が人外とは如何なものか…

互いの体が交差し、通り過ぎる

ズバツ！！

相手を切ろうと互いに刃を煌めかす

「……成程…迅竜の名は伊達では無いということか」

龍士の頬には大きく裂かれた傷があった

「……だが」

ブシューウア

「グア！！！！？？」

迅竜の体には龍士以上の傷が刻まれていた

「……別に俺は君に恨みがあるわけではない

早々に立ち去ってくれと有り難いのだが」

ゾクッ！！！！！！！！！

「!!!?!」

突然龍士から出てくる気迫に迅竜は一瞬固まる

その後すぐに威嚇をするが先ほどまでの勢いは無かった

「……そうか」

その気迫の持ち主、龍士はただ一言そう呟き

「ならば早々に」

トレース
投影、開始

フリーズ
凍結、解除

ロールアウト
工程完了、全投影待機

夫婦剣を破棄し、今度は彼の周りに50程の剣軍が浮かび上がる

危険を察知した迅雷は龍士を迎撃しようとして飛び掛かる

「逝け」

フリーズアウト
停止解凍、
ソードパレルフルオープン
全投影連続層写……！！

「……う、うん……あれ？ここは？」

「気が付いたかね？」

声が出た方を向くと気絶する直前に見た人がいた

……… ってそれよりもさっきのモンスターは！！！！！！？？？？

「先程のモンスターは俺が撃退した

それに周りにはモンスターの気配も無いから安心するといい」

そう言って微笑を浮かべながら頭を撫でてくる

「……もしかして顔に出てました？」

「ああ、これでもかというくらいにね」

そう言つて彼はさらに笑みを深める

か、顔に出てたなんて…… / / / /

でもあんな大きいモンスターを撃退するなんて凄い……

「さて、自己紹介といこうか

俺の名は龍士・E・ペンドラゴン

一応旅をしている」

な、長いなあ

でもいい名前……

……あつ、こつちも自己紹介しなくちゃ

「……君は案外抜けている所があるみたいだな？」

彼は少し笑つて私に聞いてくる

……むう、別に抜けてるわけじゃないもん

「いや、失礼した

君があまりにも面白い反応をするのでな

それで？君を名前は？」

後半が気になるがとりあえず自己紹介する

「私の名前は

「私の名前はティアラ・ユーピテルです」

……驚いた。まさか雷神の名前にあるとは

ユーピテルとはローマ神話の主神とされ、雷神でもあるという
また、同じ雷神であることからギリシア神話のゼウスとされ
北欧神話のテュールとは起源が同じだとか

おっと今は関係ないか

「それで、君は何故襲われていたかね？」

そう聞くと彼女は突然暗くなり

「……………私は化け物ですから」

……………

「…如何言うことかね？」

彼女は暗い雰囲気のまま話し始めた

「私は特別な力があるんです」

そう言っつて右手から電気を出した

これは……………ッ！！？

「なんだ？……………これは」

「見ただけで分かるんですか！？」

「ああ、俺の魔法はこの力が元となっているからな」

それにしてもこれは……………

「内に込められている魔力が違う。
それに普通の電気と違うみたいだ」

「私の街自体そんなに魔法は発達していないんです
だからか魔法を毛嫌いして……」

「加えて私の力のこの特別な電気の所為で……。」

「殺されかけた……と」

成程、ならばユーピテルの名も頷ける

……だがな

「少し違つぞ。ティアラ」

「?? 何が違つんですか？」

「これは俺の師匠から聞いたことだが
『化け物』とは非人道的なことを明確な意志を持って行つような者
たちのことを言うらしい

…君はそんな人間ではないよ。私が保証する」

その言葉を聞いてティアラは呆然とする

「む？どうした？」

「……本当ですか？」

「む？」

「……………私が…化け物……………じゃないって」

「ああ、少なくとも先ほどのように人並み笑う者を『化け物』と呼ばない。俺が保証しよう」

ティアラはその言葉を聞いた時、堪え切れずに泣き出してしまった。

今までずっと我慢していたんだろう

「よく頑張ったな……………」

胸の内に溜まったものを出してしまうといい……………」

彼女は俺の言葉に泣きながらただ頷いていた

「う、ご迷惑をお掛けしました」

「気にするな。俺が勝手に首を突っ込んだだけだからな
…ところで君はどうする？」

元の村に戻るのも辛いだろう」

「……はい」

ティアラはそう答えて俯いてしまった
無理も無いだろう。
今まですつと迫害され、仕舞には殺そうとした輩だからな、戻りた
くないだろう

「宛が無いなら俺と来るか？ある目的があつて旅をしているのだが
……」

「ッ！！！？？？……いいんですか？」

驚き顔で聞いてくるティアラに頷く

「ああ、君のような少女に一人旅は少々危ないだろう
それに……俺が首を突っ込んだことを途中で投げ出したくは無いか
らな」

「また子ども扱いして……だけど、一人だと寂しいし……それじゃ、お
願いできますか？」

やはり一人は寂しいとのこと……

不安げに聞いてくる彼女に笑みを浮かべて答える

「ああ、歓迎しよう」

「では、行くのでしょうか」

「はい」

その後ティアラには俺の目的、魔術^{まほう}を転生云々は抜いて喋った
転生のことは言う必要は無いし、関係無いからな

「まずは、この森を抜けるとしようか」

「そうですね」

俺たちは軽く会話をしながら森を進んでいった

V S 迅竜 初戦闘が人外とは如何なものか…（後書き）

え〜つとまず今回の話は申し訳ありませんでした

こんなに長いにも拘らず戦闘が短いという詐欺まがいのことが起きてしまいました

今後努力を深めていきますので今回は何卒ご容赦下さい

次回からいよいよ原作キャラが登場します

人を見た目で判断するのは三下のすることだ（前書き）

今回から原作キャラが（ちよこつと）出てきます

この駄文を読んでくれる方が少しでも楽しめれば幸いです

人を見た目で判断するのは三下のすることだ

ティアラと出会ってから3年が経った

彼女にはこの3年間身体能力を上げるために組み手をし、
魔力コントロールの仕方を少し《・・》教えた

少しというのは俺もあまり分からないからな

今は気持ちのいい風が吹く溪谷で過ごしている

周りの猛獣もこの3年で俺たちにすっかり懐いてしまった

さて、コーヒーでも「ドガーン」…何だ？

「龍士さんっ！！」

慌てた様子でティアラが駆け寄ってくる

「どうした？」

「どうやら溪谷に入ってきた人をあの子たちが攻撃して…」

「??？」

攻撃して…どうした？

「……振り返ちに」

「ッ！！？！？……成程な」

確かに一際大きな『声』が聞こえてくる

気づいた者もいるだろうがだろうがこれが俺が貰ったもう一つの能力『覇気』だ

この力を完璧に制御すれば実体の無いものを攻撃するのに魔力はいらないし

武装解除も簡単にできる

おっと話が脱線したな

俺たちは急いでその爆発が起きた場所に向かう

やれやれ……もう少しマシンな入り方をして貰いたかったのだがね……

「ここが…『彼ら』のいる溪谷か…」

儂の名はマカロフ、魔導師ギルドフェアリーテイルのマスターをしておる

今回は評議員から直々の命でここに来た
内容は「北の警告にいる二人の男女を調査し、危険があるなら排除せよ」とのこと

全く…確かにうちのギルドはめっちゃくちゃなこと偶にはやるがこの老体にはちとキツ過ぎるぞ

「……………む!？」

溪谷に入ると猛獣たちが襲ってきたので迎撃したが、大きな音を鳴らしてもうた

……………これは気づかれたじゃろうな

そう考えていると奥の方から二人の子供が出て来た
女の子の方はナツと同じくらいで男の子の方はその少し上といった所じゃろうか

「ここで戦闘していたのは……………貴様か?……………」

ゾクッ

「!?!?!?!?!」

赤い外套をきた男の子が聞いてくる

こ、これは…

なんて気迫じゃ……………こんな子供がどうやって……………儂でも少し鳥肌が立つぞ……………

「ああそうじゃ、すまんのう。
突然襲ってきたので正当防衛として攻撃したんじゃ……
あまり強くはやっていないのでしばらくすれば起き上がるぞ?」

「……そうか」

そう言っつて最初の雰囲気に戻った

「儂の名前はマカロフ。お主たち、ここで何をしておるんじゃ?

「ここには滞在するために少し居を構えているだけだ」

つまり親がないのじゃな……

……ならば

「儂のギルドに来んか?」

「えっ?」

「何?」

僕のギルドについて説明すると

「ティアラ、どうするっ？」

「えっ？どつするって言っても……私はちょっと行ってみたいかな」

「そっか……」

と軽く笑いながらティアラというらしい彼女の頭を一撫でした後

「その話、こちらは了承しよう」

「そっか」

うむ、ならば早よ行かんと日が暮れてしまっ

「俺の名前は龍士・E・ペンドラゴンだ
よろしく頼むよ」

「私の名前はティアラ・ユーピテルです。
よろしくお願ひします」

その場であいさつは済み、3人でギルドに戻るようになった

人を見た目で判断するのは三下のすることだ（後書き）

少し強引ですが二人をフェアリーテイル入りすることに成功しました
次回から原作キャラをどんどん出そうと思います
感想・評価なども考えて下さるとうれしいです

身内の実力を測るのもまた大事なこと（前書き）

今回はタイトル通りバトルです

少し長くなったので前後編に分けました

ごめんなさい

身内の実力を測るのもまた大事なこと

「ほれ、着いたぞ」

俺たちはフェアリーテイルのマスター（ギルドの長を皆こつ呼ぶらしい）、マカロフ・ドレアーの提案でフェアリーテイルに入ることになった。

今はそのフェアリーテイルの前にいる

「お〜い今帰ったぞお〜」

「お疲れ様ですマスター。大丈夫でしたか？」

鎧を着た少女が少し硬い感じで話している

……あれは今時のファッションかね？

「ん？ジーさん、そいつらは？」

一人真面目に考えていると上半身裸の奴が俺らにことをマスターに聞いていた

……ああ変態か……前世でもあんなのがいたな

「今変なこと考えていなかったか？」

「別に、今の君の服装を見て真っ先に出てくる単語を思い浮かべただけだよ」

「俺の服装……っていつの間にな〜？」

気づいていなかったようだ…
天然の変態か…

「こやつ等は新しくうちに入る者たちじゃ」

「えと…ティアラ・ユーピテルです…！
よろしく願います」

「龍士・E・ペンドラゴンだ
よろしく頼む」

「変な名前」

誰かがそう溢した途端

龍士の顔は固まり、ティアラはアツという顔になる

龍士からとてつもない量の気迫が出てきた
それはもうギルドの柱が軋むほど

「み、皆さん…！早く逃げて下さい…！
龍士さんだめですよ…！ギルドがッ…！ギルドが壊れるッ…！」

「む？それはいかな…」

さすがにそれは拙いので覇気を出すのをやめる
周りからは安堵の溜息がこぼれる

「スゲーなあいつ…」

「気迫だけでギルドの柱軋んだぞ」

「マスターならできるか？」

という声が聞こえる

やれやれ、この程度出来なきやすぐにやられてしまっぞ

(無茶言わないで下さい 汗 by 作者)

「「おいお前、俺／あたしと勝負しろ!!」」

突然そんな声が聞こえてきた

見ると桜色の紙に鱗のような柄をしたマフラーをした男と

臍を出した服装に背中の中程まで伸ばした髪を一括りにした女がこ
ちらに向かつて叫んでいた

二人も相手にしたくないからとりあえずジャンケンでも「そう言う
ことなら私も参戦しよう」

…訂正しよう三人も相手にしたくないからジャンケンか何かで決め
てくれ!!本当に…

ジャンケンの結果、ティアラの相手を桜色の髪ナツとゆうまじいの男が、
俺の相手を全身鎧の女がするらしい

まずはティアラの試合からだな

「ああ、魔法に固執しない様に俺が鍛えた。」

その言葉を聞いてまわりが驚くつまり彼女よりも実力が遙かに上だ
ということを理解したからだ

「火竜の咆哮っ！！！！」

見ると、ナツが最後の一手と言わんばかりの威力の炎を繰り出して
いた

……これはさすがに

スツと静かに右手を上げ、魔力を集中する

「ツツ！！！！！！」

極限まで上がった魔力をいい気に放出する

「雷の暴風」

彼女が繰り出した稲妻を帯びた旋風は炎に当たり相殺された
その隙にティアラはナツに肉薄し首に手を添える

「チエックメイト」

その一言で勝負は決まったとマカロフは判断し、

「そこまで!!」

終了の合図を出した

……さて、次は私の番かな

身内の実力を測るのもまた大事なこと（後書き）

すみませんでしたあ

：いや「何他作の魔法出してんの？」っていう批判が来るのは覚悟の上なんですが

思いつかなくて偶然見た「ネギま！」の魔法が

「あ、これピッタリじゃね？」と違ってついやっちゃいました

出来ることならこのまま見捨てないでくれるとありがたいです（T

—T）

vsエルザ 見せてやろう 剣製のを…(前書き)

バトル後篇です

原作前最後の話です。

vsエルザ 見せてやろう 剣製の力を…

「そういえば名乗っていなかったな
私の名前はエルザ・スカーレット
よろしく頼む」

「龍士だ。こちらこそよろしく頼む」

互いに挨拶し、それぞれの魔法（俺の場合魔術だが…）を発動する

エルザは鎧と剣を装備する

成程俺と似た力か……

「トレース
投影、開始」

俺自身も馴染みとなった夫婦剣、干将・莫耶を投影する

「っ！！？……私と同じ魔法か？」

「いや、似てはいるが少し違うな

まあ答え合わせは後でいいだろう?」

そう言って構えたのを見てエルザも構える

「始めい!」

準備ができたと判断したマスターは合図を出した

さあ見せてやろう剣製の力を……!!

「はああああああ！！」

キンツッ！！キキンっ！！ガキンツッ！！

何度も続く疾風のような剣戟の嵐をその場にいる者全員…いやマカ
ロフとティアラ以外は息を飲んでいた

何せこれほど早い剣戟を見るのは皆初めてだろう
いやというよりあのエルザと互角に渡り合っているという事に驚
いているのかもしれない

だが、

キンツ！！バキイインツ！！

龍士の持つ干将・莫耶が真ん中から折れてしまった

この瞬間誰もがエルザの勝ちを確信しただろう

エルザもそうだった

だがエルザが振り下ろした剣を

ガキイイインツッ!!

先程折れた筈の干将・莫耶が受け止めていた

これにはエルザも驚き、バックステップで後ろに下がる

「何だと!? その剣は先程折ったはず……どうということだ?」

「だから言っているだろう……。答え合わせは後ですと……
……やれやれ、このまま長引いてもメリットがない。
早々に終わらせるとしよう」

「……言ってくれるな」

エルザも剣を構え、迎え撃つ。

「行くぞ

鶴翼しんぎ、欠落むげつヲ不ラズはんじゃく」

龍士は持っていた干将・莫耶をエルザに投擲する

勿論、エルザはこれを弾いた

「いったい何を……ッ!!?つく」

「
心技ちから、泰山やまをぬきニ至リ

心技しんぎ黄河みずをわかヲ渡ル」

そのままもう一度干将・莫耶を投影し、投擲する

これにはエルザも驚き、若干だが動きが鈍る
しかし、この二度目の投擲にも対応し、弾いた

「
唯名、別天二納メ」

更にもう一度投影した干将・莫耶で今度は自ら向かっていく

これを好機と感じたのかエルザも龍士に接近する

「（甘いな）」

そこで別方向から先程投擲された二組の干将・莫耶が迫ってきていた

「この双剣、干将・莫耶は夫婦剣。それぞれがそれぞれを引き付け合う性質を持っている」

「ツツ!!!？」

「終わりだ」

両雄、共二命ヲ別ツ

「鶴翼三連」

「そこまで!!」

終了の合図が掛かり投影を破棄する

手に持っていた方は首で止め、飛んでくる方は途中で投影破棄した

「参った」

エルザはただ一言、そう言った

……師匠……

俺はこの世界に来て良かったと思うよ

vsエルザ 見せてやろう 剣製の力を…（後書き）

これで原作前は終わりです

次回から成長した彼らの活躍を楽しみにしてくださいWWW

フェアリーテイル（前書き）

少し早いですが原作スタートです
タイトルみて分かる人いますかね？

原作第一話丸パクリです（笑

長いのもう…うん、諦めた（おい
それでは、ど）ry

フェアリーテイル

「えー……っ!!!？」

この町って魔法屋一軒しかないの？」

あたしルーシイ!!

強力な門の鍵を探してきたんだけど……

「あ!!! ホワイトドギー 白い子犬」

強力では無いけど前から欲しかったんだ

「いくら?」

「2万」

「お・い・く・ら・か・し・ら?」

「だから2万」

「本当はおいくらかしら?」

ステキなおじさま？」

「だぁー……っ!!」

酷い目にあっ たぁー……っ!!

列車には2回も乗っちゃおうし」

「ナツ乗り物弱いですから」
「だね」

「ハラ減ったし」

「貴方の所為でもうお金ないですよ」
「うん」

「酷いな…ティアアラ、ハッピー」

ハルジオンの街の街道を歩く二人…と一匹の猫がいた

男の方は桜色の髪に鱗のような柄のマフラー
言わずもがなナツ・ドラゲニルだ

女の方：ティアアラ・ユーピテルはこの数年で随分成長した
髪はストリートで背中の中ごろまで伸ばし、顔は幼少時代の幼さは
すっかり見られず

初対面の人なら年齢を間違える程だった

「なあ、^{サラマンダー}火竜つてのはイグニールのことだよなあ」

「うん」

火の竜なんてイグニールしか思い当たらないよね」

「偽物の確率もありますけどね…」

「そうか」

サラマンダー

でも火竜ガイがいるのは確かなんだな

やっと見つけた!!

ちよつと元気になってきたぞ」

「あい」

そうしてはしゃいでいるナツをティアラは微笑ましげに見ていた

歩いていると

「サラマンダーきゃー火竜様あ〜」

「ほらっ!!」

噂をすれば」

「あい!!!!」

「????」

ナツは喜んでいたがティアラは顔を顰めていた

「…ナツ、先に行つて下さい。

私は後で行きます」

「わかった!!」

そう言つて人ごみの中に走つて行った

「今、何かあの周りで変な魔法があったんですよ……」

ティアラはこの数年で魔力コントロールは極限に上がり、さらにトラップ系や香り系などの魔法も察知するのが得意になって

いた

「まったく……誰がこんなことを……
やはりここはハズレですね……」

そう弦きながら歩いているとナツと金髪の誰かが喋っているのが見えた

「あんふぁいいひほがぶぁ」

「うんうん」

「ナツ、もつとゆっくり食べなさい!!」

「すみません…えっと……」

「あつ、あたしルーシィって言います!!…!!」

「ルーシィさんですか…あつ敬語じゃなくていいですよ
私これでも16なので」

「じゅづろくつ!!…!!??」

ルーシィさんと話しているとどうやらうちのギルドに入りたいみたいだ

……何か色々勘違いしてるけど

「じゃああたしはそろそろ行くけど…
ゆっくり食べなよね」

この後、さつき貰ったらしいサインをルーシィに渡して突っ込まれて
いた

「（ルーシィ、突っ込みの才能がありますね）」

感心する下「違うと思うですけど……」

「ぷはあー！
食った食った！！」

「あい」

「食べすぎですよまったく……」

もうすっかり暗くなってしまったじゃないですか

「サラマンダー
火竜？」

「知らないの？」

今この町に来てるすごい魔導師なのよ

あの有名な妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導師なんですって」

ピタッ

瞬間私たちの動きは止まった

「……………ナツ」

「ああ」

「ようこそ我が奴隷船へ」

ボスコに着くまで大人しくしてもらおうよ
お嬢さん」

「（ なんなのよコイツ…
こんなことする奴が…）」

そうしている内にルーシイの門の鍵ゲートは海に投げ捨てられた

「（これが妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導師か！！！！）
最低の魔導師じゃない…」

ばきやつ

ルーシイに奴隷の烙印が押される瞬間ナツが天井を突き破って出て
来た

しかしここは船の上なので……

「おぷ…
駄目だ
やっぱ無理」

「えーーーーーっ!?
かっこわるーーーーー!!……!!」

「ルーシイ？何しているんですか？」

「えっ、ティアラ！？何処「此処です」に……っ！？」

ナツが突き破った天井裏からティアラが下りてきていた

「まったく、乗り物ダメな癖に乗り込むとか……
バカですか？？……まあそれよりも……っ！？」

突然船が大きく揺れだし

止まった

「っ！！？……ルーシイ……ですか」

どうやらルーシイが星霊を使って岸に押し上げたようだ

「ナツ、調子はどうですか？」

「ああ、大丈夫だ」

「お前らあ……」

人の船に勝手に

乗ってきちゃイカンだろお

あ？」

「お前がフェアリーテイルの魔導師か」

「それがどうしたあ」

「少し顔を見せて貰っていいでしょうか」

向かってくる二人の右側をナツが、

左側をティアラがそれぞれの紋章を見せながら吹っ飛ばした

「俺／私はフェアリーテイルのナツだ／ティアラです

お前／貴方なんて見たことねえ／ありません」

「「「「「「「「「「「「「「」

「貴方、よく見たらつい先日、巨人の鼻から追放された魔導師じゃありませんか？」

「っ！？やっちまええ！！」

「ナツ、あいつは譲ります

私は周りの雑魚を」

「おっ」

「ふざけるなぁっ!!」

ぼぁっ

「っ!?!ナツ!?!」

「大丈夫だよ」

「でも…っ!?!ティアラ!?!」

ナツに炎が掛かった瞬間、ティアラにも部下たちが飛び掛かってきていた

「なんだコレぁ?お前ホントに火の魔導師か?」

「拍子抜けですね…」

ティアラは既に部下を全て倒していた

「な…」

「よおーく覚えておけ」

「なな……」

「これがフェアリーテイルの……」

「なんだこいつはぁー！？」

「魔導師だっ！！」

……
……

「やべっ！……逃げんぞ」

あれから数分、ナツが暴れまくったおかげで軍隊が来た為、逃げる
ことになってしまった。

……やれやれ、もう慣れましたよ逃げるのは

「何であたしまで……！……！？」

「だって、私たちのギルドに入りたいでしょ？」

ルーシィはポカンとしている。
ふふっ、おかしな顔ですね

「来いよ」

「.....うんっ!.....!」

フェアリーテイル（後書き）

今回は原作第一話なので少し詳しく書いたのですが…
長すぎました。

申し訳ありません

次回あたりにキャラ紹介を入れようと思います。

キャラ紹介（前書き）

予告通りキャラ紹介をやります

原作時のオリキャラの紹介も加えるつもりなので多少ネタバレになるかもしれないので読む読まないは自由にしてくださいませ
ん

キャラ紹介

龍士・E・ペンドラゴン
エミヤ

『世界』の誤作動により前世で不幸な人生を歩んだ男
その為、神に能力を貰い、転生した

また、能力を貰った後すぐ転生しないところを見ると割としっかりしている所もあり

常に一歩二歩先を見ているようだ

Fateのセイバー、アーチャーエミヤを師に持っており

剣はセイバー、能力その他日常生活に必要なこと（料理など）はアーチャーに教えてもらった

料理の腕は（セイバー曰く）アーチャーに一歩劣る程度らしい

転生の際に神から贈り物として記憶にある剣を幾つか具現化して貰ったため、

いくつか投影は可能

しかし、それも本物では無いので魔術で強化を重ねないとあまり意味は無いらしい

髪はエミヤ同様無限の剣製の影響により白くなっている
アンリミテッドブレイドワークス

享年26歳

転生時13歳

原作時21歳

現在行方不明(?)

ステータス

筋力：C

耐久：C

敏捷：EX（スキル補正）

魔力：A

幸運：E

宝具：???

スキル

音速突破オリジナル：A

龍士が修行の末習得したスキル
転生のもものというよりエミヤのようにただ愚直なまでに求めた結果
至った云わば「疾さの極地」
魔術や魔法によるスピードの低下は一切遮断する

千里眼：C

アーチャーの指導により習得したもの
アーチャーは元々眼がいいが龍士はそこそこののでアーチャー程見
えはしない

対魔力：C

セイバーの指導により習得したものの
しかし、セイバーに一步劣るため、効果は幻覚や毒の魔法が多少聞
かない程度

覇気：A++

神から貰ったスキル

修行中はこれを全開にして戦い、その他の生活においては一切遮断
するという修行を行った結果
大幅に上昇した

補足

エミヤの「心眼」は習得しきれなかったが、それに近い物はある
戦闘を瞬時に把握、対処のスピードはエミヤ程ではないがそれなりに
高い

宝具

無限の剣製：アンリミテッドブレイドワークス
E〜A++

固有結界

普段は無限に剣を内包する世界から零れ落ちた能力を使って剣を投
影する

エミヤは剣以外を投影するためには剣の時以上に魔力を消費するが
龍士にはそれが無い

しかし完成度が剣の時より若干劣るため、使い勝手は決して良くない
ゲイ・ホルク
刺し穿つ死棘の槍を龍士が投影して真名解放しても心臓に当たらない可能性もある程

全て遠き理想郷：EX

セイバーから旅立つ際に譲り受けた物

セイバーとは師弟である為、回復能力の恩恵を受けることが出来る
本来距離に応じて強度が変わるが神との会合の間は何処にいても「
かなり近い」という距離感になっている為、それなりの回復が望める
しかし、セイバーと接触することは出来ないので致命傷を負っても
死ぬ訳では無いが回復はしない

ティアアラ・ユーピテル

内包する魔法が異常すぎる為、自身の村から抹殺されかけた少女
現在は完璧にコントロールし、使役できる

ラクサスは余り使わないが、「形を持った雷」を主に使用する
二つ名は「電姫」
エレクトロ・プリンセス

顔は外人系というより大和撫子という方がピッタリな顔立ちになっ
ている

顔と年齢が合っていないのがちょっとした悩みらしい
現在一人暮らし

幼少時8歳

原作時16歳（見た目大体20歳WWW）

ステータス

筋力：D

耐久：A（宝具）

敏捷：A（スキル補正）

魔力：EX（スキル補正）

幸運：B

宝具：B

スキル

雷速瞬動：A

電気を体に通すことで身体能力、（主にスピード）が上昇する。
龍士の音速突破に追いつくために自ら編み出したもの

雷神の加護（仮）：EX

元から持っている先天性のもの
これにより、ティアラの雷は他よりも異質となり、常軌を逸したも
のとなる

ティアアラの魔力が高いのはこれが影響している
正確な名称が無いため便宜上こう呼ばれている

覇気：B

龍士のを見て偶然習得したもの
ただし霸王色は効果が薄いため気絶しても起きるのに長い時間は掛
からない

見聞色は龍士以上だが武装色は全く使えない

龍士曰く「宝具の影響で纏うことができない」とのこと

宝具

雷神守護する雷速の盾コトビシタル：B

ティアアラ自身の耐久を上げるために作った能力が宝具に昇華したもの
雷によって体を硬化することも可能だし、自身の周りに障壁を張る
ことも可能

展開速度が異常なほど速い

しかし、これは本来展開、解除を繰り返して使うものなので持久戦
では余り使うことは無い

キャラ紹介（後書き）

こんなところですかね

難しくてすみません

自分も途中で書いててわかんなくなりましたwww
次話は今日中には書けると思います
おい

クソくらえ

「「「ようこそ、フェアリーテイル妖精の尻尾」」」

あれから軍隊たちを撒いたあと、ルーシイをフェアリーテイルに連れて行きました

ルーシイは今憧れのギルドに来たことを感動しています

……ふふっ中見た時の反応が楽しみですね

「ただいまー！！！！」

「ただー」

「ただいま帰りました」

「ナツ、ハッピー、ティアラ、お帰りなさい」

ナツはギルドに入った瞬間サラマンドラ火竜の情報を持っていた人に向かってい

った

ルーシイは中に入ってまた感動している

しかしまともな人がいないと突っ伏して、ティアラはその反応を見て笑っている

「あらあ？

新入りさん？」

「！！！！！！ ミ……ミラジエーン」

「あっはいそうです
前々から入りたかったみたいで」

「そうなの」

「ってかあれ止めなくていいんですか？」

「それもそうですね…ちょっと行ってきます」

そう言ってティアラは喧嘩の嵐に向かっていった

「皆さん「おおらあー！ー！！」折角ルーシイが「ああナツてめえ」
つたんですからも「おおお、

漢おお〜」しなれば「ああ〜うるさい」………」

当のティアアラは怒りで少し壊れてしまっている
顔は笑っているが眼は笑っていないというあれだ

「これ以上煩くするなら……」

そう言つてティアアラは近くにあつた壊れて使えなくなったテーブル
右の人差し指を向け

カッ!!!!!!!!!!

ズドオオオン

「……………」

糸ほどの細い電気を出してそれとは反比例な音を立てながらテーブ
ルを消滅させた

そして皆の方へ向き直つて

「……」

満面の笑みを浮かべる

しかしその顔は「次は無い」と語っていた

コクコクッ

その顔に暴れていた者は皆恐怖し、従うしかなかった

ルーシイは余りの出来事にポカンとしている

「な、何が起こったんですか？」

「ティアラがテーブルを吹き飛ばしたのよ」

「ええっっ！……！！！」

「落ち着けい！！ティアラ！！！！！」

「！」

そこには身長が100cmあるか疑問な程小さなジーさんがいた

「……………ふう」

此处でティアラは溜息一つ

どうやら落ち着いたようだ

「失礼しました。マスター」

「マスター!!?」

「む、新入りかね」

「あっ、はい」

「よろしくネ」

マスター…マカロフはそう一言残して

「とっ…!」

二回の手すりに飛んで行った

……途中ぶつかって落ちかけたが

マスターは評議員からの苦情を読み上げ、ガツクリしている

「だが…」

そこで言葉を切り

「評議員などクソくらえじゃ」

「えっ?」

ルーシィは本日何度目かわからないくらい驚いている

その間にマカロフは自論をを皆に説き

「自分の信じた道を進めェい!!!!!!!!!!」

「それがフェアリーテイルの魔導師じゃ!!!!!!!!!!」

オオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ルーシィはこのギルドに入ってよかったと笑顔を浮かべていた

クソくらえ(後書き)

次回からフェアリーテイルをFTと略称します

……いやひたすらどつでもいいけどwwww

寒いところは苦手です……

ティアラ・ユーピテルは朝に弱い

低血圧ではないのだが本人曰く「魔B田が重すぎて上がらない」
そんな彼女は

「どづしてこんな所にいるんでしょう」

朝っぱらから雪のど真ん中にいた

昨日の夜

「ふあああああ……」

欠伸を一つしたところではしたないと思い、口を覆う。

「そろそろ寝ましようかねえ」

そう呟きながら入口から出て行こうとすると

「あつティアラ!! 丁度よかったあんたも一緒に来て!!」

「へえ?? ルーシイ? 行くとしても何処にiiiiiiii!？」

抵抗する間も無く拉致られてきたのだ

今、そのルーシイは逆に拉致られ、ナツと私…あ、後ハッピーの三
n…二人と一匹で探しています

「てかティアラ、お前の力で何とか何ねえか？」

「あつ………」

すっかり忘れてました

やはり朝は駄目ですね……………

「…ああ、いました……………此処より北西に1kmほどの所に」

「アツチか！…！！！」

うおおおおおおお！！と吠えながらナツが走っていきました

……………というかナツ

そっちは北東ですよ

「ティアラ大丈夫？」

「ええ、大丈夫です

ありがとう、ハッピー。」

そう言つてハッピーの頭を撫でた

かわいいけど一言多いのが玉に瑕ですねこの猫は

「何か言つた？」

「いいえ何も

早く行きましょう」

「あい」

「どづいつ状況ですか？これは」

……気のせいでしょうか？ マカオが宙に浮いてるように見えます

「ティアラ！マカオが！！！！」

「???. ああそういうことですか」

そう呟いて雷速瞬動で落ちていくマカオを掴み壁を蹴って戻る

……この程度造作もないですね

「ッ！? 何今の！！??」

「ティアラの雷速瞬動だよ

ティアラは雷並みのスピード出せるんだ」

はい、大雑把すぎる説明有り難うございます。ハッピー

「正確には自信が雷を纏って雷自体になるようなものですけどね」

余りにも大雑把なので補足を入れた
おや？…ルーシイが固まっていますね
どうしたんでしょう

「普通そんなこと出来ないよ。ティアラ」

ルーシイがその言葉に頷く。

少し自分の感性を疑ってしまう瞬間でした

あれからマカオも治療し、無事FTに帰って来ることが出来た

まったく人騒がせな、眠いたらありゃしないですよ

でも……

「ナツ兄い……………!!」

ティアアラ姉え……………!!

ハツピ……………!!

ありがとう……………!!

それと……

ルーシィ姉えもありがとう!!!!」

……こんな1日も悪くないですね。

「さあて!!…家に帰って寝ましようか!!」

そう言っって私はいい気分のまま自分の家に帰って行った

寒いところは苦手です……（後書き）

今回はいつもより落ちがまともだと思ったのは俺だけじゃないはず

エルザ・スカレット(前書き)

今回はエルザが登場します

そして我らが(？)主人公の行方も判明します

それではd(ry

エルザ・スカーレット

「でね、カニがハサミ持つてて実はエビだったんだよ!!」

今この前言ってきたっていう仕事の内容を聞いたんですがまったく理解できません

「もう少し詳しく教えてくれませんか？ルーシィ」

「知らない!!」

さつきからルーシィはずっとこれで取り付く島もありません
何でもチームを組んだことを後悔しているんだとか

「なーに 無理にチーム組む事あねーよ

ティアラも組んでねーしな

それに聞いたぜ？

南の狼の二人とゴリラみてえな女やっつけたんだろ
スゲーや実際」

「それ全部ナツ」

「てめえかこの野郎!!!!!!」

「文句あつか

「おお！！！！？」

「グレイ…服」

「ああああっ

また忘れたあっ！！！」

「うぜえ」

「今 うぜえつつたか！！？」

クソ炎！！！！」

「超うぜえよ変態野郎！！！！」

ナツとグレイはまた喧嘩だし、
ロキはルーシイ口説いてるし、

…と言うかロキ？ルーシイは星霊魔導師ですよ？
今気づいたんですか？

ルーシイから逃げつつたロキを見て思わず突っ込んだ

あれ？何か戻ってきましたね…

「ナツ！！！！グレイ！！！！」

マズイぞっ！！！！」

エルザが帰ってきた……!!

「あ……!!?」

そんな声が聞こえた直後、入口の方から……地響き?が聞こえてきた

ズシン

ズシィン

「オレ……帰るわ……」

あ、今度こそ帰っていきましたね
何がしたかったんでしょう

「今戻った

マスターはおられるか？」

「お帰り！！マスターは定例会よ」

「そうか」

……と言つかエルザ？

その角は何ですか？

いくら装飾してあってもそんな手で持つて来る人いませんよ？

「それよりおまえたち

また問題ばかり起こしているようだな

マスターが許しても私が許さんぞ」

いえ、貴女も十分問題ありますよ？エルザ

「カナ：何という格好で飲んでいる

ビジター踊りなら外でやれ

ワカバ吸いながらおちているぞ

ナブ：相変わらずクエストボードの前をウロウロしているのか？
仕事をしろ」

「まったく：世話が焼けるな

今日の所は何も言わずにおいてやるう」

「いえ、いろいろ言ってますよ。エルザ」

私はその言葉に速攻で突っ込む

：あれ？いつの間にか私突っ込みキャラになってるような……

「ああティアラ。ただいま

……所でナツとグレイはいるか？」

「ああ二人ならそこに……」

「や、やあエルザ……

お・俺たち今日も仲良死……よく……

や……やっつてるぜい」

「あゝい」

「ナツがハッピーみたいになった!!!!!!」

ルーシイは驚きティアラは笑いをこらえるのに必死だ。

「ナツもグレイもエルザが怖いのよ」

「ええっ!!!!!!?」

「実は二人に頼みたいことがある

……それとティアラにもな」

本来マスターから指示を仰ぐべき物だが急を要する為、
早急に向かう必要があるらしい

「どづいづこと?」

「あのエルザが龍士以外に仕事を頼むなんて」

「こんなバカでけえ怪物倒す女だぞ……」

「龍士？」

ルーシイは会ったことが無いため、首を傾げる

「ああ、そうね。

ルーシイは知らないのよね」

「とつても強いんだよ!!!
多分マスターぐらい!!!」

「ウソオ!!!??？」

「驚くのも無理は無いけどそれぐらい龍士は強いよね…」

「今何処にいるんですか？」

「評議員から依頼を受けたつきり帰ってこないわ」

「過ごそうだけど…」

「大丈夫なのか？その人

ルーシイは割と切実にそんなことを思っていた

エルザ・スカーレット（後書き）

今回落ちは…無いなうん

龍士が出るのはまだ先です

期待して（？）待ってて下さい

鉄の森へアイゼンヴァルトとララバイ（前書き）

お気に入り登録数が30件突破！！

登録して戴いた皆さん含め読んで戴いてる方に感謝してもし切れません

これからも頑張りますのでよろしくお願いします！！

鉄の森へアイゼンヴァルトとララバイ

マグノリア駅

その日、ホームでは剣呑な雰囲気グループがいた

「何でエルザみてーなバケモンが俺たちの力を借りてえんだよ」

「知らねえよ

つか”助け”ならオレ一人で十分なんだよ」

「じゃあお前ひとりで行けよ!!!」

俺は行きたくねえ!!!」

ぼこ どうか ばき

「じゃあ来んなよ!!!」

後でエルザに殺されちまえ!!!」

こんな風に殴り合いが起きれば

「うるさい」

ティアアラがまた殴り、事態は無理やり沈静化すること
もう四十回ほど続いているので、埒が明かない

するとルーシイは何か思いついたのか手を合わせていた

「あ!!!エルザさん!!!!!!」

「今日も仲良くいってみよー」

「あいさー」

「冗談じゃねえ!!!」

ティアラは心強えからいいが何でこんな面子で行かなきゃならねえ
胃が痛くなってきた……」

「えと…有り難うございます?」

疑問符のついたお礼に「おう」と短く答える
照れてるのだろう

「ルーシイお前何でいるんだ?」

「話聞いてなかったんですかつ!!!!!!」

ナツはいつも通りと言っていていいだろう

「すまない…待たせたか?」

「荷物多っ!!!!!!」

「そんなにたくさん何入れてるんですか?」

少し気になる

「これか？これは食糧だ」

「そういえば…君は昨日FTにいたな……」

「あつ、新人のルーシイと言いますミラさんに頼まれて
同行することになりました
よろしく願います」

「私はエルザだ

そうかギルドの連中が騒いでいた娘とは君のことか…」

ルーシイは礼儀正しく挨拶し、エルザと会話をしている
そしたらエルザは危ない橋を渡ることになると言う

（エルザがそう言うということはなかなかヤバい状況ということ
を理解した

「おいエルザ！！」

「ん？？」

「何の用事か知らねえが条件がある
帰ってきたら俺と勝負しろ
あの時とは違うんだ」

「……!!」

「お……おい……!!」

早まるなっ……!!」

死にてえのか……!!?」

「へえ……」

三者三様の反応をしていた

「……確かにお前は成長した

私はいささか自身が無いが

……いいだろうっ受けて立つ

……グレイはどうだ?」

ぶるんぶるん

……ものすごい勢いで首を振っている

「おしっ……!!燃えてきたア……!!」

やってやるっじゃねーか……!!」

数分後

シュポー

ガタ　ゴトン

ガタンゴトン

「うぶ……………」

「なっさけねえなあナツ……………
うっとおしいから別の席行けよ…
っ！か列車乗るな！！走れ！！」

「まったく…しょうがないな…………私の隣に來い」

因みにティアラはグレイの隣で寝ています

「ちっ、しゃーねえな……………」

グレイとティアラは必然的にズレル必要があつたためティアラを動かさなきゃなりません

結果

「スー…………スー…うん？」

「あっ、ワリイ起こしちまつたか？」

「いえ、逆にありがとございます
最近は何れ睡眠を取っていないので……」

「そうか…無理はすんなよ」

「はい。ありがとございます」

こんなやり取りをしていると

ボス!!

「少しは楽になるだろう」

「「「「「……」」」」」

これにはさすがにティアラも口を閉ざした

「そついやあたし…」

FTでナツ以外の魔法見たことないかも

ティアラとエルザさんはどんな魔法使ってますか?」

「エルザでいい」

「私の魔法はここじゃ危ないですからね…
後でのお楽しみです」

「エルザの魔法はキレイだよ

血がいつぱいでるんだ

相手の

「キレイなの？それ（汗）」

「龍士の魔法もそうだよ！！」

「だからキレイなのそれ？」

「…えっ？じゃあその龍士さんも同じ魔法使っんですか？」

「いや…龍士の魔法は私とは少し違うな…」

似てはいるが……」

「本人曰く「非常に使い勝手が悪いから、自ら使いたがるような奴はいないだろう」とのことです」

「へえ……（一体どんな人なんだろう）」

ルーシイはまだ見ぬ龍士に尊敬の念を抱いていた

「（エルザみたいいなじゃないといいけど）」

……
(汗)

「何と言うことだっ！……！」

時と場所は変わりオニバス駅

エルザは自分の失態に嘆き、悔やんでいる

「話に夢中になるあまりナツを列車に置いてきたっ！……！
あいつは乗り物に弱いというのにつ……！」

私の過失だっ……！

とりあえず私を殴ってくれっ……！！！」

「殴ったら痛いですよ」

「ま、まあまあ（汗）」

「そういう訳だっ……！！
列車を止める……！」

「どういう訳？（汗）」

「FTの人はやっぱりこーゆー感じなんだあ」

「オイ……！」

オレはまともだぞ」

「露出魔のどこが……？（汗）」

「私が行って担いできましようか？」

「こんなのもいるし……（汗）」

そんなやり取りをしているとハッピーが緊急停止信号を作動させていた

「ナツを追うぞ……！」

すまない

荷物を『ホテル チリ』まで頼む」

「誰…アンタ（汗）」

「見知らぬ人に頼みごとをするのはやめなさい」

「もつめちゃくちゃ………」

「だな………」

「服……！」

魔動四輪車を使ってエルザ達は列車に追いついていた

と、そこで

「とっ」

ガシャン

おわああああああ

「何で列車から飛んでくるんだよお!!!」

ゴチーン

列車から飛んできたナツと車の上に乗っていたグレイが頭と頭でキ

スをした
うわっ…痛そうですね…あれ

「「ぎゃあああああ…!!」」

「痛てーっ!!!!」
何しやがるナツてめえっ!!!!」

「今のショックで記憶喪失になった
誰だおめえ
くせえ」

「何い!!?」

「ナツ
ごめんね」

「ハッピー!!エルザ!!ティアラ!!ルーシィ!!
ひでえぞ!!!!俺を置いてくなよっ!!!!」

「すまない」

「すみません」

「じめん」

「おい…」

随分都合のいい記憶喪失だな……」

エルザはその後ナツを抱き寄せたり殴ったり随分忙しかった

「今すぐ追っぞー!!!」

どんな特徴をしていた？」

「何かドクロツばい笛持ってた

三つ目のあるドクロの笛」

……は？いやいや……それは無いでしょう……（汗

……でも、やっぱりそうなのかな？

やはり三つ目のドクロの笛というと……

「如何したティアアラ？」

エルザが悩んでいる所を聞いてきた

「いえ……ソレがおそらくララバイだと思ひまして」

「」「」「!?!?!?!?!?」「」「」

鉄の森へアイゼンヴァルトとララバイ（後書き）

ルーシイの出番横取りwww

ティアラは三年ほど籠土と旅しているので

世界の知識はそれなりにあります

それとこれからですが…

なるべく一日一回は心がけているのですがこれからはそれもできなくなる可能性もあります

高校も夏休みが終わるのに宿題やってないし

長期で空くようなことはありませんが多くて三日四日って所です

ではこの小説を読んで戴いた方に多大なる感謝を
ありがとうございます

電姫へエレクトロ・プリンセス（前書き）

できました!!

電姫へエレクトロ・プリンセス

「どづいうことだ？ティアラ」

「禁忌の魔法の中に呪殺という物がありますよね？」

「ああ、対象者を呪い”死”を与える黒魔法だな」

「ええ一応ララバイもそれに分類されるのですが……」

そこで一度呼吸を整え

「ララバイは”集団呪殺魔法”と呼ばれ、笛の音聞いた者全てに”死”を与える魔法なんです」

「「「!!!??」」」

「そう。あたしもさっき気づいた」

三人が驚き、ルーシイが同意する

「こうしてはおれんぞ……速くあの列車に追いつかなければ……！」

「エルザ……飛ばし過ぎだぞっ……！！
SEプラグが膨張してんじゃねーか」

「代わりましようか？ 魔力量は話私の方が多いですし
いざという時戦えませんよ」

「構わん

その時は棒切れでも持って戦うさ
それにお前たちもいるしな」

その言葉で二人は黙り、エルザはスピードを上げた

オシバナ駅

ふう、何とか着きましたね
少々酔ってしまいましたよ

「駅内の様子は？」

「な・・・何だね君！！！！」

ゴッ

「駅内の様子は？」

「は？」

ゴッ

「駅内の様子は？」

「ひっ」

「即答できる人しかいないってことね」

「だんだんわかってきたる？」

「いつものことです」

「何で平然としてられるのよ」

「軍の小隊が突入したが戻ってこないらしい！！
行くぞ！！！！」

構内に入ると小隊は全滅していた

「ホームはこっちだ！！！」

「やはり来たな。FT」

ホームには闇ギルド、アイゼンヴァルトが集まっていた

「ナツ起きてっ！！！！
仕事よっ！！！！」

「無理だよっ！！！！
列車

魔道四輪車

ルーシイ

3コンボだ」

「ああ、それは仕方ありませんね」

「あたしは乗り物なの」

悪乗りしたらルーシイに突っ込まれた
いいじゃないですか別にっ！！！！
私だってボケてみたいんです

「ララバイを放送するつもりか!!!?」

.....は!?

ルーシー達とじゃれてるとそんな言葉が聞こえてきた

「.....バカじゃないですか?あなた」

「貴様らの目的は何だ?
返答次第ではただでは済まんぞ」

私はアイゼンヴァルトに何が目的か聞いた

まともな返答は期待しないが

「遊んでえんだよ

仕事もねえし暇なモンでな」

「……………ぎゃはははっ」「……………」

やはりな

「まだわかんねえのか？ 駅に何がある？」

「駅？」

そう言いながらエリゴールは構内のスピーカーを叩く

「ララバイを放送するつもりか！！！！？」

「……………！！！！？」

ルーシイ達が絶句する

「ふはははははははっ！！！」

エリゴールが高笑いする中、大きくは無いが構内に響くような声が聞こえた

「……………バカじゃないですか？ あなた」

「バカだと？」

「だってそうでしょう。放送するだけなら態々こんな大人数で行く必要もないし

何よりあなた達も死んじゃうじゃないですか

周りのみなさん巻き込んで無理心中する気ですか？」

「「「あっ!!!？」」「」

やっと気づいたんですか？……おっと

「チツ」

エリゴールが風の魔法を使って攻撃してきたのでバックステップで避けた

「このハエどもがあー!!」

カゲと呼ばれた男が今度は影の魔法による手を地面から出して攻撃してくる

だがそれをナツが防いだ

やれやれ、やっと復活ですか？ナツ

「今度は地上戦だな!!!!」

「ちっ、ここは任せたぞ!!」

エリゴールが窓を割って逃走する

「くそっ!!ナツ、グレイ!!奴を追え!!!!!!
此処は私たちが何とかする

………聞いているのか!!!!」

あの二人が聞くわけないでしょう？

「行け!!!」

「「あいさー」」

「最強チーム解散!!!」

最強チーム？何言ってるんですかルーシィ

そうしている内に敵の方から二人がナツとグレイを追って行った

「こいつ等片づけたら私達もすぐ追っぞ」

「うん」

「もちろん」

「女三人で何ができるやら…それにしても三人ともいい女だなあ」

「殺すには惜しいぜ」

「とっつかまえて売っちゃまおう」

「待て待て

妖精の脱衣ショーが先だ」

「……………」

無言で電気で自身の身体能力を上げた縮地を発動し、最後の一人を殴り飛ばす

「ぐへっ」

「誰の脱衣ショーが先なんですか？」

「やれやれ、せっかちな奴だ」

しかしこいつらがFTを侮辱したのを許すわけにはイカン」

そう言いながらエルザは換装で剣を取出し、切りかかる

ティアアラは縮地を再度行い、アイゼンヴァルトの懐に潜り込み、殴り飛ばす

エルザは換装で武器を交換しながら切っていく

「こいつらなんて速さしてやがる！！」

「エルザは武器を換装？して使ってるけど、ティアアラはどつやって攻撃してるの？」

「素手だよ」

「…え？」

「だから素手だよ」

「うっそお!!」

「ティアラはずっと前から鍛えてるから力は誰よりもあると思うよ」

その言葉にルーシィは絶句した

「エルザ、山分けですよ」

「ああ、わかってる」

どうやらエルザが決めるようなので私も終わりにすることにします

その場で跳躍し回りながら魔力を手に貯める

FTに入ってから分かったんですが私の魔法って動作を加えると威力上がるらしいんですね

そうしていると周りが帯電していく

……うん、準備完了

「な、こいつまさか」

「雷のような速さで駆け、舞うように電気を操る……
間違いねえ！……！コイツ……」

エレクトロ・プリンセス
電姫のテイアラ・ユーピテルだ！！！」

さあ、く、く、行きますよ

「雷の暴風」

電姫へエレクトロ・プリンセス（後書き）

今回はいつもより長いと思います>（――）<
いや〜ぶつちやけティアラの方が龍士より動かしやすいです
いつそ主人公交代も……？

感想・評価も下さると嬉しいです
では……この辺で

ララバイ（前書き）

お気に入り登録数が後少しで50件に

「読んで戴いてるだけで幸せなのにお気に入り登録まで…」とパソコンを点ける度に思います

まだまだ至らぬ所ありますが少しずつ慣れて行くことと思いますのでよろしく願います

ララバイ

「マカロフちゃんあんたんとこの魔導師ちゃんは元気があっ
ていいわ？」

定例会会場

そこでマカロフは他のギルドのマスターと話し込んでいた
酒が入っているのが分かるほどベロンベロンに酔っぱらっている

「マカロフ様

ミラージェーン様からお手紙が届いております」

そんなマカロフに手紙が届いた

手紙から出て来たミラをマカロフは他のギルドマスターに自慢して
いる

だが次の一言で酔いが一気に醒めることになった

「エルザとナツとグレイ、それからティアアラがチームを組んだんです
これって私が思うにFT最強チームかと思うんです

「

そこから先は恐らくマカロフの耳に入っていないだろう

手紙の内容が終わりに、映像が切れた途端マカロフは余りのショックに倒れてしまった

「（な、何てことじゃあつ！！！本当に街1つ潰しかねんつ！！！いや、エルザだけじゃなくティアラもいるとなると……定例会は今日終わるし明日には帰れるか……」

それまで何も起こらないでくれ…頼むつ！！！」

かなり大真面目に先程の冗談が本当になりかねんと考えていたマカロフだった

「うっっん……
困りましたねえ………」

アイゼンヴァルトの雑魚どもを倒した後、放送室とか探したけどエリゴールが見当たりませんね…

一度みんなと合流しましょうか…
何だかさつきから変な音も聞こえるし……

と割と余裕な態度でティアラは皆の元へ向かっている

「……何ですかこれ？」

巨大な風の壁に囲まれていた

「ティアラ！…何処に行ってたんだ！…！！」

「何処って……エリゴール探して構内を徘徊してたんですが…

……ああ成程……してやられましたね」

どうやらこの場を見て状況が理解できたようだがさすが状況把握能力が半端じゃない

「何とか何ねえかティアアラ!？」

ナツが焦って聞いてくる

手が無いので慌てるのは当然だろう

「……一時的に消すことは出来ます

ただし一人抜けたらまた閉じてしまうでしょう」

「!?!?…あるのか!?!?そんな方法が」

「ええ、あれ《…》をやります」

ティアアラはそう言うと魔法陣を展開し、そこに一滴の血を垂らす

「出てきなさい”麒麟”」

そうして出て来たのは雷を纏い神々しさを感ずる一角獣だった

「行きなさい」

ただ一言そう命令され、”麒麟”は魔風壁に突っ込んで行った

拮抗は一瞬で”麒麟”が突いた箇所はぽっかり穴が開いた

「ハッピー!!」

「あいさー!!」

そこをナツが突っ込み、魔風壁を突破していった

「……ふう」

”麒麟”を消し、一息つくために座りこんだ

”麒麟”

”雷切”

”千の雷”

この三つはティアラの技のなかで特別な技で全開の状態でも二回打てれば充分というほど魔力を使う

「すみません…少し休みます」

急激に魔力をした疲れからかティアラは睡魔に負け、意識が闇の中に落ちていく

ドシンっ!!

「きゃっ」

急に衝撃が来たので飛び起きると地面の上で寝ていた

「ティアラ!! 起きたか!!」

「どういう状況ですか? これは」

「カゲの奴に魔道四輪盗られたんだ!!
追っかけるぞ!!」

一応理解はしたティアラはナツ達に付いて行った

「いた! ! ! !」

「じっちゃん! ! ! !」

「マスター! ! ! !」

「しっ
」

皆がマスターに駆け寄りそんな所を背中に羽を生やしたオカマに止められた

「今イトコなんだから見てなさい？」

…てかアンタたちかわいいわね」

「…ブルーペガサスのマスター！！！！！」

「あら、エルザちゃんにティアラちゃん
おおきくなつたわね」

「だまってなつて

面白えトコなんだからよ」

クアトロケルベロスのマスター、ゴールドマインにも釘を刺された

「さあ」

マカロフはカゲを止めるところか急かしている

「（吹けば…吹けばいいだけだ！！
それで全て変わる）」

「何も変わらんよ」

マカロフの一言に驚き、思わず笛から口を放すカゲ

「弱い人間はいつまでたっても弱いまま

しかし弱さの全てが悪じゃない

もともと人間なんて弱い生き物じゃ

一人じゃ不安だからギルドがある

仲間がいる

強く生きる為に寄り添いあって歩いていく

不器用な者は人より多くの壁にぶつかるし

遠回りをするかもしれん

しかし明日を信じて踏み出せば自ずと力は湧いてくる

強く生きようと笑っていける

そんな笛に頼らなくても…な」

「(さすがだ…全てお見通しだったか…) ……参りました」

マカロフの話が終わった瞬間、皆がマカロフに向かって行った

エルザが抱き寄せてマカロフを鎧の餌食にしたり、

ナツがマカロフの頭を叩いたり

マスターボブがカゲをかわいいと言ったりとカオスな雰囲気になっていた

ティアラは何かに使うつもりだったコインを仕舞おうとしたが

カカカ…どいつもこいつも根性ねえな

突然聞こえてきた声に皆急停止する

もう我慢できん…儂自ら喰ってやるっ

「貴様らの…魂をな」

「やれやれ…厄介なことになってきました」

ティアラは仕舞いかけたコインを構えた

ララバイ（後書き）

長くなりすぎた前編です

きょうは部活の大会なので更新が夜遅くになります

ごめんなさい

最後のコイン…分かる人は分かりますよね

小さな伏線のもりです

最強チーム!!! (前書き)

前回の後篇です

突然ですが戯言シリーズ面白いですよ

零崎人識大好きですっ!!!

最強チーム!!!

「腹が減ってたまらん
貴様らの魂を喰わせてもらっぞ」

「魂って喰えるのか……!?!?」

「知るか!?!」

「一体どうなってるの」?
何で笛から怪物が……」

「あの怪物がララバイなのさ……つまり生きた魔法
それがゼレフの魔法だ」

とか言いつつ魔力が全然少ないですよ?
案外大したことないんですかね?

(貴女の主観で言うのは止めて下さいb y作者)

「さあて……どいつの魂から頂こうか……
決めたぞ

全員まとめてだ」

宣言した瞬間

「初手は貰いますよ」

「ああ」

ピュン

光がララバイを打ち抜いた

「グオオオオオオ」

「雷の魔法!?!」

「しかもなんじゃあの魔法は!?!」

「レールガン超電磁砲だよ」

「レールガン？」

ルーシィは頭に疑問符を浮かべていた
この世界にレールガンという概念は無いから当然だろう

「あい

ティアラが魔力を極限に抑えるためにつて考えた技(?)なんだよ
!!!!

雷と同じくらいのスピードが出るんだって」

ルーシィはその言葉に驚き、ティアラを見た

ティアラはコインを親指で軽く弾きながら電気を流している。
ルーシィはそれをじっと見ていた

コインが手元まで落ちてきた瞬間、コインをララバイに向かって弾く

ピュン

それは一筋の落雷と言っても過言ではない威力があった

その隙にエルザが切り、ナツが殴り、ララバイの攻撃を 그레이が防ぐ

「今だ!!!!!!」

グレイが隙を作り、全員での一斉攻撃を仕掛ける

エルザは自分の最も攻撃力のある鎧に換装し、ナツは自身の炎の出
力を上げ、
グレイも先程よりも高威力の魔法を放った。

「千の雷」

ティアラも自信の最高威力の魔法を放った

ララバイは一斉攻撃を喰らい、崩れ落ちた

「見事」

皆はララバイがあっさりやられたことに驚いている

「……これが……」

これがフェアリーテイル最強チーム!!!!!!

「アッーっーっー」

すじじじやろおおっ！……！」

「すじじーい……！」

マカロフがまるで自分のように自慢し、ルーシィは称賛するが

「ひゃ……ゃ……は」

マカロフがある一点を見た瞬間、口をあんどぐり開けて絶句していた

ギルドマスターたちが何事かと振り向くと

「……………!?」「……………」

定例会の会場が無くなっていた《……………》

ティアラの『千の雷』がオーバーキルだったのだ

『千の雷』は元々大軍勢用の魔法

『千の雷』の余波とララバイが倒れた方向に定例会があった為、テ

イアラに魔法が原因に一つだろうが、皆がそれを分かる日は無かった

「「「「捕まえるー！ー！ー！」」」」

「おしまかせとけ！ー！ー！」

「お前は捕まる側だー！ー！」

「恩知らずな方たちですね…
黒焦げにしてやりましょうか………」

「止めるティアラ！！
大人しく逃げんぞ！ー！ー！」

「ちよっグレイ！ー！ー！??
離してください！ー！ー！ー！」

「マスター…申し訳ありません…
顔をつぶしてしまっ……」

「いいのいの

どうせもう呼ばれないでしょ？」

帰りは歩いて帰ったとか……

最強チーム!!! (後書き)

書いてたらいつの間にか0時になってしまいました
申し訳ありません

番外編 剣製の日常と行方 前編（前書き）

一応ララバイ編わ前の話で終わり（のつもり）で番外編を入れよう
と思います

タイトルのいい加減さは気にしないでもらえるとうり難いです（笑

番外編 剣製の日常と行方 前編

龍士・E・ペンドラゴンの朝は早い

まだ日が昇り切っていない時に起き、寝起きとは思えない足取りでまず最初に朝食の準備から始める

龍士曰く「そこは譲れない」「らしい

今日の朝食はどうやらBLTサンドのようだ

「〜」

ご機嫌に鼻歌を歌っている

「……そろそろティアラを起こしに行くか」

とはいっても二人は同じ家で暮らしているわけでは無い
本人の希望で、龍士は寮、ティアラは一軒家に住んでいる

龍士が寮なのは「物件探しがめんどくさい」からだ

ティアラの家の合鍵は貰っているため難なく家に入る

四畳ほどのリビングからキッチンに入り、作ってきたB・L・Tサンドを置き、寝室に向かう
かと言ってさすがに中に入るわけにはいかないのだ

「ティアラ、朝だ、起きろ」

「……………」

反応なしだ

「…仕方ないな……………」

溜息を吐きながら小さな目覚まし時計を投影する
龍士の投影は剣以外のものだと完成度が低いが

「目覚まし時計に完成度はあまり必要ないだろう……
鳴ればいいのだから……………」

と呟きながらドアの下の隙間から数秒後に大音量が鳴る目覚まし時計を転がし、室内にいれる

……………
ジリリリリリリリリリリッ……！！！！！！

「きゃあああああ……………！！！！！！」

大きな物音と叫び声が聞こえてから数秒後、突然ドアが開き、

「ビックリするじゃないですかっ！！来るなら来るって言ってくださいよっ！！」

「おはようティアラ、とは言っても君はただ声を掛けるだけじゃ起きないだろう？」

それとも俺が中に入っても良かったのか？」

「……………」

龍士の言い訳に何も言い返せず、ティアラは赤面して押し黙る

「やれやれ、君なら大丈夫だろうが今日は朝食を持ってきた今日は俺と仕事に行くんだろう？準備したらリビングに来い」

龍士の言葉にハっとなって自室に戻ろうとするティアラを

「ああ、そうそう」と止め

「朝早くに大声は出さない方がいい近所に迷惑だ」

「誰の所為だと思ってるんですかっ！！！！？？」

龍士はクッククックと笑いながらリビングに歩いて行った

「……………」

「…ティアラ、お願いだからこちらを向いてくれないかね？
話ができない」

「……………」

ムスツとした態度で龍士の言葉に耳を貸さない

だが龍士のBLTサンドをしっかりと手に持つてるあたりやっぱり
しているものだ

「先程は俺が悪かった…だからこちらを向いてくれないか？」

「……………今度から」

そう呟きながらティアラは龍士の方を向く。

「今度からはもう少しマシな起こし方してくださいよ」

自分で起きるとは言わない辺り流石である

……………何がとほ言わないが

「ああ、善処する」

「…ん、なら良いです」

そう言って漸く二人は本題に入る。

「今日はエルザとも行くんですね？」

「ああ、三人で行く。」

仕事はエルザに決めてもらうことにしたよ

……そう言った時目が輝いていたが……」

「あ、あはは………」

互いに苦笑いをしながら朝食を食べ進めていた

「そう言えば、マスターが話があるって言ってましたね」

「ああ、まあ今回の仕事が終わってからでもいいだろう
許可も得ているのでな」

「そうですね………」

「来たか」

「ああ、遅れてしまつてすまない」

「すみません」

「いや気にするな」

「私が早く来過ぎただけだ」

「……因みに何時頃から？」

「恐る恐るティアラが聞いてみる」

「ん？今回は久々にお前達との仕事だからな」

「一時間前から待ってたよ」

「そんなに早く来たのかね！！??」

「流石に龍土も驚く」

「一時間前というとティアラの家に向かう直前だ」

「さ、そんなことイイから早く仕事に行くぞ！！」

エルザが普段からはあり得ないほど上機嫌で二人を急かす
……目キラッキラしている

ティアラと顔を見合わせ、苦笑いしながらエルザに付いて行く

「今日は何の仕事に行くんだ？」

「ああ、これだ」

と依頼書を見せてくる

「一角竜 ヴォルトトスの狩猟……か」

「ああ、何でも軍隊をたつた一匹で倒したらしい
手に負えないということで評議員が私に押し付けてきたのだ」

やれやれと溜息を吐く

エルザは偶に評議員から依頼が来ることもある

「ふむ、了解した

それで？場所は何処なのだ？

出来れば地形も教えてくれると有り難いのだが……」

「砂漠だ」

「……………は？」

「だから砂漠だ

何でも砂の中に潜って襲い掛かって来るらしい

「軍隊もそれでやられたんだとか」

一角竜……砂漠……砂の中に潜る

「今度はモ○ブロスか……」

龍士はとあるオンライン狩猟RPGの一角竜の名前を呟く。
まあ、初戦闘もそうだったから当然と言えば当然の反応……か？

「何をしているんだ龍士？
早く行くぞ」

「早く行きましょうよ龍士さあーん」

「……………ああ、今行く」

もう如何にでもなれ

そう思った龍士だった

番外編 剣製の日常と行方 前編（後書き）

前後に分けました

いやあ何か龍士書くの久々で楽しいですし書きやすいです（笑
速く本編でも書けるように頑張ります！！

番外編 剣製の日常と行方 後編(前書き)

後編です

今回で龍土がない理由が分かります

……まあありきたりですけどね(笑)

番外編 剣製の日常と行方 後編

砂嵐吹き荒れる砂漠の岩など障害物が多く、モンスターなどが侵入できない所に集落はあった

「おお！！ようこそおいで下さいました
フェアリーテイルの皆様

私は酋長のロブソンと申します」

ロブソンは俺たちに向き合い腰が折れそうなほど深く礼をした

…それ程危ない状況ということだな
こんなになるまで置いておいた評議員もたかが知れてるということ
か…

「初めまして

私はエルザ・スカーレットという

こちらはティアラと龍士だ

よろしく頼む」

「おお！！あの妖精女王と最終妖精ですか！！
それは心強い！！！！！！」

「……………orz」

「ふお？……………如何なされました？龍士殿」

「ああ、龍士はどうもその名が嫌いらしいのでな
すまないが名前で呼んであげてほしい」

「なるほど、それは失礼しました」

ファイナルフェアリー
最終妖精

なぜそんな厨二な二つ名がついたかという俺の戦っていた時の状
況が悪いらしい

闇ギルドを潰しに行く理由が「彼らを撃退する手段が無い」という
状況が多かったからな
最初は闇ギルド間だけだったが何時しか民衆の方にも流れてしまった

……………これでも俺はシャイな日本人だぞ！？
メンタル面は弱い方だ

「おい龍士！！
何時までそうしているつもりだ！！！！
早く行くぞ！！！！！！」

「遅いですよ龍士さん
たかが二つ名で何落ち込んでるんですか？」

最近ティアラの言うこと一つ一つが心に來る
教育間違えたか？

「酋長の話ではこの辺りを徘徊しているらしい」

復活した（させられた）俺はエルザに特徴を詳しく聞きながら
ヴォルトトスが出没するという場所に着いた

「どうだ？奴はいるか？」

「……いや、此処から”声”は聞こえん」

「はい。もう少し奥の方にいるみたいです」

エルザは俺の”覇気”を知っている

だから俺と仕事をするときには気配探知などは俺に任せている

「そうか……ならもう少し奥に行ってみるか？」

「……………待て」

「はい

何か大きな”声”が近づいてきます」

ティアアラも感じ取ったか…

そこで警戒していると突然地響きが鳴り、地面が軽く揺れだした

「ツツ！！？この場から離れろ！！…！」

叫んだ瞬間何の躊躇もせずに二人はその場から飛び退いた

「これが……ヴォルトトス」

体つきはモ○ノブロスそっくりだが細部が所々違った

まず背甲の作りが違う

モ○ブロスのような突起があるような状態ではなく全体的に棘が後ろに撫でつけた様に生えている

地中で早く動ける様に進化したんだろう

そして頭部のあのトリケラトプスの様な作りでは無く飾り気のない盾を斜めに置いたようなモノになっている
恐らく背甲と同じ理由で進化したんだろう

尻尾などは特に気になるような違いは無かった

「さて、早々に狩って帰るとしよう
マスターを待たせてるのでね」

「そうですね」

余りマスターを待たせるわけにはいかない
内容も気になるしな

一角竜は俺たちの敵意に気付いたのか咆哮を上げながら威嚇してくる

「トレース 投影、オン 開始」

エルザは鎧を換装し、

ティアラは体に電気を走らせながらコインを構え、

俺はお馴染みの夫婦剣を出して

ヴォルトトスと対峙する

「行くぞ一角竜

狩られる覚悟は充分か

」

俺たちはその一言をきっかけにヴォルトトスに向かって駆け出した

「10年クエスト??」

「そうじゃ」

無事ヴォルトトスを倒し、仕事を終えた俺たちはギルドに戻ってきていた

「何でも評議員が回してきたの『ファイナルフェアリー最終妖精に回すように』とのこと

「じゃ」

「100年クエストか……確か100年間誰一人クリアできていないクエスト……だったか？」

「しかもこのクエスト、あと数年も経てば1000年クエストになる物なんじゃ」

「!?!?!」

「1000年クエスト……100年クエストとは難易度が倍近く違うといわれるクエスト
1000年間誰一人クリアできず、評議会もとりあえず残しているよ
うな物らしい」

「正直今回は相当ヤバい、ギルダーツの行ったもの程ではないが
な……無理だと思うなら止めた方がいいじゃろう」

「どうやらマスターが今回は行かなくてもいいと言っただけで危ないらしい
ギルダーツか……FT最強と言っでもいいあのおっさんが行った1
000年クエストの一つしたといった所だろうか」

「……やれやれ、どうやら本格的に師匠の不幸体質が移っているらしいな俺は」

俺はこれ以上ないくらい真剣な目でマスターを見つめ、口を開いた

翌日、ギルドの前

FTの殆どのメンバーがギルドの前で見送りをするために集まって

くれていた

「聞いたぞ龍士！！ギルダーツが行ったのと同じくねーヤバい仕事に行くんだって？」

「ああ」

グレイが話しかけて来たので一言返しておく

「気を付けて下さいね」

ティアラが笑いながら見送りをしてくれる

??……何故笑顔なのだね？

「だって……龍土さんが失敗する訳ないじゃないですかそれに……こんな所で死んでる場合ではないでしょう？」

「!?!」

ああそうだったな

こんな所で……まだ桜を助けにも行っていないのに死ぬ訳にはいかないな

「ああ、そうだったな」

俺はその問いに微笑を浮かべて返す

番外編 剣製の日常と行方 後編（後書き）

これで番外編は終わりですが…如何でしょうか？
個人的には久々の龍土が書いて満足しました！！

「桜のこと忘れてた」という皆さん！！

大丈夫です！俺も忘れてました！！（おい

次回からまた本編に戻ろうと思います。

有り難うございました

評議会はカエルを飼うのでしょうか？（前書き）

今回から新しい編に入ります！！

相変わらず龍士は出てきませんが若干は絡めます！！

評議会はカエルを飼うのでしょうか？

魔法評議会会場 エラ

「アイゼンヴァルトが潰れたところで何も解決しない」

10人の評議員たちが腰かけいすに座り、丸テーブルを介して向き合っていた

「まだ闇ギルドは星の数ほどあるぞ」

そう闇ギルドは文字通り星の数ほどいる
たった一つ潰したところでどうにもならないだろう

「だがあれだけけむたがっていたFTに
今回だけは助けられたみてーだな」

「たった4〜5人でギルド1つ潰しちゃうんだもん
すごいわね」

ジークレインとウルティアの言葉に残りの評議員は押し黙る

しかしウルティアの言葉にジークレインは

「ま、龍士は一人でぶっ潰してるけどな」

明らかにオーバーキルだし、と付け足す

ファイナルフェアリー
「最終妖精か…」

「奴は今何処にいるのだ？」

「この二年間音沙汰がないんだらう？
クエストは失敗したんじゃないか？」

「途中で死んだかもしれん」

「生きてるぜ」

ジークレインの一言に評議員はそちらに顔を向ける

「生きてるに決まってる……」

アイツが死ぬなんてことほどつまらないことはない」

「そう言えば貴様は奴とは知り合いだったな」

「まあな」

その言葉にジークレインは素っ気なく返す

「早く戻って来い龍士」

お前がいなきや折角のゲームがつまらない」

ジークレインは己の野望の為に龍士の生存を望んでいた

マグノリア FTの玄関前

朝、二人の魔導師が向き合っていた

一人は桜色の髪鱗のようなデザインをしたマフラーを付けた男
ナツ・ドラゲニル

もう一人は鎧にスカートという変わった服装の女
エルザ・スカーレット

「ちょ、ちょっと!!!本気なの!?
二人とも!!!」

金髪の髪を右の後ろの方で軽く結んだ女性…ルーシイが二人に確認
を取っている

「本気も本気

本気でやらねば漢ではない!!!」

「エルザは女の子よ」

「怪物のメスさ」

「後でぶっ殺されますよ
マックス」

「……………」

「ティアラ!!!何で止めないの!!!?」

明らかに実年齢とかけ離れている少女ティアラ・ユーピテルわ欠伸
1つしながら

返答する

「そーですねー…」こはひとつ注意しなくちゃ……」

ああ良かったとルーシィは安堵の溜息を吐くが

「二人ともあんまりうるさいと怒りますからねえ〜
気を付けてくさあ〜い」

「注意するトコ違つてしょうがつ！！？」

呑気なティアラにルーシィが突っ込む

やはりルーシィは突っ込みの才能があるようだ

「そもそもいいの！？最強チームの二人が激突しちゃって」

「最強チーム？なんだそりゃ」

「あんとナツとエルザじゃないっ！！後ティアラ！！」

「はあ？くだんねえ

誰がんなこと言っただよ？」

「あれ？私もチームに入ってたんですか？」

グレイは鼻で笑い、ティアラは首を傾げる

（何ともまあ今更な発言だなティアラ…（汗）

「あっ…ミラちゃんだったんだ」

「泣かした!!」

ミラが泣き出した時点で確定である

「最強の女は……ティアラと同率一位かな?とは思っけど」

「最強の男となるとミストガンやラクサスもいるし
あのオヤジや龍士も外す訳にはいかねえな」

「如何でしょうか?あのオヤジさんと龍士さんが決着付ければそれが最強だと思うのですが……」

「……………ああ〜」

ティアラの言葉に皆は納得する

そんなことをしている内にマスターから初めの一言で戦闘が始まった

「だりゃっ!!!!!!」

先手必勝!!と言わんばかりにナツが接近し右手を振るっ

それをエルザはバックスステップで避ける

今エルザが換装して着ている鎧は『炎帝の鎧』という炎に耐性がある鎧だが

無傷というわけでは無い

ナツの魔法の持ち味は炎を纏うことだがそれ以外にもパンチの威力も上がるのだ

炎によるダメージは受け流しても肉体的なダメージを受けるだろう
バックステップした状態からそのまま右手の剣をナツに向けて振るう
それをしゃがむことで躲し、顔に蹴りを放つが顔をそらすことで避
け、蹴ってきた足を
切りつけるがナツは手足の位置を逆に（つまり逆立ちwww）する
ことで避ける

エルザは地面についている腕を蹴ってナツの体勢を崩すがナツは火
を吐いて牽制する

「すごい!!!」

「な？いい勝負してるだろ？」

「どこが

あれが龍士だったら瞬殺だぜ」

周りのギャラリーを無視するように二人は互いに向かっていくが

パアアン!!!!!!!!!!

「全員その場を動くな

私は評議会の使者である」

「評議会」

「使者だって!?!」

「何でこんな所に!?!?」

「…あのビジュアルについてはスルーなのね……」

……評議会はカエルを飼っているのでしょうか?

ティアラはそんな空気を讀まないことを考えていた

「先日のアイゼンヴァルトの事件において
器物損壊罪他11件の罪の容疑で…」

エルザ・スカーレットを逮捕する「

評議会はカエルを飼うのでしょうか？（後書き）

途中の戦闘ですがごめんなさい

原作丸パクリしました

だからあまり読んでも意味は無いと思います

それとガルナ島編ですが少しいじります

まあ龍士関連ですしそこまで大きく変えませんがね

大人しくしてなさい

「やっぱり納得いかないっ！！！」

ルーシイは机から乱暴に立ち上がる

先程、アイゼンヴァルトを倒した際にFTが起こした不祥事との名目でエルザが評議会に連行されたところだ

FTの皆はこの結果に腑に落ちないようである

「出せっ！！！俺をここから出せ」

「うるせえぞナツ」

ナツはトカゲ？に変えられて閉じ込められている

「出したらどうせエルザを助けに行くとか言うんでしょ？」

「言わねえよっ！！」

誰がエルザなんかの為に！！

俺は一言言っただけなんだ！！！！！！

評議会だか何だか知らねエが間違ってるのはあっちだろ！！！！！！

やはりナツは乗り込む気のようにだ

「そうよ!!間違ってるのはアッチじゃない!!
証言しに行きましょう!!!!」

ルーシイも乗り気だ

「まあ待て今から行ったところで判決には間に合わん」

「でも!!!!」

「だせ!!!!!!」

オレを出せ!!!!!!」

「本当に出してもよいのか?」

マカロフ聞くとナツは突然黙ってしまった

皆は疑問符を浮かべている

「かつ」

「ぎゃっ」

マカロフが変身を解除させると

「マカオ!?!」

「す・・・すまねえ……」

ナツには借りがあってよお」

「ナツに見せかける為に自分で変身したんだ」

「成程・・・そういうことですか」

「「「「「!!??」「」「」」

そこには気絶したナツを横抱きにしてこちらに来るティアアラがいた

「ナツが評議会に向かっていたので連れ戻してきました
私の雷速瞬動があれば造作ありません」

「……………はっ!!?!ティアアラ!!何で止めやがった!!!!!!」

「貴方が行けばもっとややこしいことになるんですよ
エルザの懲役期間を一日から増やす気ですか？」

「「「「「…は?」「」「」「」「」「」「」「」「」」

「……………つまりですね」

「つまり形式上の逮捕だと」

「はい」

「というかこんなノバレたら評議会の信用失うし何より民衆に示しが見つからないでしょう?」

「流石じゃなティアラ」

「いえいえそれ程でも」

暫くしてエルザは無事ギルドに帰ってきた

時と場所は少し変わり、とある酒場

キイ

「お、いらつしゃい」

とある男がその酒場に入ってきた

そこはまだ誰も入ってきていないので男の貸切状態である

「見ない顔だね

遠くから来たのかい？」

「ああ、仕事で少し西の方にね……
漸く終わって今家に帰るところだよ」

「へえ、何処にあるんだい？」

マスターは酒の準備をしながら男に質問する

「マグノリアと言えば分るかね？」

「そんな遠くから来たのかい！？
大変だねえ……」

「まっただ……」

運悪く上の方から抜擢されてな……

おかげでここ数年はこちらに滞在していたよ」

男はやれやれと溜息を吐いた

その顔はまるで自分の不幸體質を諦めているような顔だった

「そ、そうかい……」

そういうのは「」で愚痴ってもらって構わないよ
…はい」

「すまないな…なら聞いてもらってもいいかね？」

マスターと男は翌日の日が出るまで飲み明かしていたとか

大人しくしてなさい（後書き）

最後の人は誰だか分かる人、いますよね！！
復活も近いかもしれません

ミストガンとS級

「いやあ~~~~よかったぜ
ギルドが解散でもするかと思ったよ」

「まさか!!ありえねえよ」

エルザが帰ってきてみんな安心したのかいつもの雰囲気を取り戻していた

「そうか!!」

カエルの使いだけにすぐに”帰る”」

訳ではなかった

グレイによってまたギルド内の空気は冷えた頃

「そうだ!!!」

忘れてたっ!!!

エルザ　!!!

この前の続きがーっ!!!」

ナツが勝負の決着が着いていないことに気づき、

エルザに飛び掛かっていく

「やれやれ」

エルザは溜息を吐き

ゴン

ドゴオオン

「仕方ない
始めようか」

「終ーーーーー了ーーーーー!!!!」

あまりにあっけなく終わった為、皆爆笑する

漸く元の雰囲気を取り戻したところに

「「「「「!!」「」「」」

「眠い……奴じゃ」

ギルドのメンバーは皆……いや、ティアラだけは平然としていて
マカロフは辛うじて起きている
ティアラは電気を応用して使っているのだろう

「お久しぶりです
ミストガン」

「ああ……龍士は？」

「まだ帰ってきて無いです」

「そうか……」

ティアラと二、三話し込んだミストガンは選んだ仕事をカウンターに置き、

「行ってくる」

「これっ!!」

眠りの魔法を解かんかった!!」

「伍」

「四」

「参」

「貳」

「吉」

ミストガンが完全に消えたことで皆目を覚ました

「この感じはミストガンか!！」

「相変わらずすげえ眠り魔法だ!!!！」

「皆さんすごい眠りっぷりですしね」

「そついやティアラは効かねえんだったか…」

「こんなもの電気で体を刺激すれば聞きませんよ」

「ミストガン？」

「FTの最強の男候補の一人だよ」

ルーシィはミストガンに、ロキはルーシィにと違うベクトルで驚いている

「どついう訳か誰にも姿を見られたくないらしくて

仕事をとる時はいつもこうやって全員眠らせちゃうのさ」

「何それっ!!!！」

「だからこの手の魔法は効かない龍士やティアラとマスター以外誰

もミストガンの顔を知らねェんだ」

「いんや……俺も知ってっぞ」

「ラクサス……!!」

「いたのか」

「珍しいですね……あなたがいるなんて」

「もう一人の最強候補だ」

「……」

グレイがルーシィに説明している
イヤホンをし、右目に稲妻型の傷を持ったラクサスは一瞬ティアラを睨んだ後、
ギルドの皆の方へ向き直る

「ミストガンはシャイなんだ

あんまり詮索してやるな」

「ラクサスーーーーー!!!」

オレと勝負しろーーーーっ!!!」

ナツはさっきエルザに負けたのにラクサスに勝負を挑む

「エルザごときにか勝てねえ 奴が俺に適う訳ねえだろ」

「それはどういう意味だ」

エルザがすごい形相でラクサスを睨んでいる

「俺が最強ってことさ」

「私との決着が着いてない上に龍士さんに勝ててない人のどこが最強ですか？」

「……試してみるか？」

「いいですよ？今すぐここでやっても」

ティアアラは” 覇気 ” を全開にし、ラクサスはその ” 覇気 ” に負けずに睨みつける

周りにはあまりの迫力に声が出ずにいた

「やめんかティアアラ!!!ラクサス!!!」

「……ちっ」「

互いに舌打ちし、目を逸らす

「ナツ、二階にはまだ上がるなよ」

今にも飛び掛かりそうになっていたナツをマカロフが咎める
ナツは悔しそうに顔を歪めていた

「ミストガンもラクサスも聞いたことのある名前だったなあ

やっぱりFTってすごいギルドよね」

その日の夕方、ルーシィは愛犬？のブルーと話しながら帰っていた

「大体FT内の力関係も分かってきたし」

どうやらルーシィの中では自分はナツやグレイと同格だと思ってるらしい

明日に向けて気合を入れながら帰ると

「おかえり」

「おかー」

ナツとハッピーが筋トレしていた

「汗臭ーい」「ぐほっ」てか筋トレなら自分の家でやりなさいよ！
「！！」

此処まで二人は噛み合わない会話をしていたが

「俺決めたんだ」

「S級クエスト行くぞ！！！！」

ルーシィ」

ハッピーは懐からS級と書かれた紙を取り出した

その日の夜、その家から大きな叫び声が聞こえたらしい

ミストガンとS級（後書き）

ガルナ島編早くもスタートです

速すぎるかな？とも思っけど高校始まったらあまり更新できないから
evenだと思います

呪われた島（前書き）

少し遅れてしまいました

高1の間だけです。が塾に通っていました

今回からガルナ島編が本格的にスタートします

それと後少しでお気に入り登録が100件に！！

一応番外編も考えています

その件については後程…

では、ど（ry

呪われた島

「たいへん!!」

マスター!!!!二階の依頼書が一枚無くなってます!!!!」

あらら、十中八九ナツでしょうね

というか皆さん?そこまで驚かなくても良いでしょう?

「オウ…それなら昨日の夜泥棒猫がちぎっていくのを見たぞ」

ほら大当たり…:…まったく…男の子なんですからこれくらいやんち
やしても良いでしょうに

「依頼内容は?」

「呪われた島 ガルナ島です」

「悪魔の島か!!」

これは少しめんどくさい物を選びましたね……

「これは重大なルール違反だ」

じじい！！奴らは帰り次第波紋…だよな」

「そのルール違反を知ってて止めなかった貴方こそ波紋にすべきでは？」

私はラクサスに命一杯の毒を吐く
どうもこの方は好きになれません

暫く睨み合った後、溜息を吐いて

「マスター

今日は帰ります

それと暫く用があつて休みますので……」

「そうか…わかった」

私は背中に視線（約一名からは殺気のおマケ付きです）を感じながらギルドを出た

……今日では無くもう少し後…二、三日後の方がいいですね
その方が二人とも島にいるからすんなり同行できます

三日後　夕方

…そろそろ頃合でしょうか

私は電磁浮遊を使って海を渡り、ガルナ島に到着する

……………ん？何ですかあの光は

見てみると山の頂上付近から普通ではない色の光が出ていた

「……………どうやら今回のクエストに関係があるみたいですね……………」

「テイ、ティアラ！！！？？」

？…この声はルーシイでしょうか？

声のした方を見るとルーシイが若干ビビリながらこちらを見ていた

「こんばんわルーシイ……………何故そんなに震えているのですか？」

「え、えーっと、その……………」

？？……………ああそついうことですか

「何か勘違いしているようですが私はあなた達を連れ戻そうとは思っていませんよ」

「……………え？」

「確かに褒められた行為ではありませんが私は意欲がある方には協力は惜しみません
龍士さんもそうでしたから……」

「前から思ってたんだけどティアアラと龍士……さんってどんな関係？」

「??ちょっと難しいですが……」

「……少し歳が近い親子……でしょうか」

ルーシィはティアアラの手助けすることによって安堵と心強さを得ていた

二人は村へ戻りナツ達と合流した

「ティ、ティアラ!!!!!!」

ナツはグレイの時とは違っておっかなびっくりしている

「安心してください

連れ戻すことはしませんよ

そもそも協力するために来たんですし既に受けてしまった仕事を放棄するのは

FTの名折れでしょう？」

「!!!!!!当たり前だっ!!!!!!」

そんなナツを見て微笑んでいたティアラだが上空に気配を感じ、空を見る

ナツ達もそれに見習い、上を向くと

服を着た大きなネズミが大きなバケツを持って空を飛んでいた

呪われた島（後書き）

長くなりそうなので前後に分けました

番外編ですが候補があります

？ 龍士たちがFTに入る前のこと

？ 前回出たティアラとエルザ以外のFTの人との仕事風景

どっちにしようか……うーんでもまだ両方とも話の筋すら考えてないし

どちらがいいか等希望がある方は感想などと一緒に書いてくれると嬉しいです

アンケート

つい先ほど確認しましたところお気に入り登録数が1000件を突破しました!!!!!!

という訳で突破記念に番外編をやらうと思っんですが

内容はとりあえず三つ用意しました

? 龍士達のFTに入る前の生活

? ティアラ以外のFTメンバーの仕事風景

これはナツとの仕事とグレイとの仕事にしようかと思えます

? 前回の番外編の続きとして龍士の十年クエスト

投票などは感想などと一緒をお願いします!!

締め切りは投票数にもよるけど9月19日とします

龍「理由は何だね？」

なんとなく

強いて言うならきりがいい日だから

「……………トレース 投影、オン 開始」

すいませんでしたって、ぎゃああああこっち来るなああああ！！

それではこの辺で！！

更新は隙を見てする予定です！！！！

それでは！！！！！！

空から来ても結局地上に降りてくるのでは？（前書き）

タイトル適当です（笑

何か俺も早く龍土復活させたいなあと思いつつながら書いてしまつので
少し雑になってしまいます
反省しなくては…

空から来ても結局地上に降りてくるのでは？

「ネズミが空を飛んでる??
それにあのバケツの中身は…?
気を付けた方がいいですね……」

「ルーシイ!!!!!!」

「!?!」

驚いてナツの方を見るとナツの足元に先程の液体が植物にかかっていた

液体が掛かった植物は煙を上げながら溶けるどころか地面も溶けてそこにぽっかり穴が空いた

ナツ? 如何しました?

そんなに怒って、あいつらが何か言っただんですか?

「あいつらこの島の皆のこと醜いって……」

……流石に許すわけにはいきませんねえ

「皆さん！！散開せずに中央に集まってください！！
あれは私が消します……」

右手に魔力をためると同時に術式を構成
魔力は最大威力の50%相当、術式もあまり精密にする必要はありません

「皆さん、鼻をつまんでおいてください」

島民の人たちに注意する
蒸発した後のガスも毒ですからね

「千の雷」

降ってくる毒を特大の雷で蒸発させていく

「……さて」

私は降りてきた三人に向き直る

……降りてくるなら空から攻撃すればいいのでは？

割と真面目に考えていると

「零帝様の敵は駆逐せねばなりません

せめてもの慈悲に一瞬の死を与えてやろうとしたのに……

どうやら大量の血を見ることになりそうですわ」

「あ？……っ！！？」

ゴオウツ！……！！！！！！

「それは……今回の件にまったく関与していない島民を殺す……
と言つことですか」

「そ、そうですわ……！！！」

ラクサス以上にムカつく女に”覇気”をぶつける
…へえ、耐えるんだ……まあまだ二割も出してないですけど

「皆さん、逃げて下さい
今ちよつと周りを考えることが出来ないのです」

「あ、ああ……スマン……有り難う……！！
此処は危険だ……！俺たちは離れよう……！！……！！」

「逃がしませんわ

零帝さまの命令は皆殺し……アンジェリカ、行きますわよ」

「チュー……ジュツ……！！？」

変なデカネズミに接近し、腹を殴る

武装色は使えませんが鍛えてはいるのでそれなりの威力はあります

「アンジェリカ!? …… よくもアンジェリカを…許しませんわ!」

「……ルーシィ、あの雑魚の相手、お願いします」

「あたし!?!?!」

「はい…ぶっちゃけあの雑魚自体の力は低いでしょう

あのデカネズミも戦うことで実力の低さが知らず知らずのうちに補われてるといった所でしょうか……

……まあそれでも弱いし、あの雑魚の顔が見たくないのよ」

「本当の狙いそれ!?!?!」

とか言いつつあの雑魚と向き合うルーシィ

さて、私の相手は誰ですか?

「魔導師ギルド 蛇姫の鱗と言えば分るかな?」

「それは私たちには関係ないですね」

「ああ……何処のギルドだとか誰の仲間だとか関係ねェンだよ

おまえ等は依頼人を狙う
つまり仕事の邪魔

つまりFTの敵
戦う理由はそれで十分だ」

「ッ!?…トビー、手を出すな
コイツはオレ一人で片づける」

「おおーん…じゃあ俺の相手はお前だな」

「一撃喰らってそれで終わり…ただそれだけです」

犬耳付けたバカそうな男がティアアラと向き合い、爪を構える

「喰らわねえよ
俺はユウカ寄り強ええんだぞ……」

麻痺爪 メガクラゲ
この爪にはある秘密が隠されている」

「……麻痺ですか？」
「何故わかった!?!?」

自分で言ってたじゃないですか

「……うわ、どうしよう……私の相手はバカですか……………」

「バカっていうんじゃないよ!!!!」

「おっと」

爪で攻撃してきたので横に体をずらして避ける

麻痺の毒持った人の攻撃を態々喰らうほどお人よしではないです

「……もつなんか相手するのもメンドクサイ」

避けながら思ったんです……コイツやっぱりバカだと

だつてやたらめつたら振り回し過ぎだし
急所とか全く考えてないし

「あれ？ここに何かついてますよ？」

「おお？…おおおおお！？」

「やっぱりバカだコイツ」

おとつと、余りのバカさ加減に思わず口調が変わってしまいました
気を付けなくては……

あれ？どうやら遊んでる内にナツもルーシイも終わったみたいですね
というかなツいないし

「ルーシイ、私はとりあえず見回りに行つてきますので
朝には帰ってきますから」

仕方ないからルーシイだけに声を掛ける

……大分荒れましたから新しい避難所が必要ですね

周りはおもう家とかは崩壊していても住める様な物ではなかった

ルーシィに一言残し、そう考えながら村だった場所を出た

空から来ても結局地上に降りてくるのでは？（後書き）

ティアラが知らず知らずの内に原作ブレイクしてますね（笑
まあ大筋は変わってませんけど

覚悟

「ふあああ………特に何も異常はみられませんでしたね………」

見回りから戻るために事前に教えて貰った避難所欠伸をしながら
向かう

朝が弱い私にしては上出来ですね

そうして向かった先は木や岩で囲まれていて
立地条件は決して良くない

普段は作業で使うであろう木の柱や桑が置いてあり、

家も木造では無くテントで出来ている

お世辞にもいい場所とは言えなかった

丁度そこに人が通りかかったので声を掛けてみる

「あの、少しいいでしょうか?…」

「ここは普段何をされている所なんでしょう?…」

「ああ、ここは村から少し離れた所にある資材置き場だよ
昨夜、村の家とか無くなっちまったろ？
だからここに一旦避難してるのさ」

「そう…ですか」

”無くなった”

その言葉を聞いてあの時の自分を今すぐ殴りに行きたくなった

(あの時もう少し冷静でいられたら)

「……何考えてるかはワカンねえけどよ…

アンタ達のおかげで怪我人は出なかつたんだ

村はまた立て直せばいい

だから元気出せや……な？」

「……はい

ありがとうございます」

「そつだ！！アンタんとコの兄ちゃんが眼エ醒めたんだ！！

何でもお仲間に呼ばれてるらしいぜ？

行ってみたら如何だ？」

「…はい！！

行ってみます！！！！」

グレイを寝かしていたテントに向かうとグレイはテントの入り口で

待っていた

「グレイー!!」

「ティアラ!? 何でここに……」

ややこしくなる前に説明する

「…そうだな

お前も龍士もそういう奴だったな…」

「それは褒めてるんですか?」

「もちろん

………そういうヤツ達が「目が覚めたらテントに来るように」って

「そうですか…なら私も行きます」

そうして指定された他よりも一際大きなテントの中に入ると
そのテントにも資材は置いてあったが端の方へ退かされていて

真ん中には縄で縛られていて冷や汗がすごいルーシィとハッピーと

この島にはいないはずの緋色の髪をストレートにした鎧の女……エ
ルザ・スカーレットが足を組んでこちらを睨んでいた

「エルザ！！？」

この島にエルザがいることに驚くグレイ

(あらら、もうバレてしまいましたか)

エルザにバレたことを残念がるティアラ

「大体の事情はルーシィから聞いた

……お前はナツ達を止める側ではなかったのか？グレイ」

いつものキリツとした眼では底冷えするような冷たい目でこちらを見ていた

「そしてティアラ……お前は自ら進んでここに来たと聞いたが……本来ならお前も止めるべきではないのか？」

「……………」

ティアラの話になったとき、ルーシィは顔を俯かせる話したことに後悔しているのだろう

「……………まったく……あきれてものも言えんぞ」

「ナ……………ナツは？」

エルザがいることで若干挙動不審になるも、ナツがいないことに気づくグレイ

ルーシイがティアラが見回りの行った後のことを話し始めた

「……つまりナツはこの場所がわからなくてフラフラしてるわけだな……」

ルーシイの話したことからナツが迷っていると推測するエルザ

「ナツを探しに行くぞ
見つけ次第ギルドに戻る」

「……本気ですか？
事情を理解していて尚この仕事を私たちに放棄させると？」

「そうだ！！この島で何が起きてるか知ってんだろ！！」

「……ソレが何か？」

こちらを睨み、ティアラたちの意見に淡々と返すエルザ

「私はギルドの掟を破った者を連れ戻しに来ただけだ
……残るはナツ一人……それ以外興味は無い」

「……この島の人たちを見てはいないのですか？」

「見たさ」

「じゃあどうして!?!」

「依頼書は各ギルドに発行される

正式に受理された魔導師に任せるのが筋ではないか?」

ティアアラの質問に簡潔に答え、 그레이の疑問に正論を述べる

(弱りましたね…エルザの悪い癖です)

エルザは基本的に何よりもまず”ギルド”を優先する

それが他人が助けを求めているも…だ

ティアアラがどうするか悩んでいると

「見損なつたぞ…エルザ」

「何だと?」

그레이の言葉にさらに眼を鋭くするエルザ
心臓が弱い人なら発作を起こすだろう

「 그레이!!!エルザ様になんてことを!!!」

「貴方どちらの味方ですか?」

「つてか”様”？」

移り気な猫にティアラとルーシィが突っ込む

その間にエルザは武器を取出し、切っ先をグレイに向ける

「お前までギルドの掟を破るつもりか……………ただでは済まさんぞ」
しかし

「勝手にしやがれ!!!
これは俺の選んだ道だ!!!
やらなきゃならねえことなんだ……………」

グレイはその剣の刃を素手で掴み、己の覚悟をエルザに示す
エルザは剣を振ることでグレイの手から剣を開放し、グレイを凝視する

「最後までやらせてもらおう……………
斬りたきゃ斬れよ……………」

「!?!?!」

そう言い残してグレイはテントを出て行った

「……………グレイ、龍士さんに似てきましたね」

ポツリとティアラは呟く

「きつと龍士さんもこうする筈ですよ」たとえギルドを介していても介していなくても人を助けること

間違いはない

きつと俺は人を助けてこのギルドを抜けることになっても後悔しないだろう」って」

「!!!?」

この後にも龍士は言葉を続けていたが今は必要ないと判断したのだろう

「私も同じです

自分で決めてここにいます…

たとえそれが原因で皆と別れることになっても決して後悔しない」

これ以上ないくらい真剣な目でエルザに語りかけ、

ティアラはグレイを追いかける為にテントを出て行った

残されたエルザは縛られてるルーシィとハッピーに向き直り、

「…行くぞ」

縄を切つてルーシー達を開放する

「これでは話にならん…まずは仕事を片づけてからだ」

惚けていたルーシーだが言葉の意味を理解し、徐々に笑顔になる

「勘違いするなよ

全員罰はつけてもらつぞ」

「「あい…」」

何処までも容赦のない女魔導師だった

覚悟（後書き）

アンケート見ると？が結構来ますねえ…

まあ本編の後に書くのに一番馴染む話ですからこちらは構わないんですが…

……クエスト内容決まってるない

いや、ちゃんとありますよ！！？候補は

モンハンだけどwww

デリオラ（前書き）

前々から思ってたやるの忘れてたんですが

sideを付けようかと思えます

今まで付けずに書いてしまったことをお詫びします
申し訳ございませんでした

デリオラ

side ティアラ

あれからグレイと合流した私…いや、エルザ達もですね
とにかく合流し、ナツがいるであろう遺跡に向かっています

向かう途中グレイが態々デリオラ？を復活させる理由を聞いたわけ
ですが……

アイゼンヴァルトの時から多いですが……バカじゃないですか？」

「どついつの意味だ？ティアラ」

おっと

言葉に出ていましたか

「どついつって氷を解かすということはそのウルさんの命をかけて
はなつた魔法を無駄にする
ということですよ

いくら死んだ人を追い越すためだからと言って
そんなことをするなんて弟子失格の最低野郎だなあ…と」

「お前ホント容赦ないな……」

先頭を走るグレイから突っ込みが入る

いいじゃないですかこれが私の大事な一つの個性なんですから
(毒舌が個性とかwww)

ん？何か電波を受信しましたが…まあいいでしょう

閑話休題

「いや…あいつは知らねェんだ

確かにウルは俺たちの前からいなくなった」

でも、で区切りグレイは次の言葉を一言で言い切る

ウルは生きている

「……!!!!??」「……」

これには私を含めて全員が驚く

……だってそうでしょう

死んだ死んだ言われてた人が生きてるんですから

エルザが過去の詳しいことを聞き、グレイが話し始める

……いいお方ですね…ウルさんとは…一度お会いしたかったです

元々グレイが住んでいた町はデリオラに襲われ壊滅したらしい

グレイも怪我をしていたがそこに偶然通りかかったウルに助けられ、弟子になったとか

……結構多いケースですね

何の危険も無い平和な日常だったがある日デリオラが近くにいるという話を聞き、

グレイは我も忘れて飛び出し、デリオラと戦ったがまったく歯が立たなかった

今度こそ死ぬ、という状況でウルに助けられ、今までウルとの生活が楽しかったと改めて痛感するが、

リオン：兄弟子（今回の事件の首謀者：だとか）が暴走し、後にデリオラにウルが掛ける絶対凍結魔法
アイスドシエル
”絶対氷結”を放とうとしたがこれをウルが妨害・気絶させた

膨大な魔力に気づいたデリオラにウルが改めて”絶対氷結”を発動
デリオラは封印……と

……ん？

「如何したティアラ？」

「いえ、ウルはグレイの闇は私が封じると仰ったんですね？それに生きています……」

「ああ、そうだ」

「そうですか……分かりました
ありがとうございます」

それが本当ならウルは今も……

s i d e o u t

話は終わり、森の中を駆けていると

ズズウウウウン！！

大きな音が鳴り響き

「遺跡が……傾いてる？」

「…ナツの仕業ですね」

「ああ、狙ったのかは知らねえがこれで…」

「見つけたぞ FT！！！！」

話し込んでいると

額に月のマークが入った変な覆面？を頭に被った集団が出てきました

「うわぁっ！！..!」

「変なのがいっぱい！..!」

「というか暑くないのでしょうか？こんな森の中で」

「お願いだから空気読んでティアラ！..!」

そうしている内にぞろぞろと増えていく集団

「行け.....ここは私に任せろ」

「一応私も残りますから安心してください」

グレイも遅れるわけにはいかないが少し迷っている

仲間を置いていくことに躊躇しているみたいだ

「リオンとの決着を着けて来い」

その言葉で覚悟が決まったのか力強く地面を踏みしめ、走り出した

「さて、始めますか」

「ああ」

「あたしもいるわ!!!」

ティアラ達は何人いるか分からない集団に向かって行った

S i d e ? ? ?

「オイ！！聞いたか！？FTのギルドが襲われたって話！！！」

「ああ、何でも鉄の杭が何本も刺さってたとか……」

「！！！？…何だと

「すまない…少しいいか？」

「ん？アンタ見ねえ顔だな
旅の人かい？」

「ああ、東の方に行くんだがそのFTというのは東の方にある魔導師ギルドではないかね？」

「ああそうだ

マグノリアツツー町にあるんだがな……

鉄の杭みてえのが何本も刺さってたらしい

……噂じゃ何処かのギルドの仕業じゃないかとも言われているよ……

「アンタも行くなら気を付けな」

「ふむ……了解した」

「すまないな話の途中に」

「では俺はもう行かせてもらっよ……」

「ああ気を付けてな」

「ありがとう」

「……それにしても、別のギルドの仕業……か」

「……これは急いだ方がよさそうだ」

「そう呟いて赤い外套の男は足を速めた」

デリオラ（後書き）

時期的にこの辺が合うと思ったので最後に入れさせてもらいました
！！

もうわかりますかね？

あの男復活します！！！！！！

前回と同じタイトルにしようとしたので私が阻止しましたbYティアラ(前書き

こんなに更新してていいのだろうか…
宿題終わってないのに……

傑作だぜ!!!

………すみません調子乗りました

前回と同じタイトルにしようとしたので私が阻止しましたboyテイアラ

sideテイアラ

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

全員統一の変な服装の集団を蹴散らしていると
遺跡から妙に大きな音が鳴り始めた

「何の音だ？」

「……もしかして」

見ると

「……………そんな」

先程までナツによって傾けられていた遺跡が元に戻り始めていました

弱りましたね

これでは本来の仕事の目的である紫の月の光が遺跡に入ってしまいます

こんな言い方でしかないのは私も詳しくは聞かされていないので

紫の月の日、島の人たちが悪魔みたいな体になってしまうと
実際見たわけですが…

で、さらにその月から出る光がデリオラの氷…つまりウルを解かす
ことが出来るというらしいです

まあ随分入り組んだ話ですね

閑話休題

「二人とも私は先にデリオラがいるという地下に行ってください
二人はその頂上にあるという魔法陣の破壊を」

「わかった」

そう言い残してこの場を去り、遺跡の中に入っていった

s i d e o u t

ティアラがいなくなった直後

「
」
「それは」

「?
」

「ティアラは地下への生き方を知っているのか？」

「「あつ……」」

勿論行ったことが無いティアラが知っているはずが無く

「
……あれ?ここ何処でしょうか？」

まったく知らないところで迷っていた

その頃ナツとグレイは

「ど…どーなってるだー!?!?」

「こ…これじゃ月の光がデリオラに……」

柱を半分程折って傾くようにしていた遺跡が突然元に戻ったことに

ナツは確認するように地べたを踵で蹴り

グレイはその場で狼狽する

「お取込み中失礼」

そこに奇怪な仮面をつけ、ローブを羽織った小さな爺さんがナツ達とグレイの兄弟子、リオンがいる部屋に入ってきた

「ほっほっほ

そろそろ夕月が出ますので元に戻させてもらいましたよ」

「ザルティ、お前だったのか」

どうやら二人は知り合いのようだが

リオンはザルティを変なモノを見るような眼で見ている

あまり関係は良好ではないようだ

「な…何者だコイツ……」

「俺があれだけ苦労して傾かせたのに……どうやって元に戻した」

「ほっほっほ」

ザルティと呼ばれた爺さんははぐらかす様に笑っている

「どうやって元に戻した~~~~~っ!!!」

しかし、ザルティはナツを無視して頂上の方へ向かおうとする

ナツは無視されたことに激怒した

「上等じゃねえええかなマハゲがあああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ザルティをボコボコにするために
走り出すナツ

「ナツ!!」

「俺はあのクソツタレを100万回ぶっ飛ばす!!!!!!!!
こっちはお前に任せるぞ!!!!!!!!」

任せるの発言に頷くグレイ

「負けたままじゃ名折れだろ?」

「ああ」

「お前のじゃねえぞ」
「わかってる」

間に行数が入らないくらいに即答するグレイ

「フェアリーテイルのだ……!……!……!……!……!……!……!」

ぶち抜けばいいんだー！

side ティアラ

「うーん？………」

拙いすね

非常にまずいです

本格的に迷ってしまいました

考えてみれば私一度もこの遺跡入ったことないじゃないですか……

こんなどつち見ても分からない状況になるまで気づかないなんて……

……(orz

ナツ達は今頃如何しているんでしょうか……

……ん？ナツ達？

「……ああそうだ
何だ、迷ったらナツ達みたいにぶっ壊せばいいんだ」

如何して気づかなかったんでしょ

side out

「迷ったらナツ達みたいにぶっ壊せばいいんだ」

サラリと物騒な言葉を呟くティアラ

誤解されない様に言うが普段ナツ達はそこまで壊しているわけでは
無い

ただ怒りの沸点が低いだけだ

互いに怒りやすいからすぐ喧嘩に発展して結果、周りの物が壊れて
いるだけだ

……まあそれが決して少ない訳ではないのだが………

「うるわー!」

思わず耳を塞ぐティアラ

「丁度下からですね

……まさか」

下に何の苦も無く着地すると

「ティアラ!いいところに来た!!!」

ナツがこちらに走ってくるのが見えた

周りを見ると少し離れた所にグレイもいる

「どつやら間に合わなかったみたいですね……」

そこには人間に悪魔を混ぜたような形状をしたデリオラが雄たけびを上げていた

「復活しちまったモンは仕方ねえ!!」

「アイツぶっ倒すぞ!!!!!!」

「くくく」

突然笑い声が聞こえ、

「お前……ら……には
無理だ……」

「アレは……俺が」

「ウルを超える為に……俺が」

リオンが地面を這いながらデリオラに向かっていく

「リオン!!」

「オメーの方が無理だよ!!
引っ込んでろ!!!!!!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

デリオラはいまだに雄たけびを上げている

「やっと……会えたな……デリオラ……」

s i d e ティアラ

「やっと……会えたな……デリオラ……」

ああ……こういう自分こそ無理なのに相手に無理無理言う奴も嫌いです

そう思い、リオンが起きないように足で蹴り飛ばす

「ガッ！……何を……する……」

「貴方こそ無理なんですから大人しくしてください」

「ティアラ……そのままりオンを抑えていてくれ」

そう言ってグレイは左の掌を上、右の掌を下に向けて交差させる

足は命一杯開き、軽く膝を曲げる

これが”絶対氷結”？と首を傾げるティアラ

「よ、よせグレイー！」

あの氷を解かすのにどれだけ時間が掛かったと思っているんだ！！！
同じことの繰り返しだぞ！！

俺が氷を解かして再び俺が挑む！！」

「これしかねえんだ……」

しかし、ナツが眼の前に出ることでそれを止める

「っ！！！？どけナツ！！邪魔だよ！！！！！！」

「俺はあいつと戦う」

「……………」

ティアラはじつとこの状況に口を出さずに見ていた

「死んでほしくねえからあの時止めたのに……

俺の声は届かなかったのか……」

「……………！！！？」

「やりたきゃやれよ
その魔法」

そう話し込んでいる間にもデリオラは拳を振り上げていた

「よけるーーーーーっ!!!!!!」

「俺は最後まであきらめねえぞ!!」

しかし、デリオラが拳を振り上げた所で動作が止まった

これに皆が驚いていると振り上げた拳から徐々に罅が入り崩れ落ちて行った

「な、何だ!!?」

「バ、バカな!!!!!!」

「ふう、やっと来ましたね」

安堵の溜息を吐くティアラをみんな驚きながら見ていた

「な、何がやつとなんだ!???」

分かっているが認めたくない

そんな顔をしている

「何がつて……………」

「デリオラの体の崩壊、つまり死ですよ」

ぶち抜けばいいんだー！（後書き）

次回でガルナ島編完結するつもりです

更新は今日できるかどうかって感じですよ

それでは

三位一体とはこのことでしょうか？（前書き）

ガルナ島編完結です！！

三位一体とはこのことでしょうか？

「デリオラの体の崩壊……これは死を意味します」

ティアラは現状起こっていることを説明する

グレイは呆然とし、リオンは地面に寝そべったまま俯いている
リオンは理解しているがグレイは半分ほど……といった所だろう

その間もデリオラの体は崩れ、破片と化していく

「先程グレイはウルは生きていたと言いました

それはつまりこの氷自体がウルだということ……

これが分かれば簡単です。何の難しくも無い……ウルがリオン、

貴方がこの氷を解かすまでの間ずっとデリオラにダメージを与えて
いただけのこと」

「………何時から気づいていた？」

「はい？」

先程まで俯いていたリオンは顔を上げ、ティアラの方を向いていた

「……何時からその事実気づいてた!？」

という問いに対してティアラは

「……ああ」

と相槌をうち

「貴方たちの過去を聞くと同時にグレイからの「ウルは生きている」という発言を聞いた時から……
です」

「生きているというならウルにはまだ意識があったはずですが、
だってそうでしょう?生き物には意志があるのですから」

「さらに過去の話を聞いているとウルはグレイの過去を清算しよう
としているという
仮説も付きます」

「この仮説グレイの発言に信憑性があるならデリオラは既に死んで
いるか大分弱まっているということが

予想されます

……まあこの場合デリオラが死んだことでそれは証明されましたが
……」

グレイとリオンは押し黙り、ナツは頭に疑問符を浮かべている
半分も理解してないようだ

「こんな取るに足らない戯言ですが私からも一つ……」

そこで一泊置き

「いい師匠を持ちましたね」

その顔に慈愛の表情を浮かべていた

「「……」」

「す、すっげーな！！お前の師匠」

ナツは殆ど理解していなかったが「ウルがデリオラを倒した」とい
うことは理解できたらしい

ガン！

「……かなわん……俺にはウルは越えられない」

リオンは地面に拳を叩きつけ、ウルにはかなわないと悟る

『お前に闇は私が封じよう』

「……………ありがとうございます

……………師匠」

グレイはウルを思い出し、涙を流しながらウルに感謝の言葉を述べていた

それをティアラは微笑みながら見ている

かつての自分と重ねて

s i d e ティアラ

いやぁーハハハハ……私今回何もしてない……（o r z

いやそれは最後戯言で締めましたよ？

あそこでは何だか満足しましたが後になってくると……

「まだ終わっていないぞティアラ」

えっ？……ああそうですね目的違いましたね

とエルザの方を向くと

エルザは今までにないくらい冷たい表情でこちらを見ていた

ナツとルーシイは大量の冷や汗を流し、グレイは小刻みに震えている

…流石にちょっと私も怖いです

「これでちょっとってどづいづいことよ……」

「それがティアラです」

失礼ですね二人とも

そっだ

リオン、貴方なら何か知っているのでは

「俺は知らんぞ」

「何だとお!!!??」

「とお!!!??」

チツ…あ、舌打ちしちゃいましたー

「三年前、この島に来たとき村の存在があるのは知っていた
…しかし俺たちは村の人々には干渉しなかった

奴らから会いに来ることもなかったしな」

傷ついた体を岩に預けながらそう言うリオン

……そりゃそっだでしょう

貴方が干渉したってメリットが無いじゃないですか

リオンは自分の疑問や意見をエルザ達に話している

「三年間一度もか？」

「そう言えば毎晩のように月の光が下りていた筈だよ
なのにここを調査しないなんて」

「人体の影響についても疑問が残る？」

「どうしてですか？」

「三年間俺たちも同じ光を浴びていたんだぞ？貴様ならそれに気づく
かと思っただがな……」

呆れた眼でこちらを見てくる……

……仕方ないじゃないですか！！？多少の気のゆるみぐらい！……！

「ま……ここからはギルドの仕事だろ」

「……そうはいかねえ……お前らは村をぶっこわ」グッ「……」

ナツに言葉をエルザが止める

……頂上で何かあったようですね

「行こう」

「行こう」だってどうやって……」

ナツを大人しくさせ、私たちはその場を離れる

グレイ？

遅れてきましたが
リオンに何を言ってきたのですか？

避難所になっている村の資材置き場に戻ってきたが
人っ子一人いなかった

寝ている気配もないですね…

何処にいるのでしょうか？

「皆さん!!!!!!
戻りましたか!!!?」

悪魔化した青年がこちらに走り寄ってきた

…如何したのでしょうか？
そんなに慌てて…慌てて走ると転びますよ？

「た………大変なんです!!!
と………とにかく村に来てください」

転ぶことは無かったが息切れが激しい青年

……大変なこと？

……あ、マズイ

「エルザ……少し眠いので後頼みます……」

「？オイティアラ！！？大丈夫か？！！」

その言葉を最後に意識が闇の中に落ちて行った……

side out

300

「寝ちまったな……」

「ああ……元々こんな時間まで起きてることもないし、何より働き過ぎだからな……」

「でもきつと今回ティアアラ何もしてないって思ってるんじゃない？」

「お？分かってきたじゃねえかルーシィ……」

それがエルザがティアアラを背負い、村へ行く途中の会話でした

「……………ん？」

「起きたか、ティアアラ」

薄目を開け意識が覚醒するティアアラ

「ティアアラ、お前も手伝ってほしい」

「構いませんが…何をするのかできるだけ簡潔に説明してほしいです」

「月を破壊する」

「……………簡潔すぎますが、まあいいでしょう
事情は後で説明してくださいね……………」

「ああ、わかってる」

そう会話しながら村の高台に上るティアラ、エルザ、ナツの三人

「エルザ

月壊すならあの遺跡の方がいいんじゃないかね？

此処より高いし」

「十分だ

それに遺跡へは村人が近づけないからな」

エルザは投擲力を上げるといふ鎧、『巨人の鎧』と闇を退けるといふ『破邪の槍』を構える

「私が投げただけでは距離が足りないだろう

そこで私が投げた瞬間ティアラが電気を槍に流してくれ

レールガンの要領でな・・・、ナツがそれを殴ることで速度を大幅に上昇させる」

「それで月ぶつ壊すのか！！

おし分かった！！」

「何だか面白くなりましたね……」

「オイ、あの三人何でノリノリなんだ？」

「まさか本当に月壊れたりしないよね…」

割と本気で考えているグレイとルーシィだった

エルザが槍を構えた所にティアアラが電流を流し、ナツが石突きを殴る

槍はとんでもないスピードで月に向かい、衝突した

村人は歓声を上げ、グレイとルーシィは絶句している

しかし、月が割れた所から紫では無く本来の色の月が出て来た

みんなが驚く中、エルザが説明する

「この島は邪気の膜で覆われていたんだ」

「?…月の光で出来た…ですか？」

「流石だな…その通りだ」

その膜の所為で月は紫に見えていたんだろう」

エルザが話していると村人たちの体が光りだした

「邪気の膜は彼らの体だけじゃなく記憶まで冒していたのだ」

「記憶？」

「ああ、彼らは元々人間だった……とな」

「？」

「じゃ……じゃあまさか……」

「そういうことだ……」

「彼らは元々悪魔だった」

FTメンバーが絶句する

……もちろんティアラも

「流石だ……君たちに任せてよかった」

見知らぬおっさんが出て来たことに？を浮かべるティアラだが

皆嬉しそうな顔だったのでその疑問は心の片端に置いておいた

「何だか悪魔というより天使みてーだな」

ナツの言葉に大きく頷き、満足したのか再び寝に入るティアラだった

三位一体とはこのことでしょうか？（後書き）

今回でガルナ島編は終わりです

長くなってすいませんー！…どうしてもここで終わらせなかったの…
次回からは新章のつもりです

幽鬼の支配者へファントムロード〈前書き〉

先程プロローグの指摘して戴いた部分を直させていただきました

指摘して戴いた方、ありがとうございます…！

とは言ってもあまり変わりは無いです

付け足しただけです

幽鬼の支配者へファントムロード

「な…なんと！！報酬は受け取れない!?」

「ああ…気持ちだけで結構だ
感謝する」

村の皆が驚愕する

全て終わっていざ帰ろうとした時、

村長が報酬の話をしてきたので
エルザがいらなと言い出したからだ

「まあその通りですね

今回の件は正式に受理されたわけじゃないですし

遂行出来るかわからないのに受けたのが悪いですから」

「そっだ

昨夜も話したが今回は一部のバカどもが先走って遂行した仕事だ」

ティアラの言い分にエルザが同調する

まあその通りだろう

遂行出来るかわからない仕事を受けて依頼主に無駄な信頼を得るよ
うなことは今回は違ったが本来は
あつてはいけないことだ

「ほがぁ…それでも我々が救われたことに変わりはありません

これはギルドへの報酬では無く友人へのお礼という形で受け取って
くれませぬかの？」

エルザは困ったように笑い、ティアラは「いい人たちですね…」と
呟き、笑っていた

「そう言われると拒みづらいな

……しかしこれを受け取ってしまうとギルドの理念に反する
追加報酬の鍵だけありがたくいたただくでしょう」

村人は前半で歓喜したが、その歓喜も後半の
言葉で風船が萎んだように静かになった

「いらねー……っ」

「いるいる……っ」

「売れば少しは足しにはなりますよ?」

「やめて!?!?!?」

side ティアラ

漸く全てが終わり、マグノリアに帰ることになった
帰りはエルザが強奪したと思える海賊船に乗って帰りました

……略奪者から略奪するなんて凄いですねエルザ(汗)

無事マグノリアに着きました

さて、ギルドで何されるんでしょうね?

「まさかアレをやらされんじゃない?？」

「ちょっと待て!……!」

アレだけはもう二度とやりたくねえ!……!」

「アレってなに?……!?!?」

「気にすんな

じつちゃんなら」よくやった」って褒めてくれるぞ」

「アレは確定的ですか?エルザ」

「ああ、アレはほぼ確定的だろう

……ふふ、腕が鳴るな」

私がそれとなく聞いてみると確定だとエルザは言った

ナツは先程まで笑顔だったのに今じゃ泣き叫んでいる

この位覚悟の上でしょう………情けない(呆

side out

「な!!!?」

「えっ!?!」

「何…だと!?!??」

「俺たちのギルドが!!!!!」

「誰が一体こんなことを……」

「何があったと言うのだ……」

「誰が……!!!!!」

「ファントム……」

「「「「!!!」」」」

全員振り向くとそこには白くて長い、若干ウェーブの掛かった髪の女性ミラジェーンが立っていた

「悔しいけど……やらねちゃったの……」

幽鬼の支配者へファントムロード〈後書き〉

ファントム編プロローグみたいなものです

丁度よかったですので此処で区切らせてもらいました

守れているでしょうか？

ミラの話ではギルドを潰され、F.Tの皆は普段は使われていない食糧や酒樽などの保管庫も含めた地下一階に待機しているという

このまま一階にいるわけにもいかないのでナツ達は地下一階にいる皆の元へ行くことになった

「お！エルザが帰ってきたぞ」

「ナツ、グレイ、ティアラも一緒だ」

「見たかよー！
ギルドのあの姿ー！」

いつもクエストボードの前をウロウロしてばかりで消極的な男、ナブも

今回はかりは怒っているようで、積極的に話している

「フアントムめエー！
よくも俺たちのギルドを」

「うちら昔から仲悪いもんな」

「今度は奴らのギルド潰してやるっぜ!!--!!」

「落ち着けよ!!--!!」

相手はあのファントムだぞ」

それぞれで議論し合うFTの仲間たち

中には今回の出来事で冷静でない者もいるようだ

そんな中を歩き、ナツ達はマカロフの元へ向かう

「よっ、おかえり」

呑気に酒を飲んでいる

「じっちゃん!!--酒なんか飲んでる場合じゃねえだろ!!--!!」

「おーそうじゃった.....お前達!!--勝手にS級クエストに行き
おってからに!!--!!」

「...罰じゃ!!--今から罰を与える!!--覚悟せい!!--!!」

ナツは呑気なマカロフに怒りを覚える

だがこんな時に罰の話をしているマカロフ

しかしその罰というのも頭を叩かれるだけという何とも軽いものだった

……ルーシイだけ尻を叩かれたが……

「マスター!!」

今がどんな状況か分かっているんですか!!!!」

「ギルドが壊されたんだぞ!!」

「まあまあ、落ち着きなさいよ
騒ぐほどのことでもなかるうに……」

フアントムだあ? あんな馬鹿たれどもにはこれが限界じゃ

誰もいねえギルド襲って何が楽しいやら……」

「ナツ、エルザ、落ち着いて下さい……」

どうやらギルドが襲われたのは夜中らしく、誰もギルドにいなかったそうだ

ティアラはナツとエルザを落ち着かせるために声を掛ける

「つーかちよつと待て…漏れそうじゃ…」（汗）

「何で平気なんだよ…じっちゃん！ティアラ！」

ナツは残ったティアラに掴みかかる

「お前は悔しくねーのかよ！！？」

「ギルドをあんなにされてよ！！！！！」

「……悔しいに……決まってるだろうがっ！！！！！！！」

ティアラは俯いていた顔を上げ、いつもの口調を完全に壊してナツを睨みつけ、叫んでいた

これにはさすがにナツ達だけじゃなく、周りにいた皆も驚いた

「ギルドを……私達の家をあんなにされてっ！！」

悔しくないはずがないだろうがっ！！それはマスターも皆も同じだ
！！！！！！

……そんなことはお前が一番分かってるだろ……………」

そこでティアラは呼吸を整え

「失礼しました……………少し頭を冷やしてきます……………」

と皆に背を向け、階段を上りだす

その時、皆はティアラの目元から光が見えた気がした

「ナツ……………ティアラの言う通りよ……………」

だけどギルド間の武力抗争はギルド間で禁止されてるの……………」

先程のティアラの態度を見た者たちは皆押し黙るしかなかった……………」

s i d e ティアラ

「……………はあ」

私は住宅街に流れる川の前で座り込み、動揺していた頭を落ち着かせる

……………思えばあんなに怒ったのは龍士さんと旅をしていた中でもなかったかもしれない

……龍士さん

私の命の恩人、そして何も知らなかった私にいろいなことを教えてくれた

この世界のことや魔法のこと、料理も教えてくれた

初めてまともな魔法が使える、喜んだ時、龍士さんは私にこう言ってくれた

「いいかティアラ、魔法というのは時に人々を助けるがそれと同じくらい危険なものだ…」

大切なのはそれを理解していること

だからその魔法を使う時は君が何かを守りたいと思った時に使いなさい」

……龍士さん

私は

私はその守りたい何かを

守れているでしょうか？

守れているでしょうか？（後書き）

今回はシリアス（のつもり）です

余りの怒りにティアラのキャラが崩壊しました
それぐらい怒っていたということですよ

戦争じゃ

「……………」ご迷惑をお掛けしました」

ナツ達がギルドに帰ってきた次の日

落ち着いたのかいつもの冷静なティアラに戻っていた

「気にするな

私たちは仲間だ

時にはこうして本気でぶつかり合うことも必要さ

エルザがティアラに微笑みながら言う

ギルドの皆もどこか笑顔だった

「それにあんなに怒ったティアラ初めて見るもんな」

「ああ、あそこまで怒ったことねえよな」

「ティアラの違った一面見た気がするぜ」

ギルドの皆の言うことにティアラは昨日のことを思い出して赤面する

326

「私たちは全く気にしていない……」

むしろああいうのはどんどん言ってほしい」

「……………はい!」

皆の笑顔を見て、ティアラも笑顔になる

「お~~~~い!!!!!!皆大変だ~~~~~!!!!!!」

突然ギルドに入ってきた彼の一言で皆の笑みが消える

「南の公園でレヴィ・ジェット・ドロイが……………」

side ティアラ

「すまん、通してくれ
ギルドの者だ」

皆で公園の人混みをかき分けると

鉄の杭で貼り付けに仲間達の姿が

.....そろそろ限界です

これほどの怒りは今まで感じたことが無い

ファントムめ.....

そうして私は怒りに震えているとマスターが後ろから来た

マスターもこの惨状に顔を手で覆い、嘆いている

「ボロ酒場までなら我慢できたんじゃないかな...

ガキの血を見て黙ってる親はいないんだよ」

が、次の瞬間

マスターは自分の持っていた杖を握り潰し

「戦争じゃ」

s i d e o u t

魔導師ギルド 幽鬼の支配者
ファンタムロード

ギルド内では魔導師たちがFTを襲ったことに歓喜している

「そついやマスターが言つてた”奴”つて誰よ？」

「さあ」

「手は出すなとか言つてたな」

「どつでもいいさ」

みじめな妖精どもに乾杯だ」

「今頃羽をすり合わせて震えてるぜ」

男たちは乾杯し、飲み明かしている

と、その時その内の一人が席を立つ

誰が会いに行くようだ

「あつ！！いけね
こんな時間だ」

「女かよ」

「まあまあいい女だ

依頼人だけだな

……脅したら報酬2倍にしてくれてよお

「俺なら三倍まで行けるよ」

「行ってるタコ」

そう言っつて男はギルドを出て行くつとする

だが男が出ることは無かった

ゴッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

扉ごと吹き飛ばされ、男はギルドの端まで吹っ飛ばされた

入口にいるのは

「フェアリーテイルじゃああっ!!!!!!!!!!!!!!」

「なっ!!!?!」

「おおおおっ」

ナツが拳を構え、ティアラがコインを構える

「らあっ!!!!!!!!!!!!!!」

「っ!!!!!!!!!!」

ナツが殴り、ティアラがコインを弾く

二人の攻撃を機にFTの皆は突撃する

그레이が凍りつかせ、エルフマンが殴り、

カナがカードマジックをつかい、ロキも指輪魔法で攻撃していく

「マスターマカロフを狙えええっ！！！」

その声をきっかけにファントムはマカロフを狙う

がマカロフは魔法で巨大化し、蹂躪していく

「ぐあああっ」

「ばっ…化け物！！」

「貴様らはそのガキに手を出したんだ

人間の法律で守られると思うなよ！！！！」

その姿を見たファントムの連中は恐怖する

エルザは剣で切り裂き、ティアラは即席の雷を落としていく

その様子を鉄の滅竜魔導師^{ドラゴンスレイヤー}、ガジルは天井から見ていた

「あれがティターニアのエルザにエレクトロプリンセスのティアラ

……

ギルダーツ、ラクサス、ミストガンは参戦せず……か

ま、^{ファイナルフェアリー}最終妖精は死んだと聞くがな

……しかし、これほどまでマスタージョゼの計画通りに事が進む
とはな……

せいぜい暴れまわれ、屑どもが……」

戦いは激化していく……

戦争じゃ（後書き）

長くなったので二つに分けました

空（前書き）

空と書いて「から」と読みます

空

「エルザ此処はお前たちに任せる!！」

「!」

マカロフはエルザに言伝を頼む

「ジヨゼは恐らく最上階

儂が息の根を止めて来る

エルザは頷き、気を付けてと一言言い、自分の持ち場につく

side ティアラ

私は今一人の男と相對しているわけですが

「「……………」」

その……なんていうか……やる気が見られないんです

「「……………」…ねえ君」

「！」

「僕に何の用？」

別にこれと言って言いたいことも無いんだけど……」

男は目を瞑りながら私に聞いて来る

……………そんなの、あなた達が私たちのギルドを、仲間を……………

……………

「……………ん？君もしかして電姫？」

今頃気づいたんですか！？

「そうか……………、なら……………」

そう呟いて男はゆらりと立ち上がる

「っ！？」

男は何かを投げてきた

間一髪避けてそれを見ると

「手錠？」

「そ、僕は手錠を無限に出せるんだ……」
男は欠伸をしながらそう言うってくる

「換装ではないのですか？」

「まあ、違うね……」

うっくん……やりづらいですね……

限りが無いということはいくら避けたり弾いたりしても無駄……と言
うことですから

「考え事もいいけど隙だらけだよ」

「っ！……！」

来ると思い、慌てて身構えても男は欠伸してるだけだった

………つてやる気ゼロですか……！！……？

「そもそも今回の件はガジルとジョゼの独断だし、僕基本的にギル

ドのやることに関与しないし」

「ガジル？…鉄竜くろがねのガジルですか？」

「そ、今その桜色の髪の男に吹っ飛ばされた奴」

「っ！…！…？」

見ると、ナツがガジルを殴り飛ばしていた

…流石ですね

「さてと…流石に今回はやらなきゃヤバそうだし、そろそろい
よ…」

「…貴方はどうしてここにいますか？」

「暇つぶし」

「……そうですか」

もう何も突っ込みません

「……まあ、君たちみたいなのところに行きたかったけどね」

「？」

どういふことですか？

「君たちといると退屈しなさそうだから……まあそこは僕の運が無

「かったということだね」

そう言っつて男は構える

私もそれに対抗するために構える

一触即発の空気の中

上から何か落ちてきてそれは中断された

落ちてきたのは

「あ……あ……う……あ……」

「ワ……ワシの……魔力が……」

マスターマカロフだった

空（後書き）

今回は短めです

今回のオリキャラ、モデル分かりますか？

あのREBORN!の最強風紀委員長です

体は剣で出来ている

「マスタ―！！」

「ま、魔力が…僕の魔力が」

FTのメンバーたちはマカロフに駆け寄る

当のマカロフ自身は何が起こったか分かっていないようだ

「な！？…どういう事ですか？…マスターから魔力が感じられない」

「アリアだろっね」

目の前の男はそう呟いた

「アリア？…アリアというのは」

「こつちで言うS級魔導師だよ…」

「！」

マネットは誰の仕業かを的確に言い当てた

「彼は相手の魔力を空にする魔法があるんだよ……」

「そんな!!じゃあ今のマスターは唯のお爺さんということですか!?」

「……そうだよ」

「……行かなくていいの?」

「行ったら貴方に背中を狙われるでしょう?」

「分かってるじゃん」

今ティアラはマネットにトンファーによる攻撃を受けている

ティアラはそれを捌きながらマスターの所へ向かうのは不可能と踏んでいた

「これで奴らの力は半減だ!!!!」

「今だ!!ぶつ潰せ!!!!」

「くっ……撤退だ!!!!!!」

マスター無しではジヨゼには勝てん!!

撤退しろー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

エルザが状況を的確に判断し、撤退を命じる

皆も悔しいがエルザの言うことに間違いは無いので、撤退していく

ティアラもそれを見て、撤退の準備をする

「……………帰るの？」

マネットは少し眠そうにティアラに聞いてくる

「ええ、…決着はまた今度……………」

分かれる前に改めて名乗っておきましょうか……………」

エレクトロ・プリンセス
電姫ティアラ・ユーピテル」

「マネット・ディ・ヌーヴォラ

「二つ名は特に無いよ……………」

「そうですね……………」

……では、御機嫌よう」

「ん」

そう言ってティアラとマネットは逆の方向へ足を進めた

FTとファントムの抗争による被害は決して小さくなかった

まずマスターマカロフは魔力を失い、無力化

最悪の場合死ぬこともあるらしい

今はマカロフの昔の知人という人間嫌いのポーリュシカの所で治療中

次に、FT陣の負傷者多数

あるいはこちらの方が被害は甚大かもしれない

中には、重症で動けない者もいるのだ

ティアラはそんな中で治療する側に入っていた

「（ここまで酷いと…戦うのは無理ですね……）」

ティアラは治療していて戦闘続行は無理と判断する者の治療に特にあたっていた

「そう言えば……ルーシイは何処にいるのでしょうか？」

見かけませんねえ…と呟きながら探していると

入口の方でナツが肩を貸した状態でうつむいていた

「ルーシイ!!?!? 如何したのですか!?!?

何処か調子が……」

「うっん……違っの

ただ……」

そしてルーシイは話し始めた

今までいなかった理由と

何故FTが襲撃されたかを

s i d e ティアラ

……成程

つまりまとめるとこういふことですね

・ルーシイはとある財閥の令嬢で現在家出中

・そしてルーシイの父がしびれを切らし、ファントムに連れ戻すよ
う依頼した

と……

ルーシイはいまだに震えている

「どーした？」

「まだ不安か？」

グレイがルーシイに話しかける

「違うの…そっぴじゃなくて……」
「めえ」

「何故謝るのですか？」

「そうだ」

「だって……」

「人には話したくないことなんてたくさんありますよ

気にしないで下さい」

「そうだけ……っーかお嬢様つても似合わねエ響きだな」

「！」

ナツ……そういうのは言わない方がいいですよ

……まあ同意しますが

「この汚ねー酒場で笑ってさ……騒ぎながら冒険してる方がルーシイ
って感じた」

確かに静かなルーシイって似合いませんね

「此処にいたいって言ったよな

戻りたくねえ場所に戻って何があんの？

……… FTのルーシイだろ

此処がお前の帰る場所だ」

「そうですね」

貴女がいたい場所に貴女はいればいいんです」

ルーシィはその言葉で泣き出してしまっ

……向こうでミラがラクサスと喋ってますが別にいいでしょう

何よりあの下種と話したくありません

side out

マスター不在

これは想像以上に皆の心をどん底まで陥れた

マスター不在、ラクサス、ミストガンもいず

けが人も多数、そんな中皆の心はある男に向いていた

龍士

ファイナルフェアリー
最終妖精と呼ばれ、ギルダーツとも肩を並べる程の男

彼らは戻って来るはずのない男に心を寄せていた

だれもがファントムのどんな方法で攻めてくるのか考えていると

ズシンン！！ズシンン！！ズシンン！！ズシンン！！ズシンン！！

という音が海岸から聞こえてきた

皆慌てて外に出ると

六足歩行でこちらに向かってくるファントムのギルドが

これにはエルザもティアラも…全員が絶句した

「そ、想定外だ…」

まさかこんな方法で攻めてくるとは……」

そうエルザが一人呟いていると

『魔道収束砲”ジュピター”用意』

そんな声が聞こえたかと思うと

ファントムのギルドの正面から大きな大砲が出てきて、魔力を収束し始めた

「マズイ！！！！全員ふせるおお！！！！！！」

事態に気づいたエルザが皆に激を飛ばし、一歩前が出る

エルザが何をするのか悟ったティアラは顔をしかめながら体に魔力を通す

『消せ』

その一言をきっかけにジュピターは発射される

その直前、エルザは動いた

先程までの服を払い、換装する

「ギルドはやらせん！！！！！！」

換装するのはエルザが持つ中で最高の防御力を持つ鎧

” 金剛の鎧 ”

「 金剛の鎧！！！！ 」

「 まさか受け止める気じゃ……………」

「 いくら超防御力を誇るその鎧でも死んじまうぞ……………」

「よせ！…エルザ！！」

「ナツ！！ここはエルザを信じるしかねえんだ！！」

ナツが飛び出していきそうなのをグレイが止める

「うぁ…」

ルーシィは余りの事態に絶句する

そうしている間にも”ジュピター”は放たれた

ナツは未だに暴れ、グレイに止められている

皆それぞれが自分自身を守るために伏せている

そうしている間に”ジュピター”エルザに迫り

「やれやれ……流石にそれは見過ごせないな？」

「え？」

「ジュピターとの距離、僅か数十センチ

彼女の目の前に誰かが降りて来た

今では彼の象徴となっている白い髪に赤い外套

服装も顔つきもほとんど変わっていない

変わっているとしたら左目に走る太い傷だろうか？

しかしそれは視力に影響は無く、問題なく見えてるようだ

「I am the born of my sword 《体は剣
で出来ている》」

男は歌う

それはまるで自身の象徴とも言えるかのように

歌い、自身の内包する世界から七枚の花弁を呼び出す

「ロー・アイアス熾天覆う七つの円環！！！！！」

彼が突きだした右手によってジュピターの光線は二手に分かれた

一枚

二枚

そして三枚目にたどり着いたところでジュピターは勢いを失くし、
消滅した

ジュピターの放出が終わると同時にそのピンクに彩られた花弁も消
える

「「「「「「「「「「「「「「！！？」「「「「「「「「「「「「

皆……もちろんティアアラも理解できず、困惑している

そんな中

「……さて、漸く帰ってこれたと思ったのに………^{びっび}びっびっ事
かね？」

俺はすぐに休めると思ったのだが………」

「如何やら……つくづく俺には運が無いらしいな」

男はそう言いながら上げていた右手を下す

そしてその鷹の様な鋭い目でファントムを睨みつける

「……やってくれたな……」の貸しは高くつくぞ……！……！

体は剣で出来ている（後書き）

お待たせしました！！！！！！

ようやく！！ようやく龍士復活です！！！！！！

いやぁこれをどれだけ書きたかったことか！！！！！！

一応こんな形での復活ですが…どうでしょうか？

個人的には満足ですが皆さんに満足していただけると幸いです

我が骨子は捻れ狂う（前書き）

今更ですがマネットとは手錠

ヌーヴォーラは雲とイタリア語でいいます

つまりマネット・ディ・ヌーヴォーラとは「雲の手錠」ですね（笑

我が骨子は捻れ狂う

side 龍士

村で話を聞いた俺はどうやってマグノリアの行こうか悩んでいた

此処から行くにしたって後一週間は掛かってしまう

万全の状態なら一日、二日で着くのだが

「トレース
同調、開始」

魔力：全開時の40%

固有結界、アンリミテッドブレイドワークス無限の剣製展開可能

アウァロン全て遠き理想郷正常起動中

身体：両足膝下に軽度の怪我

腹部に大きな斬傷 現在塞がってはいるが現状完治不可能

腰に大きな打撲あり 動きを約30%制限

右肩斬傷あり 現在治療中

結論：固有スキル 音速突破使用不可能

覇気精度半減

覇気が半減なのは構わないが音速突破ヲ使えないのは痛いな

やはり歩くしかないか…いやしかし

こうして脳内会議を開きながら悩んでいた

「よう悩めるお兄さん

人生の先輩としてオツチャンの助けは必要かい？」

「……………」

その時だ

後ろから声が聞こえたのは

後ろを振り向くと

後ろに流した黒髪に深緑の着流しを着て背中には大刀一本と小刀三本を背負っている

飄々とした態度でこちらを見ている初老の男性

「ジーさん……」

彼はクエスト中も色々助けしてくれた云わば「謎のジーさん」だ

「おっ！！僕のこと覚えててくれたんだ？…嬉しいねエ」

「くっ、命の恩人を忘れるわけがないだろう？」

「ファイナルフェアリー最終妖精に命の恩人と言われるとは光栄だねえ」

「……」

「いやごめんごめん

君はこの名前嫌いだったねエ」

……分かってて言っているな（呆

「それで貴方が何故此処に？」

今頃はあの雪山の麓でのんびり暮らしているはずだ

「いやあ、そろそろ知り合いが壁に当たるかと思ってねエ」

「！……！……気づいていたのか」

「そりゃあその傷治療したの僕だからね

一週間は掛かるって止めても無駄だし……」

まあ五日でここまで来たのは流石だけどねえ

とジーさんは溜息を吐きながら首を横に振る

「…………それでも行かなければならない

速く帰る理由が出来たからな…………」

キツとジーさんを睨み、答える

こうしている内にギルドは…………俺の家は

「……………やれやれ」

ジーさんは俺の目を見てまた溜息を吐く

…むう、本人の前でやられると少しイラッと来るな

「止めても無駄みたいだねエ…………」

…………じゃあ…来なさい…マグノリアまで案内してあげよう」

「！…！…本当か？」

「本当も本当

未来ある若者の先達を務めるのも僕の役目だしね……」

さあ、とジーさんは手を俺に差し出してきた

俺は迷わずその手を取った

「此処までだよ」

FTのギルドの後ろに広がる湖の上空

そこでジーさんは飛行艇を停止させ、告げる

「ああ…すまない」

「礼に及ばず…だよ」

言っただろ？未来ある若者の先達を務めるのが僕の役目だって」

見れば、ファントムの物と思わしき要塞が俺の家に向かって放つた
めの何かを貯めているのが見えた

ちっ…どこまで腐った奴等なんだアイツらは！！

「ほら、早く行きなさい」

「む？」

気づいたらジーさんがこちらを向いていた

「君はまだやることが残ってるだろう？」

今度は……………」

君が頑張る番だ

「……………」

俺ががんばる番、か……………」

「……………」
くっ……………ああ、了解した」

そうだな

ここからは俺の番だ

ジーさんの働きを無駄にするわけにはいかん

ならば俺は家族を守り、その敵を排除するまで……………!!

「行ってくる……………」

「気を付けて……………」

俺はただ一言残し、そのまま飛び降りた

高さは約30メートル

負傷していても十分着地できる

そして地面に着くころにはジュピターはもうすぐそこまで来ていた

「やれやれ……それは流石に見逃せないな？」

「え？」

珍しくエルザから少し間抜けな声が出たことに少し笑いつつ、俺はジュピターを七枚の花弁で防いだ

「大丈夫か？」

俺は振り返らずにエルザに声を掛ける

やはり熾ロー・アイアス天覆う七つの円環は改造を施しておいて正解だったな
この盾は神に事前に『投擲武器や飛び道具に対して』だけでなく『
打ち出された物に対して』に改造するように頼んでいる
光線を止めたのは初めてだが…ふむ、ちゃんと機能しているようだ

それにしてもFTか……懐かしいな…ティアラは元気だろうか？

「りゅ、龍士……」

エルザはまだ驚いているのか素っ頓狂な声を上げる

「くっ、何て顔をしているんだ？」

ようやく俺は振り返りエルザの顔を見る

……くっ、酷い顔だな

内心笑いながら前に向き直る

「待ってる……すぐに終わらせてくる」

s i d e o u t

「「「「「「「「「「龍士!!!!!!」」」」」」」」

「りゅ、龍士さん?あれが?」

「はい、そうです」

F T最強候補にして最もF T最強に近いと言われる男です!!!!」

ルーシイの言葉にティアラが若干興奮した様子で答える

龍士が帰ってきたことが相当効いてるようだ

何だかいつもより活き活きとしている

「龍士が帰ってきた……」

「よし!!行けるぞ!!!!!!」

「エルザに加えてアイツがいるなら……」

「もうこっちは負けねえ!!」

「龍士!!後で勝負しやがれ!!!!!!」

龍士の帰還で皆の士気が上がる

……一人言ってることが違うが……

ファイナルフェアリー
「最終妖精……！！」

ジヨゼは忌々しげに龍士を見る

死んだと思っていたので生きていることに不愉快なのだろう

「やあ御機嫌よう、マスタージヨゼ

今回は一体何の用で此処に？

買い物か？なら俺の許に来るがいい

状況に応じて手軽なものを勧めてやる」

龍士は前半から後半まで飄々とした態度で話す

だがこれから何をするか、先ほどの一撃を防いだ時点で分かっている筈だ

「…………まあ買物と言えば買物だな。ルーシィ・ハートフィリアを渡せ」

だからジヨゼも強気な態度で話す

「ルーシィ・ハートフィリア」？」

龍士は”ハートフィリア”の単語に反応する

「仲間を売るくらいなら死んだ方がましだっ!!!!!!!!!!!!!!」

「「「「「「「「オオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!」」」」」」」

エルザが叫び、皆も同意する

その一連の動作でルーシィは泣き出してしまった

「…成程、そういうことか…………」

今のエルザ達のやり取りで現状を把握する

現状把握能力は流石というべきだろう

「ほう…ならばさらに特大のジュピターを喰らわせてやる…………!!」

装填までの十五分 恐怖の中であげ!!!!!!!!!!」

「な、何だと!？」

「また撃つのか？」

「これじゃ流石に龍士でも……」

更にファントムのギルドから何かが出て来た

「なっ!?!?!兵が出てきやがった!?!」

「バカな!?!ジュピター打つんじゃねえかよ」

「お、脅しさ!?!撃つはずねエ……」

「いや…撃つよ…」「」「」「!?!」「」「アレはジョゼの魔法幽兵^{シエイド}」

…人間じゃないのさ………」

「我が兵に殺されるか、ジュピターで死ぬかだ」

「龍士さん！！！！」

振り返ると、龍士に向かってくるティアラの姿が

「…ティアラか……随分大きくなったな……………」

「そりゃ二年も経てば……って違いますよ！！」

如何するんですか！？ジユピターを防ぐならアヴァロンはそう何度
も使えないし熾天覆う七つの円環だって……………」

「心配ない…」

確かに全て遠き理想郷は何度も真名解放できない
アヴァロン

熾天覆う七つの円環はそうでもないが生憎今の俺にそこに魔力を割
ロー・アイアス
く余裕はない

だが装填というからには魔力を貯めているのだから？

其処を突いてやれば充分アレを無力化できるさ……………」

丁度いい、反撃の狼煙を上げてやるっ……」

そうして龍士は一步前が出る

of my sword . 《我が骨子は捻れ狂う》
I am the born

龍士は弓と剣やを投影し、構える

狙うはジュピターの発射口

そして打ち出すと共にその真名を開放する

「カラドボルグ?偽・螺旋剣!!」

打ち出された剣やは一筋の光となってファントムへと向かい、着弾した

しかし、その剣は止まらず、ファントムのギルド内を突き進み、破壊していく

ブローケンファンタズム
壊れた幻想

龍士が唱えた刹那

ギルドを破壊していた光が

爆発した

爆発した箇所は崩壊し、原型を留めていない

そこにいた者は死んではいないが明らかに戦闘不能だろう

「さあ……反撃開始だ……」

そう龍士は不敵に呟くのだった

我が骨子は捻れ狂う（後書き）

今日から二学期です

つまり更新ペースが落ちる…orz

書いてて楽しいですが書いてばかりではいられないと思う
今日この頃

殴り込み

ジュピターの砲台は大きな音を立てて崩れていく

よく目を凝らすとその中で一人気を失っている者がいる

エレメント4と呼ばれるファントムの4人のS級魔導師「大火の兎
兎丸」だ

ファントムのギルドから少し離れた所でFTの皆は

「よっしやー！...！」

「ジュピターが壊れたぞ」

「流石龍士だ...！」

「それでもう恐れる者は無くなった...！
いくよ...！」

そしてあなたを守る為でもあるのよ

この戦いに皆誇りを持って臨んでいるのよ

…龍士だってきっと今回のことを知って駆け付けてくれたんだと思
う
う

ミラの言葉にルーシィは押し黙る

「だから言うことを聞いてね」

ミラはまるで子供をあやすように言い、ルーシィに睡眠魔法をかける

とっさの出来事で反応できなかったルーシィは静かに眠りに落ちた

「リーダース!!」

ルーシィを隠れ家へ!!!」

「うい
うい」

リーダースは返事をして腹に描いた絵を物質化する

そうして見送り、戦場に目をやると

龍士、ティアラ、エルザの3人が幽^{シェイド}兵を蹴散らしながらファントム

に突っ込んで行くのが見えた

どうやら乗り込む気のようにだ

「ミラ」

ナツが前方を睨みながらミラに声を掛ける

「俺も行く」

人数は少しでも多い方がいいだろ」

ナツは返事を待たずにハッピー出籠士達の方へ向かった

「エルフマン!!」

俺たちも乗り込むぞ!!!!」

「オツシャー!!」

グレイとエルフマンがナツに続いて突っ込んで行く

「……………」

ミラは無言でカモフラージュになるようにルーシィに変身する

「お願いね……」

「ふう、切りが無いな……」

龍士達はそれぞれの得物で突き進んでいたがその数に徐々に勢いを失くしていった

「（やはり、消耗している今じゃ厳しいか…）」

元々龍士は唯でさえ重傷と言ってもいいくらいの大怪我を治療して
数日しかたってないのだ

大群を相手にするのは厳しいだろう

そんな時、後ろから何かが駆け抜けたかと思うと

向かってくる大群を吹き飛ばしていた

「ナツ！！！！グレイ！！！！エルフマン！！！！」

3人は龍士の方を向いてニヤリと笑っていた

「今だ！！行くぞ！！！！！！」

誰のかわからない掛け声で6人はファントムのギルドに乗り込んで
行った

エレメント4

「さて、積もる話もあるが……久しぶりだな」

龍士達は押し寄せてくる幽兵を押しつけ、ジュピターの動力源だった場所から侵入していた

もっとも、ジュピターの動力源はぼろぼろで見る影もないが

「ああ、久しぶりだな龍士!!」

「漢がさらに磨かれている気がするぞ!!!!!!」

「……………」

グレイは再会を喜び、エルフマンはまた意味不明なことを言っている

ナツは先程からだんまりを決め込んでいる

「ナツ? 如何した?」

「ああ……これは……………」

「あ、やっぱり……」

龍士は疑問符を浮かべるが他の皆は納得している

「……何故君たちは納得しているのかね？」

「……龍士さん……ナツは乗り物……」

「……ああ……」

二年という歳月が経っている所為か乗り物酔いのことを忘れていたようだ

「（それにしてもこの動きは不自然じゃないか？）」

そう、今この城塞は縦に動いているのだ

空に向かって歩いているわけじゃあるまいし、何より周りの機械音が不自然すぎる

「ハッピー、外まで少し飛んで見てきてはくれないか？」

「あい……」

ハッピーは元気よく返事をして外に出て城塞を見た

いや、最早ではないだろう

そこには巨人がいた

いや、少し所々細部が先程の城塞に似ているため、変形したのだろう

これにはFT陣も言葉を失っていた

ハッピーに至っては大汗をかいて動けずにいる

その状況をものともせず巨人は手を動かし締めたかと思うと空中に何かを描き始めた

それが何か気づいた者達が声を上げる

「魔法陣だ！！この建物自体が魔導師とでもいうのかい！！？」

カナが声を上げ、気づかなかった者達が声を上げて驚く

「この魔法は煉獄^{アビスブレイク}砕破……！！？」

禁忌魔法の一つじゃない……」

「この規模はマズイ!!」

カルディア大聖堂辺りまでが暗黒の波動で消滅するぞ!!」

その声を聴いていたハッピーが大急ぎで龍士達の元へ戻る

「大変だー!!」

ギルドが巨人になって魔法を唱えてるんだ!!」

「ウソつけ!!」

「ウソじゃないって!!!!」

「……ハッピー、その魔法の名は?」

ナツはその言葉を否定し、龍士は唱えている魔法名をハッピーに問う

「煉獄碎波だつて!!!!」

「……!!?!」

「……なるほど、このギルドの大きさならカルディア大聖堂辺りまでなら一気に吹き飛ぶだろうな……」

五人が驚き、龍士は冷静に分析する

この手の状況には強いようだ

「止めるぞー！」

「手分けしてこのギルドの動力源を探すんだ！」

「次から次へと飛んでもねえことしてからにいい！！！」

「まあ待ちたまえ」

急いで行こうとするナツ・グレイ・エルフマンの三人を呼び止める

「何だよ龍士！！！」

「早くしねえと魔法陣が！！！」

「そつだ！！漢は急がねばならんだあ！！！！！」

「私たちはいいのでしょうか？」

「いい訳ないだろう！！！」

ナツ達は焦り、ティアラはボケてエルザに突っ込まれていた

「まあそう焦るな
動力源なら大体予想はついている」

「……！！」「……」

その言葉にティアラ以外が驚く
ティアラも予想は出来ているようだ

「まず煉獄砕波というのは四元素魔法という分類に入る

この四元素は火、水、風、土だ

そこで倒れている者が少し炎を出しているのを見た

恐らく火のエLEMENT4がいたんだろうな……

それに俺が剣ゃを射つ前とは動きが遅い

此処まで言っただならわかるだろう？」

「……！！……ファントムのELEMENT4が動力源か……！！？」

「そうだ

だから手分けしてELEMENT4を搜索
見つけ次第各自撃破、でいいだろう

俺が一人倒してしまったからあと三人はいるだろう

……ああ、うっかりした

ナツ、君は鉄竜のガジルを探せ」

「……は？」

エルザの言葉に肯定した後、ナツに注意をいれる

……ナツは珍しく呆気にとられたような顔をしているが

「元々ナツの相手は俺が倒してしまったようなものなのでな

なに、その代わりといっでは何だがガジルは君に任せよう」

そう言いながら龍士は不敵に微笑んでいた

「……ああ！あいつとの決着つけてねえからな！！」

あんな奴ぶっ飛ばしてやる！！！！

……そうだ！！龍士！！この戦い終わったら俺と勝負しやがれ！！」

ナツの言葉に龍士は一瞬固まるが

「……くっ、ああ分かった……受けてたとう」

快く了承し、これからの指示を出す

「まず始めにティアラは俺と来てもらう……万が一を兼ねてな

それ以外は基本的に別行動だ

……では、散開！！！！」

その言葉を皮切りに、皆は各々の目的を達成するために走り出す

「.....」

漢エルフマン！……！

FTはこの命に代えても守ってみせるう！……！」

エルフマンはガーデニングがされ、壁に装飾を施されている道を走っていた

と、そこに

モコモコ

そんな擬音が聞こえそうな風に地面から男が出て来た

「ユヒサやあ

「ぬ？」

「…ん？」

同時刻、グレイは外に出ようとした時、上から降ってきた水滴に目を向ける

「雨……なんか降ってたか？」

「しんしんと……」

「……」

突然聞こえてきた声にグレイは身を固める

現れたのは女だった

蒼い髪を顔の横で巻き

紺色の外套を腰のあたりをベルトで止め、傘をさしている

「そう……ジュビアはエレメント4の一人にして雨女

しんしんと……」

「エレメント4……お前が……」

「まさかエレメントを倒してここまで来るとは思わなかったわ

……しかしあと三人のエレメントは甘く見ないことね」「

「悲しい」

「……」

細い道を走り、エレメント4を探していたエルザは突然聞こえてきた声に即座に警戒する

「妖精の翼は朽ちて墮ちてゆく……」

嗚呼……そこに残るは妖精の屍

……わが名はアリア、エレメント4の頂点なり」

「……マスターに手を掛けたのはお前か？」

エルザは名前を聞いた途端いつもの雰囲気ではなく、研がれた剣のようになっていた
顔は敵を倒すことのみを目的とした修羅と化している

「そつだ」

その言葉が出た途端、エルザが敵に飛び掛かることで死合いは合図も無しに始まった

「む？…どうやら始まったようだな……」

「そうみたいですな……」

龍士は突然発生した魔力を感じ取り、戦闘が始まったのだと理解した

「ティアラ、俺たちも急いだ方がいい

一刻も早くジヨゼを探さねばな…

奴を野放しにはしておけん……」

「わかりました」

二人はジヨゼを探して走る

「ねえ君たち……」

「「！！」「」

突然前方から聞こえた声に足を止める

「先に進むのはいいけどさ……その前に僕の相手してくれない？」

「……………マネット……………」

そこには左手の指に手錠を引っ掛け、右手にトンファーを持ったマネットがいた

「…知り合いか？」

「…ええ、ファントムで一度」

「めんどくさいけどさ……一応僕もファントムだし
今回は出張らなきゃいけないからね……めんどくさいけど」

欠伸をしながら話すマネット
どうやら本当に面倒くさいようだ

マネットの話の内容に疑問を持ちながらティアラの言葉に
そうか、と返事をして龍士は一步前に出ようとするがティアラにそ
れを止められる

「此処は私が…、龍士さんはジョゼを……」

「……了解した」

ティアラの目を見て何かを言おうとした龍士は大人しく頷き、先を
急いだ

「……………」

「……………良かったの？」

沈黙を破ったのはマネットだった
率直な疑問をティアラにぶつける

「彼に任せれば君は先に進めたよ
彼なら悔しいけど僕なんか簡単に倒せるだろうし……」

ま、いずれ彼も咬み殺すけどね……
と不敵に笑いながらつぶやいていた

その言葉にティアラは大げさに肩をすくめながら答えた

「御冗談を……今ジョゼに対抗できるのは龍土さんだけです

……それに、貴方との決着はまだついていませんし……」

「へえ」

マネットは感嘆の声を漏らし、そのまま構える
ティアラもそれに反応してコインを構えた

そこで両者は口を閉じ、戦いに身を投じた

こうして、それぞれの戦いが始まる

エレメント4（後書き）

今回は長めでした

大分原作ブレイクしましたね！！しかも無意識に（笑
原作ブレイクが嫌いな方は申し訳ありません

それにしても長いですね……

何か省略化するいい方法は無いだろうか……

皆さんの中でのよろしければ何方か教えて下さると作者が喜びます

しかし、原作は大幅には変えていないつもり（誰が誰を倒すとか）
なので

許容してもらえると嬉しいです

大地のエレメント

「ミラ、あの魔方陣完成までどれくらいかかる」

ファントムのギルドの外

ミラはルーシィに変身して隠れていた

カナはそのミラに魔法陣の完成時間を尋ねる

「10分つてどこかしら……」

10分

それは決して長くはない時間である

戦いが長引けば長引くほど事態は最悪へと近づいていっていた

「何とか動力源を壊せないかな」

実際龍士がそれを言い当て、各自孤軍奮闘しているのをミラ達は知らない

「中にある連中も同じこと考えているはずだよ……」

「中には？」

「ナツと他にグレイとエルフマンが龍士達に加勢に行った」

「！……エルフマン！！？何で！！？」

ファントムのギルドに向かったメンバーを聞いた時、ミラが驚愕する

「何でってことも無いでしょ、あいつだって「無理よ！！！」」

カナの言葉をミラが途中で遮る

「……はあ……ねえミラ……あんなことがあってあんたもエルフマンも深く傷ついたけどさ」

あいつはあいつで前に進もうと努力してるんだよ」

「（エルフマン）……」

……前に……私も前に！」

カナの言葉でエルフマンの覚悟を知り、ミラも覚悟を決め、そこから走り出した

カナやFTのメンバー止めるが、ミラは無視して走る

「あなたたちの狙いは私でしょ！！！！！」

今すぐギルドへの攻撃をやめて……！！！！（これで少しは時間が稼げる）

しかし、

「消えろ

偽物め」

「……！！」

「初めから分かってたんですよ

狙われてる人間を前線に置いていくわけがないとね」

「……（私は……なんて無力なんだろう）」

シヨックのあまり、変身が解けてしまった

「我々を欺こうとは気に入らん小娘だ

潰してしまえ」

「……ぎゃっ」

「ミラー!」

その一言でミラは巨人の空いている片腕で捕まってしまった

ミラを助けようとしたカナ自身も幽閉に拘束されてしまう

「私の名はソル
ムッシュソルとお呼びください」

「出たな、エレメント4」

「おや？その様子だとこの巨人の止め方を知っている様子で？」

「ああ、龍士が教えてくれたからな」

「…成程、流石かの最終妖精…ファイナルフェアリーFTの切り札、ということですか」

そうしている内にエルフマンは魔法を行使する

「ビーストアーム”黒牛”」

「おや？片腕だけでよいので？…」

あの噂は本当だったのですかな？」

ムッシュソルの言葉にエルフマンが反応する

「私はFTの情報はすべて頭の中にあるのですよ」

「「「ぢゃ「ぢゃ「うるさいんじゃい！！！！」」」

しびれを切らしたエルフマンが変化した右腕で殴るが、独特な動きで上に飛び、避けられてしまう

「あなた…妹様がいたでしょう？」

「！！！！」

「サイブルダンス砂の舞」

「ぐっ」

ムッシュソルの言葉にエルフマンは動きが止まり、もろに攻撃を受けてしまう

しかし今の魔法は攻撃が目的ではなく

「何処だ!!?」

「ロッシュコンセルト
岩の協奏曲」

「ぐああ!!」

放たれた岩の嵐にエルフマンは吹き飛ばされる

何とか持ちこたえたが、魔法が解けてしまった

「貴方は昔、全身テイクオーバー接收到失敗し、暴走してしまった

妹様はそれを止める為に命を落としてしまった…違いますか?」

「!…!!…!!…ピーストーム”鉄牛”」

エルフマンは新たな魔法を行使して攻撃するが、地面に逃げられてしまう

出て来たところを攻撃しようと思えるが、後ろから隙を突かれ、拘束されてしまう

「くっ、離れんかムッシュソル!!」

「ムッシュにございます」

…名前を間違えられた腹いせかきつめのキックをエルフマンにする

「(コイツ…見かけに寄らず強え・・・!!!!!!」

…………やるしかねえ!!!!!!」

「んふ?」

エルフマンは一か八かで全身接收の体勢に入る

しかし

「(…………リサーナ)」

妹の顔が頭によぎり、集中力が乱れて失敗してしまった

「ん〜慣れないことはすることではありませんな」

「!」

この隙にムッシュソルはエルフマンに接近し、飛び蹴りを仕掛ける

「ムッシュソルそれっ!」

「うあぁあっ!」

その蹴りによってエルフマンは体勢を崩し、魔法を使おうにも使えない状況になってしまった

「ん~~~~~紳士たるもの留めは最大の魔法でさしてあげましよう」

そこで準備に入ったことにより、隙だらけだがエルフマンは体勢を崩しているため攻勢に出れない

そして

フフッ
「石膏の奏鳴曲」

「がはあああつー!」

魔法が決まり、壁に当たることで止まったエルフマンはダメージが酷く、動けずじま

「ん?.....っ!」

「エ、エルフマン」

拘束されているミラを発見し、血相を変える

「姉ちゃん!」

エルフマンは感じる痛みも気にせず、姉のミラを開放しようとするがムツシュソルに拘束される

「やめて！！私はどうなってもいいから！！！エルフマンだけは…」

「何でだよ…もう姉ちゃんの涙は見ねえって言ったのに…何で姉ちゃん泣いてんだよ！！！！！」

ぼろぼろの体とは思えないほどの力で立ち上がり、全身接收の体勢に入る

「駄目よ！！…あなた、片腕しか使えないじゃない」

「そうそう」

「……………俺が弱かったばかりにリサーナは死んだ！！」

……………もうあんな想いは二度としたくねえっ！！」

思い出すのは三人の思い出

「俺は姉ちゃんを守る漢になりたいんだあ！！」

あんな想いはしたくないという想いによってトラウマを跳ね除け、魔力を迸らせる

「姉ちゃんを放せえええっ！！！」

全身接收、
獣王の魂^{ビーストソウル}！！！！

ムッシュソルを秒殺したエルフマンはミラを助け出していた

「ごめんな姉ちゃん…こんな姿、二度と見たくなくなっただろ？」

でもこれしかねえって思ったんだ…FTや姉ちゃんを守る為には」
れしか……」

そこでミラはエルフマンの言葉を遮り

「リサーナはあなたのせいで死んだんじゃないのよ
あの時だってあなたは必死に私たちを守るうとしたじゃない……」

「でも、リサーナは死んじまった」

リサーナを守れなかったことに後悔するエルフマン

ミラはそれを慰め、自分がいることを伝える

エルフマンはミラが無事なことに泣き出すが

ドゴオオオオン

突然の爆発音に二人は驚く

「な、何の音！！？」

「っ！！そつだ姉ちゃん！！」

「？」

エルフマンは龍士の言っていたことをそのまま伝える

「ッ！！？……… だったらあの爆発は誰かが戦ってるのかも…行くわよ！…エルフマン…！」

「うん、うん」

その頃、屋上ではグレイもエレメント4と対峙していた

「アイスメイク”ランス槍騎兵”…！」

グレイがエレメント4の一人、ジュビアにランスを放つ

しかし、グレイの攻撃はすり抜け…いや、当たったがジュビアのは

じけた体が再生していった

「ジュビアの体は水で出来てるの…しんしんと」

「水だあ！！？」

こうして戦いは激化していく

大地のエレメント（後書き）

うっわ長（笑

…すみません

自分が悪いですはい

何とかならないかなあこの長いの……

水・風のエレメント(前書き)

お待たせしました!!

昨日は家帰ったら即ボタンキューだったので……

水・風のエレメント

「水だあ！！？」

グレイは今対峙しているエレメント4、ジュビアに攻撃を仕掛け、

当たったのが当たった個所に穴が開いたかと思うと再生し始めていた

「（今のは攻撃：そう、彼は敵！！」

ジュビアくじけない！！これが戦争！！！！！！）

さよなら小さな恋の花！！！！ウォータースライサー水流斬破！！！！！！」

「何言ってるんだコイツ！！！！」

……どうやらこれまでに一波乱あったようだ……

グレイはしっかりと避け攻撃するがまたもすり抜けてしまう

「あなたはジュビアに勝てない

今なら助けてあげられる

……ルーシィを連れてきて頂戴

そうしたら私がマスターに話して退いてもらおうわ」

「オイ…ふざけたこと言ってるじゃねえよ」

その一言でグレイのスイッチが完全に入る

「ルーシイは仲間だ

命に代えても渡さねえぞ」

「！！！！！！！！グスン」

その言葉をどう捉えたのか涙を流すジユビア

それを見てグレイは顔をヒクつかせる

そして

「キイイイイイイ！！！！！！」

ジユビアがキレた

……なんかもつ…色々と……

「ジユビアは許さない！！！！！！」

ルーシイを決して許さない！！！！！！」

「あちっ！！熱湯！！？……っか何でルーシイにキレてんだよ……」

「シエラア!!」

「うおっ!!」

ジュビアの熱湯と化した水を避け続けるグレイ

速すぎて造形魔法が使えないのだ

「時間を稼がねえと」

そう呟きながら自分が出て来たところから屋内に入るグレイ

それを追うためにジュビアはコースを曲げ、天井を屋外から水圧で
砕くことで侵入してきた

「アイスメイク”盾”シールド」

その間に盾を出して防御するが余りの水温に溶けてしまう

「ゲッ…マジかよ…ぐおあああっ!!!!」

余りの出来事に呆然としてしまい攻撃を喰らうグレイ

余りの水温に身動きが出来ず、二撃目を喰らってしまう

そこからグレイは先程水圧によって碎かれた場所から屋外へ打ち上げられてしまう

「…んの野郎！！—か所でもいから凍らせちまえば…」

そう言つてグレイは手を熱湯に突っ込み

「凍りつけえ！！！！！」

そこから一気に凍りついた

しかしそのグレイの手の先には

もぎゅっ

「あゝあゝあゝ——っ！！！！！」

思わずグレイは魔法を解除する

「（氷から解放した！？なぜ！！？

…優しすぎる！！！！）」

「し、仕切り直しだ」

「……駄目よ……ジュビアはあなたを傷つけることは出来ない」

グレイの言葉にジュビアは気を取り直し、グレイの言葉に否定の意を示す

「は？傷つけられねえって……勝ち目はねえって認めちまつのか？

……でもこのまま倒さずに辞めるわけにはいかねえんだけどなあ……

……」

「ジュビアはルーシーより強い

ジュビアなら守ってあげられる」

「守る？何で俺を」

「そ、それは……その

……あ、貴方のことが……す……す……す「てか雨強くなってねえか？」

……ジュビアじれったい……！」

「まったく……鬱陶しい雨だなあ」

誰もがこの状況で言うであろう一言を言ったショックを受けたジュビア

「（この人も……今までの人と同じ）……同じなのねーっ……！！」

「うおー!!? 何だ!!?」

ジユビアが突然仕掛けてきた攻撃に対応できず、再び熱湯を被るグレイ

「また凍らせて…!! さっきより高温なのか!!?」

「(ジユビアはエレメント4!!!! ファントムの魔導師!!!!)」

シエラー!!!!」

迫る二撃目にグレイは体勢を立て直し

「負けられねえんだよ!!! ファントムなんかによおお!!!!!!!!!!
」!

熱湯に手をかざし、グレイも攻撃する

ン越冬はだんだん凍りつき、雨までも凍りつき始めた

「雨までも氷に…なんて魔力!!!?」

「ぬあああつ!!!!!!!!」

そして

「アイスゲイザー
氷欠泉!!!!!!!!」

全て凍った熱湯は砕け、氷からジュビア自身が出て来た

「ジュビアは…負けた!？」

「どーよ？」

熱は冷めたかい？」

呆けているジュビアにそう語りかえるグレイ

そこに

「お！やっと晴れたか」

透き通った青空がどこまでも広がっていた

「（これが青空……………」

キレイ…）」

「で…まだやんのかい？」

グレイが声を変え、顔を向けた瞬間ジュビアはKOされた

そこに

「グレイイ」

「エルフマン！？…あれ？何でミラちゃんまで……」

事情を知っているミラは少し慌てているようで、グレイの言葉を無視している

「あと一人、あと一人倒せば煉獄碎波は「ドゴオオオオン！！」」

「「「！！」」」

「今の爆発音は！？」

「あつちには確かエルザが行ったはず……」

「急ぎましょ！……」

その頃爆発が起きた場所では

「マスターが貴様ごときにやられるハズがない…

今すぐ己の武勇伝から抹消しておけ」

エルザがアリアを瞬殺していた

細かく言うとアリアが放った魔法をエルザが一瞬で切り裂き、そこから攻撃を仕掛けて撃破

……といった所だろう

ファントムのギルドが崩れ始める

そこに

『FTの皆さん

我々はルーシイを捕獲しました

一つ目の目的は達成されたのです

我々に残された目的は唯一つ……

貴様らの皆殺しだ

クソガキども』

その放送を聞いた龍士は足を速めた

水・風のエレメント（後書き）

エルザが本気ならアリア瞬殺だと思っんですよね……（汗

鉄竜と雲 前編

ファントム とある一室

そこではルーシイがレビィ達と同じように磔にされていた

ファントムの滅竜魔導師、ガジルがそこに鉄製のナイフを投げていた

「あつぶねー

今のは当たっちまうかと思っただぜ

ギャハハハ」

他のファントムの男たちはそれを止めようとするがガジルは一向に止めない

「ったく、くだんねえな

この女が金持ちって知って尻尾ケツの奴等も必死だぜえ」

ガジルが笑いながら辺りを見渡しながらそう言う

クスッ

そこでルーシイが小さく笑った

ガジルもそれに気づいてルーシイに目を向ける

「アンタ達って本当に馬鹿ね

かわいそうで涙が出てくるわ」

「へえー…」

この状況で虚勢がはれるとは大したタマだ」

ナイフをもう一度ルーシイ投げ、ルーシイの顔の横の壁に当てる

今回ばかりはガジルの言う通りである

この状況でそのような虚勢をはるのは寧ろ自殺行為だ

「あたしが死んだら困るのはアンタ達よ」

ルーシイが僅かに足を震わせながら言う

「FTは決してアンタ達を許さない！！そういうギルドだから

世界で一番恐ろしいギルドの影に毎日脅えることになるわ

一生ね」

ルーシイがそう断言する

断言するだけの何かがルーシイにはあるようだ

「そいつは面白そうだな

ちと試してみるか？」

それを聞いたガジルはナイフで今回は的確に頭部を狙う

だが突然

床が地面と反比例して浮かんできた

そしてナイフがそれによって止まる

…いやよく見ると誰かが床を持ち上げていた

「がああああつ！！！！！」

その男…：ナツ・ドラグニルは炎を撒きちらせて咆哮を上げる

「やはりな…：匂いで気づいてたぜ」

ナツはまるで竜を模したような炎を纏っていた

「サラマンダー
火竜…：」

「オオオオオツ！！！！！」

ナツはガジルに向かって疾走し殴りつけた

とある大部屋

片手にコインを構え、一定の距離を保っている女…ティアラと

それを片手のトンファーで弾き、もう片方の手で手錠を投げつける
男…マネットがいた

ティアラは投げつけられた手錠を弾く

が、よく見ると一度も喰らってないわけでは無いようだ

左手に僅かな跡が見える

如何やら無理矢理外したようだ

「……………」

マネットは無言で肉薄する

ティアラはコインに籠める魔力を上げ、打ち出した後接近する

「っ!!!?!」

さっきよりも威力と速さが増したコインをトンファーで弾く
如何やら特別性のトンファーのようだ

その隙をついてティアラが拳を振りかぶる
若干だが電気を纏っている

宝具、ユービテル雷神守護する雷速の盾が発動しているようだ

「っ！！！？」

それを察知したマネットは後方へバックステップする

「……………ふうん」

マネットは戦いが始まってから初めて声を上げた

「……………おもしろいね……………」

咬み殺しがいる……………」

獰猛な笑みを浮かべるマネットだがティアラは腑に落ちないという
顔をしている

「……………やはり、あなたは手錠を無限に出す魔法という訳ではありませんね」

「!!……………」

それに僅かながら反応するマネット

「私が至近距離で見た物は殆ど細部は同じでした

……同じものを無限に出せると言ったらそれまでですが手錠が増える時、

魔力の発生する量が違つんです

それに手錠が出る時、魔力が発生しない」

「…ワオ」

マネットは笑う

心底面白いという顔だ

「…………その通りだよ

僕の魔法は手錠を無限に出すんじゃない

物体を増殖させる魔法なんだ……………」

この手錠は基本装備してる物なんだ…と付け加える

「……………」

「確かに普段僕は違う魔法を使ってるよ

それは君自身で考えなよ……」

「……先程から」

ティアラは口を開き、続きを話す

「僅かに熱を感じますが…炎ですか？」

「……その通りだよ」

マネットは笑い、トンファーに炎を纏わせる

「まあ戦う時はこうして纏わせる程度の炎しか出せないけどね……」

「…あなたは何故フアン^{トム}にいるのですか？」

ティアラがジッとマネットの目を見て尋ねる

目を逸らすことを許さないという目だ

「あなたは前に「運が悪かった」と言いましたよね？」

あれはどういう意味ですか？」

当のマネットはブスツとした顔で答える

それがまるで子供の様でティアアラは内心微笑ましく思っていた
だが戦闘中なので身を引き締める

「…どういつも何もそのままの意味だよ

偶々所属することになったギルドがファントム…

唯それだけさ」

「…そうですか」

ティアアラは口を閉じ、腰を沈めて突撃の姿勢に入る

マネットはそれを見て、同じように構える

「…あなたとは決着を付けなきゃいけないので、ここからはノンス
トップで行きますよ?」

ティアアラがその声を掛ける

「いいよ別に…」

どうせ話すことなんてないし………」

「…そうですか」

残念です

とティアラが呟いた後、二人は残像を残してその場から消えた

鉄竜と雲 前編（後書き）

本当に長くなりそうなので前後に分けました

マネットの炎の色は個人で想像してくださいWWW

鉄竜と雲 後編

ガキツガキン、キキン、キキキン

金属音を撒き散らせながらティアラとマネットは戦闘している

ティアラは常に一步先を読んだ戦い

マネットは敢えて受けに回り、ティアラの動きの隙間に見える僅かな隙を突いていた

「くっ……!!」

その為、不利なティアラの動きに若干の乱れが生じる

「……………?」

しかし、マネットはそれを逆に疑問に思っていた

「（動きが合っていない?）

いや、そもそも魔力がさつきよりも弱くなってる」

そう、本来受けに回っている相手に対して無闇に突っ込むのではなく、

ヒットアンドアウェイなどの戦法が効果的だが

しかも先程からの違和感はこれだ

魔力が弱すぎる

これがマネットの最大の懸念事項だろう

先程までと段違いに違う魔力に疑問を唱える程だ

何をやる気なのか

それが分からない内はどうしようもないと言う様に隙だらけのティアアラに攻撃していく

ティアアラは自身の宝具を展開しているが、基本的にこの宝具に持久戦は向かない

障壁の長時間の展開が出来ないのだ

マネットの手錠を弾き、肉薄する

それをバックステップで躲しながら置き土産と言わんばかりに手錠を投げる

それをティアアラは諸に喰らう……………わけでは無かった

突然地面から電氣化した魔力が湧き上がりマネットを囲む

手錠は通り越さずにそのまま壁に弾かれてしまった

「（！！？……やられた）」

マネットは僅かに唇を噛む

ティアラは唯隙を出していたわけでは無い

誘い込んでいたのだ

魔力がティアラ自身から余り感じなかったのは地面に常に魔力を送り込んでマネットを囲むようにしていたのだろう

ティアラはこの手の作業は最も得意だ

「（……………面白い）」

マネットは純粹にそう思った

今まで戦った相手、その誰もがマネットにとって弱すぎた

類稀な戦闘センス、魔法の組み合わせ、そしてそれを利用した戦闘スタイル

どれをとってもマネットに適う者はいなかった

が、今日の前にそれがある

自分と互角に戦えるものが！！

マネットは最大の炎をトンファーに纏わせる

恐らく本気になったのだろう

更に手錠だけじゃなく小ぶりの何かを取り出す

形は棘棘したもの、銃弾に似たものとそれぞれだ

電気の包囲網を抜け、見たのは

右手に雷を帯びた眩しい光を放つ刀を持つティアラだった

一方、ナツは

ゴツ、ガコツ、ドン！！

ガジルとド突き合いをしていた

互いのブレスを皮切りに

ナツが殴ればガジルが殴り

ガジルが蹴ればナツが蹴り

と、長続きしていた

「だらあっ！！！！！！」

「うおらぁああっ！！！！！！」

互いが雄たけびを上げながら拳のラッシュを相手に仕掛ける

余りの速さと擦れた時の摩擦熱で光が生じていた

ナツは拳が決まった直後にその場から跳躍し、ガジルに右足を振り下ろす

間一発避けたガジルは鋼鉄化した肘でナツを殴り、ナツはそこに左ストレートをお見舞いする

そこからまたド突き合いに発展するかに見えたが

徐にガジルが床を手で剥がし、口にいれた

バリッ、ガジガジガジ

「や、やっぱり鉄を食べるんだ」

そこはやはり鉄の滅竜魔導師である

「てめえずりいぞ!!!」

自分だけっ!!!」

魔力が回復したガジルは不敵に笑い、

「鉄竜槍・鬼薪!!!!!!!!!!」

両手を鉄の槍に変え、突きの嵐をナツにお見舞いする

「ぐあああつ!!!!!!!!!!」

ナツは為す術無くただ攻撃を受けていた

「はっ！だったらナツも炎を……！！！！（自分の炎で発火させた炎は食べられないんだっ……）」

その間にナツは抵抗できずにただ攻撃されていた

ルーシイは星霊の中に火を出せる者はいるか探そうとするが今はサジタリウスしかないことに気づく

「こつなったら契約はまだけど……」

そう呟いて出したのは馬の被り物をした星霊だった

「細かい説明は後、アンタ火出せる……!?」

「いえ…某は弓の名手であるからして　もしもし」

出せるはずがないだろう

……………見た目的に

そんなルーシィにナツが離れるように注意を飛ばす

それに素直に従うルーシィ

が、その後もワンサイドゲーム一方的な戦いだつた

ナツは抵抗できず砕けた壁の方に追いやられた

「見るよ

お前達を守ろうとしている者を」

外を見ると

幽兵達にFTのギルドを破壊されていた

如何やら、守りきれなかったようだ

ナツは破壊されたことに対する怒りで立ち上がる

だがボロボロでまともに歩くことすらできない

そこをガジルが殴りつけ、また一方的に殴る

「魔力を使いすぎたんだ!!!」

炎さえ食べればナツは負けたりしないんだ!!!」

「……成程」

ハッピーの叫びを聞いたサジタリウスが状況を理解する

「少々誤解があったようでございますからして　もしもし」

矢を番えながらルーシィに語りかえるサジタリウス

「ルーシィ嬢は「アンタ火出せる?」と申されましたので某は「いいえ」と答えました」

「しかし…今重要なのは火を出すことでは無く火そのものという訳ですな　もしもし」

そう言つて今にも倒れそうなナツととどめを刺そうとするガジルの間に矢を射る

「……雷切」

ティアラはそう呟き、刀を構えた

「これは余り出したくなかつたけど…決着を付ける為には仕方ありませんね…」

「……面白い」

先程の小道具もトンファーで放つたが雷切に焼かれてしまった

文字通り焼かれたのである

そう呟いたマネットも構える

「…僕も次は本気で行くよ」

「こちらこそ」

そう互いに言ってマネットは腰を沈めて、ティアラは雷切を大上段に構える

マネットが突撃し、それをティアアラが受けるようだ

「っ！…！！」

マネットは合図も無く突撃し、炎を纏ったトンファーで殴りつける

「はあああああっ！！！！！！！！」

それをティアアラは雷切を振り下ろすことで迎え撃つ

互いの武器が重なった瞬間、大爆発が起きた

サジタリウスの射った矢は誰の当たるわけでもなく、部屋の機材に当たり、発火した

「火!!!」

「機材を爆破させて炎を……」

ナツは火に食らいつく

ナツが食い終わるうちにすぐ第二射、第三射が放たれ、機材が発火していく

ナツはそれを全て食っていく

「射抜き方一つで貫通させることも粉碎させることも

機材を発火させることも可能ですからして　もしもし」

心なしか馬の顔がドヤ顔になっていた

「ごちそう様

ありがとなルーシィ」

「うん!!」

「火を食ったぐれーでいい気になるなよ!!!!!!

これで対等だということのを忘れんなあ!!!!!!

そしてナツが食い終わった直後にガジルが飛び掛かる

しかしそれをナツは一睨みした後、

左手で下から顎に向かって一気に殴り飛ばす

「これでパワー全開だあー!!!!!!!!」

「レビィ、ジエツト、ドロイ、じっちゃん、ルーシィ、仲間達、
…

ハッピーが嬉しそうに叫び

ナツがやられた者の名前を呟く

そして妖精の尻尾フェアリーテイル」

ガジルは体勢を立て直し、

「鉄竜の咆哮！！！！！！」

一気に放つがナツはこれを素手で跳ね返す

「どれだけのものを傷つけければ気が済むんだお前らは！！！！！！！！！！」

ナツは右拳を固め、振りかぶる

「バカな！！！！！！この俺がこんな奴に…」

こんな屑なんかに！！！！！！」

「今までの借りを全部返してやる！！！！！！
FTに手を出したのが間違いだっとな」

「俺は…最強の…」

「紅蓮火竜拳！！！！！！」

ナツがガジルに怒涛のラッシュを繰り出す

それがファントムのギルドのあちこちに及び、崩れていたギルドが更に崩壊する

FTはファントムの崩壊に歓声を上げた

技が終わる頃には

ナツもガジルもボロボロだが

ガジルは白目をむいて倒れていた

「くっ！！…よく暴れまわる竜だ……………」

ファントムギルド内の道でジョゼは一人皮肉を呟いていた

「こうなれば私一人でFTを皆殺しに「残念だが…………」！！？…………」

「それは叶わんな……………」

その声が聞こえ、前方の曲がり角から龍士が出て来た

ファイナルフェアリ
「最終妖精……………！！」

「やれやれ、その二つ名は好きではないのだがね……………」

まあこの状況にピッタリではないか？……………」

ジョゼは怒り心頭なのに対して龍士は飄々とした態度であった

龍士も体に魔力を通し、相対する

「
トレース
投影、
オン
開始…!!」

戦いは終盤へ……

鉄竜と雲 後編(後書き)

後篇です

長くてすいません

どうしても終わらせたかったので……

次回からよつやくジヨゼ戦です!!!!

幽鬼の支配者（前書き）

今回のサブタイはそのまま読みます

また例によっては前編です

幽鬼の支配者

「^{トレース}投影、^{オン}開始：！！！」

龍士はお馴染みの夫婦剣、干将・莫耶を投影し、ジヨゼが放った魔力弾に向かっていく

「ハッ！！血迷ったか！！！！！」

そう叫びながらジヨゼは魔力弾の数を増やした

しかし、龍士はそのまま向かい、

突然姿を消した

「っ！！！？一体何処に「何処を見ているのかね？」っ！！！！！？？」

気づけば龍士はてに持つ夫婦剣で斬りかかっていた

それを間一髪ヒラの所避けるジヨゼ

「くっ！！何故此処まで……」

「何故と言つても……君のお蔭だと言えないな」

ふう、と龍士は深いため息を吐きながら言う

ジヨゼのことも「君」と呼んでいて随分余裕である

「君が奥の方で踏ん返り返っている間にこちらは大分回復しているのだよ

確かにクエストの傷は完治していないがそれなりに回復したつもりだ」

龍士の体には全て遠き理想郷アウマロンが埋まっている

魔力を通せば怪我など殆ど治ってしまうだろう

それに今、この場にはいないが距離感が操作できる神の間にいるセイバーのお蔭で回復量は最高値に達している

完治はしていないが固有スキルぐらいは使えるということだろう

…最も、完治していないということはそれほどの怪我ということだ

それを聞いたジヨゼは肩を震わせている

如何やら相当キレているようだ

「き・さ・まあ!!許さんぞオオオオオ!!!!!!!!!!」

ジヨゼが一気に魔力を開放し、辺りの障害物が粉々に砕け散る

「やれやれ、逆鱗に触れてしまったか？」

それを龍士は見て、静かに結論を下す

だが流石にこれには龍士も冷や汗を流す

「（確かに怒らせることが目的だがまさかここまでキレるとは……

相当怒りやすいな……………（汗）」

呑気に考え事をしている間にジヨゼがさっきの数倍の魔力弾を放つ

龍士は横に走ることですそれを回避する

「死ねエーーーーー……………っ!!!!!!!!!!!!!!」

そこにジヨゼは追撃を入れる

龍士は目的の場所まで辿り着くとその場で黒鍵を一本投影し、ジヨゼの向かって投擲する

「チツ……………!!」

ジヨゼはその速度に弾く暇は無いと悟り、その場から飛び退く

その間に龍士は天井が抜けているその場から跳躍する

如何やら空中に回避することが目的だったようだ

「クソッ……!!」

ジヨゼは悪態を吐き、仕方ないとばかりに魔力弾を放って天井を破壊する

「来るか………」

空中で龍士はジヨゼが来るのを待ち構えていた

しかしFTは龍士が突然空中に出て来たことに驚いている

「誰も手は出さないでくれ！……！」

o r d .
I a m t h e b o r n o f m y s w

470

そう唱え、龍士は弓と剣を投影する

魔力は節約の為に抑える

丁度その時、ジヨゼが天井を突き破って出て来た

そこを龍士は狙い撃つ

ジヨゼは狙われていることに気づき、慌てて回避に入る

「カラドボルグ?偽・螺旋剣！！」

…マスターの手を煩わせる訳にはいかないからな」

そして煙から出て来たジヨゼをひと睨みする

「マカロフと同等の魔力を持つ俺に貴様如きが適うと思っているのか！！？」

「無論だ……貴様如き、俺一人の力で十分事足りる」

「……ほざけっ！！！！！」

ジヨゼは手に魔力を込め

「デッドウェイブ！！！！」

地面に振り下ろした

魔力は衝撃波となって龍士に襲い掛かる

龍士はその場で跳躍することで回避する

「
トレース、
オン
投影、開始

トリガー
投影、装填」

龍士は空中で体勢を整え、着地と同時に駆ける

「
憑依経験、共感終了」

そして、龍士はギリシャの大英雄の斧剣を投影する

「セッ
ト
全行程投影完了」

ナインライフスブレイドワークス
是、射殺す百頭也……………！！！！！！」

そして投影した斧剣で様々な武器で行える万能宝具を斧剣で発動する

「ゲウ……………」

ジヨゼは捌ききれずに一太刀くらう

fire is my blood .
Steel is my body , and

龍士は干将・莫耶を二組投影して投擲する

「くっ……ええい！！小賢しいっ！！！！」

ジヨゼはさらに魔力を放出してそれらを破壊する

その隙に数十本の剣がジヨゼに向かって放たれた

ジヨゼは力いっぱい地面を蹴って避ける

I have created over a
thousand blades .

Unknown to Death .

Unknown to Life .

龍士はそれに追撃を仕掛ける様に干将・莫耶を持って斬りかかる

「嘗めるなあ！！！！！！！！」

しかし、ジヨゼは魔力弾を放って龍士を攻撃する

「くっ……」

予想外な一撃をくらい、思わずその場でしゃがみこむ

「「「「龍士！！！！」「」「」」」」

思わずFTの皆は龍士に向かって叫ぶ

「俺は聖十大魔道の一人、てめえみてえな若造に負けるわけねエんだよ」

そう言いながら近づいてくるジヨゼ

「……………くっ…生憎、まだ諦めた訳では無いのでな……………」

この勝負、勝たせてもらうぞ！！マスタージヨゼ！！！！」

「何だと？……………っ！！？」

ブローケンファンタズム
壊れた幻想

先程龍士が投影した剣達が一斉に爆発した

それが目隠しとなり、ジヨゼは龍士を見失う

「くそっ！！何処だ！何処に「Have withstood
ain to create many weapons」
っ！！！！！！？」

気づけば龍士は先程の遙か前方で右手を左肩に添え、片膝を地面につけていた

それはまるで主人に従う騎士のようであり、皆を守護しているようにも見えた

「龍士さんは何をしようとしてるの！！？」

ルーシイは先程から唱えている言葉に疑問を唱える

「さあ……これは俺たちにもわかんねエ」

グレイは首を傾げながらルーシイに答える

龍士が勝つと確信しているのか随分余裕な態度だ

ジヨゼは何か危険を察知し、魔力を貯める体制に入る

そして

「S o a s I p l a y ,

” u n l i m i t e d b r a d e w o r k s . ”
L

ゴオッ!!!!!!!!!!!!!!

瞬間、世界は浸食される

FTとジヨゼが眼を開け、見たのは

一面に広がる銀の世界

そこはまるで生き物を拒絶するような静けさだった

そこに広がる静けさはまるで氷

だが空はそれとは逆にまるで生き物が最後までその命を燃やすかの様な紅い色をしていた

その情熱さはまるで炎

そしてその世界にはこの世界に存在する民のようにも思える剣達

その中でただ一人、まるでその世界の王であるかの様に立っている

龍士

龍士は口元に笑みを浮かべている

「じ、これは……!!」

「ご覧の通り、貴様が挑むのはこの無限の剣

剣戟の極地……」

急に世界が変わったことに狼狽しているジヨゼに龍士は静かに語りかける

「恐れずしてかかって来い!!」

そうして龍士は手元の剣を一本抜いてジヨゼに向かって行った

「!!...!!...きさまああああ!!...!!」

ジヨゼもそれに反応し、構える

「行くぞファントム!!!!」

裁きの覚悟は充分か!!...!!...!!...!!」

幽鬼の支配者（後書き）

龍土本気全開です（笑

此処で出す必要もないと思いますが
復活ということでした（笑

龍土の固有結界ですが空が真っ赤になっている北極などの銀世界と
思ってもらえれば結構です（適当

次回ジョゼ戦決着です

無限の剣製

龍士が片手を上げると先程とは比べものにならない百近くの剣が周りで浮き始める

「逝け!!!!!!!!!!!!!!」

そして上げた手を振り下ろすと剣がジョゼに向かっていく

「嘗めるなガキがあああ!!!!!!!!!!!!!!」

だがジョゼも先程とは比べものにならない量の魔力を放出する

「俺は聖十大魔道、ファントムロードのマスタージョゼだ!!!!!!!!!!
貴様みたいなガキに「ああ、この程度では終わらないだろうな」……
っ!!!!!!!!!!!!!!?」

「今ので誰が本気と言った？」

「固有結界」

ティアアラが静かに呟くがその呟きは皆に届いていた

「ティアアラ？固有結界とは何だ？」

エルザが堪らずティアアラに質問する

ティアアラは龍士の方を見ながら解説を始めた

「固有結界とは術者の心象世界を具現化した魔法、故にこの世界は龍士さんの心を形にし、

その場で世界そのものを塗り替えた物だと龍士さんは言っていました」

FTは驚愕する

当たり前だろう

世界そのものを塗り替えるなんて大魔法など誰も見たことなどないし聞いたことも無いだろうから

そんな中マカロフは一人頷いていた

「…話には聞いていたんじやがまさかこれほどとはのう……」

しかし、これが龍士の世界か………」

マカロフは後者の言葉を周りを見渡しながら呟いた

「何か……暑くも冷たくもある……って感じだなあ」

「すっげえ—————っ!!!!!!!!!!」

グレイが静かに感想を述べ、ナツはずっとこの調子である

そんな中ティアラが補足を入れた

「因みに龍士さん曰く今までの投影はこの固有結界から零れ落ちた物だそうです

だから『力の一部』」

その言葉を聞いて皆は納得するがルーシィは？を浮かべた

「投影？」

「龍士の魔法はね、剣を投影……つまり贗作を作って戦うの」

「ええっ！？じゃあこの剣全部贋作ってことですか！？？」

「そういうことね」

「何か見たことある奴もあれば見たことねえ奴もあるぞ……」

皆は神々しい気配を放つ剣に圧倒されながら龍土を見る

龍土の勝利を願って

龍土 side

「（ちて、困ったな……）」

先程の剣もジョゼの魔力で弾き飛ばされてしまった

先程までは押していたのだがな……

……くっ、往生際が悪いとはこのことか？……

そう一人心中で苦笑しているとジョゼは魔法陣を書きだしていた

……煉獄碎波！！

仲間と一緒に俺を消すつもりか！？

「……………まったく……………何処までも救いようのない男だ」

俺は本気で怒った

当たり前だ

ギルドに手を出しておいてさらに昏を消すだと？

「…いいだろう!!」

恐れずしてかかって来い!!!
早々に逝かせてやる……!!」

そう叫び、俺は手元にある剣を掴んだ

その剣はまるで最初から手元にあったように当たり前であった

人々の”こうであってほしい”という想念で作られ、
最強の幻想ラストファンタズム
”と呼ばれた
最強の聖剣

俺の師匠が持つ最強の一振り

「死ねえええ!!!」

ジヨゼは叫びながら煉獄碎波を放った

俺は剣を大上段に構え、同時にその真名を開放する

「約束エクスされた……」

そして近づいてくる黒い波動に向かって振り下ろす

「勝利カリバーの剣”—————!!!—————!!!」

振り下ろした一撃は光の帯となって黒い波動に当たり

双方同時に消えた

余り魔力も籠めて無いからな

まあ当然だろう

「なっ……!!?!?」

そのまま真名開放で強化された体で啞然としているジョゼに走り込み、袈裟に斬る

「がっ…………はっ…………!!!」

「何、命までは取らんよ

生きて自分のしたことを償うがいい」

ジヨゼが倒れると同時に固有結界も解けだし、

”エクスカリバー約束された勝利の剣”も破棄された

…………今回は思ったより危なかった

魔力も半分もないし何より傷が完治していない状態での戦闘だからな

…ま、FTを守れただけ良しとしよう

「「「「龍士!!!!!!!!!!」」」」

「…………やれやれ」

そう呟きながら俺は壁の元に歩いて行った

無限の剣製（後書き）

ぶっちゃけ約束された勝利の剣を出したくて固有結界を出した
エクスカリバー

後悔はしていない

事後処理（前書き）

すみません遅くなりました

学校が昨日から文化祭だったので……

事後処理

オオオオオオオオ!!!!!!

「勝ったあ!!!!!!」

「ファントムに勝ったぞおおっ!!!!!!」

ファントムのギルドが破壊され、ジョゼが倒れたことにより勝利が確定し、FTは歓声を上げる

そんな中、ルーシイが照れくさそうにハッピーと帰ってきた
一同はルーシイの方を向いているがその顔に嫌悪は無かった

そして、そのすぐ後に皆は龍士に向かって行った

「龍士!!!!!!」

「てめエやってくれたなこの野郎っ!!!!!!」

皆は龍士をボコボコに殴る

が、その顔は笑顔で一杯だった

しかし、龍士の体は重傷を負ったにも拘らずこの場に駆けつけ、さらに体を酷使していたので

「グハツ!!」

「あれ? …… 龍士さん!? …… しっかりしてください!! 龍士さん!!」

こうなるわけである

ティアアラがいち早く気づき、皆を止めるが今や龍じは意識を失う一歩手前だった

「……ん? …… 君がルーシイかね?」

龍士は手前の方にいた自分が見知らぬ女の子がいたことに気づき、声を掛ける

「は、はいっ！……そうです……えっと、龍士さん？」

「龍士で構わん」

……そうか、君も大変な目にあつたな」

「いえ、そんな……」

「龍士」

と、ルーシィと話しているとマカロフが龍士に声を掛けて来た

「よく帰ってきたの」

「ああ、すみませんマスター」

挨拶が遅れてしまった」

龍士はマカロフに軽く頭を下げるがふるふると首を振る

「まあこんな状況じゃ

とりあえずギルドに戻ろうとするかの……」

「あつ、そつだマスター!!」

突然ティアラが声を上げたので皆はそちらを向く

「少し出てきていいでしょうか？」

すぐ戻りますので」

「…相分かった……先に行くからの」

「はい!!」

ティアラは戦闘後とは思えないほどの速さで駆けて行った

「さて、先に行くのでしょうか」

何処かに用事があったというナツと合流し、FTのギルドがあった場所に戻る

「こりゃあまた…派手にやられたのう…」

少しのんびりとした雰囲気のマカロフ

「あ……あの…マスター……」

そんなマカロフにルーシィは気まずそうに話かける

今回のことに負い目を感じているのだろう

「んー？」

お前も随分大変な目にあつたのう」

しかしマカロフはそんなルーシィに何も言わなかった

ルーシィはつらそうに顔を俯かせる

皆はルーシィに目を向ける

龍士は近くの破壊された柱に寄りかかり、眠るように目を閉じている
相当疲労しているのだろう

実際軽く睡眠にはいつていた

「そんな顔しないのルーちゃん」

と、そこにルーシイが聞きなれた声が聞こえた

ルーシイはつらそうに俯かせた顔を上げ、そちらに目を向ける

「皆で力を合わせた大勝利なんだよ」

「ギルドは壊れちゃったけどな」

「そんなのまた建てればいいんだよ」

「うい」

そこにはまだ傷が治っていないがすっかりとした足取りでこちらに歩いてくる

レビイ、ジエツト、ドロイ、リーダーがいた

龍士は四人の気配に気が付き、目を開ける

「大丈夫か？龍士」

近くにいたエルザが声を掛ける

「ああ、問題ない

少し休めばどうとでもなるぞ」

龍土とエルザがそんなやり取りをしている間、シャドウギアの三人は心配をかけたことに

リーダーはルーシィを守れなかったことに謝罪をする

「ルーシィ」

そこでマカロフは口を開いた

全員が口を閉じ、マカロフの方を向く

「楽しいことも、悲しいことも、全てとまではいかないが

ある程度は共有できる……

それがギルドじゃ」

龍土はいつの間にか建物の壁際にいたミストガンの隣にいた

「一人の幸せは皆の幸せ、一人の怒りは皆の怒り

そして一人の涙は皆の涙

自責の念に駆られる必要はない

君にはみんなの心が届いてるはずじゃ」

そしてマカロフは初めてルーシィの方を向く

「顔を上げなさい

君はフェアリーテイルの一員なんだから」

そしてマカロフは優しい顔で言い切った

ルーシィはその一言でとうとう泣き出してしまった

……何故かマカロフも泣いた

「……これからどうするんだ？……龍士」

ミストガンが龍士に疑問をぶつける

龍士はミストガンの正体を知っている

それでは知らないがギルドに来た時より親しげだ

「さあな…その内評議院も来るだろう」

その時に一緒に報告を済ませればいいだろう

態々あんな所、出向く気になれん」

「そうか……」

そう一言溢し、ミストガンは町を出て行った

「さて、これから忙しくなるな……」

そう呟いて龍士は皆の方へ歩いて行った

side 龍士

あれから数日、俺たちはギルドの建設に力を注いでいた

特にこれと言って問題は…あつたな

ティアラがファントムの男を連れて来た

その当の男はムスツとしていて何だか無理やり連れて来たみたいだった

ティアラから事情を聞いたマカロフはその男…マネットと言ったか…をFTに入れることにした

今ではすっかり馴染んで………

「ねえ君たち強いのか？」

咬み殺させてよ」

「ぎゃあああっ！…！」

…ないな

そしてあと一つは……実は今日なわけだが…

何でも評議院が俺に用があるらしい

……まあ……十中八九クエストの件だろうな

sideout

所変わって評議院

龍士は評議員全員の視線を受けていた

当の龍士は決められた場所にはいないで扉の近くの壁に寄りかかり、目を閉じて上でを組んでいる

そこでカエルの様な体の職員が声を掛ける

「あ、あの龍士さん…ちゃんと決められた位置に「すまんが遠慮する。どうせそれ程長くは掛からない

のだろうか？」

ならばどこにいても関係無い」

如何やら評議員たちが相当嫌いらしい

よく見ると評議員たちから一番遠いところの壁に寄りかかっていた

「…それでは今回呼び出した件について話すとしよう……」

議長がそう切り出し、話が始まる

「まず十年クエストについてはご苦労であった」

おかげで百年クエストを増やさずに済むことが出来た」

「……………」

龍士が沈黙によって先を促す様に指示する

「そしてファントムの一件だが、FTは無罪とする」

「……………そんなことは分かりきっている」

此処で龍士はようやく目を開けた

その開けた眼で評議員たちを睨む

その鷹の様な目に何人かたじろいだ

「本当は別の要件があるのではないか？

それだけのことなら態々こんな所に呼び出すほどのものでもあるまい」

こんな所

神聖なる魔法評議院をそう呼んだことに一瞬顔を顰めるが議長は要件を一息に言い切った

「では、本題に入るとしよう」

龍士・E・ペンドラゴンを聖十大魔道に任命する」

「ファントムの解散、ジョゼの聖十の称号の剥奪

そこまでは予想通りじゃが儂らが無罪とは思いつた判決じゃのう」

評議院の宮殿の様な廊下でマカロフは旧友と話していた

評議員であり、唯一龍士が評議員の中で心を許している評議員、ヤシマである

「感謝せえよマー坊

ワ？も弁護？たけえねえ」

二人は相当旧知の間柄なのか世間話から込み入った話まで話していた

「マスター」

そんな処に長身の赤い外套を着た男が現れる

言わずもがな龍士だ

「おお、リュウズかい…久しぶりだのう」

「ええ、先ほどは言えませんでしたがお久しぶりです」

そう言って頭を下げる龍士

マカロフは話が見えずにキョトンとしてる

「なんじゃ？さっき会ったのか？

というか龍士はなぜここにいるんじゃ？

「これです」

そう言っつて龍士は聖十の称号の意味を持つバッジを見せる

マカロフは驚きのあまり目がどこかに飛んで行ってしまった

「そういつこつちやマー坊

早く決めておいた方がええぞ」

そう静かにマカロフを諭すヤジマだった

龍士はあれからマカロフは残ると言ったので一足先にFT帰ると

「…へえ……大分できて来たじゃないか」

見れば大体の骨組みは完成していた

と、感心しながら歩いていると

ガコオオオオオン!!

そんな音が聞こえてきた

FTギルド（仮）

そこではエルザと何時の間に帰ってきたのかラクサスがいた

先程の音はエルザが蹴り飛ばしたテーブルがナツに当たった音だった
非情なことに、皆ナツを無視している

「この際だ

はっきり言ってやるよ

弱え奴はこのギルドに必要なねエ」

ラクサスの不遜な態度にエルザがアリア戦並みの顔をして睨んでいるがラクサスは平然としている

そこでティアラがいつものごとく爆弾（毒）を投下した

「ならあなたはいいですね

弱者は必要ないのでから」

余りの重圧にティアラもラクサスも急停止する

「やれやれ、まだいがみ合っているのか？君たちは……」

声が掛かり、全員そちらをむくとエルザでさえ圧倒される気迫を放った張本人、龍士が入口から自分のペースでゆっくりと歩いてきていた

事後処理（後書き）

— 応前編みたいになるのかな？（おい

ジーさん…それは無茶だ（汗）（前書き）

今回からはオリジナルに入ります

…正直この章から出てくるあの人を出したいがための章ですが……

（汗）

それからこの章はグロ設定が入ります

ご注意ください

ジーさん……それは無茶だ(汗)

side 龍士

「やれやれ、まだいがみ合っているのか？君たちは……」

まったく……二年も経てば少しは仲良くなると思ったが……悪化して
いないか？

しょうがないから覇気を当てたが……やはり二人も腕が上がって
いるな……

ナツとグレイは少し動ける程度だがティアラ、エルザ、ラクサスは
微動だにせず……か

「随分腕が上がったようだな？……ラクサス」

「当然だ……もうテメエに負けねエよ……」

俺はFT最強だからな……！」

それに一回も師匠たちに勝てなかったし

「あら？あなたに師匠なんていたの？」

ミラが驚いた顔で尋ねてくる

…む？話したことはなかったか？

見れば周りもポカンとしている

……なんだ？俺に師匠がいることがそんなに可笑しいか？

「…ああ、二人な

一人にこの魔法ともう一人に剣を教えて貰った

この魔法は異質中の異質だからな

……二人の戦いは余り似た物ではなかったが二人からはそれなりに
継いでるつもりだよ」

少し懐かしいな……二人は元気かな

皆は静かに……いや違うな……少し笑っていて俺を見ていた

「……何かね？皆して笑っていて」

我慢できずに聞いてみたらエルザが代表して言ってきた

如何やらラクサスは何処かに行ったみたいだな

「いや……お前が余りにも嬉しそうに話すからな

……嬉しそうに笑っている龍士はあまり見ないからな」

「……嬉しそう？俺が？」

その問いにエルザが笑って頷く

「……そうか……俺は今嬉しいのか……」

確かに短かったがあんなに暖かかったのは前世でも数える程度だな

……

……桜は今どうしてるだろうか？

彼女はしっかりしているようでその実とても心が弱いからな

……どのみち早く見つけなければなるまい

俺は改めて決意を固め、手を強く握った

s i d e o u t

暗く生き物が住んでいるのか疑問が残る場所にエリゴールはいた

ナツ達に負けた後、鉄の森は潰れたが彼だけは逃亡し、今もこうして逃亡中だった

「待っている……FT

次に会った時にこの恨みを……」

「……鉄の森のエリゴールね」

「……!」

エリゴールは突如聞こえてきた声に驚き、その場を離れて身構えた

その声の主はエリゴールの前に姿を現す

声と口調からして女ではあったが、

普段あまり見ることのない黒髪をストレートに伸ばし、少し薄い赤色の十二単衣に袴という格好だった

顔は少し目つきが悪いが充分整っている二十代初めぐらいの女だった

「…お前は…何モンだ？何処のギルドだ？」

自分を追ってきた以上、どこかのギルドだというのは分かっていたがまさか女だとは思わなかったエリ

ゴールは気が抜けたが女の纏うその圧倒的な雰囲気気を引き締めた

「何者とは可笑しなことを言うのね？」

私はあなたを殺すために、そしてあなたは生きるために向かい合っている

それだけのことなのに態々名乗る必要がある？」

女の物言いに少しカチンときたエリゴールだが

「まあ冥途の土産に教えてあげるわ

……グリモアハート悪魔の心臓所属 霞城桜」

「っ！！!?」

エリゴールはそのギルドを聞いた瞬間、自分でも驚くほど速い動きで魔法を行使していた

自分のギルドが傘下になっていた『バラム同盟』の一角から来たのだ
疑惑より生存本能が動いたのだろう

しかし

「この程度？」

先程の声が何処かから聞こえてきた

「なっ！！!?」

エリゴールは驚嘆する

不意打ちで放った一撃が躲されたのだから並の人間なら驚くだろう

「あなた相手に使わなくてもいいけど………」

早めに終わらせたいから使わせてもらおう

『舞刀曲 一の型』

最後の一言が後ろから聞こえてきた時、

エリゴールは既にこと切れていた

「……まったく」

女は溜息を吐くと持っていた刀を仕舞い、空に浮かぶ月を見上げる
とても先程人を殺した人間の態度と顔じゃない

「そろそろ来てくれないと……何もかも壊しちゃっわよ？ 龍士………」

とある酒場

「……ええと、確か此処だったか？」

龍士はとある人からの便りでこの酒場に来ていた

「よっ…こんな辺鄙な所に来るひとが来ると思ったらいつかの……」

「覚えてたのか!？」

そこはクエストの帰りに寄ったあの酒場だった

今日の約束をここで会うという約束だった

「そりゃ覚えてるさ…あんなに愚痴ってた客は後にも先にも君だけだからね

今日はどんな用で？」

「今日は約束があつてな、待ち合わせ場所をここにしたんだ

…先日のクエストで世話になった人でね」

「そうかい…じゃあ酒の一本や二本、用意しないとね」

「感謝する」

マスターは笑って首を振ると奥へ消えて数分、その人は来た

あの時会った時と変わらない珍しい黒髪に緑の着流しで背中に大刀一本と小刀二本

「ジーさん、この場合はご無沙汰と言つべきか？」

「そうだろうね」

待ち合わせ相手…ジーさんはにっこり笑って俺の隣に腰かけた

何時の間にか戻ってきたマスターはそんな二人にそつと酒を置く

「さて、早速で悪いが事情を聞かせて貰おうか？」

龍土の言葉にジーさんは頷き、言葉を紡ぐ

「まず、事の始まりは知り合いのとある貴族が趣味で少し他と違う人たちを館に集めたことから始まるんだけど…」

ある日、その内の一人が殺されていたんだ

その日を境に死亡者が出てきて館は大騒ぎさ」

「……死亡者の殺され方は？」

龍土はここで閉じていた口を割った

「皆首を斬られてたらしいよ

犯人は鎌か魔法を使ったと「いや、それは無いな」？…何故だい？」

「どれ程かは分からんが異端者は基本的に周囲に対する警戒は常人より強い
なんせ異端だからと周りから弾かれたりするのだからな……」

その異端者が気づかない内に殺すならば……隠密性の優れた糸か銃を使うだろう」

龍士の言葉にジーさんは納得する

確かに人間は自分と違う者を嫌うそんな人間が周りにいると自然と警戒心も強くなるだろう

「?……糸?

銃なら分かるけど……」

「糸は思ったよりバカにできない

何重に縛って拘束したりその細さを利用して敵が気づかぬ内に首を切り落とすこともできる

……俺は暗殺に最も優れているのは糸だと思っている」

証拠隠滅も簡単だからな、と付け足し、溜息を吐く龍士

「……今回は厄介だぞ……」

まあジーさんの頼みだから

受けない訳にはいかないが…誰か他にいるのか？」

「いや、こつちがは君だけだけどあつちは何だかひとり頼むみたい
だけど遅れるらしくてね

だから君にも頼みたいんだ」

side 龍士

「…ジーさん、それは無茶だ………（汗）」

この事件を一人で解決できるほど頭良くないぞ俺は……

しかし、何だろう………そのあちらが依頼した一人というのが引っ
掛かる

「………ジーさん、その人は信用できるのか？」

貴族が雇ったという人のことを聞いてみる

「うん

その人と知り合いみたいだし…有名みたいだし…

仕事は毎回絶対成功するみたいだからね

今回の仕事も請け負ったみたいだよ？その人」

「……………請け負った？」

オイオイまさか……………

「うん

その人は請負人…つまり何でも屋みたいな職業してるらしいよ」

……………ジーさん、はっきり言おう

その人がいれば俺はいらない

それが誰だかわかった俺は憂鬱に溜息を吐き、酒を煽った

ジーさん…それは無茶だ(汗)(後書き)

オリキャラというかクロスっぽいですね(汗)

誰だかは殆どの方が分かると思います

あの人こそ真のチートだと思う(笑作者でした)

…何故来たんだ俺は… orz (前書き)

ただいま確認しましたところ

PV341876アクセス、ユニーク32176人突破しました

~~~~~!!!!!!

もう感謝でいっぱいです!!!!!!

夏休みの終わりに書き始めたのもう一年近く書いてる気がします

……

これからも頑張りますので暖かい目で見てくれると嬉しいです!!

!!!!!!!!!!

…何故来たんだ俺は……orz

side 龍士

ジーさんが言った場所からするとどうやら島みたいだな……

………ちょっと待て

これはどう考えてもクビキ○サイクルのそれではないか……！！！！！！

(違います。ちゃんとしたオリ展開もありますby作者)

…ん？なんか電波が………まあ、分からないということはどうでもい  
いということだな………

ジーさんは既に向かっているらしい

俺のことで貴族に話を通していているそうだ

まあ長い船旅の後ようやく着いたら敵扱い………ってのは嫌だからな

ありがたいと言えばありがたいが

そうして島に行く為の舟を見つけたが……

ボートだ

もっとう見てもボートとしか言えない形状をしていた

「……やはり受けなければよかったか？」

今回は少し真面目に考えていた

……いやだってあの人来るんだつたら俺の必要はないんじゃないか？

どうせ来たその日にはい解決なんてのも……有り得なくはないな

「如何したにーちゃん、乗ってかないのかい？」

「あ、ああ……乗らせてもらおう」

そう言って慌てて飛び乗ったが少し軋んだ音がした

……大丈夫か？

side out

舟に乗って数十分経つが……可笑しいと龍士は感じていた

「君、何時になつたら着くのだ？」

ジーンの話だともう着いてるはずなんだか」

「……くっくくくッくッく」

「やはり罨か……」

まったくどうせなら準備などせずジーンに同行すればよかった」

そう呟いて龍士は干将・莫耶を投影する

「……邪魔ヲするナふあイナルフェありー」

男は若干外れた感じの声で一方的に言った後、龍士に襲い掛かってきた

だが踏込も浅く、重心が安定していなくてさらに体重も乗りきれない

という何とも半端な拳の一撃を放ってきた

初心者だろうか？おまけに少し遅い

それを龍士は難なく躲し、男を切りつけた

しかし男は斬られた瞬間、靄がかかって消えてしまった

「……………幻覚」

龍士はそれを確認すると投影を破棄し、目を閉じる

そして

「……………はっ！……………」

パキン！！

そんな音が聞こえた途端、周りは少し曇りが勝った空をしていた

「……………む？……………あれは……………」

視力を強化する必要もない距離に島はあった崖の方に船があるのであれで間違いはないだろう

「……上陸するか」

そう独り言を溢し、龍士はボートを漕いで進める

「……今回の件……どうやら早急に片づける必要があるな」

上陸すると海では見えなかったが森と森の間に大きな屋敷が建っていた

「……あれか」

そう呟くと龍士はまっすぐ歩いて行った

side 龍士

「…此処か……」

やれやれ、かなりの距離を歩いたぞ……

目の前には大きな門（鉄製）があり、上に見張り用だろうか？窓があった

「すまない！！！！FTの者だ！！」

此処に先日来た者の紹介で来たのだが！！！！！！」

「…FT？」

叫ぶと上の窓から誰かが顔を出してきた

「ジーさんの紹介か？」

「…ああ、そうだ」

あの人此処でもジーさんって名乗ってるのか…（呆

「一応マークを見せて貰っていいか？」

見張りがそう聞いてきたので俺は右手の肘と手首の関節の間の真ん中にあるマークを見せた

「…よし！！では入ってくれ！！！！」

その言葉と共に門が開いたので俺はそのまま入っていった

…何故来たんだ俺は… orz (後書き)

今更本編の補足ですが龍士はライトノベルを含む小説やゲームはやりませんが

漫画は殆ど読まないという特殊な傾向があります

今回ほとんど進みませんでしたね(汗

あまり長引かせたくないなので急ピッチで仕上げようと思います

この二日間は文化祭の代休なので(笑

…気に食わん

side 龍士

「やつ、よく来たね」

入ってすぐの大きな玄関にジーさんと初老の男性、その男性の傍にメイドが一人付いていた

「…はあ、よくもそんな平然と……」

せめて迎えが欲しかったよ………」

「ん？じゃあどうやって来たんだい？」

ジーさんが首を傾げて聞いてくる

「途中会った犯人と思われる者に

まあ襲ってきたから撃退したがね……」

「……ふん、この程度で疲れるとはあの名高きFTも大したことは無いな」

隣の初老の男性がつまらなそうに声を放つ

…はあ

「すまないな

何分傷が完治してまだ数日といった所なんだ」

「……………まあよい」

ジロリとこちらを一瞥すると興味なさげに眼をジーさんに向ける

「こんな奴がお前が推薦するものか？

随分とひ弱な奴を連れて来たのう……………」

まあよい、と男性は呟くとこちらに名前を聞いてきた

「お前、名はなんと言つ？」

「人に名前を聞くときはまず自分から…とは聞かされてないのか？」

鼻で笑って言い返すと怒りで目が苛烈になり、歪んできた

見ると隣のメイドも構えている

…ふむ、中々の手練れだな

「まあまあ…お互い矛を収めて……………」

それより君の所の請負人とやらは来ないのかい？」

その話を変える為の問いに男性はああ、と返す

「まあ呼んですぐ来るとは思っていないしのお……………」

気に食わんが自己紹介じゃ

儂の名前はゲリハルトという

「龍士・E・ペンドラゴンだ

よろしく頼む」

握手は交わさない

互いが互いを嫌っているからな…やめておいた方がいいだろう

そうして漸く大広間に案内された

……ずっとメイドに睨まれていたが……

大広間には複数人人がいた

これが皆異端者というのだから驚きだ

「こちらにいるのは魔力が強大な者や未来を見ることが可能な者、さらに色白すぎることによって

魔力魔法共に異端になるような方ばかりです」

「……成程な………すまないが殺人現場に連れて行ってくれないか？

544

来たばかりで地理が掴めん」

「……かしこまりました」

そう言ってメイドは奥の方へ歩いて行ったので着いて行った

「こちらになります」

メイドはそう言ってドアを開けた

そこには人…と呼べるのだろうか？

腹ばいに倒れた首から上が無い死体とその傍に首が胴体と離れて転がっていた

部屋は普段事務的なのだろうか？

余計なものが無く、作業をする為の机と腰かける為の多少豪華な机、それと大きな本棚があった

広さは二畳ほどだろうか？

「中の者は余り弄らないで下さい

出ないと………」

「ああ、分かってる

君は俺をどんな目で見ているか知らないがそこまで馬鹿な真似はし

ないさ」

「そうですねか……」

失礼します

と言ってメイドは退出していく

……あつ……名前聞くの忘れた

まず顔の方の首を見ると切り口がきれいに切れていた

「やはり糸だろうか……」

そう呟きながら今度は胴体を見ると異変に気付く

「切り口の形が違う?」

そう、首の切り口が片方ずつ違った

胴体の切り口は目に見えずらい程の小さなギザギザになっていた

「魔法か？……いやそれなら魔力が多少なりとも死体に残留するものか……」

と、此処で溜息を1つ吐き、自分の責任の重さを実感する

「……今回は大変な依頼になりそうだ」

sideout

「あ奴は何じゃ？」

龍士が去ってゲリハルトが開口一番に言った言葉がそれだった

「何……って僕が選んだ魔導師だけど？」

「…ふん、あんな若造に事件の真相が分かるモノか」

そう吐き捨てる目の中が入ったワイングラスに目線を戻す

厳しいなあとジーさんは笑い

ゲリハルトは笑わなかった

「……………娘さんはまだ？」

唐突に聞かれたので一瞬止まったが、ゲリハルトはしっかり答えた

「ああ、まだ部屋に引きこもっておるよ…」

まあ仕方ないんじゃないかのう……………こんな状況で不安になるのも無理はない」

ゲリハルトは天井を見つめ、消え入るような声でつぶやいた

「こんな所か……」

龍士は現場から得られる情報を粗方調べ終え、戻ろうとした時

「!!!!!!…誰だ!!!?」

背後の窓際から感じる気配に振り向くと、空いた窓から誰かが走り去っていくのが見えた

「くっ、待て!!!」

龍士は窓枠に手をかけて跨ること外に出て、敵を追っていった

何者だ？

「何処だ？……」

龍士は現場検証を終え、部屋を出ようとした時に感じた気配をたどっていた

現在は見聞色の覇気を島全体にまで広げている為、見つかるのも時間の問題だろう

「……いた……」

龍士は呟くと同時に『声』がした方へ駆けて行った

数分前

蹠を隠す程度の長さの草むらがある少女は走って行った

170cmで年は十代程といった所だろうか？  
肩甲骨辺りまでの白い髪に赤い目、俗にいうアルビノである

女はこの島に来た赤い服の男を見る為に気配を殺して窓の外から見  
ていたが

「（何者なの？）」

音を発していた訳でもないのに彼はすぐに気付いた

現在、その彼から逃げている状態にある

「（兎に角早く撒いて屋敷に戻らないと

……………っ！！！？？）」

突然、右斜め前方からナイフが飛んできた

少女はそれを弾くことが出来ないと判断し、咄嗟に後ろに飛ぶ

「躲されたか……………」

突如後ろから聞こえてきた声にバツと振り向くと

黒いまったく装飾もされていない上下の服に鼻から上を隠す白い仮面の人

声からして男だろう

身長は180程で年は見るからに30を超したばかりだろう

男はさほど残念とは思っておらず、新たにナイフを構えて少女を見据える

かなり濃い殺気も放っていた

「あなたは何者？」

前方からナイフが飛んできたのになぜ後方にいるのかと多少疑問が残る

が、少女は殺気に怯むことなく質問する

「貴様と貴様の家族に復讐をといる者の為」

男はあくまで事務的に答える

その様子はまるで人形のようなだった

少女はその言葉に顔を曇らせた

先程のやり取りで実力の差は分かっていた

このまま殺り合えば殺されることは確定だろう

少女はどう逃げようか画策している

「トレース 投影、オン 開始」

そんな言葉が聞こえたと思ったら十を超えた程度の剣がその場に降り注いだ

side 龍士

『声』を辿り、草原に出ると二人の男女が対峙していた

一目見ただけでは何とも言えないが男と少女の実力は圧倒的な差が

あるだろう

このままだと少女が殺される

「トレース投影、オン開始」

俺はその場で剣を十数本投影し、二人の距離が開くように飛ばす

土煙が上がり、互いが互いを見失った所で少女の傍まで走り寄った

「何者かは知らんが……女性に詰め寄るのは些か不作法ではないかね？」

そう言いながらチラリと後ろを見ると少女は少しポカンとした顔をしている

「……君が誰だかは知らんが早く行け

此処は俺が引き受けよう」

視線を外し、少女にだけ聞こえる様に言つと驚愕したのが分かった

「……どつどつして？」

少女は其処で初めて口をきいた

声からしてまだ十代といった所だろう

その疑問ももつともである

得体のしれない、ましてや自分のことを探ってた相手を助けるなど  
普通はしないだろう

「何、ただの気紛れだ

君が誰かなど聞きたいことはあるが

目の前で死なれては後味が悪い

死にたく無ければ早く行くがいい」

「ッ！……！……ありがとう」

少女はそう言って走り去っていった

男はそれを追おうとせず、静かにこちらを見据えている

「…別に男に見詰められる趣味は無いのだがね……」

君のこの島の事件への関連性と君の目的も知りたいところだ

悪いが仲裁に入らせてもらったよ」

「ファイナルフェアリー  
………最終妖精」

男は俺が誰かを認識するとナイフをおろし、殺気を収めることで戦意喪失の意を表した

「…む？……それは大人しく拘束されるということかね？」

俺としては話が早くて助かるが……」

「馬鹿なことを……」

男はそこで初めて笑った

しかしその笑みは何処までも深く、得体がしれなかった

「貴様と争ってもメリットが無いし何よりこちらの敗北は確定している」

今は事を荒立てるつもりもないし行動を起こすこともない」

「…一つ聞きたい」

そう断言した男に向かって質問を投げかける

沈黙したことが肯定の意と捉え、続きを話す

「君は複数の集団かね？それとも今回の一件は君個人によるものか？

…いや、誰か依頼人がいるのだろうか………

俺の乗った船に掛けられた幻術は君の仕業のようだが」

「……さあな………」

俺の質問に顔色一つ変えずに曖昧な返事をする

……むう…鎌をかけたが失敗だったか

コイツは厄介だ

少し悩んでいると男は何も言わずに立ち去って行った

追うこともできるが今追った所で事態は進展しない

そう言うことで俺は屋敷に戻っていった

屋敷に戻った龍士は大広間にいたジーさんとゲリハルトに色々言われたが今までのことを軽く話したら納得した

……ゲリハルトは「何故捕まえなかった」と悪態を吐いたが

「ゲリハルト様っ！！！！」

と、そこに突然メイドの一人が大広間にある階段から降りて来た

かなりの慌て様である

突然入ってきたことにゲリハルトは眉を顰めるがメイドの様子がおかしいのでとりあえずそつちを先に聞くことにした

「どうした？」

「それが……………」

カツンッ

メイドが言いかけた所で階段の方から足跡が聞こえてきた

三人は一斉にそちらを向く

「……………なっ！！？」

龍士はその少女を見て驚愕する

白い髪に赤い目

先程龍士が逃がした少女がこちらを見下ろしていた

了解した 精々期待に応えとしよう(前書き)

ごめんなさい

忙しくて一日空いてしまいました

了解した 精々期待に応えるとしてよう

「おおアリア

ようやく出てきおったか」

ゲリハルトは安心半分、呆れ半分でアリアと呼ばれた少女に話しかけた

それにアリアは貴族らしい静かな態度で応じた

「はい…」心配お掛けしました」

「よいよい

」こうして出てきてくれたことの方が僕は嬉しい」

アリアの言葉にゲリハルトは龍士と話す時とは段違いに優しい好々爺の様な態度で応じていた

先程まで固まっていた龍士は心の中で苦笑していた

それで、とアリアは突然話を変える

何か頼みごとをするようだ

「そちらの方と少々お話したいのですが…宜しいでしょうか？」

「「「っ！！！？」」「」

これにはゲリハルトは勿論龍士とジーさんも驚いた

「い、いやあ…それは……………」

「御心配には及びません

お時間もあまり取りませんので……………」

結局ゲリハルトはアリアに言い包められ、面会は許可された

龍士は内心「この親馬鹿め……………」と毒づいていた

「さて」

アリアは龍士を自室に入れ、開いていたドアを閉じてそう口火を切った

龍士は先程アリアに促され、ソファに座っていた

「……まさか昨日助けた君が此処のご令嬢だったとはな……」

事件が起きてからはずっとこの部屋に引きこもっていたのだろうか？

何故「いいえ」は？」

「事件が起きてこの部屋に閉じこもった後、すぐに現場検証をして周囲の調査を夜から早朝にかけて

行っていました

自分の家で起きたことですからこれぐらいはしませんと……」

「……………」

静かなご令嬢が蓋を開けたらビックリ、ティアラより行動的な少女だった

「…まあその所為であちらにはばれてしまいましたか……」

「当たり前だ

君の気配遮断は悪いが一流はおるか二流にもいっていない素人の者だった

行動的なのは認めるが少し自分の身と周囲の心配を………」

其処まで言っつて龍士はアリアが泣いていることに気づいた

「……お父様は…彼らに最初に殺されました」

「……成程、やはりゲリハルトとは親子ではなかったか」

「?…分かるのですか?」

アリアの声にああ、と返事を返す龍士

「まず年齢だな

君とあの男は年齢が離れすぎていると思った

それに君たちは似ている所が全くない」

まあそれだけではないがね、と付けたし、龍士はソファに体重を掛け、体を預ける

「…成程、理解した」

やはり今回の一件、一筋縄ではいかないな……………」

龍士の言葉にアリアは小さく、俯きながら頷く

「…………さて、ならば指示を仰ごうか」

龍士は一段落ついたと言わんばかりに溜息を1つ吐いた後、ソファから立ち上がる

アリアはそんな龍士に呆気にとられていた

「…あの、指示を仰ぐとは一体？」

我に返ったアリアは龍士の言葉に疑問符を浮かべる

「言葉通りの意味だが？」

君が雇い主である以上、君の言うことを聞くのは当然ではないかね？」

「わ、私別に雇い主という訳じゃ……………」

「ああ、これは俺が勝手にそう決めただけだ

…俺は今回の一件にFTの魔導師として介入することを決めた

……君を雇主としてな」

それにあの男が雇い主では些か不本意なのでな

と付け足した後、龍士はアリアを静かに見据える

「…後は君次第だ

君はこれからどうしたい？」

「……私は」

アリアはキツと顔を上げ、決意をした顔で龍士を見る

「私は仕返したい!!」

お父様を殺した奴らをとっちめてやりたい!!!!!!」

龍士はこの言葉に関心した

復讐では無く仕返し、と来たことに

龍士はその言葉に満足し、手をアリアに向ける

アリアはそれに笑みを浮かべ、その手を握った

s i d e 龍士

「さて、早速で悪いのだが敵の人数、及びその規模は？」

アリアの依頼を受けた俺は敵の戦力を聞く

アリアは少なからず情報を持っているらしいからな

少しでも相手の戦力は把握しておきたい

「おそらく4、5人のグループだと思います

その内の一人が昨日の男です

「……ですが………」

「ああ分かっている

殺したのは奴ではないと言いたいのだな？」

俺の言葉にアリアはコクンと頷く

……4、5人が

「これはそちらの請負人を待ってる品はなさそうだな」

「はい……そうですね

……あの、龍土さん

「む？……」

アリアは不安そうにこちらを向き、

「……今回の事件、よろしくお願いします」

そう言いながら頭を下げて来た

……俺はその頭に優しく手を置く

少し震えていた

「?…龍土さん」

「…くっ…ああ了解した

必ず期待に応えて見せよう」

そう言っただけで見たらアリアはホッとしたような顔になり、ソファに腰を掛けた

それなりに疲れたのだろう。なんせまだ女の子なのだからな

「さて…この場にその請負人がいないのが残念だが…致仕方ない

俺達だけで話を「その必要はないぜ」…!!?」

突然扉の方から聞こえてきた声に驚き、そちらに向くと

「ふうーん…なかなか面白いことになってきてんじゃねえか」

声の主はワインレッドのスーツに胸の大きく開いたシャツ、短いスカートと随分赤が多い恰好

をしていた

肩まで届く髪も赤い色をしている

しかし、その人はその服をまるでその人のためにあるかのように着こなしていた

当の本人から出る威圧感も半端ではない

「気に入ったぜ!!」

この仕事、あたしも請け負った!!!!」

その女性はシニカルな笑みを浮かべ、そう言い切った

## 最強の赤色（前書き）

遅れてしまって申し訳ありません…

三連休にインターネットのトラブルにあったかと思うとその後事故に遭ってしまいました…

少しいつもと違うと思いますですがご容赦ください

それではどうぞ

## 最強の赤色

side 龍士

「とうとう訳で

この島にいた異常者たち全員解散命令だしてきたから」

……………は？

あれから軽い自己紹介をして、こちらの情報を提供をした俺たちにこの赤色、「ロット・デイ・スターク」は突然そんなこと言ってきた

……………いやいや突然すぎるだろう！！！！？？

見たまえ

アリアが呆然としすぎて顔が固まっているぞ！？

「まあ落ち着けよ」

あたしだって何も考えずにこんなことをしねえ」

「……どういう事かね？」

「だってよお」

お前ら手詰まりだったんだろ？

だったら一回デケエことして『モーデット』の奴等を一泡吹かせな  
きゃ何ねエ

それに異常者を遠ざけることでアリアの安全を確保しつつ中から出  
て来た奴等の一味

を追跡すりゃあいい」

気だるげに煙草を吸いながら目的を話すロット

「…成程、一理ある……」

確かにそれならば犯人の特定ができ……？……『モーデット』？」

聞いたことないな……

「ああ、暗殺に長けている奴等が一人の男をリーダーに立てて行動している集団」

暗殺専門だからギルドには出来ないし依頼も何もなくてただ『己の殺人衝動』を満たすためだけに行動するだから尚更質が悪い」

「……貴方は既に犯人の特定をしていたのか？」

啞然としながら疑問をぶつけると彼女は「ああ」と軽く頭を縦に振ることで肯定した

……やはり俺がいる必要は

「……チツ……参ったな……奴等が相手じゃ流石にあたし一人じゃ手に負えねーぞ」

「……………」

……無い訳では無いみたいだ

頭をガリガリと掻く彼女に思わずニヤリと皮肉気に笑う

「そうか……この身はあくまで貴方が来るまでの引き立て役に過ぎないと思ったが……」

存外、まだやることもあるらしい」

俺の言葉に反応したこの赤色はシニカルな笑みを浮かべる

…ふむ、今はこんな状況だが何時かは対峙する時が来るだろうな……

彼女が本気で俺と相対すれば此方の敗北は揺るがないだろう

これは一種の賭けか……

「…ああ、テメエには手伝ってもらっぜ

そんな安い挑発が無くてな」

……やはりこの世界でも彼女は傲慢だ

「それに今回、あたしは殆ど仕事を取られちゃった様なもんだからな」

「？」

訳が分からず首を傾げる

赤色は俺の疑問を知ってか知らずかすぐに答える

「お前がほとんど調べちゃったしな

それにボスと会ったんだろ？」

なら終わりは見えてるようなモンだ」

「ボス？」

ならばあの男がボスという訳か

確かにあの男はかなり……いや、とんでもなく強いだろう

しかし一つ腑に落ちないところがある

「奴は一切魔法を使っていなかった」

「ああ、奴等は魔法は使わねえ」

魔力を自在にコントロールして戦う

武器に纏わせたりな

……だがテメエも負けるつもりは無えだろう？」

「……無論だ。生憎この身はただ一度の敗走も無いのでな

負けるつもりなど毛頭無い

唯一ついいか？」

「あん？何だ？」

赤色は気だるげな眼に戻り、煙草を踏み潰していた

……此処は屋内なんだが？

「ボスの戦い方を教えてほしい

相対はしたが一戦は交えていないのでね」

懸念すべきことがあるとすればここだ

「そうだな…主にナイフを使ってる

だけどそのナイフには一つ問題がある」

「問題？」

「ああ……奴のナイフは『どんなモノでも殺す』

物も者も全部だ」

…何だと？

『どんなモノでも殺す』

これは『直死の魔眼』以外無いだろう

殺すことに置いてアレの右に出る者は無いからな

だが『直死の魔眼』という概念はこの世界には無い

持つ者がいるという事は

「……………転生者か？」

これは確かめる必要があるみたいだ

「……………と、どうやら御出ましのようにだぞ……………」

へっ、向こうから来るなんて……………手間が省けて助かるぜ」

そう言って彼女がニヤリと笑った瞬間、傍にあった窓ガラスが砕け散った

## 最強の赤色（後書き）

ロットはドイツ語で「赤」

デイ・スタークもドイツ語で「最強」という意味の字を多少もじって使いました

モーデットはデンマーク語で「暗殺」とそのままです

今回突っ込みどころ沢山ありますね…

解ったあなたは凄いと思います（おい

## 開戦

窓が割れたことで二人が身構えるが出て来た者は人では無く銃弾だった

いや、本来なら確認などできるはずがないのだがそれができる二人はやはり次元が違うのだろう

「コッ！！！！！！！！」

それでもやはり人の気配を感じ取っていた二人は驚きつつアリアに向かっていく銃弾の対処をする

ロットは銃弾を素手で弾き、アリアの前へ

龍士は割れた窓の前に立ち、第二射の警戒をする

しかし、一向に第二射が来ないため、龍士は千里眼にさらに魔力を込めて強化を施す

「……………いた…」

此処からは約4キロ

龍士が見れるギリギリの距離だ

龍士の視界には1メートルはあるであろう銃を両手で構え、取り付けられたスコープに目を通してしている隻眼の男と

「…奴だ」

「御出ましか？」

「ああ…俺が対峙した貴方が言うリーダーだよ」

先日アリアを襲った男だった

あの時と変わった様子は無いが今回は目が蒼くなっている

「（やはり『直死の魔眼』……）」

その蒼い眼を見たことで龍士は確信する

### 直死の魔眼

モノの寿命を視覚情報として線と点で捉えることのでき、「線」はモノの死に易いラインを表し、

線をなぞり断てば本体が生きていようとその部分は「死亡」し、

結果として対象はどんなに強靱であろうと切断される。「死の点」は死の線の源でもあり、寿命そのもの

の。死の点を見つけばそのモノの意味が死に至る。

「……やれやれ、また随分厄介な相手が来たものだ」

溜息を吐きつつ龍士は弓と剣（や）を投影する

「……………赤原を往け……」

番えてからおおよそ30秒

その間彼の魔力に気づいたのか隻眼の男は次の弾の装填に少し焦り出す

その隣ではただ腕を組んでまっすぐにこちらを見る蒼眼の男がいた

「フルンディング  
緋の獵犬!!!」

龍士の放った剣は紅い流星となって標的に向かう

その「一度放たれた矢の標的は変えられない」という絶対の原則を覆すという一撃は

真っ直ぐに彼らに向かって往くが当たる直前で剣が消えた

「……いや、あれは……………（殺されたか……………）」

だが突然剣が消えたことに龍士は勿論ロツトも気にはせずじっと彼らの方を見ていた

剣<sup>や</sup>をナイフで殺し、そのまま戦闘態勢に入る暗殺集団『モーデットの  
の実質的リーダー』

「カオス・デーレブレ」に隻眼の男、「ピストーラ・デイ・ワッフ」  
は声を掛ける

如何やら結構怒っているようだ

「如何いうことだ頭？…アンタの見立てではここまで距離が延びる  
ことは無いんじゃないか…？」

「ああ…如何やら過小評価をしていたみたいだ…」（これは面白くな  
りそうだ…！！）

おい！！ボルソンとジンジャーはいるか…！！…！！

「はっ！！」

「此処に……」

呼びかけて現れたのは全身鎧で顔も円柱型の兜をつけ、背中に斧のような形状をしたハンマーを背負った巨漢の男：ボルソンと

腰にククリ刀を4本差し、にも拘らず背中には自分の身長より高い杖を背負った半袖に短パンと軽装の女：ジンジャーが現れた

「あいつらを殺して来い

出来なくても多少の足止めならできるだろ？」

「了解致しました！！」

「承った……」

そう言つて二人は予備動作なしでその場から消えた

それを確認したカオスはこの場にいる全員に指示を出す

「すぐにメンバー全員に招集命令を出せ！！！！」

「奴らがここに来る前にな！！！！！！！！！！」

あの二人が奴らに適う訳がない

元から理解しているカオスはわざと二人を送り出し、足止めに使ったのだ

「さて…オレを楽しませてくれよ？」

龍士・E・ペンドラゴン……………」

カオスは今いる崖からこちらに向かってくる龍士に視線を送る

アリアをゲリハルトに預け、弾が放たれた場所を目指して龍土と口ツトは森の中を疾走していた

その二人の速さに風が追い付かず、残像を残すほどだ

「ひゅー、中々速えじゃねえか

着いてくのがやっただぜ」

「……そんな余裕の顔をしていて着いて来るのがやっとなのかね？」

龍土も全開ではないが多少スピードは出している

龍土のスキル「音速突破」は文字通り音速を突破するなので本気ならば大体秒速340メートルを超える程ではあるが現在は8割ほどしか出してない

それでも全体の8割なのでとても速いのだ

それに着いてこれるのは流石というところだろう

「……………む？」

此处で龍士は飛んできたものを避ける為に大きく後退する

あれほどのスピードを出していたのだ  
投擲した者は相当の実力者だろう

その龍士達の目の前に巨漢の男と軽装の女が現れる

男はハンマーを両手で構え、女はククリ刀を構えているが周囲で杖が動いている

「……………『モードット』か……………」

龍士の呟きに二人は答えず、その場で踏み込んで龍士に肉薄する

龍士は投影しようとして構えるが

「まあ待て…こんな雑魚に態々構う必要はねーよ」

そう聞こえたと思ったなら横から赤い何かを通り過ぎたかと思うと

ロツトはボルソンの腹を鎧ごと殴り、横を走り抜きざまに背中を肘で打ち崩す

ジンジャーがそれに気づいたころには既にジンジャーの顔のド真ん中に回し蹴りが決まっていた

もつすがすがしいほどに瞬殺だった

余りの瞬殺ぶりに少しヒいている龍士を気にせずロットは先程付いたであろう血を舐めつつ  
先程の崖を見据える

「さあ……祭りの始まりだ……」



## 囷と足止め

「ヤベ、 囲まれた」

森の中を疾走していた龍士とロツトの二人の足止めに来た『モーデ  
ツト』の二人を瞬殺したロツトは突然そんなことを呟く

その言葉は小さいながらもちゃんと龍士の耳に届いていた

慌てた様子が無い辺り、龍士も気づいていたようだ

「ああ分かっている……やれやれ、 此処で足止めすることに一体何  
の「別に深い意味は無い……」……」

「まあ強いて言うなら……」

そこに『モーデット』：殺人鬼の大軍を率いて出て来たのはあの時と同じ服装に蒼い眼をした男だった

「貴様は……………!!」

「やあ、一日ぶりかな？ 龍士・E・ペンドラゴン」

そつ男：カオスは刃渡り二十センチ程のナイフを龍士に向けて呑気に挨拶をする

「我が名はカオス・デーレブレ」

そしてカオスはその体勢のまま消えたかと思ったら龍士の目の前に移動していた

「貴様と同じ転生者だよ」

ヒュッ

「くっ!!!?」



悪いが貴様の相手をするつもりはない!!」

そう叫んでカオスは龍土の上を飛び越え、先程の殺人鬼たちに続いた

「くっ!!…させるか!!!!」

龍土は手に持つ短剣をカオスに投擲するがその短剣は突然飛んできた弾丸に弾かれた

その直後、龍土にも同じと思われる弾丸が放たれた

「……くっ!!?」

突然の奇襲に軽く動揺するが一步下がることで避けることに成功した

追撃は来ず、その代わりに森に声が響いてきた

「貴様の相手はこの俺だ……ファイナルフェアリー最終妖精」

「……?」『声』が聞き取りづらい……」

何時もの冷静さを取り戻した龍士は辺りを見渡して静かに現状を理解する

龍士は『覇気』によって相手の気配を『声』として感じ取れる

この気配を探ることと相手の動きを先取ることには長けた『覇気』、  
『見聞色の覇気』

を龍士は城を出てから常時展開し、相手の動きを探っていたが

「（先程は聞こえなかった『声』……その小さすぎて居場所の特定ができない……か）」

「俺の気配を探ろうとしても無駄だぞ

俺は『モードット』で一番隠密に長けているからな」

「成程、しかし彼女の足止めには失敗したようだな」

「何？……っ！……しまった！……！」

「俺にばかり気が行っていて気付かなかったようだな」

森を進み、城まであと一キロを切った所で

「…何？」

そこにいたのはまるで全ての上に君臨する王者

赤いスーツにスカート

「……………はあ…参ったな」

しかし先程とは違い、真紅のロングコートに真紅の髪が腰のあたりにまで伸びていた

「本当はここまでするつもりはなかったんだが……」

まあアイツを気に入っちゃったあたしが悪い……か……」

彼女はこの大群の前に余裕を保っていた

「貴様……何故……」

カオスも前世で彼女と同じ存在を知っている為、動揺を隠しきれない

そもそもこの世界でも彼女は有名なのだ

目の前の女性は恐らく平衡世界の彼女なのだろう

「じゃあない……今回は裏方に回ってやるよ

いつも主演は疲れるしつまんねーからな

……ほら、どうしたよそんなとこに突っ立って？

早くしねーと怒わっちはっげっげ

そつ君臨する王者、ロット・デイ・スタークは不敵な笑みを浮かべ  
て彼らに囁いた

## 困と足止め（後書き）

結局ロツトは平衡世界の潤さんという設定にしました

…えっ？何で名前で呼ぶかって？

名字で呼んだら殺されるに決まってるからじゃないですか！！  
（  
知るか

## 王の蹂躪（前書き）

遅れてしまい申し訳ございません…>（――）<

風邪を引いてしまいまして帰ってきては布団に潜るといって生活を繰り返してました……

十月はたくさん更新できるといいですね……！

龍「他人事か……（呆）」

## 王の蹂躪

「……………」

キン！！キン！！

目の前に広がる弾丸の雨を龍士は無言で弾き、逸らしていく

動きを先読みして避けることも可能だが避けて一瞬無防備になったところを撃たれる可能性もある

そんなやり取りを現在、龍士とピストーラはしているのだ

龍士からすれば相手は『声』が聞きづらい相手なわけだしリスクの高い方を選ぶわけにもいかないだろう……

一方、撃っては動き、撃っては動きを繰り返しているピストーラは自身の攻撃が当たらないことに  
多少のイラつきを覚える

「ちっ！！（これだけ撃っても当たらないとは…………そろそろ用意し

ていた魔力弾が切れる)」

ピストローラは基本魔法は使わない

と言っても魔力は普段使用する銃とその銃で打ち出す弾の内部に魔力を込める

銃は定期的に込める必要があるが…

更に撃つ直前に再び魔力を込めることで共鳴し、  
二重に込められるので威力は「世界最強の拳銃」と呼ばれるパイプ  
アー・ツェリスカで徹甲弾を撃つた場合よりも高くなるのだ

それを龍士は投影した剣を破壊されることなく弾き、逸らしていく

「（奴の魔法は頭から聞いているが…何故壊れない？

投影とは本来魔力で作られたものだから何時壊れてもおかしくない  
んじゃ……………」

一般の投影品はオリジナルにほど遠く、この銃弾を弾いたとしても  
一発で折れてしまうだろう

だが龍士の魔術は特殊な上に魔力も込めている

更にそこに元の使い手であるエミヤシロウに師事を受けていたのだから扱いは完璧だろう

と、もう何十と撃ったか分からない。

何十と弾いたか分からない

という状況から動きが見えた

龍士はその場で跳躍し、投影を破棄するとともにその場で腕を組み始めた

そしてあるうことが眼を閉じてしまった

「諦めたのか？（……いや、違うな）」

自分で問いかけておきながら答えを確信しているピストーラ

龍士は問いには答えず、ただ眼を閉じている

「（まあこの機会を逃す手はあるまい……！！）」

そこからすでに二重に掛けた弾にさらに魔力を込めていく  
そして備え付けられたスコープを除き、狙いを定めた瞬間

ゴオオツツツツ！！！！！！！！！！

体にまるで電撃が走ったように感じた

何故か自分の意志とは裏腹に意識が遠のいていく

かろつじて動いた腕でスコープを目元まで寄せると

先程まで受けに回っていた龍士が此方を睨んでいた

「畜……しよ………」

最後眼で口に出せず、ピストーラの意識は闇の中に沈んだ

「……ふう」

相手の意識が失われたことを確認すると龍士は『覇気』を収める

「まさか本気を出すことになるとは………」

龍士は普段本気で『覇気』を出しはしない

出せばそれだけで過剰に相手を威圧してしまう

だが本気を出せば自分の読み取れる範囲全ての生き物の『声』は聞こえる

聞こえずらいなどということは絶対に無くなるのだ

「しかし……これは………」

龍士は周りの惨状を見て軽く額に手をやる

今の覇気で木々は軋み、まだ若い気は折れている物もある

龍士はそれに軽く頭を下げながら館へのルートを通り、『モーデック』を追い始めた

……数分前……

その場に緊張が走る

それでも彼らは各々の武器や構えを解かずに警戒態勢を取っていた

対する赤き蹂躪者、ロットは腕を組んだ状態でそのまま自然体を取っていた

「……来ねーのか？」

いい加減始めねーと籠士の野郎が来ちまうぞ？」

ロットの催促にも乗らず、『モードット』（もちろんカオスも……）は唯受けの姿勢を取っていた

だがそれは間違いであると誰も気づかない

「……しゃーなーなあ〜」……

来ないんならこっちから行くぜ？後悔すんなよ？」

彼女はそう言うと腕組みを解き左手を地面に添える

唯それだけ

それだけなのに『モードット』全員を含んだ半径100メートルほどの地面が粉々になった

……いや、辛うじてカオスは躲していたが

その崩れた足場から跳躍し、いつの間に出したか分からない乱回転した魔力の塊を

下に打ち込んだ

……瞬殺である

カオスも心なしか口元がヒクついているがロットに質問を投げかける

大変勇者なことで……………（汗）

「…強いとは思ったがまさかここまでとは……………その髪と服に関係が？」

「鎌をかけても無駄だぞ？……………まあ減るもんじゃねエけどな？」

これがあたしの魔法って奴だよ

これぐらいしか言うこと無いけどな……………WWW

そう言っただけで彼女は後ろの残骸を見て爆笑している

何がツボに入ったかは謎だが……………

「……………成程」

ただ一言そう呟いたカオスは懐からナイフを取出し、油断なく構える

ナイフを持ってない左手を前に出し、ナイフを逆手に持った右手は右肩の近くで力を貯める様になっている

如何やらカウンターを狙っているようだ

しかし、彼女はいつの間にか魔法を解いた状態で腕を組み直して眠たそうに欠伸をかく

「ふわぁ……まぁそう焦んなって

言っただろ？今回あたしは裏方に回るって

それにほら………

………  
お前に客人だよ」

「ツ！！！！？？」

その一言と背後から飛んでくる矢に気づいてその場から一気に横に  
跳躍する

そして先程いた場所に何でもない唯の矢が飛んできたが  
その威力は地面に軽く穴をあける程の威力を持っていた

「……やれやれ、確かに足止め位はしてくれるとは思ってたがまさかここまで……」

瞬殺かね？」

「ああ……あんな奴ら集団出来ても一厘出すのがいいトコだ

それに……お望みのシチュエーションは出来ただろ？」

「……まあ……そこは否定しないが」

そして彼女の横に着地した彼……龍士はその手に持つ干将・莫耶を油断なく構え、

カオスを睨みつけた

カオスもそれに応じ、龍士の鷹の目に臆することなく構える

「……………」

「……………」

両者の間に会話は無い

両者各々の構えを取り

そして

ジャリ

ダンッ！！ シュッ！！

誰の分からない土を擦る音で死合いを始まった

王の蹂躪（後書き）

そろそろ完結ですね

いやあ〜長かった

龍「…自分が考えた章だろうか？」

実は殆どのオリ展開って前から考えていた物でこれは書く直前までまったく作ってなかったシナリオです

龍「……………」

ああやめて！！そんな目で見ないで！！分かってるから！！

いつも以上に駄文なのは分かってるから

龍「ならば次からはちゃんとしたものを書くのだろうか？」

それはどう……………いえ、何でもありません。次こそはちゃんと書きます  
はい

龍「……………よろしい」

はあ〜怖い怖い

ではこれにて！！

今年ももう10月に入りました!!

今年残すところあと三か月!! まだまだあるかな? … (笑)

次回は何時になるか分かりませんが早めに投稿したいと思います!!

## 剣製 V S 直死（前書き）

龍士復活の話を少し直してみました  
サブタイも少し可笑しかったので一緒に  
と言っても使った宝具とセリフが変わってるだけですからあまり変  
化はありません

## 剣製 VS 直死

ギャリインッ！！！！

互いの得物がぶつかり合う音がする

たった一合

それだけで龍士の干将・莫耶とカオスの二本のナイフは真っ二つに折れた

いや

「……………？（今の切れ方はおかしい……………）」

互いの剣がぶつかり合った瞬間、龍士の干将・莫耶の方が先に切れた

いや、というより切れる直前龍士が若干逸らして当てたわけだが…

それにしたってあのまま斬り合っていたら龍士の剣は殺され、

斬られていただろう

「…………それが貴様の能力か？」

龍士は再度干将・莫耶を投影して油断なく構える

それを見たカオスは腰に手を当てて答える

「察しがいいなあ

ああその通りだよ

と言っても唯眼と肉体の力が良いだけだよ……………」

「……………そういうことが……………」

眼がいいと言っても別に視力がいいだけが眼がいいとは言わない

静止視力・動体視力・深視力・中心視力・中心外視力・裸眼視力

矯正視力・片眼視力・両眼視力・近見視力・遠見視力

そもそも視力とは目で物体を識別できる能力なので遠くを見る事が出来ないから目が悪い  
という訳では無いのだ

それを踏まえてカオスは「視力の向上とそれに見合った肉体」を手に入れていたということだろう

あの状況で使う視力と言ったら

動いている物体を視線を外さずに持続して識別する能力

つまり動体視力だろう

「（厄介だな……つまり俺がどんなに疾く動いても反応できるという事ではないか）」

どこのアメフト漫画の様な「神経伝達速度0.1秒!」とかそういう問題ではない

その動きの過程も全て見えるのだ

結果、速く動いても何処を攻めてくるか

速く跳躍しても何処に着地するか

などということも考察、理解出来てしまうのだ

更にその眼に見合った肉体も与えられている

「理解したか？お前では俺には勝てない！！！！！」

「くっ……！！！」

ナイフによる剣閃を龍士は紙一重で避けている

見聞色を使ってもぎりぎりだ

つまり龍士と同じかそれ以上の疾さを持っているという訳だろう

対して龍士の攻撃は軽く避けられてしまう

龍士の横薙ぎをカオスは避け、低姿勢のまま刺突をする

龍士はナイフの刺突を避けようとするが足の腿に刺さる

「ぐう……！！？」

思わずその場で膝をつきそうになるが堪えて後ろに大きく跳躍する

「…………ちっ」

「諦める

片足を負傷し、誰もいないこの状況では誰の助けも得られない  
その足ではそう遠くには行けまい」

そう、この場にロツトはいない

龍士自身がアリアの護衛に就くように頼んだのだ

「……………くっ」

すると、この絶体絶命ともいえる状況にもかかわらず龍士は笑った

「生憎、まだやり残したことがあってな

それを成し遂げるまでは死ねないのだよ」

思い出す

あの何も言えずに死んでいった少女の姿を

龍士は唯再開を望む

会いたい

会って抱きしめて……謝りたい

ずっと……

彼女の傍にいたい

「……トレス 投影、オン 開始」

龍士は唯それだけを心に留め、投影を開始する

投影されたのは刀だ

柄や鍔、鞘が真っ黒な刀

「切れ味」に主眼を置いて鍛たれたあらゆる物を抵抗なく一刀両断できる刀の中でもトップクラスの切れ味を持つ刀

名を斬刀「鈍」

「それは……!!」

「君もこれぐらいは知っているだろう?」

龍士は不敵に微笑み、傷口から流れ出す血を鞘の濃口に押し当て  
刃に垂らす

もし刃を押し当てたらその時点で龍士の右足は本体とサヨナラして  
しまっただろう……（汗）

そして再び刃を鞘に仕舞う

そして刀を腰だめに

右手を柄に軽く触れておく

この刀の特性の利点は「居合」にある

斬刀「鈍」を血で濡らすことで、鞘との摩擦係数を減らして  
光速を超える居合いを繰り出すことを可能とする

これぞ斬刀「鈍」限定奥義、斬刀狩り！！

「……………いいだろう」

カオスは懐から取り出したけのナイフを取り出す

数はギリギリ100いかないといった所だろう

とつか何処に仕舞ってどうやって持ち歩いているのだろうか？

「この大量のナイフの中でお前に当たるのはたった一通り、一本だけだ

他のナイフなど気にかけていると死ぬぞ？」

そう言つてカオスは腕を交差して構える

龍士はジツ……とカオスを見据える

刹那、カオスが飛ぶ

そして必然的に下に位置する龍士に狙いを定める

「デェー！！」

「秘剣……」

カオスはすべてを投げたと思ったら懐から最後の一尺六寸程の小刀  
と言ってもいいナイフを  
右手に持って自身もナイフの雨を追う

「エンド……!!」

「零閃!!!!!!」

龍士の手から光速を超えた一閃が飛ぶ

互いの技が交差し、全てが決まった

剣製 vs 直死（後書き）

前半の辺りは何も突っ込まないでいただけるとありがたいです（笑

あれ？何これ？って思ったんですか指を止まらなくて

後龍士の軽い爆弾発言も（笑

最初に入れるつもりはなかったんですけどなあ（おい

再開と別れ（前書き）

い、忙しい

部活が終わったらずぐ塾、塾が終わったころにはすでに十時過ぎ

はい、すいません愚痴です

これからさらに忙しくなるので更新ペースが落ちますが見捨てない  
でくれると嬉しいです……

## 再開と別れ

太陽は隠れ、月が昇り始めた頃

「……………かはっ」

一人の男は吐血し、一人は仰向けに倒れたまま動かない  
気を失っているわけでは無いようだ

吐いた血が男の服に掛かり、赤い生地を更に赤に染める

「……………何故殺さない」

倒れていた男：カオスは漸く口を開き、もう一人の男：龍士に声を掛ける

「俺は暗殺集団『モーデット』のリーダーだぞ？」

此処で殺しておくべきだと思わないのか？

『正義の味方』」

間違っではないだろう

実際龍士が師匠としているエミヤシロウは正真正銘英霊…… 『正義の味方』となったのだから

それに龍士がやってきた行為もそれに該当する

少し前に行った村は病原菌が蔓延していて放っておくと他の村に移ってしまつたため……

全員殺した

その行為は充分エミヤシロウがやってきた行為と一致する

しかし、龍士はこの行為に微塵も後悔していなかった

それどころかその名に誇りすら感じている

師匠のやってきたことを弟子が引き継ぐ……とは少し違っが

それは何故か？

その行為は仲間を守ることにもつながるからだ

病原菌がさらに広がればいつか自身の仲間の許に来るだろう

それを見越したうえで殺したのだ

自身の仲間を守ることを前提とした『正義の味方』なのだ

師匠とはまた違った形になるだろう

「それが如何した」

龍士はボロボロの体でカオスの言葉を切り捨てる

その言葉にカオスは口をあんぐりと開けて龍士を見る

たった一言で返されたことに驚いているのだろう

「俺がしてきた行為は仲間を守る為に覚悟を持ってしてきたことだ

その行為に後悔はしていない

寧ろ…俺はその名に誇りすら持っているよ」

まあ…もう一つは勘弁してもらいたいところだがね

と、龍士は苦笑しながら付け足す

その様子を見たカオスは

「……そうか」

とただ一言呟き、ぎこちなくだが立ち上がる

「む…もう行くのかね？その体ではまともに動くこともかなわんぞ  
？」

「構わない

歩砕けの体力があれば何とか持ち直す」

そう言っつてフラフラと歩き出すが途中でピタリと止まり

「……………『モードット』は解散する」

突然そんなことを言い出した

「もうお前と会うことは無いだろう」

……………まあ、会ったとしてもどうせ殺し合うだろうからな」

そう言いたいことを言ったのかまた歩き出す

「もう君と戦うのはごめんだがね

……………ウチに来た時は茶でも出そう」

その言葉に一瞬止まるが返事をせずにカオスは去って行った  
姿を消したところで龍士は尻餅をつき、大きく息を吐いた

「ふう〜……………流石に限界か……………」

「魔力は消費してないけど身体に問題あり……………ってどこかしら……………」

このままにしておくか死ぬわよあんだ？」

後ろから突然聞こえてきた声に龍士は驚かず、逆にフツと笑って返す

「心配ない

この身には師匠から受け継いだ『鞘』が埋まっている

死ぬことは早々無いだろう」

「そつ……なら良いけど」

「くっ……相変わらず心配性だな君は」

そう言ってやっと龍士は後ろを向いた

後ろには腰まで伸びた黒い髪に薄い赤の十二単衣

下に袴をはいていて左腰に長さ二尺五寸程の刀を帯刀していた

「久しぶりだな………桜」

「ええ………久しぶりね龍士」

ずっと待ちわびた再開にしては随分淡泊だがお互い気にせず言葉を並べていく

「まったく…今まで何をしていたかと思ってたけど……」

碌なことしてないわね」

「相変わらず厳しい評価だな

そう言えば前世でも君に勝てたことは一度もなかったか？」

「…ああそう言えばそうね

情けないわね……女の私に負けるなんて

せめて一度くらい勝ってほしかったわ」

「君と俺とじゃ鍛え方が違うのだから当たり前の話だろう？」

それもそうね、と桜はここで口を閉じた

その様子に訝しむことなく龍士は声を掛ける

「それで？ここに来た目的は何だ？

グリモアハート  
悪魔の心臓」

さっきの楽しい雰囲気はどこかに行き、殺気が蔓延し始めた

「別に？ただ様子が気になったから見に来ただけよ？

……………それが何か？」

「いや…そうだな……………一つだけ言うことがある」

「……………へえ、何？」

そこで龍士は目を瞑って間を置く

目を開けた頃には決意が宿った力強い目をしていた

「必ず君を連れ戻す

……………それだけだ」

その言葉に一瞬キョトンとする桜だが

「……………プツ…アハハハハハハ！！！！」

これでもかくらいに笑い始めた

笑い終わって、まだ収まらないのか若干腹を押さえている

「ハハハ、はあ……へえ、いいわ

強引な男は嫌いじゃないわよ?」

そう言つて桜は妖艶な笑みを浮かべ、龍士を見る

龍士もまた不敵な笑みを浮かべ、桜を見上げる

体勢はさっきから変わっていない

「ああ、期待して待っていてくれ」

その言葉にピクツと反応するが桜はすぐその場から去って行った

「……ふう、囚われのお姫様を救うのは大変だな」

月が浮かび、夜風が吹く中、龍士はポツリと呟いた

再開と別れ（後書き）

前半はカオスとの別れ、後半は桜との再会となりました

桜は前世の名前をそのまま使っています

それから三連休は更新できません！！

それどころか月末まで……………

ハッハッハ……………笑えねえ（汗）

## オリキャラ紹介（前書き）

次話投稿する時間が取れないため、オリキャラの紹介をすることになりました

## オリキャラ紹介

マネット・デイ・ヌーヴォラ

元『幽鬼の支配者』の魔導師

元々孤児で一人で生活していた所をジヨゼに拾われる

本編では出ていないがジヨゼのことを「あれ」と呼んだり「気色悪い」と言ったりと  
非情に嫌っている

所々撥ねた髪を下ろし、目はいつも細めで鋭い（本人曰く「眠たげな目」）

基本めんどくさがりの傍観主義、だがこと戦闘が関わると真っ先に飛びつく戦闘狂である

真っ黒の上着を基本袖を通さずに肩に羽織っているだけ  
中はワイシャツにジーパンなど割と爽やか系な服を好んで着る

ステータス

筋力：C

耐久：C

敏捷：A

魔力：B

幸運：A

宝具：-

## 使用魔法

### ・増殖

#### マネットの基本魔法

オ리지ナルに触れていることを条件に物質を増殖させることが出来る  
物量作戦などのメリットがあるがその分かさばるので戦場で使うこ  
とになるし、魔力の消費も  
その分著しくなるといってデメリットがある

### ・発火

これも手で触れていることが条件で、物体に火をつけ、攻撃力が増  
すことを目的とした魔法

炎による攻撃で戦略の幅が広がるが一定以上の温度は出せないし、  
耐熱性に優れた物じゃないと

発火できない

使用中、魔力をガンガン使うため、余り燃費がいい方ではない

増殖との併用もできるが本人曰く「めんどくさいからヤダ」らしい

ロット・ディ・スターク

並行世界の「哀川潤」

容姿・服装は殆ど彼女と変わらないがただ一つ、前髪の稲妻型になった金髪が無い  
性格は意外と家庭的  
「自分で作ったもの以外は食べる気がしない」とのこと  
派手好きで敵をどう倒すか小一時間悩むこともあるとか

ステータス

筋力：S（-）      耐久：B（B）

敏捷：A++（-）      魔力：S（-）

幸運：EX      宝具：-

（ ）内は魔法使用時のステータス  
- は測定不可能

使用魔法

・覚醒

自らのステータスを上げる近接戦闘のための魔法

ただし耐久は上昇しない

その間、髪は腰に届くほどまで伸び、魔力で出来た赤いロングコートが出現する

カオス・デーレブレ

転生者

龍士との死闘に敗れ、死にこそしなかったものの相当な重傷を負った服は基本的に上下黒一色、偶に赤い線の入った服も来ている

龍士との戦闘後は目をあまり使わない様に包帯を巻いている

ステータス

筋力：S

耐久：A

敏捷：-（測定不可能）

魔力：D

幸運：B

宝具：-

能力

・直死の魔眼

対象の「死期」を視覚情報として捉えることが出来る目。  
カオスは一度死んでいる為、原理としては成り立つ  
その際には改めて「死」を見る必要があった為、「死」の世界の中  
に約三年ほどいた

剣術・武術の知識

知識というより「この刃物を使った場合、最適かつ合理的な戦い方」  
が頭の中に入っている  
後述の「デイ・エンド」で使うナイフはすべて投擲用のナイフ

・「視力」の上昇、その視力に対応できるほどの肉体

まさに言葉通り、最高の「視力」と最高の「肉体」

だが肉体はあくまで「転生時の年齢で最高の肉体」であるため、鍛  
えなければいずれ衰える

使用魔法

無し

使用技

デイ・エンド

深視力・近見視力・遠見視力をフルに使い、数十のナイフの内一本だけ当たるように投げ、

隠し持った長めのナイフで斬りかかる

ぶつちやけ「極死・七夜」の応用である

周りの多数のナイフで逃げ道を塞ぎ、一本を交わしたところを手元のナイフで一刺しにする技



## オリキャラ紹介（後書き）

カオスの必殺技の名前が厨二ｗｗｗｗ

オリキャラが少し多いのでひとまず此処でひと段落ということ載せました

本編は………すいません来週は出来なそうです

## 新たな一歩

目を開ければ、そこは白だけで彩られた世界だった

「……………ここは？」

見覚えがある

確かあれは……………

「……………ああ、そうだ」

ここは俺にとってすべての始まり

俺がその一歩を踏み出した場所

いわば俺の原点だ

「……………目が覚めたかの？」

振り返れば、そこは俺を送り出した神があの時から変わらない姿で俺を見ていた

しかし、俺は何時の間に寝てしまったんだ？

「お前さん、相当疲労していたようじゃな  
あのまま森で寝てしまったのじゃよ」

……ああ、成程

そしてそのまま呼ばれたと

「ああ、覚めたさ

……それで？俺を呼んだ理由を話してくれるかな？

久しぶりに来たのでね

その久しぶりが強制的で尚且つ突発的だったのでいまいち慣れないのだ」

「……お前さん、アイツに似てきたのう」

神を名乗る爺さんは呆れるような眼でこちらを見てきた後、溜息を吐きながら頭を抱える

……頭を抱えるなら訳を話してからにしてくれないか？

「…やれやれ、だから言ったのですよ

呼ぶなら連絡なり何なりしてから呼ぶべきだと……」

そうして奥の方から一人の女性が出て来た

その女性は普段つけている鎧は外し、ドレスのような服を着ていた

彼女は俺を見るや否や眉間のしわを消し、笑顔で迎えてくれた

「お帰りなさい、リュウジ」

「ああ、ただいま師匠」

彼女の名はアルトリア・ペンドラゴン

俺の二人いる師匠の内の一で主に剣の指導を受けた

二人は両親を早くに亡くした俺にとって親の様な存在だ

しかし、彼女はいるのもう一人の師匠はどうしたのだろうか？

「師匠、<sup>アーチャー</sup>師匠は？」

<sup>セイバー</sup>師匠は俺が誰のことを言っているのか理解したらしく、頷きながら

答えてくれた

「ああ、シロウなら……」

そこで言葉を止めると後方を向き

「やれやれ……随分遅かったな？」

鍛えが足りない証拠ではないかね？」

「…相変わらず厳しいですね……」

もう一人の師匠…エミヤシロウが口元に皮肉げな微笑を浮かべながら

テーブルに座り、紅茶を飲んでいた

しかもテーブルにカップがもう一つある

どうやら目の前の騎士王も飲んでいたみたいだ

「い、いや違うのですよりユウジ!？」

シロウが「何もしていないで待ってるのもつまらん」と言っているのでお茶を飲んで待ってたわけで

け、決してあなたのことが心配していない訳では……………」

如何やら俺が師匠セイバーも飲んでいたことがばれたと思っセイバーたらしく  
慌セイバーてて弁解する

……………いや別に悪く思っセイバーてはいないのだが

「……………落ち着いてくれ師匠」

「そっだアルトリア

それに今回は唯雑談をするために読んだわけではあるまい？」

師匠アーチャーの一言でハツセイバーとなった師匠は

いつもの凜とした表情に戻った

「落ち着いた様じゃの

それでは「まず、貴方が今回の事件について疑問に思っセイバーたことを聞  
かせて下さい」……………」

ガン無視した！？

落ち着いたことを確認神が口を開くがそれを無視して師匠セイバーが俺に問

いを投げかけて来た

ほら見ろ、神がいじけているぞ

というか師匠アーチャーも笑ってないで何か言ってください!!!!

そう言う俺も隅でいじけている神を無視して問いに答える

「…疑問に思ったことは二つ

『カオスと言う転生者の存在』と『最初の被害者を殺した犯人の存在』」

そう、俺が見たあの惨状を作り上げた張本人はまだ特定されていないのだ

カオスに去り際に問うたが本人は

「俺が依頼されたのはアリア嬢一人だけだ。それ以外を殺すつもりはない」

と言っていたのでアレは『モードット』の仕業ではないだろう

ならばいったい誰がしたことなのか？

そもそも彼は何故この世界に転生してきたのか？

考え出したら切りが無い

その疑問に師匠セイバは一つ頷き、答えてくれた

「彼は自身で口にしたように貴方と同じ存在、つまり転生者ですよ」

ですがそこにいる神が送ったわけではありません

彼とは別の者：神が貴方の世界に送ったのでしょ

誰が送ったかまでは知ることはできませんが」

「しかしアイツは、もう二度と会うことは無いだろう」と言っていたが……」

「それは分かりません

元々転生者というのは輪廻から外れた者達

我々サーヴァントと少し似ている者達を指します

しかし、彼らと私たちは大きく違うことがある」

「違うこと?」

俺は師匠セイバーが最後に言ったことに疑問を抱き、復唱する

確かに本来の世界から隔絶された辺りとか大まかには似ているだろう  
だが俺達とサーヴァントとの大きな違いだと?

違和感を感じたことはなかったがそんなものはあるのか?

「リュウジは他の転生者に会ったことは無いだろうからそんな違いは分からないでしょう

その違いとはつまり『同属と惹かれ合う性質』を持っていることです」

ッ!?!?

……つまり、俺とアイツはまた必ずどこかで会うということか?

参ったな…あいつと戦うのは正直ごめんだ

能力を貰ったばかりとは到底思えないほどの技術と力

今度再び戦うことになったらどうなるか分からない

「そして二つ目の質問ですが……おそらくあれも転生者でしょう」

「ッ!!!? ……何だと?」

あれがすべて転生者の仕業だと言っのか!!?」

「…現在、貴方の世界にいる転生者の数は貴方と霞城桜を入れて七人です」

その中の誰かがやったことでしょう」

「……成程、つまり」

本来ならばその転生者が事件を起こすために人を殺したがその時、『モーデット』がやってきた

その転生者は不利を悟り、『モーデット』に全てを擦り付けた、と  
いった所か………」

「察しがいいですね」

その通りだと思います」

成程な

だがその全員が敵と言う訳ではないのだろうな  
運が良ければ和解できるかもしれない

「相手はどんなことをしてくるか分からない  
十分気を付ける様に」

「ありがとうございます」

森の中で目を覚ました俺は『モーデット』が壊滅したこと、殺人はもう起きないことをアリアたちに説明し、事件解決を伝えた

ロットはこの場にいない

「あたしがここにいる必要はもうなくなったみたいだから」と言っ  
て船も用意せずに行ってしまったらしい

何と言うか…流石だと思っ  
てしまったよ

そして、その次の朝

俺は残るとい  
うジーさんを置いて一人で帰ることになった

目の前では見送りに来てくれたアリアが静かにお辞儀していた

「別に、礼を言われることなど」「あの被害者は……」「……?」

「あの被害者は……私が好意を持った方でして……」

「!?!?!?」

俺は彼女の一言に驚愕した

思わずその場で立ち尽くす

「…そうか、それで君は」

「はい……彼が殺された時、私は悲しくて……どうしようもなくて、家に引きこもったのも

自分が殺されると思った恐怖心じゃないんです……」

彼がいなくなつて……私、どうしたら……」

彼女はそこで泣き出してしまった

今までピンと張っていた気持ちが緩んだからだろう

俺はその少女をそつと抱きしめて

「大丈夫だ」

ただ一言、そう告げた

「……………へ？」

アリアは突然抱きしめられたことに驚いているのか  
顔を真っ赤にして慌てふためいている

「彼の代わりがいるわけではない

だが君にはまだ君と共にいてくれる人がいるだろうか？

……………まあ、あれは少々親馬鹿な気質があるが……………

それに、これからそんな人が現れるかもしれない」

そこで腕を解き、アリアの目を見る

その言葉にアリアは真剣に耳を傾けていた

「彼のことを忘れるとは言わん

寧ろ忘れるな

それが彼の為であり、君の為でもある」

この世に生きていると、必ず辛いこと、悲しいことがある  
だが、それと同じくらいの幸せなこと、嬉しいこともある

「そこから新たな一步を踏み出せ、今の君にはそれが必要だ」

大切なのは『忘れない』こと

良いことや悪いことすべてが重なって今の自分があるんだから  
否定することはすなわち「自分を否定する」ことになる

「……でも、それでもダメなときは？」

「その時は人を頼れ

一人で駄目なら二人、それでも駄目なら三人

もしそれでも駄目なら俺を呼べ、必ず手を貸しに来る」

アリアはその言葉を聞いて顔を俯かせる

彼のことを思い出しているのだろう

顔を上げた彼女の顔はまるで憑き物が落ちたような顔をしていた

…うん、これならもう大丈夫そうだな

「……それでは、これで失礼する

何かあったら呼んでくれ、必ず駆けつける」

「はい……それでは」

「ああ」

そう言っただけで俺は船に括り付けたロープを外し、船を進ませた

後ろを向けば一人の少女が満面の笑みを浮かべて手を振っていた

……ああ、偶にはここに遊びに来るのもいいかも知れないな

俺はそんなことを考えながら島を後にした

## 新たな一歩（後書き）

遅れました

野外実習で房総半島の方に行つててですね……昨日帰ってきたわけですが

龍「ストックなどは作らないのかね？」

そんな高度なテクニック、この駄作者にできると思っているのかい？

龍「…すまなかつた……今の言葉は忘れてくれ」

まったく、いつもその場で書いて投稿しかできない俺になんてことを

……あれ？ちよつと龍士さん？何処へ行くんですか？

無視しないで下さい！！置いてかないで下さい！！

……え〜つとそれから報告です

実は来週からテストでして、しばらく更新できません

最近更新が出来ずに行き詰まっている状況ですが見捨てないでくれるとありがたいです……（涙）

それではこれにて失礼します！！

お〜い、待つてくれ〜……………

…また俺のいない内に……orz（前書き）

今回から新章です

それからすいません

………楽園の島編飛ばしちゃいました！！！！！！！！

いや、別にめんどくさいとかそういう訳では無くてですね、

龍土が仕事帰りに遭遇、も考えたんですがやはりこれがいいかなと

……

あゝ来るゝ、誹謗とか中傷とかゝ

…また俺のいない内に…orz

翌日、ハルジオン港に無事着いた龍士は歩いてマグノリアにあるギルドに向かっていた

電車を使った方が早いがハルジオンからマグノリア行き電車は通っておらず、どうせならあるいて帰ろうとなったわけだ

「しかし、今回の事件はもう少し調べる必要があるそうだな…」

今回の事件、と言うと昨日までいた島の殺害事件だろう

あの死体についてカオス及びモーデットは無関係

死体の致命傷となった傷痕の謎

そしてあの場にはすでにいなかったこと  
どうやってあの場から逃げ出したのか？

「挙げればきりがなし…」

龍士はあの事件の要点をまとめた所で意味不明さに軽く頭を抱える

この後も歩きながら数分、考えていたが結局

「まあ、何とかなるだろう

犯人が転生者ならその内接触を図ってくるだろうしな」

と締めくくって考えるのを断念してしまった

断念してから一分もしない内に

「……！……何だこれは？」

丁度『見聞色』の範囲にマグノリアが入ってきた時、町の状況に啞然とした

ギルドのメンバーの『声』が殆ど聞こえない

いや、辛うじて聞こえる為死んでいるわけでは無いみたいだが戦闘不能で動け無いようだ

「……！……！……まったく」

そんな中、龍士はとある『声』を聴いて溜息を吐いた

「いくら不満が爆発したからと言ってな……………」

そして龍士は足に強化の魔術を掛け、

「やって良いことと悪いことがあるぞ！！ラクサス！！！！！！」

その場から姿を消した

マグノリア、カルディア大聖堂

そこではナツ、エルザがラクサスと対峙していた

ラクサス及びラクサス親衛隊『雷神衆』の反乱、策略により、ギルド同士での潰しあい

『バトル・オブ・フェアリーテイル』が始まった

現在、『雷神衆』の三人は戦闘不能になり、残るはナツ、エルザ、ラクサス、ガジルの四人

ティアラは何故かマネットの宣戦布告に乗り、激闘の末、相打ち

「あの空に浮いている物は何だ　ラクサス!!」

「神鳴殿、聞いたことくらいあるだろ？」

ラクサスはエルザの斬撃を避けながらマグノリアの上に浮いている物の名を告げた

神鳴殿

時限性で雷が落ちるようになっていた魔水晶<sup>ラクリマ</sup>  
破壊しようと試みると生体リンク魔法という魔法により、自身に同  
じ量のダメージが帰って来る

「ナツ！！すべて破壊するんだ！！」

随分無茶な命令だ

これにはさすがにナツも反論する

「くっ…龍士は今何処にいるんだ！！？」

「戻ってきてもここには来れねえよ

外には術式で結界を張っているし、アイツ《…》が待機してい  
るからな」

術式とは一定の空間にある程度の制約をつけ、その制約をクリアし  
ないと出られず、外部からの干渉も受けられないという一種の結界である  
つまりラクサスはこれを利用して外から出入りできない様にしてい  
るのだろう

「アイツ？」

エルザはラクサスの発言に疑問を持つ

如何やらラクサスは術式だけじゃなくさらなる手を打っているようだ

「ああそつだ、今帰ってこられても面倒だからな術式の外に一人置いてんだ」

「…くつ（龍士……）」

エルザは心の中で戻ってはこれない仲間の名を呼んだ

「成程、術式か……………」

龍士は目の前の見えない壁に手を突き、呟く

「やれやれ、こんなものが俺に聞くとでも…む？」

途中何かが飛んでくるのを感じ、その場から大きく後ろに跳躍する

先程まで自分がいた場所に槍が突き刺さった

「ヒュウ〜、これを躲すなんてやるじゃねえか」

槍を投げた張本人は隠れることなく堂々と出て来た

蒼い着物に左右足が分かれた袴

着物も帯を締めておらず、裸の上に着ている為、素肌が見えている

髪は若干黒が混じった紺色で首より上の方で結んでいた

目をギラギラと血走らせ、まるで好敵手を見つけたと言わんばかりに笑っていた

「別に…あれは躲せないような奇襲ではないだろう？」

そもそも君の外見から奇襲は似合わないと思うのだがね……」

そう、見た目は少し違うが雰囲気はランサー、クーフリーンにそっくりなのだ

あのギリギリの殺し合いを望む男に奇襲は似合わないだろう

だがそれを知らないこの男は似合わないと言われ、若干だがカチンときたらしい

額の隅の方がびくびく痙攣している

「…ほお、そう言うテメエも陰気な戦い方しそつだな

ファイナルフェアリー

最終妖精だっけか？

名前負けって奴じゃねエの？」

「やれやれ、まるで狗だな（ボソッ……別に好き好んで名乗ったわけでは無い

君は少し恰好が派手すぎるな君の言う陰気な戦いがどんなかは知らんが出来もしない戦いに口を出すの

はどうかと思っぞぞ

「……………」

「……………」

「殺す！！！！」

龍士と男は一瞬で間合いを詰め、それぞれの得物で攻撃を繰り出した

蒼い男は神速の刺突を繰り出し

それを投影した干将で弾きながら横に避ける

干渉は破壊され、粉々に砕け散った

龍士はそれを見て冷や汗を流す

「…なんて馬鹿力だ」

先日であったロットほどではないが、相当な力だろう

「そついや名乗ってなかったなあ

俺はシバ

シバ・トリスタンだ!!」

「……インドの破壊神にブリテンの円卓の騎士か……」

大層な名だな、と呟くと

両者は己の得物を構え、衝突した

…また俺のいない内に…orz（後書き）

シバはヒンドゥー教の3最高神の一柱、破壊神シヴァを多少もじり  
トリスタンはアーサー王伝説に出てくる円卓の騎士から取りました

トリスタンに至ってはそのままですね（汗）

紅き流星VS蒼き旋風 前編(前書き)

最近サブタイ適当になってきたな(笑)

それから46話に出て来た一の腕の件について  
当作品で説明したと事実が違っているとの報告を受けたので丸  
々削除させていただきました

不快になられた方、申し訳ございません  
指摘してくださった方、ありがとうございます

紅き流星VS蒼き旋風 前編

二つの得物はぶつかり合い、片方が砕け散った

砕けたのは龍士の剣

先程とは違って真ん中からポツキリと折れた

「ぬ……（少し基本骨子の想定が甘かったか……）」

実は龍士は普段、基本骨子の想定を甘くしている

勿論それなりの武器ならすぐに折られてしまいがこれならば敵に力の底を見せずに済むと考えた結果なのだろう

しかし、目の前の相手は違う

先日相対したカオスもそうだったが、今までの相手とは次元が違う本気で行かねば即首が飛ぶだろう

「……あん？…そいつ、魔力で出来てんじゃないのか？」

「―ことは換装の類か？」

「……如何いう意味かね？」

龍士は効いても無駄だと悟りながらも質問してみた  
しかし、以外にもあの青い槍兵は答えてくれた

「俺の槍は…まあ、名前は付けちゃいねーが…コイツに触れたモノ  
の魔力は例外なく削られるんだよ」

「…態々説明をどうも（と言うことは破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルゲと同じ能力と言  
うことか…

厄介だな）」

破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルゲ

フィオナ騎士団、デイルムッド・オディナの持つ真紅の槍

その槍と接触したモノの打ち消す呪いを保有している

シバの持つ槍はそれに当て嵌まるだろう

そもそも、この男は魔法を使うのだろうか？

「おらあ！！余所見してんじゃねえよ！！……！」

「ッ！！？くっ……！」

気が付くと、シバはその槍で龍士の足に薙ぎ払いをかけていた

少し考え事に夢中になっていた龍士はその薙ぎ払いを軽く飛ぶことで避け

「……トレース、投影、開始」

改めて投影を開始する

今度はあの槍に対抗できるように

たった一合で破損することの無いように

創造の理念を鑑定し

「チッ！！」

シバはそのまま下に向けた槍の刃を上に向けて切り上げるが龍士は体を横にずらすことにより

回避する

基本となる骨子を想定し

構成された材質を複製し

着地と同時にシバは高速の刺突を何回も繰り返すがことごとくそれを回避する龍士  
元々疾いのだ  
槍の刺突に適した距離にいないようにすることで回避できる確率を  
上げているのだろう

製作に及ぶ技術を模倣し

成長に至る経験に共感し

「チツ……」

シバは諦めたのかバックステップでいったん距離を取る

いや、その眼は何処か待っているような眼だ  
まるで龍士武器が揃うのを待つように

蓄積された年月を再現し

ここに幻想を結び！！剣と為す！！！！！！

「トレース、完了」

投影したのは先程と同じ干将・莫耶

しかし今回は先程とは違って完璧に複製した

「……………何だと？」

シバは同じ剣が出て来たことに軽く驚いていたが

「ハッ！！面白れえ！！！！！！

良いぜ、かかって来いよ」

「……………くっ」

龍士は不敵に微笑み、その手に二刀の夫婦剣を持って突っ込んだ

シバもそれに対抗するように槍を下段に構えて突っ込む

今、最速同士の戦いが始まった

紅き流星VS蒼き旋風 前編(後書き)

思ったより時間があつたのでもう一話ぐらい投稿しようかなと思つてたりします

……いや、できるかな？

でもできそうなんだよな……いやでもry

紅き流星VS蒼き旋風 中編(前書き)

え〜と最初の方に色々混ぜた所為で三部構成となりました

ごめんなさい

紅き流星VS蒼き旋風 中編

マグノリア バトル・オブ・フェアリーテイル

時は過ぎ、バトル・オブ・フェアリーテイルも終わりへと近づいていた

神鳴殿はエルザを筆頭に復活したFTメンバー達の一斉攻撃によって、合計およそにして300個の神鳴殿の破壊に成功

だが、生体リンク魔法により参加したメンバーは再び戦闘不能に

ナツは途中参加のガジルと共にラクサスを迎撃

しかし、その連携も虚しく、ほとんどダメージを与えられなかった

ラクサスの本気の『雷竜の咆哮』により、ガジルは戦闘不能

そこに復活したティアラが加入した

「まさかここまで鈍感だとは思いませんでした……」

「如何いう意味だぁ！！！！」

睨み合いの最中、ティアラは静かに言葉を並べていく  
それはまるで過ちを犯した者に向けた憐みの籠ったような声だった

「貴方はマスターマカロフの孫です

きつと妖精の法律フェアリーロウも使用できるのでしょう？」

「！！？」

ばれている

FTに伝わる超絶審判魔法、フェアリーロウ『妖精の法律』  
術者が敵と認識した者のみ打ち倒すという伝説の魔法

ラクサスはそれを既に習得していた

「しかし……それを使えるのですか？

貴方は本当は後悔してるのではないですか？

本当に嫌いなら時折見せる優しい表情は如何いう意味ですかね？」

「!?!?」

ティアラは最後に意地悪をする子供のような顔でラクサスに問いかける

「…如何やら自分では気づいていないみたいですね

つまり貴方は「うるせえ…」「……?」

「うるせえ!?!?! 俺の周りにいる奴は皆敵だ!?!?!」

弱っちいギルドの奴等も!?!ジジイの孫だからと正当な評価をしないマグノリアの連中も!?!

皆敵だああああ!?!?!?!?!」

ラクサスは今保有するすべての魔力を迸らせ、叫ぶ

それを悲しい眼で見るティアラ

この場にいる全員が呆気にとられていた

「俺は俺だっ!?!?!?!」

ジジイの孫じゃねエ！！！！

ラクサスだあああ！！！！！！」

「みんな知ってる」

ラクサスが叫ぶ中、突如そんな声が聞こえてきた

皆が一斉に振り向くとナツが片手を支えに立ち上がるところだった

「思い上がるな馬鹿野郎

じっちゃんの孫がそんなに偉えのか

そんなに違うのか」

立ち上がったナツはラクサスに語りかける

「血の？がりごときで吼えてんじゃねエ！！！！！！

ギルドこそが俺たちの家族だろうが！！！！！！！！」

「……テメエに何が分かる……」

ナツの言葉によってラクサスの怒りの矛先がナツに向けた  
滅竜魔導師特有の牙が生えた口から電気が漏れる

「何でも分かってなきや仲間じゃねエのか」

そしてナツも拳に炎を纏い、迎撃体勢に入る

ラクサスも拳に電気を纏う

「知らねえから互いに手を伸ばすんだろお！！！！！！　ラクサス！  
！！！！」

「だまれええええっ！！！！！！　ナツウウアアアアアッ！！！！！！  
！！！！」

そして互いの拳がぶつかり合った

マゲノリアの外

キンツッ！！カァン！！カキン！！ギイイイン！！！！！！

「はっ………！！」

「じゃっ………！！」

そこは戦場だった

シバは槍の射程圏内から敵を逃がさないように刺突を繰り返す

しかし、その一撃一撃がどれも急所を捉えたモノだった

龍士はその刺突を避けて、剣でいなし、を繰り返して敵の懐に入ろうと試みる

だが、その刺突の雨に龍士は接近できずにいた

ギャリイイーンッ！！

大きな音を立てた打ち合いを最後に両者は大きく距離を取った

「…やれやれ、速さには自信があったのだがね？」

こつもあつさり抜かれると少々悔しく思えてきてしまった

「ハッ！…抜かせ、弓兵風情が……………」

弓も何度か試したがあまり効果は無かった

それどころかシバに本業が弓であることを知られてしまった

龍士は師匠マヒに魔術を教わるにあたって、主に弓の技術を教わってきた

魔術の修業は、剣の修業よりも大きく時間を取っていたので、弓の方が上達しているのは当然だろう

だが、それをたった数回のやり取りで見抜いたシバも流石である

「弓兵の癖して二刀使いだあ？」

聞いたことねエぞそんなもん」

「生憎、師事した人物の影響だね

……何、別に問題は無い

君に遅れは取らせないさ

だが、まあそれは君の実力次第といった所だがね……」

「…言っじゃねえか」

龍士の一言を聞いたシバは目の色を変えた

……空気が一変する

辺りは静寂に包まれ、

シバは腰を深く沈め、右足を前に置いた状態に

そして両手を軽く地面、とまるでクラウチングスタートのような構えだ

だが、龍士はそんな構えを見ている余裕が無かった

「それ……は………」

シバが右手に持っているのは先程までの名が無い槍などでは無い

その紅い槍は世界の調律を乱し、因果を狂わせる

「気づいたか……コイツはまだ出会って数か月の奴だがな、コイツ自体に能力が付いてると来た物だ

喰らえ……我が必殺の一撃を……!!!!」

そしてシバは走り出した

一步、その一步でおそらく十メートルほどはいったただろっそこから  
二歩、三歩目で  
大きく上に飛んだ

その手には放てば無数の鏃を撒き散らすという槍があった

「突き穿つ《ゲイ》」

「

紡がれた言葉にその手の槍が呼応する

間違いない、あれは

シバは上体を大きく反らした状態から

「死翔の槍<sup>ホルク</sup>」

「!!!!!!」

怒号と共にその一撃を振り下ろした

ゲイ・ボルク

何故シバがそれを持っているのか  
そんなことを考えている暇は今の龍士にはなかった

目の前から破滅の槍が迫っている

だが龍士は右手を前に出した状態で目を瞑った

そして

「 I a m t h e b o r n o f m y s w o  
r d . 」

自身の内包した世界から最強の盾を引き出す

引き出したそれは七枚の花弁となって主へ向けられた破滅の一刺を  
阻む

「織天覆う七つの円環<sup>ロ・アイアス</sup> ! ! ! ! ! 」

キイイイン、ドオオン ! ! ! ! !

互いに大きな音を立て、衝突する槍と盾

かのトロイア戦争において、大英雄の投擲を唯一防いだという花弁  
それが織天覆う七つの円環<sup>ロー・アイアス</sup>

この盾の前には投槍など一枚も砕けずに敗れ去るだろう

だが、必殺の槍はその盾を苦も無く直進、貫通していく

数秒拮抗したが一枚、二枚、と花弁は四散していく

「ッ……………！！！！！！！！」

遂に、必殺の槍は最後の一枚へと到達した  
本来の主から放たれた一撃ではないというのにその必殺の槍の勢い  
は本来のモノと大差なかった

「ぬううううう……………！！！！」

龍士は突き出した右手に左手を添え、ありつただけの魔力を注ぎ込んだ

「ぬああああ……………！！！！！！！！！！」

そして

…ピキ…パキイン

カツ！

ドオオン！！

最後の一枚の四散と共に、その場で大規模な爆発が起こった

紅き流星 V S 蒼き旋風 中編（後書き）

後編は今日仕上げちゃいたいと思います

紅き流星VS蒼き旋風 後編(前書き)

出来ました!!

紅き流星vs蒼き旋風 後編

マグノリア バトル・オブ・フェアリーテイル

ナツとラクサスの戦いも終わりが見えてきた

いくら殴り倒しても立ち上がるナツシビレを切らしたラクサスは  
大技で決めようとしていた

「よせ!!!ラクサス!!!!!!」

今のナツにそんな魔法使ったら……」

直前で察知したフリードは慌ててラクサスを止めようとするが止ま  
らず

「雷竜方天戟!!!!!!」

無情にもそれは放たれた

満身創痍ナツに避ける気力は無かった  
元々立つてはられないほどの傷を負っているのだ

しかし、その攻撃は

……カクン

ナツの前で右に九十度方向転換してしまった

その先には

「うおおおおっ」

腕を鉄にしたガジルだった

自らを避雷針にすることでナツへの直撃を避けたのだろう

「ガジル」

ナツは思わずガジルを見るが

「行け」

ガジルの一言で決意が固まる

「この……畜生があああ！！」

ラクサスは追撃を仕掛けようとするが

「させません!!」

「があ……!!」

ティアラの超電磁砲によって麻痺し、隙が出来た

本来ならすぐに持ち直すのだが、先ほどの攻撃で魔力がほとんどなくなっただろう  
いつもより復活が遅かった

「火竜の……」

そしてナツは動けないラクサスに向かって駆ける

「鉄拳!!!!!!」

「がはっ」

ナツが渾身の右ストレートをラクサスに浴びせる  
しかし、ナツの攻撃はこれで終わらなかつた

「鉤爪!!!!!!翼撃!!!!!!剣角!!!!!!碎牙!!!!!!」

ナツの猛攻を一同は固唾を飲んで見守る

「その魔法、竜の鱗を砕き」

「竜の肝を潰し」

「竜の魂を刈り取る…」

誰からともなく呟く

それは書物に残る滅竜魔法について記された文だった

「滅竜奥義」

紅蓮爆炎刃

ドドドドオオオン

ラクサスは大きく吹っ飛び、起き上がることは無かった

「ラクサスが…負けた」

ナツは勝利の雄たけびと言わんばかりに吼えている

そこに

ドオオン!!!!!!!!!!

地面が大きく揺れる

「????????!!!!!!!!!!??」

大聖堂にいた者は皆（ラクサスはフリードが背負って）大聖堂の外に出た

地面が揺れた原因を探す

「あ、あれ！！！！」

レヴィが突然上を指さす  
皆が一斉に上を向く

そこでは

紅と蒼の光が空中でぶつかり合っていた

「！！！！」

ティアアラは驚愕した

蒼の方は知らないが紅の方は分かる

自分を救い、導いてくれた恩人

「…龍士さん！！？」

龍士・E・ペンドラゴンだった

「……………」

「>

龍士は槍と盾の爆発の後、木の方に吹っ飛ばされたようだ  
周りを見るがシバはいない

恐らく町の方に行ったのだろう

「……さて、如何したのか……」

龍士はそんなのとっくに分かっている筈なのに考えた  
無駄だったと気づき、苦笑する

「<sup>トレス</sup>投影、<sup>オン</sup>開始」

龍士は干将・莫耶を投影し、町の方へ向かった

屋根の上を通るとギルドの一番上で腕を組んで待っていた

「よぉ、来ると思ったぜ

……その体で俺に挑むのか？」

「無論だ。君に借りを返さねば些か気分が晴れないのでね

それに………」

「？」

龍士が突然言葉を切ったことにシバは頭に？を浮かべる

「生憎、この身に敗走は無い上にFT最強候補なんてものに挙げられている

そうおいそれと負ける訳にはいかないのだよ」

「……………はっ！！」

シバはゲイボルグを一度横に振り、構えた

「よくぞ言った

如何やら、そうひねくれた奴でもねえみてえだな？ テメエ……」

「くっ……俺は君とは仲良くなれないと思っているよ

龍士の軽口にまったくだ、返すシバ

「……龍士・E・ペンドラゴン」

「ああ？」

「俺の名前だ

何、君にだけ名乗らせては俺も気が済まないのね

「……そうかい」

そうしてお互い口を閉ざし、

ジャリ

その音を皮切りにお互い突っ込んで行った

最初に仕掛けたのシバ

その長い槍で龍士の胸めがけて刺突を三回、連続で突く

それを手にある二刀で器用に流す龍士

そうしてこれでもかと言うくらいに密着した状態になり、

互いの得物を相手に叩きつけた

その影響で、二人はそれぞれ別方向に吹っ飛ばされる

しかし、そこからすぐに体勢を整え、また向かっていく

鏑迫り合っては吹っ飛び、叩きつけては弾かれ、とあらゆる攻撃を  
各々仕掛けるが  
まったく互角だった

しかし、能力的に言うならシバの方が高い

龍士よりもスピードが速いのだ

しかし、それを龍士は先程の剣戟で分かっている  
それに悲観することなく

あらゆる手を使って敵と相対しているのだ

これが龍士の強みでもある

一度距離を置いた二人は少し動きを変える

シバは自身の名もなき槍を取出し、龍士は弓に剣やを番える

「はあ！……！！！」

「ふう……！！！」

シバは槍を投げ、龍士は剣やを放つ

しかし、両者はそこで止まらず先程の得物を再び出して相手に向かって行った

ドオオオオオン！！！！！！

その先程の一撃のぶつかり合った音をBGMに二人は鏝迫り合いを始める

そこからシバは高速の刺突、龍士は高速の斬撃を放ち何十と言った剣戟を始める

下ではFTの魔導師たちが啞然として見ていた

龍士とシバの次元の違う戦いに見入っているのだろう

魔導師は基本的に身体能力が低い

近接系の魔法を使う魔導師は別だが、ここまで動ける者は魔導師以外でもこの世界に片手で数える程度だろう

しかし、いよいよ百に到達するといった所で二人は互いに距離を取った

「っ！……はあ、はあ、はあ………」

「チツ……まったく飛んでもねエ野郎だ

テメエ…ホントに弓兵か？」

「…確かに、俺は弓が一番特化しているだろう」

だが俺は一度も弓兵と名乗った覚えは無いぞ？

それに、何事にも相性という物はあるだろう？

君の相手をするに当たって狙撃するために後ろに下がっては勝ち目はないのでね」

龍士は軽く皮肉を込めながら苦笑する

だが、疲労が隠せないほど消耗しているようだ

「…はっ…そうかよ……」

シバも笑ってはいるが疲労が目立つ

「お互い一撃で決める………どうだ？」

「やれやれ、今時それが流行っているのかね？」

まあ、乗らない手は無いが………」

途端、

シバから濃密な殺気と共に膨大な量の魔力が出て来た

本当にこの一撃で決めるつもりだろう

「（あれに対抗できるのは……………）」

龍士は一本の名剣の投影を始めた

イメージするのはフランスの叙事詩、『ローランの歌』の決して折れない不滅の聖剣

シバも互いの距離を縮める為に、魔力を込めながらその名を叫ぶ

「刺し<sup>ゲイ</sup>穿つ

」

龍士も迎え撃つように聖剣を大上段に構える

そして、

「死棘の槍<sup>ホルク</sup>

!!!!!!!!!!!!!!」

「絶世の名剣<sup>デュランダル</sup>!!!!!!!!!!!!!!」

宝具のぶつかり合いで起きた大規模な爆発が、戦いの終わりを告げた

幻想曲 前編（前書き）

長いので二分割

あれ？こんな長くするつもりなかったのに……

あれ？前もこんなセリフ（ry

## 幻想曲 前編

全てが終わり

FTギルド内

「ポーリユシカさんのおかげで一命は取り留めたそうだ」

その一言でギルドが歓声に包まれる

如何やらバトル・オブ・フェアリーテイルの最中にマカロフが発作で倒れたらしい

ギルドのメンバーは「とうとうぼっくり逝くんじゃないか」と気が気でなかった

しかし、年に一回開催する収穫祭”ファンタジア”は皆の疲労激しく、明日に延期となった

「こんな状況でファンタジアやるのかあ？」

「マスターの意向だし…こんな状況だから…って考え方もあるわよ」

エルフマンの愚痴にミラが律儀に返す

「ジユビアもファンタジア観るの楽しみです…！」

「あんたは参加する側だよ」

「ええっ!？」

ジユビアはカナの一言に驚く

入ったばかりの新人が出るのだから当然だろう

「怪我人多いからね」

まともに動ける人は全員参加だって」

「じゃああたしも!？」

「まあそうなりますね……」

ってことは私も参加することになるのでしょうか……………」

ルーシイの言葉にティアラは頷いた後、露骨に嫌な顔をする

余り人前に出たがる性格ではないのだ

目立つ行為が嫌いなのはどうしてあんなに雷魔法をぶっ放すのだから……………？

「それに見ろよ

あんなの参加できねーだろ？」

「……！」

「まあ無理ですねー」

グレイが顎で指した先には

体全体を包帯ぐるぐる巻きにしたナツとガジルだった

「確かに」

この姿を見たルーシイも思わず頷いた

「ふぁがふんごがー！」

あげがあんがぐー！！」

「何言ってるか分かんないし（汗）」

口まで包帯ぐるぐるなので何を言ってるのかわからないナツ

「無理だね

参加できるわけねーだろクズが」

「おがえがげおごおご……」

「それは関係ねーだろ」

口を塞がれていないガジルが突っ込む  
何故通じるか疑問だが………

「じゃ、じゃあアレはー!？」

「あん？」

今度はルーシィが指を指す

その先には

「……………成程、つまりその槍は君の師匠から譲り受けたモノなのだ  
な？」

「ああ、まあその後すぐどっか行っちゃまったけどよ…

別段、探す気も無えしな」

「まったく、その師匠も厄介な奴を弟子にしたものだ

どうせならこの態度の悪さも一緒にしごいてくれればいい物を……

……

「……ああ？」

と、優雅に紅茶を飲みながら会話をする龍士と

その近くのテーブルの上にヤンキーの様な座り方で座るシバ

……その後すぐ睨み合いの一触即発の空気に様変わりしたが

「止めて下さい！……！」

その二人に慌てて仲立ちに行くティアラ

というかこの三人は何故目立った傷が無いのだろうか？

三人とも引き分けでそれなりにダメージを負ったはずだが……と、よく見ると

マネットも入口の近くの長椅子をベッドにして寝ている

此方も目立った傷は無い

グレイもこの光景に啞然としていた

先程までティアラと話していたことは誰も突っ込まない

と、こんないつもの楽しい雰囲気に戻った時

「ジジイは？」

傷だらけのラクサスが歩いてきた

そのままマカロフの居場所を聞く

「ラクサス!!!」

「テメエ…どの面下げてマスターに会いに来やがった」

「そーだそーだ!!!」

勿論それにこたえる者はいな

「よさないか」

「!?!」

「……」

「奥の医務室だ」

「オィエルザ!!!」

い訳では無かった

居場所を聞いたラクサスはちらつと……衣天田に喧嘩している龍士達の方を見てからそのまま奥へ入っていく

……が

「んぐあゝっ！……！！  
ふあぐあぐゝゝ！……！！」

そこをナツに呼び止められ、

「ぎがんどゾリ？ 子んどばばじくゝらばん！……！！」

ぼか………ん

「……………」

「ふう……、ふう……」

相変わらず支離滅裂な言葉を叫んで一人息切れを起こすナツ

「二対一でこんなんじゃ話にならねエ

次こそはぜってー負けねえ

何時かもう一度勝負しろラクサス……！！

だとよ

ナツ語を一語一語正確に翻訳するガジル

隣でルーシィは疑問の声を上げるがガジルは頭ごなしに否定した

「俺もあれを勝ちとは言いたくねエ

あいつはバケモンだ

ファントム戦に参加してたらと思うと ぞっとするぜ」

スッ

そのままラクサスは通り過ぎようとする

ナツは怒りの声を上げるが

ラクサスは唯右手を挙げ、軽く左右に振った

それだけで十分だと言わんばかりにナツは喜色満面でラクサスを見送った

「さあ、みんな

ファンタジアの準備をするぞ」

「おい！！いいのかよ！！

ラクサスを行かせちゃって…」

「大丈夫よ きつと」

「てかミラちゃん!!」

何で怪我してんだよ!?

誰にやられたの!？」

誰かがミラの怪我に突っ込み

「ナツ…お前ラクサスよりひでーけがってどーゆーことよ…」

「んがごがー!!」

「こんなのなんともねーよ だとよ」

「ナツー血い!!」

血でてる!!」

正気に戻れば誰もが思うであろうことをナツに振りかけ、  
無茶をしたナツが出血し

「やんのかコラ!!!!」

今すぐ決着付けてもいいんだぜこっちは!!!!!!!!!!」

「くっ…野蛮だな

まあこちらも構わんよ

君の攻撃の傷など昨日の内に完治しているからな」

「僕も混ぜてよ……………」

「三人とも止めて下さい……………」

……………最後のは無視しよう!!

「騒がしい奴等だ」

それがラクサスが医務室に入っの第一声だった

お互い、目を合わせようとしない

「お前は……」

そう言いながらムクっと起き上がり、漸くラクサスの方を向くマカロフ

しかし、ラクサスはマカロフの方を向かない

「自分が何をしたか分かっておるのか？」

「……………」

未だそっぽを向くラクサス

「ワシの目を見る」

その一言でようやくマカロフの方を向くラクサス

照れていたただけだろうか……

「ギルドと言つのはな

仲間の集まる場所であり

仕事の仲介所であり

身寄りのねえガキにとっては家でもある

お前のモノではない

ギルドは一人一人の信頼と義によって形となり  
そしていかなるものより強固で堅固な絆となってきた

お前は義に反し、仲間を脅かした  
これは決して許されることではない」

「わかってる」

ラクサスはマカロフの言葉に動じることなく即答する

しかしその直後には俯き、拳を握る

「俺は…このギルドを…もっと強くしようと……」

その様子にマカロフは溜息を吐き

「まったく、不器用な奴じやの  
もう少し肩の力を抜かんかい」

そう言いながらベッドから降りるマカロフ

そうしてラクサスに歩み寄り、言葉を並べてゆく

「「そうすれば今まで見えなかったものが見えてくる

聞こえなかった言葉が聞こえてくる

人生はもっと楽しいぞ」

「……………」

「儂はな…お前の成長を見るのが生きがいだった

力などいらん、賢くなくてもいい

何より元気である

それだけで十分だった」

その言葉で体が小刻みに震え、何も言えなくなったラクサス

「ラクサス

お前を破門とする」

そう、

マカロフは”FTの害と為すもの”を切り捨てた

「ああ

世話になったな」

それに何も言わずに背中を向けるラクサス

「じーじ」

と、

ラクサスは昔呼んでいたマカロフの愛称を呼んだ

それだけで今のラクサスの気持ちが分かる

「体には気を付けてな」

「……出てい、げ」

ラクサスは破門されたことを全く気に留めず

唯祖父の身だけを案じてこの場を去った

幻想曲 前編（後書き）

ナツのあの言葉

コミックを読み直して自分なりに翻訳してみました

幻想曲 後編

マグノリア、夜の街

今日はマグノリアの皆にとって特別な日

年に一度行われる祭り 収穫祭

それは殆ど序での様なもので本命はその夜にある

FTの魔導師たちによる壮大なパレード

ファンタジア

パン！パン！

ドーン！！ドーン！！

花火が飛びかい、夜の空を照らす

その下ではFTが各々の魔法でマグノリアの街道を彩っていた

カナは自身のカードを

マカオは紫の炎を

ワカバは煙を

それぞれが使役する魔法で道を彩る者もいれば

それぞれが楽器を持ち、演奏する者や

独特の衣装を着て踊る者もいる

ラクサスはそれを木の影で一人、静かに見ていた

そしてメインの魔導師たちによるパフォーマンスが始まる

昼に行われたミスFTのコンテストに出ていた女の子たちによるダンス

皆楽しそうに笑って踊っている

接收をしたエルフマンによる迫力のあるアクション

その直後にミラが細工の施された花弁から姿を現す

その二人の姿はまるで美女と野獣であった

しかし直後、ミラのエルフマンを超える大きさのトカゲに変身した  
ことにより、  
周りは大きく湧いた

その後ろをグレイとジユビアが氷の城をバツクに通る

二人の姿はその城に住む王子と王女のようなようだった

ジユビアが水を操り、様々な方向行き交う

仕上げに、氷の城の周りを大きく回転する水にグレイが氷の魔法を  
かける

氷の魔法が掛かった水はFAIRYTAILと文字を象る

そのどれよりも大きく輝く剣軍を従え、

エルザが現れた

普段は無骨に見えるその鎧も今回は美しく感じられた

その後、エルザは前方に跳躍したかと思うとその場で換装

衣装に変わり、空中で剣を使った舞踊をする

この姿に男性陣が大きく湧いた

何もない台座

しかしそこには大量の剣が刺さっていた

そこでシバと龍士は互いに刺さっている剣を使ってお互いに激しい  
剣戟をしていた

しかし本気では無く、あくまで魅せる為の剣戟

時折、二人は剣を上投げたかと思うと

壊れた幻想  
フロークンファンタズム

爆散し、幻想的ともいえる光を残して消える

その光の中斬り合う二人の姿に男性陣は暑い声を発し

女性陣はその二人の精悍さに酔いしれた

ツボから出る火柱

その背中には燃え盛る炎

それらにまったく動じることなく、むしろそれらを従えるかのよう

に現れたナツが

FAIRYTAILと炎で文字を書こうとするが

「がはあっ!!」

ポッフポフン

「ナツ!!お前どーしたんだその怪我!!!!」

「よ…よせつて!!!!ぐだぐだじゃねーか」

「あはははは!!!!」

ラクサス戦の怪我があるせいか満足に炎が出せない

それを知らない町民は心配する声を上げる物やそのぐだぐださに爆笑する者も

皆で魅せるファンタジア

それを見る者達の中にはかつて争った者もいた

しかしその顔にあるのは感嘆のみ

争い、敗れたことなど頭の片隅にもないような晴れやかな顔だった

そこに、

「マスターだ」

「マスターが出て来たぞ!!」

マカロフが奇抜な衣装で妙にコミカルな動きで踊りながら出て来た

それを見た皆は苦笑いを浮かべる

ラクサスも苦笑いを浮かべつつ、その顔は何処か嬉しそうだ

『じーじ！！俺…パレードの最中、これやるから！！…！』

『じーじを見つけれなくても』

俺はいつもじーじを見てるって証！！！！！！』

それは昔、ラクサスがマカロフと交わした約束

その数年後には二人は仲違いになり、今はこうして落ち着いた

『見ててな！！じーじ』

「……………」

ラクサスはもう後悔は無いとばかりに晴れやかな顔でその場を後にしようとする

しかし、

バツ！！！！！

「？……ッ！！」

音が止んだことを不審に思い、再びパレードに目を向けるラクサス

そこには

天に向かって右手の人差し指を突き上げるFTの皆がいた

それはかつてラクサスがマカロフと交わした約束

「たとえ姿が見えなくても

お前をずっと見守っている」

そう決められた約束事

それを見たラクサスは静かに涙を流し、

「ああ…ありがとうな」

その場から立ち去った

こうして

ファンタジアは今まで以上に盛り上がり、皆満足の結果で幕を下ろした

幻想曲 後編（後書き）

オチが……orz

まあそんなことよりも（おい

前からずっと思ってたんですが……

この作品三点リーダー多いな……！！！！

龍「それは君が勝手に入れてるだけだろう……（呆  
」

番外日常？ 騎士王の訪問 前編（前書き）

今回からしばらく番外編に入ります

初期のころに取ったアンケートとかもやりたいと思います

番外日常？ 騎士王の訪問 前編

ファンタジアが無事に終わり、翌日

.....

.....

.....

あの後ファンタジアの打ち上げと言っことで俺達は朝まで飲んで  
た訳だが.....  
調子に乗りすぎたな

くっ……頭痛と軽い吐き気がする

これが二日酔いと言っちゃつか……

とりあえず水を飲みに行こうとリビングのドアを開け

「おはようございます、リュウジ」

無言で閉めた

………はあ、今日は調子が悪いみたいだ

ギルドに行かずに寝ていようか？

そう思いながら気持ちを改めて再度ドアを開いてみた

そこにはやはり

「いきなりドアを閉めるとは何事ですか、リュウジ？」

「……………何でいるんですか？」

俺に剣の修業を付けてくれた親とも呼べる存在

騎士王……………アルトリア・ペンドラゴンがいた

「……………で、今日は何故此処に？」

と…いつかアーチャー師匠はど…うしたので…す？」

「ああ、シロウなら置いてきました」

酷いことをサラッというセイバー師匠

あれか？いつまでもぐずってるから置いてきたとかそんなところだろうか？

「それと何故来たかはですね」「どうせ暇つぶし序でにこっちの世界はどんなところか

見に来たとかでしょう？」「そ、そんなことは無いですよ……」

否定するのはいいけど目が泳いでますよ師匠

まったく……まあ、幸いにして今日は特に予定もない

二日酔いのこの頭でも町の案内位、出来るだろう

「……はあ、なら今日はこの町を案内しますよ

その前に朝ごはん……は要りますね」

朝ごはん、と言う単語を出した直後に目が光ったのが見えた

……はあ、経験したことは無いから分かんが、一体山何個分作ればいいのかね？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

そして俺たちは朝食を食べてきたわけだが……

ストレートに言ってしまうおう

家の食糧が無くなった………

言葉通り、正にその通りなのだ

確かに最近忙しかったし、数日前まで家を空けていたのだからそんなに残ってはいなかった

カビが生えた物を出す訳にはいかないからな

だがそれでも一部屋の三分の一は埋まるぐらいあったのだ

それなりに節約すれば五日……いや一週間は持っただろう

しかし！！師匠は顔色一つ変えないで食べたのだぞ！？

あの約一週間分の食糧を！！！！

一体その体のどこに入るのですか師匠……………（汗

「では、参りましょうか、リュウウジ」

そんなことまったく気にせず俺に話しかけてくる師匠

服は第五次聖杯戦争で着てた服を着ていた

そう言えばあの空間でも来ているな……

おっと、話が逸れかけたな

俺は黒のジーパンに黒の下地に赤の歪な模様が入ったロングコート  
下にはこれまた黒いTシャツを着ていた

「それで？……何処に行くんです師匠？」

「はい、この世界に来たことは無いので……  
とりあえず露店にどんなものが並んでいるのかと……」

成程な、確かに師匠たちは転生者と関わりを持たない限り、この世  
界を訪れたりしないだろう

しかも自身がいた世界とは違った発展を遂げているから珍しいだろ  
うな

俺はもう慣れたが

「りゅ、リュウジ……アレは何ですか!?!」

「ああ、あれは……」

街を出歩いてから数時間経つが

やはり師匠には新しい物ばかりで珍しいだろうな

途中幾つか食べ物にも手を出したし

「……………む？リュウジ、あの丸い水晶のようなものは？」

「あれは魔水晶<sup>ラクレマ</sup>といって……………そうですね、師匠の所で言う『魔力のこもった宝石』といった所ですか

……………まあ、そのまま戦闘に使う人はそう多くはいませんが……………」

「成程……………」

そう呟くと師匠はじっくり見入ってしまい、しばらく動きそうになかった

やれやれ、しばらくここで立ち往生か



「む……？」

師匠もようやく顔を上げ、歩き出して数分後にとあるアクセサリ―  
シヨップを見つけた

……ちょうどいい

俺は八百屋で野菜を興味津々に見ている師匠に気づかれない様にこ  
っそり

中に入り、パールツク的首飾りを買った

途中「彼女へのお土産買い？」と茶化してきたが……

「リュウジ、何処に行っていたのですか？」

戻ると師匠は若干ムツとした顔で俺を見てくる

…そうだ

確か師匠は目立つのが嫌いだったな

「あ、ああすみません

貴方にこれをお思いまして」

そうやって俺はペアになったネックレスを渡す

首に掛ける？

まさか

俺がするわけないだろう？

それはあくまでアーチャー師匠の仕事だ

それを見て少し大げさに驚く師匠

「こ、これは……ふふ、気を使わせたみたいですね、すみません、リュウジ」

「……いや、礼をされることなど何も……」

そうしてまた露店を見ていると

「そう言えば前回質問し損ねたのですが」

「む………何ですか？」

「貴方が行っていた転生者との戦いの後、霞城桜に会いませんでしたか？」

「………気づいてたんですか？」

やれやれ、やはり師匠には適わん

その直感ほもはや未来予知にも匹敵するのではないかね？

「……まあ、会ったことは会ったが……」

「会ったが？」

「姿とかいろいろ変わってました

髪も黒くなって少し伸びてたし、眼の色も何処か霞んでいた

……おそらく、何らかの暗示か、魔法を掛けられているかでしょう」

桜の髪は元々薄目の金髪だ

それに長さも首がすべて埋まる程度の長さであった

あの時見た限りでは腰に届くほどまで伸びていたな……

やはり桜の身に何かがある

「髪の色はともかく、長さは唯伸ばしていただけではないですか？  
それにもかしたら金髪から黒に染めただけかもしれないですし……」

「いや、それは無い

桜は神に整髪料とか付けるのを嫌ってたんです

それにあまり長くはしたがないし……彼女の周りは異常なほどど  
す黒い魔力に覆われていました」

「っ！……成程、それで『黒』ですか……」

「恐らくは……」

色はそれ自体が意味を持っていたりするからな

じっさい、あそこまで黒い髪は前世でも見たことが無いぞ

「……すみません、何だか重い話になってきましたね」

「いや、別に構いませんよ」

……それよりほら、まだ案内の途中でしょ？

早く行きましょう」

そうやって俺は師匠を連れて歩き出した

桜については時が来たら考える

そう決めたんだ

ま、問題ないさ

なんせこの身は

『正義の味方』なんだからな

番外日常？ 騎士王の訪問 前編（後書き）

何かかつこよく終わってますがまだ前編です  
と言っても前編に色々突っ込み過ぎたし元々一話で終わらせるつもり  
だったのでネタ不足だったり……………（汗

番外日常？ 騎士王の訪問 後編

「そういえばリュウジ、最近鍛錬の程は如何ですか？」

案内も終わり、ギルドにでも行こうか…と考えている時、師匠が突然そんなことを聞いてきた

鍛錬か……………

最近の仕事が多いしこの前まで十年クエスト（あと数年で百年だから百年クエストでもいいか？）に行っていたからな…

更に帰ってすぐは戦闘し、その後は軽い療養期間に入り、その後も少し遠くに……………

む、まったく言っていないほどじゃないか

そもそも相手になってくれるティアラが許してくれなかったし

どう答えていいか分からない俺を見た師匠は苦笑しながら声を掛けて来た

やはり帰って来る答えがわかっているのだろう

「でしたらどうでしょう？」

久々に打ち合い稽古でも……………」

打ち合い

つまり久しぶりに師匠と稽古か……………」

まあどうせ打たれまくって終わりだろうが何もしないよりマシだろう

そうして考えがまとまった俺はその旨を伝える

「了解しました……………なら公園にでも……………」

「おお〜い！！おまえらたいへんだあ〜！！」

魔導師ギルド、フェアリーテイル

そのギルドの入り口に一人の男が大急ぎの様子で入ってきた

皆に呼びかけたその男は息を切らしてはいるがそんなこともお構いなしに話を続ける

「りゅ、龍士が知らない誰かと竹刀持って打ち合いしてて……」

それを聞いた瞬間、何だそんなことか……、と呆れてまた各々の作業に戻ろうとする

龍士が暫く仕事続きだったのは皆知っているし、療養していてもまだ本調子ではないだろうとも思っている皆にとってどうでもいい話だった

だがその後、男の口から信じられないことが聞こえてきた

「それでよ!!! そいつ、龍士に手も足も出させずに押しちまうんだ!!!」

あの龍士がだぜ!? しかもその相手がまだ十代ぐらいの嬢ちゃんなんだ!!!」

これにはさすがにみんな驚く

出会った当初から無敗で、FT最強候補の一人（もうコイツ最強じゃね?…と唱える者もいる）にも数えられる龍士が手も足も出ないというのだから当然と言えば当然…か？

「……………はっ！！面白え！！！！！」

それを聞いた蒼い着物に黒寄りの紺色の長髪を首のあたりで結んだ男、シバが急に大声を出して飛び出していった

「ちよ、シバさん何処に行くんですか！？」

偶々近くにいたティアラが声を掛ける

龍土が絡むと真っ先に行きそうだが流石に今回の件は予想外なようだ

シバが突撃していくまで固まっていたらしい

「決まってるんだろ！！その強えつつう嬢ちゃんの相手とその嬢ちゃんに負け続きの惨めなクソ野郎をバカにするためだ！！」

いや、どんだけ嫌いなんだよ

シバの答えを聞いた皆が満場一致でそう思った

「少しはやるよつになりましたが……まだまだですね」

「くっ……」

やはり強い

自分もそれなりに力量は上がったとは思ったのだがまだまだ師匠には及ばない

「二刀の方はシロウに任せていましたが……やはりそっくりですね」

師匠セイバ曰く「太刀筋はシロウにそっくり」とのこと

やれやれ、仕方のないことだが改めて見せつけられると少し凹むな

「……少しはすっきりしましたか？」

「?…何のことだ？」

唐突に師匠がそんなことを聞いてくる

一体何がすっきりしたのだろうか？

「本当は負い目に感じているのではないですか？」

霞城桜を巻き込んでしまったことを」

「ッ！？……………くっ……………」

やはりこの人には適わん

生前…と言うか転生前からこの人にウソは通じなかったな

そういえば師匠アーチャーがいつていたな

「自分は凜とセイバーには基本的に勝てないと決まっている」と

俺もそうなのだろうか？

「ああ、やはり師匠には適わん」

「ふふ、その様子では気晴らしにはなったようで何よりです」

俺は思ったことをそのまま口にし、苦笑する

その苦笑に対して師匠は満足げな笑顔を浮かべている

二日酔いで少し辛かったが…成程、その割にいい一日ではあったな

途中、蒼着物のバカが乱入してきたが師匠に呆気なくやられていた

番外日常？ 騎士王の訪問 後編（後書き）

如何でしたか？

セイバーの突撃訪問

龍「終わりが中途半端だな」

それは仕方ない

なんせこの話考えてから数週間経つけどいまだに落ちが思いつかなかった位だから

龍「この駄作者め……」

うっさい！！まったく……

まだ番外編は続きます

ようやくできますね…あの話が

龍「ああ、夏に取ったアンケートか

……少し尋ねるが、あれは本当に見る人がいるのか？」

さあ？

龍「さあって…因みに何票来たのだね？」

……一票

龍「……読者に見捨てられた哀れな作者WWW」

.....ΣΠΕΝΔΩ

## オリキャラ紹介2（前書き）

桜の紹介にかなりスペース取りそうだったので2という形で更新します

## オリキャラ紹介2

シバ・トリスタン

放浪者

マグノリアの『バトル・オブ・フェアリーテイル』でラクサスが龍士の足止めをするために連れて来た槍兵  
現在はFTに身を置いている

基本的に着物を好んで着る

髪は黒寄りの紺色で肩甲骨の少し上あたりまでの髪を首の上の方で結んでいる

基本的に昼寝か釣りをするが龍士が絡むと色々殺伐とした雰囲気になる

言動と持ち物からしてシバの師匠は『クー・フリーン』と予想される

ステータス

筋力：B

耐久：B

敏捷：-（測定不可）

魔力：C

幸運：C

宝具：B

スキル

無し

使用魔法

無し

宝具

刺し穿つ死棘の槍ゲイ・ホルク：B

突けば必ず相手の心臓を貫く呪いの槍。その正体は、結果の後に原因を導く因果の逆転。

種別 対人宝具

レンジ 2～4

最大捕捉 1

突き穿つ死翔の槍 ゲイ・ボルク

ゲイボルクの呪いを最大限に解放し、渾身の力を以って投擲する特殊使用宝具。  
本来こちらがゲイ・ボルクの本当の使用法である

種別 対軍宝具

レンジ 5～40

最大捕捉 50

霞城桜

龍士の幼馴染

龍士の呪いの運命によりこの世から消されたうちの一人  
現在は龍士を転生させた神によってFTの世界に飛ばされる

龍士と違って肉体の再構成では無く、前世で使用していた肉体で転生している

前世では病弱だったが、剣術を代々受け継ぐ霞城家では「歴代最強」とも言われるほどの実力を持つ

そして現在（グリモアハート編以前）は黒髪を腰まで伸ばし、赤の十二単衣を着ている

基本的無手だが最も得意とするのは刀である

容姿

作「これに関してはモデルがいます

Fateイメージアルバム『Wish』の表紙の…ぶっちゃけセイバーさんがモデルです

上のでググってみると分かると思います」

龍「…何も考えない駄作者め……」

スキル

筋力：E（スキル制限）

耐久：D（スキル制限）

敏捷：S（スキル制限）

魔力：-（測定不可能）

幸運：D

宝具：？

スキル

病弱：A

体の弱さによりステータスが落ちるスキル  
Aだと身体的ステータスが2は落ちる

桜刀斬神流：EX

霞城家に伝わる剣術

EXは歴代最強と言われるほどの実力となる

使用魔法

？

宝具

？

### 桜刀斬神流

開祖「霞城高峯」が開いた剣術  
桜の木の下で天皇を暗殺したとも言われる  
詳細は不明だが、当時は『桜刀流』と言われていた説もある  
この名については一族内で目下研究中だが現在、『斬神は「天皇」  
を斬る』という意味が有力である

その舞うような武闘と鋭い歩法は敵に動くことを許さない

何時しか流派を継ぐ者には必ず刀を鍛造され、継承者は桜刀斬神流

の稽古は必ずその刀で受けると決められている

基本的に外部から来た者も多いが長い歴史の中で当主を継いだ者は皆霞城高峯と少なからず何らかの関係を持った者が受け継いでいる（特に血縁関係を持った者が多い）

流派は中で

『舞刀曲』

『無刀曲』

『奪刀曲』

『歩刀曲』

の四つに分かれている

この剣術を受け継ぐ者はこのうちの一つを選び、鍛錬することになる

一つの曲にはそれぞれ型があり、舞刀曲は拾、無刀曲は質、奪刀曲は伍、歩法曲は参まであり、最後の型を『終の型』として放つ

また、型の名を言わずに技を放つことを『破綻曲』という

スピードと自由度は上がるが威力は落ち、終わった直後に生じる隙が多くなる（約0・1から0・5まで、この隙は一族の中では致命的である）為、殆ど使わない

当主はこのうちの一つを完成させた者唯一人を選抜し、決めることになる

しかし、歴代でもその世代に置いて曲を完成させた者は必ず一人しか出ていない

完成した者は一から終までの型をほぼ同時に放つこと（刀語の『七花八裂』と同じこと）が出来る

そして、二つの曲両方を完成させた当主も歴代当主の中で存在しない  
例外的に開祖である霞城高峯と歴代最強である霞城桜（生前、まだ当主を継いではいなかった）の二人は全ての曲を修めている

一つ曲を選んでも必ず完成した者は最終奥義『逆天夢想』に到達する

最終奥義『逆天夢想』

開祖『霞城高峯』が「この世は儚き泡沫の夢なり」と説いた末に出した結論にして  
彼の答えとも言われる奥義

故に桜刀斬神流の存在意義とも言われる技  
開祖はこれで天皇を切ったとも言われる

歴代当主の中でこの技が一致している者はいない  
つまり、先代当主の『逆天夢想』を使用可能にしても当主になり得ることは無い

歴代当主たちの奥義は多種多様だが皆総じて『周囲が切り刻まれるほどの剣圧が生じる』という  
霞城桜は四つの曲の集大成として『逆天夢想』を完成させた（本人は龍士以外に明かしていない）

## オリキャラ紹介2（後書き）

桜の説明、というか流派の説明が長すぎた

龍「もう少し簡単にすればよかったのではないか？」

いや、これだけは絶対に譲れない！！

なんせ全部の型、昔から全部頑張って作ってるんだから

龍「……………作ってる？」

ギクツ！？

ま、まあその辺は置いといて今回は終わりと行きましようか！！

龍「あ、コラ！勝手に終わらせて

」

更新は基本毎週日曜です

ではまたお会いしましょう！！

龍「……………帰るか」

番外日常？ 龍士の土産話1 空白の二年

夜

魔導師ギルド フェアリーテイル

活気のあるマグノリアの街も夜が来れば静かな空間に様変わりする

このギルドも静か

「ぎゃははは……！」

「おい！！それ俺の肉だぞ……！！！」

「ああ！？うつせえな……！」

「んだとコラ！？やんのかテメエ……！！！」

ではなかった

いつものように騒が、いつものように喧嘩をしている

そんな酒場の二階、その丁度一階の大広間が見える柵の所でしんみり酒を飲む男が一人

男はいつも来ている紅い外套に今では師匠同様真っ白となった髪隣では大和撫子の様な美貌を持った少女と黒寄りの紺色の髪に血の気が多い目を持った蒼着物の男

「へえ、それじゃテメエはつい最近戻ってきたばっかなんだな」

蒼着物の男：シバは瓶に入った酒をラツパ飲みしながら紅い外套の男：龍士に語りかける

「ああ…正確には帰ってから数週間といった所だが……………」

そう言つて龍士もグラスに入ったワインを飲み干し、隣の瓶からワインを注ぐ

「というか二人とも、どれだけ飲めば気が済むのでしょうか…………？」

龍士の隣の少女：ティアラはその笑顔を若干引きつかせつつ二人に無駄とわかつていて質問する

実はこの二人、今手を付けている酒で既に十本目を超えていたりするそれだけの量が何故入るのか、そして何故そんな平気なのかそのティアラの質問にも答えずに会話は進む

「お前達、いい加減其処までにしないと明日起きれなくなるぞ」

そのどうにも説明しがたき雰囲気の所に一人の赤髪の女性が入ってきた

赤い髪に西洋風の鎧を付けた女性

エルザ・スカーレット

エルザは呆れながら二人を見る

当の二人は平然とした態度でエルザに対応する

「別に大丈夫だったの

この前みてえなへましねえしな、なあ？」

「無論だ

それに…たまにはこんな日もあっていいと思ってね」

シバと龍士の中が良い！？

そこに驚いた付近の一同は固まっている

もちろんティアラもだ

普段止めている側としては珍しすぎる光景だろう

当の本人たちは外野を無視して意気揚々と話を進めていた

「そうだ！！だったらその二年も掛かったっつうクエストの話聞かせろや！！！」

しかもシバは少し酔ってきていた

だが意識ははっきりしているようで呂律もまわらない訳では無いみたいだ

周りもシバの言ったことに興味があるのか龍士をじっと見ている

「そうか……まあ丁度いい機会だな

酒の肴にでもしてくれ」

そうして龍士は語りだした

FTを出た後、俺は一度評議員に侵入して情報を集めていた

今回のクエストはいつもとは違う

何か情報が無い限り対応するのは難しい

まだ数年残っているがそれでも百年クエストの候補なだけあって意外と簡単に情報は集まった

長く太い銀の鱗を持つ体に九つの尾を持ち、

その前方にある二本の腕とその体をうねらせて雪山を掛ける

名をカウルーンというらしい

カウルーンの全長は約3.5メートル

その鋼鉄の様な牙は1メートルにも及ぶ

しかもその牙には麻痺性の猛毒付きだという

基本的に肉食、しかも肉ならほかの肉食動物でも食い散らすほどの  
獰猛さ

雪山で奴と遭遇すると静観することは出来ないと言われる程だ

そこから奴は『殺銀の十頭』、クロガネ『鉄の毒大蛇』と言われている

俺はそこで本を閉じ、気配を悟られない様に評議院から出た

この程度、気配遮断のスキルが無くとも容易い

「やれやれ……」

今回はてっとり早く済ませたいところだが…如何やら、そうもいかんらしい

「ままならないモノだ………」

雪山に入る為の装備（軽い防寒具とホットドリンクの様な暖かい飲み物等）を整え、雪山を上る

両手には刀にまつわる全ての事をたった一人でやってのけた天才的な刀鍛冶、四季崎記紀の

最後の十二本、完成形変体刀十二本が一本『炎刀・銃』を握っている腰にはスサノオ神がヤマタノヲロチを尾を斬り、倒すのに使ったと言われた剣アマノハハキリノツルギを腰に差している

ヤマタノオロチとは違うが、普通の剣より蛇との相性はいいだろう  
今回はいつもと違い、おそらくスピード勝負となる

手元にある炎刀では無理だと思うが…弱点ぐらいは見つかるだろう  
この銃の役目は『弱い部位を探すこと』  
それが果たせれば接近した時、こちらが優位に立てる

そして龍士は気を引き締め直し、手元の回転式連発拳銃と自動式連発拳銃を握る力を強める

この雪山は麓の村から大体三キロほど先に行った所に入口がある  
中は奥の方に行くまでは人が五人並べるかどうか程の横幅に大体100メートルほどの高さだった

その先を行くと三本の分かれ道になっていて  
右に行くと頂上に？がる広い空間に  
真ん中を行くと雪山内に広がる大空洞に  
もう一つある天井付近の入口は頂上に行く途中にある

左を行くと雪の広がる世界を一望できる  
だが崖が近いのであまり近寄れない

それにどれを行っても温度が急激に下がる  
万全な準備は必要ではあるがあまり重装備でも困る

右に進み、頂上付近までを探索する

しかし、

「……いない（気配も読めないし、ここは少々入り組んでいるな）」  
『声』が聞き取れていても正確な場所が読めないのだ  
今分かっていることは『この雪山にいる』ということだけだ

「しかし、よく考えればここまで来たというのに一度も生物と接触



「ッ！？何っ！！！？？」

突如穴から叫び声上がり、『何か』が龍土に向かって振り下ろされる

咄嗟に後ろへ引いたため、事なきを得たが

ドゴオオン！！

『何か』が貫いた場所に積もった雪は一瞬で弾け飛び、その下に地面にまで及んでいた

「……………尻尾？」

龍土は突き出されたモノを観察し、静かに分析に入る

最初は首かと思った

しかし地面から抜け出た所を見て確信した

尻尾には顔と同じような輪郭を持ち、口に当たるところからは鋭利な牙のようなものが前方に突き出されている

尻尾と断定できた要因は『顔』が全く崩れなかったからだ

判別しづらいがこれならまだ何とかできるだろう

そしてその尻尾は静かに穴に戻っていく

そして今度は先程と同じ尻尾が二本、三本と出てきて、仕舞には九本出て来た

そして最後に尻尾とあまり変わらない大きさの頭が出て来た  
しかしその頭は明らかに他とは違った印象を持っていた

その頭と胴体を繋ぐ太い首

そして顔から怪しく光る紫の双眸

その牙からは液体のようなものがこぼれ、細い舌はチロチロと止ま  
ることなく動いている

「…現れたな、『カウルーン』……」

龍士は一眼見た瞬間、先ほどまでとは違う表情を作った

本気の目

この大蛇を前にして龍士は本気を出す必要があると理解したのだろう

そこから龍士は速かった

何の予備動作も無しに手元の炎刀・銃の引き金を引く

銃から放たれた弾は全弾寸分違わずカウルーンの牙に命中した

カウルーンはそれを気にも留めず、龍士を串刺しにしようと尻尾を伸ばす

「くっ……!!」

横に二、三ステップを踏んで回避した後、弾が続く限り色々な場所を撃つ

何処も弾かれたが他とは手ごたえが違う箇所がいくつもあった

そうして龍士は腰のアマノハ八キリノツルギを抜き放ち腰に差してある投影した鞘を捨てる

そして下段に構えたかと思うとその場から姿を消した

次に姿を見たのはカウルーンから一歩手前ほどの場所だった

「うおおおおおおおおお……!!……!!……!!」

その場から一歩踏み出し、その手に持つ剣を一息に切り上げた

少し遅くなりました

龍「少し説明が多いのではないか？」

はい

今回説明した三つのは右に行けばモン○ンの雪山のエリア6

真ん中に行けばエリア3

左に行けばエリア7

そしてエリア6からエリア8に行く途中にエリア3に？がっている  
と思ってくればいいです

龍「…随分と簡単に説明してくれるな？

というかモンハ○要素が多くないか？」

簡単になればそれでいいのだ！！（どーん！！）

あつ因みに『カウルーン』とは英語で漢数字の九を意味します

龍「それでいいのか作者よ……」（呆）

番外日常？ 龍士の土産話2 龍対蛇 そして……

ギャリイイイイイン！！！！

「くっ……！！」

剣を斬り上げた瞬間、大きな音と共に龍士の体が大きく後ろに傾く

「（なんて硬さだ。これほどまでに固いと数回斬りつけただけで折れてしまう……）」

龍士はカウルーンの鱗の硬さに僅かながら戦慄した

その隙を縫ってか、カウルーンは右手の爪で龍士を切り裂こうと大きく振り上げる

「ちっ……」

しかし、それを黙って受ける龍士では無い

唯のバックステップでは避けられないと見た龍士はその手にある剣

を惜しみなく投げ捨て、  
後ろに向かって大きく蹴りだして空中へ飛ぶ

「トレース  
投影、開始」

そう呟いて右手を軽く掲げる

「フリーズ  
凍結、解除」

カウルーンは追撃を仕掛けようとこちらへ向かってくる  
しかし、後方へ飛んだ龍士のスピードはもはや人の域を超えている  
いくら相手が人外だろうと早々遅れを取りはしないだろう

「ロールアウト  
バレット  
クリア  
工程完了、全投影待機」

そうして龍士は背後に数十の剣軍を配置する  
龍士が掲げた右手を向けるとその剣軍は一斉にその標的に向く  
カウルーンは相変わらず龍士に向かって走っていた

いくら後方に飛んだからと言って距離がかなり開くわけでは無い  
龍士が魔力強化を行い、自身のスキルに上乘せをして数百メートル  
ほどだ

無論、龍士はこれを一瞬で移動できるが

カウルの現在のスピードは目測でおよそ1000m/分

龍士にたどり着くまで数秒を要する

そしてそのままカウルに向かって剣軍を発射する

「フリーズアウト停止解凍、ソードパレルフルオープン全投影連続層写……………!!」

発射された剣軍はそのままカウルに向かっていく

……………例によっては今回も弾かれるわけだが

「ギユル!!!!!!!!!!????」

それでもカウルにとっては不快に思ったのか、意識がそちらに向く

「……………壊れた幻想」ブローケンファンタズム

……………ドドドドドオオオオオオン!!!!!!!!!!

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!????」

突然の爆発にカウルーンは反応できず、もろに受けた

辺り一面を爆風が覆う

「これでやられるとは思わないが……………」

何処までいけたモノか

龍士はそう呟き、念のために干将と莫耶を投影する

煙が晴れ、辺りが良く視認できるようになった所で周りを見るとそこには何もいなかった

「む？……………逃げた…訳ではなさそうだ、な！！！！！」

咄嗟に龍士は言い切る前にその場から離れる

その場には先程のカウルーンの尻尾と思われるモノが突きだしていた尻尾自体はさほど脅威という程脅威ではないがその先端についている牙のような鋭利な突起物が危険である

あれに刺されたらひとたまりも無いだろう

「むっ……………!!」

龍士は着地した直後も足を休めず、一定の位置にいない様に移動する  
そしてそれを追う様に尻尾が突きだしていく

九本すべて突き出た所で尻尾がすべて地面に再び戻っていった

それを龍士は警戒して観察している

その直後に、尻尾では無く本体が一番最初に出て来た  
地面には手にある爪で掘っているらしい

「まあ後ろ足無いし、潜りやすくはあるか……………って今は関係ないか」

そんなどうでもいいことを考えていて少し動きが鈍った龍士

そこにカウルーンが今度は自身の牙で噛みつこうと身を乗り出して  
きた

大きく口を開いているため、その場から口内が見える

「……………むっ?」

その時、龍士の頭の中で一つの考えが浮かんだ

少々危険だがうまくいけば決定打に足り得る一撃が入る

「…まあ、分の悪い賭けは嫌いではないがね……」

そう呟いて手元の干将・莫耶を口内に向かって投擲

「壊れた幻想」  
ブローケンファンタズム

爆破した

「ギイイヤアアアアアア……」

今回の一撃は重かったのか、口から煙を吐きながら体を後ろに大きく反らすカウルーン

それを見た龍士は少し安心した顔で後ろに跳躍した

「やはり口内は固くも無いか…しかしそう何度も狙えないな……」

今回の一撃でカウルーンに警戒レベルは最大まで引きあがるだろう  
先程まで出さなかった攻撃パターンも出てくる筈だ

龍士は手に干将・莫耶を投影し、両手に持って油断なく構える

「ギュルルルル……」





「カラボルグ？  
偽・螺旋剣！！！！」

放った

放たれた剣は光となってカウルーンに直進する  
カウルーンも異変に気付き、意識をそちらに向けるが既に剣は目の  
前まで迫っていた

ズドン！！！！

剣がカウルーンの体に当たった音が大きく響く  
光の線が鱗を大きく削っていく

「ギユルルルル！！！！」

カウルーンは大きく体を下に沈めることで剣の射線上から外れる

「……しぶとい」

そう呟いて龍士は再び剣を投影しようとして構える

カウルーンも体から煙が出ているがその身から出る有り余ったさっ  
きは健在だ

” その時 ”

「うおー——————ん  
！！」

突如、狼のような遠吠えが雪山に響く  
しかし狼の声にしては綺麗で透き通っていた

龍士は静かに警戒するがカウルーンは眼を血走らせ、辺りを見渡し  
て声の主を探している

まるで生涯の宿敵でも探しているような感じだ

龍士の『見聞色の覇気』は今回殆ど無意味なので最初から目で探し  
ている

そのとき、カウルーンとは比べものにならない殺気が辺りに充満した

「ッ！！？」

これには龍士も軽く眩暈を起こす  
殺気の出所を辿り、目で追っていくと

「……………あ」

いた

この雪山の頂上

そこからこちらを静かに見据えている狼のような生物が一体いた

白銀の毛に蒼い瞳

その口から僅かに見える牙はどんな生物でも刺し殺せるほどに鋭利にできていた

ここからでは判断しづらいが大きさはカウルーンの半分ほどだろう

その逞しい足で力強く地面を踏みしめている

その眼は何処までも静かで、

何処までも粗ぶっていた

カウルーンは龍士のことなどまるで最初からいなかったかのようにその狼に向かっていく

頂上から飛び降り、危なげなく着地した狼はゆっくりと歩き出す

そこに向かって走り出したカウルーンは牙から毒を撒き散らしながら大口を開けて襲い掛かっていく

「……………なっ！！！！??」

そこで龍士は驚愕した

それはそうだろう

カウルーンの尻尾がすべて切れているのだから

カウルーンは自身の尻尾が切れていることに、既にその場に狙っていた狼がいないことに気が付いていなかった

狼は後ろからゆっくりと歩き

その牙でカウルーンの首を噛み切った

「……………」

圧倒的だった

スピードに関しては負けているつもりはない。だが問題はあの牙だ  
カウルーンの鋼鉄のような鱗を紙のように噛み切ってしまった

「……………む？」

その狼が今度は龍士の方へと向いた

先程の眼とは違い、明らかに敵意を抱いている

「……………成程、奴にとって俺は自身の縄張りに入り込んだ邪魔者…  
といった所か」

そう呟いて龍士は一本の”刀”を投影する

決して折れず曲がらない、永久機関のような刀

絶刀『鉋』

「……………」

「……………」

最早二者の間に言葉はいらない

邪魔者を排除するという者とそれに抗う者

他方は人では無いがそれは関係ない

龍士は『匏』を腰の辺りに地面と水平となるように構える

狼は前のめりに構え、いつでも突撃できるような体制を取っていた

瞬間

二者は消えた

番外日常？ 龍士の土産話2 龍対蛇 そして……（後書き）

ティ「サブタイの『そして……』の部分はこういう意味だったんですね」

そうですね

まあ名前は次話で明かされますが

ティ「ちゃんと決まってるんですか？」

勿論です

まだ明かしませんが

それより今日はティアラなんですね？龍士は？

ティ「龍士さんはあちらでシバさんと殺し合っていますよ？」

そろそろマネットも混ざる頃でしょうか？」

え、なにそれ怖い

というかそれ以上にそれで平然としてるティアラが怖い

番外日常？ 龍士の土産話3 手負いの皇帝

「おおおおおおおおおおお！！！！！！」

雄たけびを上げながら龍士は刀を腰だめに構え、突っ込む  
対する白銀の狼もその巨大な体で全力疾走する

互いが既に規格外な疾さを持っているので一瞬で互いが眼と鼻の先  
まで迫っていた

「報復絶刀！！！！！！」

腰だめの位置から一気に絶刀『鉋』を突くがその巨体が横に流れる

「ッ！！！？？……（いや、流れたというより……）」

流された

そう言った方が正しいかもしれない  
実際、龍士が突こうとした方向と結果突き切った方向が少なくとも  
斜め30度はずれている

龍士はすれ違い様に振るわれた左前脚を躲そうとするが…

ザシュツッ！！！！

「グウツ……………」

腹部を大きく斬られた

目で見ただけならただ掠っただけに見えるかもしれないがその足は  
確実に龍士に傷を負わせた

互いの距離が大きく開く

銀狼はその足でしっかりと、龍士は半ば全身で突っ込む形で地面に  
着地する

「ガハ…………ツ！！」

着地しても龍士は腹の傷が想像以上に深く、まともに呼吸もできない  
全て遠き理想郷アヴァロンは正常に起動しているが完治に時間が掛かる  
セイバーの魔力を込めれば話は別だが今はそれが出来ない  
自身が込めても微弱にしか回復しないし、そんな余裕が今は無い

この状況は正に

「絶体絶命と言っちゃつか……………」

龍士はそう呟きながらヨロヨロと体を起き、弱弱しくもしっかりとその足で立った

その様子を銀狼は最後まで何もせず、ジッとみていた

それはこの雪山に君臨する皇帝故かそれ程に余裕があるのか

「……………まあ……………後者だろうな……………」

実際銀狼の眼は唯一つを示していた

侵入者の排除

それだけがその静かな眼に見えている

その眼を見た龍士はチラツと自分と銀狼の中間辺りに落ちている絶刀『鉋』を見る

あの距離なら今の自分では走って取るのは無理

その前にあの狼に食い殺されるだろうな……

そう考えた龍士は絶刀『鉋』を破棄する

そしてその手に最も馴染んだ二刀……干将・莫耶を投影した

「今の自分にどこまでできるか分からんが……」

行くぞ……！銀狼……！！」

そして龍士は雪山の王者に向かって行った

「はっ、はあっ……はあっ……ぐっ、ガハッ……」

死闘が始まって数時間

此処で遂に龍士に限界が来た  
その場でしゃがむこみ、吐血する  
白い雪に吐いた血が赤く彩る

「はあっ、はあっ、はあっ……やれやれ、此処までか……………」

そう呟きつつも龍士は口元の笑みを崩さない  
諦めているわけではないだろう

だが逃げる気も無いらしい

死の一步手前にいるにも拘らず龍士は怖い程にいつも通りだった

「……………」

それを見た銀狼はクルリと踵を返す

数十メートル離れた所で首だけを振り向き

「……………」

ジッと龍士を見た

まるで再戦でも望むかのように……………

そしてそこから銀狼は頂上に向かって一足飛びに駆けあがっていった

それを見届けた龍士は身体を横たえ

「グッ……………」

静かに目を閉じた

「……………む？」

ふと、目が覚めた

そこは極寒であった雪山とは違い、暖かい空気が辺りを支配していた  
身体が十分に温まっていることからおそらく数時間は気絶していた  
のだろう

しかし、ここは一体何処だろうか？

あの後すぐに気絶してしまったのだから火を焚いてはいない  
ふと自分はどんなところにいるのかと辺りを確認する

周りは夜で視界が上手く働かなかったが焚かれた火によってある程  
度は確認できる

如何やら山を下り、麓の村の近くのような

誰かが毛布を掛けてくれたみたいだから恐らくここで野営を張って  
いたのだろう

「おっ！！目エ覚めたかい？」

そう言って傍まで近づいてくる者が一人

黒髪を後ろに流し、深い緑の着流しを着ている

背中には大刀一本、小刀三本と少し奇妙な組み合わせだった

その顔には所々刻まれたしわが目立つ

老人…と言う訳ではなさそうだ

精々初老といった所だろう

「いやあくびつくりしたよ

雪山を下山してたら吹雪のご真ん中で君が血まみれで倒れてるんだもん」

その男は飄々とした態度で俺に接してくる

……正直対応しづらい

こういうタイプの人間は苦手だ

何処か抜け目ない性格をしていて色々なことを隠している節があるからな

……ふむ、このまま何も言わないのもまずいな

「……助けて貰い、真に感謝する

しかし何故雪山に？あそこはカウルーンが出ると言われなかったのかね？」

「あれだけ猛吹雪の中なら別に問題ないさ

僕は隠密は結構得意だからね」

そう自慢と言えるか分からない（本人は自慢のつもりだろうが……）  
ことを言いながら

俺に……正確には俺の身体に一瞬目を向けた後

「それで、君の名前は？なんて言うのかな？」

……ああ、まず僕も自己紹介しなきゃだね」

これはつつかりだ

とからからと笑う男はとても初老には見えなかった

そんな俺を気にも留めずに話は進む

「僕のことはそうだな……ジーさんとも呼んでくれ」

これが俺と俺の恩人……ジーさんの出会いだった

番外日常？ 龍士の土産話3 手負いの皇帝（後書き）

龍「……………」

テイ「……………」

い、痛い！！二人の沈黙とその冷めたような目が痛い！！  
な、何でそんな目してるのさ？

テイ「…だって」

龍「ああ」

龍・テイ「何故戦闘をあれほど飛ばし（たのだ？/たんですか？）  
」

グツ……………し、仕方ないでしょう？あれがメインという訳じゃない  
んだから

龍「ほう？つまり君はメインになる部分以外は適当で構わない…と  
？」

テイ「まったく…今年残り一か月と少しというのに…………大丈夫なん  
ですか？

このまま行けば今年までに一段落つきませんかよ？  
目標にしているのでしょうか？」

そつなんですよねえ…新しい小説も書いてみたいけど作者は一気  
に二つ書くほど余裕も集中力もないし…………

龍「そもそもあのサブタイは何だ？」

それはまた次回

龍「……まあ……とにかく自分のペースで書いていくのがいいだろう」

無理矢理終わらせた……でもそうですね

ではまた次回まで！！

短くて申し訳ございません！！

作・龍・ティ「」「」次回も是非よろしくお願ひします！」「」「」

全治一年

それが俺がジーさんに告げられた診断結果だ  
今は麓の村で療養に入っている  
実際このクエストは無期限だから別に構わんが……  
いや、そもそもカウルーンはあの銀狼に討伐されたのだからもう関係ないか？

……いや、そういう訳にもいくまい  
なんせあそこに入ったことで奴の闘争本能を焚きつけてしまった  
あの眼は知っている  
より強い強者と戦うという強い願望を秘めている  
野放しにしていると村に降りてくるかもしれないな

そうして今後の方針を立てているとドアを開けてジーさんが入ってきた  
現在は俺が少し仲良くなった人の家でこの部屋を借りている  
如何やらその人はこの村の長老の家らしく、その人は長老の孫だそう  
うだ

……ちよつと待て、あの人絶対三十代入ってるよな？子供いたし  
……長老一体いくつだよ

ま、まあ要するにこの村の長老に部屋を借りている。と思えばいい  
訳だ

#### 閑話休題

ジーさんは俺を見ると飄々とした笑みを俺に向ける  
その顔は何処か一仕事終えたような笑みだ

「やあ龍士君、とりあえず村長には報告してきたよ  
しれで依頼追加だっさ」

「……ああ、分かっている」

どうせあの銀狼の討伐だろう？

それに関しては構わん

だが傷が残った状態で奴を討伐しきることは不可能  
そして情報も乏しい

ジーさんなら何か知っているのではないだろうか？

「ジーさん、あの銀狼は……」

「僕も直接見てはいないからよくわからないけど……  
雪山に現れる白銀の狼と言ったら一つだけだよ」

「……………そいつの名は？」

「……………」

ディフアント

それがその銀狼の名前だ」

ディフアント……………

成程厄介な相手だ

だが手負いの侵入者を治療のために一時休戦を望む辺り戦闘強の節があるのだろうか？

……………まあそう考えるのが妥当だろうな

「別名『手負いの皇帝』」

皇帝のように君臨し、傷を負えば負っただけ強くなる」

「……………何だと？」

何だその反則的な力は……………」

長期戦なんてできないじゃないか

「それだけじゃないよ

ディファントはその体に自ら魔法をかけているんだ  
どんな魔法かは未だに分からない  
唯一つだけわかってしていることは………」

「分かっていることは？」

「個体によってその体に掛けられている魔法が違うことだ」

！？………何だと？

ならば奴等は既に魔法を理解し、使役できるということではないか  
！！

「その通りだよ

実際、前回見つけた個体は辺りに炎を放っていたらしい

君が言っていた特徴から考えると風の魔法だね」

成程、だから奴とすれ違い様に斬られたという訳か  
ならそれなりの対策を取らねばならんな

「まあ何はともあれ全治一年だ

ゆっくり休んでくれないとこっちも困る」

そう言ってジーさんは部屋を出て行った

部屋にいるのが俺一人となり、話し相手もついさっき消えたので俺は少し寝ることにした

「ディファント…か」

「…………む？」

ふと、目が覚めた

辺りは暗く、村の人たちも眠りについている  
静寂が辺りを包む中、『何か』に惹かれた

…おそらく『覇気』の所為だろうな

そう考えながら家を出る

違和感を感じた場所は……農場か

ここは農業が盛んだ

だが解析すると寒さに弱い作物も栽培されている  
恐らく何か魔法を使っているのだろう

その土に埋まった作物を少し眺めた後、溜息を一つ

冷たい空気が肺の中に入り込み、先程まで布団に籠っていた火照った体を冷やしていく

そして徐に雪山の方へ意識を向けた

………ディファント、か

あの銀狼は相当の手練れだがジーさんのいうことが本当なら奴はまだ戦いをほとんど経験していない…謂わば子供だ

いや、ジーさんから言われた特徴から逆算すると大きさ的には既に大人だ

となると、やはり……

傷を負う前に敵を食い殺す

ということか

……これは中々大変な依頼を受けたモノだ

そこで考えるのを中断し、農場を進む

辿り着いたのは壁だった

しかし、梯子が掛かっており、上ると鉱石を採掘するためのピッケルなどが置いてある

全体的に鉱石が埋まっているみたいなので、何処を掘ってもすぐに探し当てられるだろう

だが龍士は梯子を上らず、その左前方から見たらわからないような位置にある洞窟を発見した

恐らく何か秘密があるのだろう

そうでなければ態々こんな分かりづらいところに洞窟を作ったりはしない

そう考えて中に入ろうとする、……が

「あ、あの!!」

突然後ろから聞こえてきた声に反応し、後ろを向いた

そこには一人の少女がいた

龍士はもう少し辺りを警戒しておくべきだった。と己の未熟さに腹が立ってた

だが辛うじて顔に出すのだけは防いだ

龍士が何を考えているか分からない少女は言葉を控えめに並べていく

「…も、もう動いてもだ、大丈夫なんですか？」

「…ああ、問題ない

しかし君は何故此処にいるのかな？」

子供はもう寝る時間だろうに

そう考えながら目の前の少女に疑問をぶつけた

少女は目に見えて困惑し、どう答えていいか分からない。といった様子だ

やれやれ、とため息をついてそんな少女に声を掛けた

「別に答えたくなければ答えなくても構わん  
唯の興味本位だしな

そういえば君の名前を聞いていなかったな……

俺は龍士だ

君はなんというのかな？」

その言葉に少女はハツとなってその疑問に答えた

「わ、私はルカって言います！！そ、それで……えっと……」

たどたどしい自己紹介をされた龍士はニコツと笑って

「そうか、よろしく頼む

それと俺を呼びとめたのは……」

そこで言葉を切って背後の洞窟に目を向ける

答えは疾うにわかっているみたいだ

「…………アレが理由か？」

その言葉にルカはぎょっとして固まってしまった  
その様子を見た龍土は

「やれやれ、言っただろう？」

別に話す気が無いなら構わないと

君が望むなら今すぐここから立ち去ろう」

そう言って

龍土は農場の入り口の方へ歩き出したところで

「あ、あの……………！」

再び呼び止められた

振り返った時に見たルカの顔は大きな決意を宿している

「……………誰にも言わないと誓ってくださいますか？」

番外日常？ 龍士の土産話4 再戦に向けて…（後書き）

余裕があったので二つ目作成、即投下しました！！！！

龍「最後のアレとは何だ？」

それいつちゃ面白くないでしょう？

まあまた来週になりますか……

龍「高校は大変だな……」

本当ですよねエ

忙しいッたらありやしない！！

まあ凍結はしませんかね！！！！

それでは読んで戴きありがとうございます  
また次回

番外日常？ 龍士の土産話5 剣と銀狼

「どうぞ……………」

誰にも言わないと約束し、中に案内してもらった

中はさほど暗くは無い

先の方に光が見えるから、外に？がっているのだろう

「失礼する……………ッ!？」

中に入り、そこにあつた物に俺は驚愕した

そこに置いて…いや刺してあつた物は

細長く、それでいて力強い作りに見える軽く湾曲した剣、分類で言えば野太刀に分類される剣だ

刀身は蒼く、峰は燃え盛る炎の様な形になっていた

鍔には数本の棘が付いており、それだけでも十分武器になりそうである

柄も普通の刀にしては長く、倍はあるだろう

「（間違いない……！！）」

俺は確信した

「コイツが”俺を呼んだ”のだと

それは数多くの龍を斬ってきたと言われ、それ自体が龍を憎んでいる呪われた妖刀

その一太刀は大型の龍をも切り捨てる程と言われる正に『龍殺し』の太刀

龍に対して絶対的な愛称を誇る

銘を『龍刀・劫火』こっか

俺が投影できなかつた刀だ

いや、刀自体の特性に一種の概念武装にまでなっている

……ははは、これは神に見せて貰った物より強力ではないか？

「何故これがここに……（いや、それ以前にコレがここにあって平気なのか？）」

「あ、あの………」

この刀があると竜が寄って来るのではないか？  
この世界ならば恐らく唯一残っている龍殺しの太刀だろうに……

…ん？待てよ……

この刀自体が龍を憎んでいるなら感情なり何なりある筈だ  
もし仮にこの世界の竜が近づいたならばそれ相応の憎念をその竜に  
与えるはず

それを察知した竜が警戒のために近づかない……と

「……成程、そう考えるのが妥当だな……」

「あ、あのー…聞いてます？」

考えてみれば近くにモンスターが蔓延る雪山があるというのに近辺  
にそいつらが降りて来た形跡が見られない……恐らく龍刀の憎しみ  
が他のモンスターにも流れて来るからなのだろう  
現に解析を掛けてから頭に声が響いてかなわん  
まあこの程度如何ということも無いがな

だが、俺にまで憎しみを抱くのは如何なものか……

確かに俺は自身の名前に龍の名を二つ持っているがまさかそれが原  
因か？

名前は自身の存在の証明であると同時に

その者の本質を形作ると言うが「聞いてますか！……！」「うおっ！  
？何だ？

横から突然大声が響いたので、思わず肩を震わせる  
恐る恐る顔をそちらに向けるとプリプリと言う音が聞こえそうなく  
らいに頬を膨らませた  
ルカの姿があった

「さっきからずっと黙ってて…声かけても返事してくれないし…  
…」

そうやって怒っているのを見ると年相応だと分かり、思わず頬が緩  
みそうになる

おっと、今は我慢すべきところだな

「すまない、少々考え事をしていてね……

ところでこの刀は一体？」

話題を変えるべくルカに問いを投げかける  
案の定乗ってくれたルカは怒りを擧めて質問に答えてくれた

「この剣は昔から刺さっていて私たちを守ってくれているんです

おかげでこの近辺にはモンスターが出ないし……」

「そうか……」

やはり先程の推測は正解だろう

モンスターがこの刀の憎しみを警戒して近づいてこないのだ

「……抜かないで下さいよ？」

「とんでもない」

俺の目を見て何を感じ取ったのか念を押しってくるルカ

安心しろ抜きはしない

精々利用させてもらうがな！！

くくく、今は無理だがいざという時の為に解析は済ませておこう

竜と相對しないという保証はないからな

不敵に微笑んでいる俺をルカは終始ジト目で見ていた

療養に入って半年と三か月

はっきり言って傷はほぼ完治していると言っていていい  
この身に埋まる鞘が傷の回復を促進させているからだろう

現在は村の畑仕事を手伝っている  
偶に体を動かさない鈍ってしまうと村長に言っ  
て手伝わせてもらっているのだ

ルカとも週に何度かは顔を合わせている  
といっても向こうがこちらに会いに来るからだが  
その時に採れた食材を使って昼飯をご馳走したりしている内にいつ  
の間にかルカの兄ポジション  
に位置付けられた

……まあ、悪い気はしないが  
徐々に心を開いてくれたのか今ではすっかり「お兄ちゃん」だよ  
やれやれ、全国のお兄ちゃんはあるんじゃないや馬を妹に持つのかね  
え？

「おにいちゃんーん！ーん！ーん！ーん！」

おっと、噂をすればじゃじゃ馬の登場だ

走り寄ってきたルカはこちらに笑顔を向けてくる

その笑顔に俺は一瞬桜が見えた

似ていないというのに…一体どうしたのだろうか？

「おにいちゃん？」

黙っている俺を不思議に思ったのか下から顔を覗いてくるルカ

「いや、何でもない」

そう言ってルカの頭を撫でた

ルカは気持ちよさそうに目を細め、俺の腕を引っ張ってくる

「お昼の時間だって村長さんが言ってたよ！！」

早く食べに行こー！！」

そういえば今日は村長の所で食事をするのだったな

俺は苦笑しつつもルカに腕を引かれながら村長の許へ向かった

「待たせたな村長、昼を誘って載っているのに申し訳：む？如何した？」

村長の所に行くとジーさんと二人深刻そうな顔をしていた  
何かあったのか？  
相当深刻な話らしいが

「実はディファントが山の麓で発見されたって報告が来てね

その対処について相談してたんだ」

……とうとう来たか

くっ、待っていたぞ皇帝

待ってる

すぐに俺が貴様の首を獲りに行く

番外日常？ 龍士の土産話5 剣と銀狼（後書き）

因みに『龍』という字で日本に伝わるあの長細いドラゴンのことですがドラゴンボールの神龍とかがそうですね

フェアリーテイルの出てるイグニールとか四肢の生えたドラゴンは『竜』と書きます

Wikipedia等で調べるともっと詳しく載っていると思います

番外日常？ 龍士の土産話6 雪山に佇む銀の帝王

「……………やて」

こちら龍士、只今絶賛遭難中…ではないが

まあ察したかもしれんが現在雪山だ

許可？そんなもの貰った覚えはない

村長の家をそのまま飛び出してきたのだからな

だが防寒装備を持って来なかったのは痛いな……

おかげで体が少々動きづらい

魔力強化で誤魔化していなければ凍死確定だな

そんなことを考えながら歩いて数か月前に訪れたあの場所に向かった

「さて……着いたはいいが」

今度は何処にいるのだろうか？

生憎今回は手加減などするつもりはない

前世で言つたら…… 『最初からクライマックスだぜ!!』 といった  
所か

……今はどうでもいいな

若干自分のキャラが壊れていってると感じながら  
辺りを注意深く観察する

……いた

山頂へ続く坂の方からゆっくりとこちらに歩いてきた  
その眼は俺一点に集中している

狩る

その一言しかその眼は語っていなかった

「さて…あの時付けなかった決着を付けるとしようか？」



「グオオオオ……」

「ハアアアア……」

バキン！！シュツ、ガキイイイン！！！！！！

## 牙と剣の応酬

龍士の剣は何度も破壊されたが再び投影することでまたその手に剣が握られる

だがそれに訝しむことなく銀狼…ディファントはその牙と爪を目の前に得物を狩ろうと振るう

龍士は何度か懐に潜り込んだが周りを覆う風に吹き飛ばされる

今までのことを考えると疑いたくなるが龍士は人間だ

その体に強風が吹けば多少よるめきもする

「……くっ」

龍士はここで顔を歪ませ、後ろに飛んで距離を取る  
前回の戦闘で受けた傷が開き、その上からさらに傷を負っている為、  
ダメージは相当だ  
ディファントも警戒して追撃を仕掛けない  
此処で龍士は軽く思考に入る

「（やはりあの風の出所が分からない……出すなら口かもしれんが  
普段は閉じているみたいだな）」

やはりもう少し探りを入れるべきか

そう結論付け、その手に持つ干将・莫耶を投擲した  
ディファントはその場から動かず、風を発生させて弾く

「やはりそう簡単に尻尾を掴ませてはくれないか

……トレース  
投影、開始オン

そして龍士が投影したのは全長3・4メートルに匹敵する大太刀『  
祢々切丸』

といってもその刀身は鞘の入っていて見ることが出来ない  
だがこれでいい

そのまま龍士は鞘に入ったままの『祢々切丸』をディファントに投

げつけた

本来なら途中で失速するが今回は違った

……シュッ

音を立てて鞘から刀身が出て来た

そのキラリと光る刃がディファントに向かい、

「ギャン!!!？」

その巨体に深く突き刺さった

祢々切丸は遙か昔は『山金造波文蛭巻大太刀』と呼ばれていた大太刀で、二荒山神社の拜殿に安置されていた

日光の『ねね』と呼ばれる虫の妖怪を討伐する際、人の手を借りることなく、鞘から抜けて自ら妖怪にとどめを刺したと言われているその後山金造波文蛭巻大太刀は祢々切丸と呼ばれるようになった

そこからこの剣には『狙ったものに自ら飛んでいく』という変わった概念がある

龍士はそれを利用したのだろう

ディファントは多少よろめきながらも龍士に威嚇する

そして

「ウオオオオオオオオン!!!!!!!!!!」

風を辺りに巻き起こしたかと思うと自身の体に突き刺さった袷々切丸を抜いた

風を自身に掛けるということは当然自分にダメージを与えることになる

「グルルルルルル……………」

案の定、ディファントは先程の勢いを失くしてしまった  
だが龍士はその姿を見て一つの疑問が浮かんだ

「（体全体に傷を受けて尚周りの風が消えない……………か）ということ  
は」

そう呟いて干将・莫耶を投影する

「やれやれ……………如何やら決着も近いようだ」

そう言って堂々と接近する龍士

それを見たディファントは臨戦態勢を取る

「行くぞ皇帝!!」

「狩られる覚悟は充分か!!!!!!」

番外日常？ 龍士の土産話6 雪山に佇む銀の帝王（後書き）

次回決着です

番外日常？ 龍士の土産話7 決着の一閃！体は剣で出来ている

雪山は基本的に静かである

生物の死骸も無ければ争いも起きない

あるのは唯吹雪の音と日常から切り離された銀の世界

だがそこは確かに戦場だった

辺りに血はばらまかれ、白い世界に赤を足す

静かに積もる雪は只々崩れる

造形された形を崩す様に

一つの完成品を壊す様に

そしてその戦は静かに終わりを告げようとしている

ザクツ、ザクツ

「……………」

足元の雪を音を立てて踏み荒らしながら龍士は山を下山する  
手はもはや感覚を失くし、足もちゃんと歩けているのか自分で分か  
っていない

だが龍士はその身を貫く痛みなど関係ないとばかりに歩みを止めない

「……………」

だがそれは雪山を抜けるには少し遅すぎる  
どの方向を見ても雪、雪、雪  
既に自身が歩いた形跡など消え去っている

歩みを止めればそれで終わりだ

止めてしまえばもう一生動けないだろう  
そう自分に言い聞かせ、歩き続ける

龍士は歩みを止めないために考えることをしなかった

「……………」

ふと、後ろを向き、見えるはずがない場所を見る  
だがそこには白に彩られた赤が、

自身と他者の血で彩られた赤い世界が確かに広がっていた

そしてその雪で覆い隠せない程膨大に広がる赤い世界の中心に  
もう動くことのない皇帝が安らかに眠っていた

龍士は決別の意味も込めて目を逸らす

「……………」

龍士はまた前を向いて歩き始めた



雪山の吹雪が些か荒れて来た頃

龍士とディファントの闘いも決着が着こうとしていた

ディファントは風を

龍士は剣を互いに使い

敵を斬りつけ、時には放つ

その争いが原因で周りは血で真っ赤になっていた  
雪山に広がる白い雪のキャンパスが赤で彩られる

「はあっ、はあっ、はあっ……………」

「クルルルルルル……………」

何回目かもわからない

数えたら切りがない

それ程の数、龍士と目の前の銀狼は交差していた

龍士も呼吸は乱れ、ディファントの鳴き声にも力は無い  
だがそんな中でも龍士の口元は確かに笑っている

目も死んでいない  
寧ろ一際力強く光っている  
それは決して楽しんでる物ではない

何かを……………企んでいる時の笑みだ

「そろそろ頃合か……………」

そう呟く中でも、ディファントは容赦なく襲い掛かる  
雪山で生きているだけに足元の雪に足を取られることはない  
やれやれと身体を流す様に右に傾ける

倒れかけた体を支える為に右足を地面に叩きつけるように踏みつける  
それでも体が重く感じるのは血を流し過ぎたことによる貧血が原因  
だろう

後から襲い掛かってくるディファントの風を避けきるほどの力は無い  
だが軽減することは可能  
そう考えた龍士はその手に干将・莫耶を投影し、十字に構えること  
で衝撃に備える

キィィィン！！

「グウ……ッ！」

その手に加わった衝撃と高音が腕と耳を刺激される

その手にかかった負担は想像以上に強く、大きく後方に吹き飛ばされた

激痛が両腕に走る

何故まだ腕が着いているのか不思議なほどだ

腕全体に痺れが広がるが、決して剣を握れない訳では無い

目の前には傷を受けて尚、威風堂々と立つ『銀の帝王』

またの名を『手負いの皇帝』

その身に傷を負えば負うほど闘志を漲らせ、力を底上げする

先程の剣は折れ、投影している内に相手にやられ、デッドエンドかと言って無手でいけばそれこそアウトだ

今までこれほど苦戦した相手はいなかった

龍士にとって転生して以来初めてのピンチだ

だがその強敵を前に龍士は口元に笑みが浮かべていた

距離にしてわずか三メートル弱

この決戦の舞台と比べるとあまりにも近すぎる

相手なら一息で飛び越えてくるだろう

周…りの剣など無視して

「……すまないが」

龍士は静かに

「これで終わりとしよう」

戦いの終わりを宣言する

その眼には絶対的な自身と決意が入り混じっていた

その傷ついた身体で尚、力強く立つ姿はまるで一本の剣の様に見える

無骨なれど美しい

龍士はそれを体で体現していた

龍士はその身に無茶な強化の魔術を掛け、疾走する

ブローケンファンタズム  
「壊れた幻想」

一つ…の言葉をその場に残して

ドドドドドオオオオン！！

「グオオオオオオオ！！！！！！！！」

その爆発の中心でディファントは吼える  
大きく体を振らせ、痛みにもがく

爆風を掻い潜り、いつの間にか投影していた干将・莫耶を

「鶴翼しんぎ、欠落ヲ不ラズ」

渾身の力で投げつけた

その剣は宙を舞うことなくそのまま銀狼に向かい、突き刺さる  
だがその剣がその身に宿す風で弾きだされることは無かった

「心技ちから、泰山やまをぬきニ至リ

心技ちから黄河ヲ渡ル」

そこから二度、三度投げつけられた剣がディファントの体に刺さった  
ディファントはそれでも尚、龍士に襲い掛かる

その眼で龍士を見据え、左前脚が龍士を潰そうと振り上げられる

だが流石に『手負いの皇帝』と呼ばれながらも、あの爆撃は決定打になり得た

そのスピードは今までで一番遅い

龍士はアツサリ避けてまた投影した干将・莫耶を投擲する

「  
唯名、せいめい別天二納メりきゅうにととぎ」

今度は左右それぞれ逆の方向に夫婦剣が放たれる

放たれた夫婦剣はその特性を活かして左右から一気に中心へと向かっていく

銀狼の体にはすでに同じ二本一对の夫婦剣が三組刺さっている

最後に投げられた夫婦剣の車線上にいる銀狼

その一撃は今の銀狼には重すぎる

直前に龍士は上体を逸らし、出来る限り爆風から遠ざかる為に後退した

交差した瞬間先程よりも小規模な爆発が起きる

「~~~~ツツ!!」

銀狼は声にならない悲鳴を上げ、前足から体が崩れてゆく

その体は既に動くこともままならない  
龍士も本当なら同様に倒れているところだが強化の魔術がそれを無理矢理に防止している

その両手に握られた干将・莫耶は先程投げたモノの倍以上にまで巨大化した

龍士は剣が握られた腕を交差し、疾走する

その姿はまるで大きな翼が生えている様にも見える

「うおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

強化の魔術を掛けていてもその体は限界だった  
それでも尚、龍士はその足を決して止めない

そして目の前の死に体の『皇帝』に

斬<sup>ザン</sup>！！！！！！

今出せる究極の一撃を放った  
その一撃は全力とは言わずとも、十分にこの戦いに終止符を打つに  
なり得た

龍士は両腕を振り切ったまま、銀狼は前足を地面についたまま、  
時が止まったように両者は動かない

先に動いたのは銀狼

その身に辛うじて残っていた力はその一刀のもと、崩れ落ちる  
そして地面に崩れ落ちた体がもう二度と起き上がることは無い

そして龍士の口から、最後の歌が紡ぎだされる

「  
両雄われら、共ともにてんをいだかすニ命ヲ別ツ」

吹雪はいつの間にか勢いを失くしているようにも感じた

「  
そして依頼を完遂した俺はまた麓の村で……

…  
「

「療養生活、ですね？」

言葉を取られた龍士は渋い顔をしながら肯定した  
そのティアラが挟んだ言葉に周りは苦笑いする

話を最後まで聞いていた者は最初の半数程もおらず、後は全員眠りに落ちていた

「しかし……まあ随分不幸な目にあってんなあ」

ディファントなんて下手すりゃ百年クエストレベルの大物だぜ？」

「そんなこと、分かっているぞ……」

龍士の向い側に座っていたシバがやれやれと手を肩の高さまで上げる  
龍士も自覚はあるのか溜息を吐いて苦笑していた

「まあ八つ当たりの意も込めて近辺の闇ギルドを潰していたからストレスは無いが……」

たった一言

ボソツと呟かれた一言で起きていた者全員の酔いは冷めた

「なんつうか……」

「規格外だな……」

「流石龍士さん……」

「な、何だね君たち？その少しばかり心に来る目は……」

全員から放たれる何処かチクリと心に刺さる目線に龍士は困惑する

龍士の困惑する姿を見た皆は次の瞬間大笑いした

龍士は訳が分からず、唯頭に疑問符を浮かべる

その夜、マグノリアは平和な笑い声が満ちていた

番外日常？ 龍士の土産話7 決着の一闪！体は剣で出来ている（後書き）

ようやく終わりましたね

龍「まあ、これは……」

テイ「そうですね……」

龍・テイ「」（貴様／貴方）の駄文が悪い」

ちよつとおお！？

それは初心者に対して酷くないかい！？

龍「もう三か月はやっているだろう……」

テイ「それ以前に無駄が多すぎます……」

最近二人が辛辣だ……（泣

六つの祈り 二体の悪魔

夢を見た

そこは何時か見た桜の木

未だに色褪せることのない遠い記憶

その桜が散らす花弁はとても幻想的で

手で触れることを躊躇われる

その花吹雪の中に立つ一人の少女

少女はこちらに気づかず、ただ前を向いている

こちらに気づき、漸く後ろを向いた彼女

彼女はこちらを見て

満開の桜のような笑顔をこちらに向けていた

「オラシオンセイイス  
六魔將軍が？」

闇ギルド

その中でも最大勢力を誇るといふ三つのギルド、”バラム同盟”の  
一つ

グリモアハート  
悪魔の心臓

その飛行艇内

その中で二人は声を交わしていた

一人は若き女、もう一人は年老いた男

女の方はその手に持つ水晶をいじりながら窓から外を眺めていた

男の方は大きな創りの椅子に腰を下ろしている

どちらも強力な魔導師であることが見て取れる

女の問いかけに男はゆっくりと頷いた

「そう……動くのね」

女は相槌を打つと水晶を弄るのを止め、男の方へ顔を向ける

「如何なさいます？マスターハデス？」

「放っておけ」

女の問いかけに顎に蓄えられた髭をなでながら男は一言で答えた

「奴らが動けば表の者どもも黙ってしまい」

「それに今回はあの方が動く

その隙にゼレフの封印を解くカギを見つけるのだ」

「ふう〜ん、あの子がねえ……」

あの子って本当に強いのか？」

奥の方から新たに現れた二人、陰に隠れてよく見えないがどちらもかなりの実力者だ

二人目の言葉に相槌を打った女は椅子に座る男に問いを投げる

「まあ奴は自由にさせておけ

それが奴との約束だからな

……あわよくば邪魔なギルドを幾つか消してくれることを願おう」

「フェアリーテイル…とか？」

男の言う『邪魔なギルド』の例えをだし、カマをかける

男はそれを分かっていて口元に盛大な笑みを浮かべた

収穫祭も終わり、やや落ち着いてきたマグノリアの街

その比較的奥の方に居を構える魔導師ギルド、フェアリーテイル

いつもは忙しいギルドが今日はその声も少し鳴りを潜めている  
今ギルドにいる魔導師は全員あるボードの前に集まっていた

「何ですかコレ？」

つい最近はこのギルドに入った魔導師、ルーシィはボードに書かれている内容が分からずに疑問符を浮かべている

龍士は入口の近くで腕を組んで目を瞑り、ティアラはその近くの椅子で遅めの朝食をとり、シバはカウンターで朝から酒を飲んでいるこのギルドの一部の主力メンバーは何とも自由に過ごしていたマネットは二階の椅子で昼寝中だ  
皆それぞれの場所でプライベートの時間を過ごしているのだろう

「闇ギルドの相関図を書いてみたの」

「あ…書いたの俺」

ルーシイの疑問にミラが答える

しかし書いたのはミラでは無くその傍にいる太った体系の男、リーダーダスが書いたようだ

「どうしてまた？」

リーダーダスの声をルーシイは無視して話を進める

ミラもリーダーダスのことを話題に出すつもりは無いようだ

…何ともまあ可愛そうな男である

ミラ曰く、近頃闇ギルドの動きが活発になってきたという

龍士達はその言葉に一瞬反応する

龍士とティアラはまた自身の作業に戻り（龍士はそのまま動かないが）、シバは完全に手を止めてそちらを向く

如何やらそれなりに興味を引いたようだ

酒瓶を片手にボードの前まで出向く

ボードを見た魔導師の一部は仲間が潰したギルドは何処の傘下かを見る

「あー!!鉄の森って!!」

「そうだ

あのエリゴールがいたギルド」

「アレは六魔將軍オラシオンセイイスってギルドだったのか」

「……………」

龍士はルーシィとエルザのやり取りをじっと見つめた後、相関図が書かれたボードに目を向ける

その様子をティアラは不安そうな目で見ている

龍士がどんな思いであのボードを見ているのかが分かる

数日前、龍士はティアラに桜の居場所を突き止めたことを告げているそして”あの夢”を見てから龍士の生活に覇気を感じなくなっていた

891

桜と対峙していた時はあれほどの啖呵を切っていたというのにいざとなるとこれほどまでに元気がなくなる  
いっそ迷惑なほどにヘタレな男だ

そうしてる内に騒がしくなってきたのでそちらを向くとシバが何か叫んでいるのが聞こえる

大方一人で潰すとも言っているのだろう

それに同調する者もいれば反対の者もいて騒いでいるようだ

「気にすることねえさ

この六魔將軍とかいう奴

噂じゃたった六人しかいねーらしいwww」

「どんだけ小せえギルドだよってwww」

話の内容が自然とバラム同盟の話になっていく

バラム同盟最少のギルドである六魔將軍の話になっているようだ

「たった六人で最大勢力の一角を担っているのよ」

六人という数の少なさを笑っていた者達はミラの言葉で押し黙る

ミラの言うことはまったくその通りでそれは六人で闇ギルド最強の一角であるということは

逆にそれ程の実力があるということの意味する

量より質

その言葉をそのまま体現したようなギルドだ

「その六魔將軍じゃがな……」

「儂らが討つことになった」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

定例会から戻ってきたマカロフからの突然の六魔將軍討伐宣言に皆  
驚愕する

「あ！お帰りなさいマスター」

「違うでしょ！！？」

ミラの的外れな言葉にルーシイが突っ込む  
普段ならティアラもボケるところだが龍士の心配ゆえかそちらに首  
を突っ込むことH無かった

そしてその龍士は相変わらずだんまりを決め込んでいるが、  
どうやら元々潰すつもりだったのか視線だけをマカロフに向ける  
マカロフも出た定例会で上がった議題が丁度六魔將軍のことらしく  
近々大掃討作戦が行われるらしい

「しかし今回ばかりは敵が強すぎる  
儂等だけで戦をしては後々バラム同盟にここだけが狙われること  
になる

そいでじゃ」

マカロフはそこで言葉を切る  
皆固唾を飲んで次の言葉を待った

「我々は同盟を組むことになった」

「『『『『『同盟!!?』』』』』」

「フェアリーテイル

ブルーペガサス

ラミアスケイル

ケットシエルトー

四つのギルドが各々メンバーを選出し、力を合わせて敵を討つ」

マカロフの言葉にその場にいた者（マネット以外）全員がざわついた

「マスター」

その中、ずっと黙っていた龍士が今日初めて声を掛けた

「何でこんな作戦にあたしが参加することになったのー!!!?!?」

結局ナツ、グレイ、エルザ、ルーシィ、ティアラ、ハッピーのいつもの五人（と一匹）

それに龍士が加わった六人（と一匹）になった

「俺だって面倒くせーんだ  
ぶーぶー言っな」

ルーシィの言葉にグレイが注意を入れる  
グレイの注意に反抗してルーシィはぶーぶー言い続けた  
ナツは相変わらず乗り物酔いだ

「マスターの人選だ  
私たちはその期待に応えるべきじゃないのか？」

ナツは放つとかれたまま話は進んでいく  
ティアラは窓の方をじっと見ていて話に入ってこない

「ん？如何したティアラ」

「いえ、別に何でも……」

そう誤魔化したティアラにグレイは一瞬眉を顰めるがすぐに元に戻る  
この場にはいないが今回は龍士も参加している  
しかし（本人は否定するだろうが）龍士は今、相当不安定な状態にある

ティアアラはそんな龍士の身を案じているのだろう  
グレイは敢えてそれを口に出さなかった  
当の龍士はずっとつわの空で御者台の裏で引いている荷物の上で胡  
坐をかいている

「……………」

龍士はただ空をじっと眺めている

六つの祈り 二体の悪魔（後書き）

ようやく六魔編開始ですね

投稿ペースを上げて頑張ろうと思っています

連合軍集結！！そして、龍士は…

集合場所、ブルーベガサス青い天馬マスターボブの別荘

後ろの荷台に明らかに必要のない大量の荷物を引いて集合場所に到着したFT一行

「趣味悪いところね」

「青い天馬のマスターボブの別荘だ」

「あいつか…」

「グレイ、仮にも他のギルドのマスターですからあいつ呼ばわりはちょっと……」

「ま、まだ着かねえのか………」

「着いてるよナツ」

ルーシイが到着早々失礼なことを口走り、エルザが屋敷の詳細をルーシイに告げる

グレイはいつかの定例会の時を思い出し、既に服を脱いだ状態で身を震わせる

ティアラは服を脱いでいることはスルーしたままグレイを窺める  
ナツは目下車酔い中で到着の催促をしているがすでに到着済みだ  
そのことをハッピーが静かに告げている

傍から見れば十分カオスな状況である

「FTの皆さん、お待ちしております」

「我ら青い天馬より選出されし」

「トライメンズ」

そこに天井から照らされる三人の男たち

「百夜のヒビキ」

「聖夜のイヴ」

「空夜のレン」

新たなカオスを呼ぶ者達…では無く青い天馬の代表者達だった

「か、カッコいい」

「え、！！??」

ルーシィがポツリと呟いた言葉にティアラは身を固まらせる

よほどショックだったのか(；。 )みたいな顔をしている  
そんなティアラを余所にルーシィはFT陣営の男に目を向ける  
そこにいたのは

「しまった！服着るの忘れた！！！」

「うぶ……」

「……こっちは駄目だぁ」

まだカオスの抜け切れない変態と車酔いの二人だった

ルーシィは自分のギルドに僅かながらショックを受ける

「噂に違わぬ美しさ」

「初めまして妖精女王、そして電姫」

「さあ……こちらへ……む？」

レンがエルザとティアラを先導しようとするがティアラがいないこ  
とに

気づき、辺りを探すと……

「……………」

壁の端っこの方へ非難していた

警戒するような目で三人を見ている

だが警戒する理由は何とも単純なもので

「……………女性を誘惑する男は敵です」

ヒビキはその様子を見て、

「あはは、嫌われちゃったかな？」

でも、来たくなかった何時でもこっちに来てね？」

少し残念そうな顔をしつつ誘うことを忘れない

今時の優男といった感じだ

ティアラはグルル、と唸り声を上げながら響きを睨んでいる

見ると電気も少し帯電してる辺り、多少本気のようにだ

ヒビキはその様子に苦笑し、テーブルの方へ向かった

そして妖精の尻尾からナツ・グレイ・ルーシィ・エルザ・ティアラ

青い天馬から一夜・ヒビキ・レン・イヴ

蛇姫の鱗からジュラ・リオン・シェリー

化け猫の宿からウエンディ

四つのギルドが集結したところでFT陣営から声が上がった

「あれ？龍士は？」

「「「あ！！！！！！！」」」

そのことに一人、ティアラを除いたほかの三人が声を上げる

他の三つのギルドはFTの騒ぎに首を傾げ

ティアラはその様子を暗い顔で見つめていた

「はあ、はあ、はあ……………!!」

マスターボブの別荘から少し離れた場所です。一人の男性が走っている。丁度180センチといった所に長身に、赤い外套を着ている。男：龍士は別荘から離れていくにも拘らず、ただ全速力で駆ける。先程来た道に戻るのではなく、寧ろその反対方向に距離を離していく。

「はあ、はあ、はあ……………!!」

龍士は唯駆ける

その目は唯一点にしか向けられていない。龍士は限界を超えるスピードで駆けて行った。

「はあ、はあ……………ッ!!」

いた!!!

そう言わんばかりに足を止め、目の前に広がる光景を見る。

そこに広がるのは血、血、血。

夥しい量の血が木に、地面に飛び散っていた。

そのまるで隔絶された世界に一人、ポツリと立っている女性がいる。最早腰まで伸びた黒髪に数か月前に見た覚えのある薄い赤の十二単衣。

右手に持つ刀は血で真っ赤に染まっていた

「……………ん？」

あれほど音を立てて接近していたにも拘らずまるで今気づいたと言わんばかりに後ろを振り向く  
そして龍士を見た瞬間

「あっ龍士、遅かったわね」

あの夢で見たような笑顔を龍士に向ける霞城桜

「……………桜」

龍士は唯彼女の名を呟くことしか出来なかった

さてここから動く物語

これは果たして負け戦？勝ち戦？

どちらにしてもこれから世界は大きく動く

連合軍集結！！そして、龍士は…（後書き）

来た……

とうとう来た……

日曜以外に更新できる日が！！！！！！！！！！

すいません騒ぎすぎました

でも冬休みだから多少は…ね？

成るべく多く投稿しますよ！！

…あつ、最後は気にしないで下さい

ただ落ちの為に書いたようなモノなので（笑）（おい

折れた剣 前編（前書き）

遅れてしまい、申し訳ございません。――

## 折れた剣 前編

side 連合軍

「見えてきた!!!樹海だ!!!」

戦闘を先走るナツが声を上げる

あれから龍士がいないことに気づいたFT陣営は周辺を探すが龍士は既に樹海の奥の方にいる為、誰にも発見されなかった

仕方なく先に進むことにした連合軍（FT除く）の顔には驚きが残っている

「まさか最終妖精が参加するなんて」  
ファイナルフェアリー

「僕たち必要あるのかな？」

「最終妖精、か………」  
ファイナルフェアリー

「ウエンディ!!もたもたしない!!」

「だつてえ〜………」

F Tの魔導師たち（ティアラ以外）は「龍士なら大丈夫」と口をそろえて断言し

青い天馬のトライメンズは龍士の参加に純粹に驚き

蛇姫の鱗のリオンはF T最強と名高い魔導師に興味を引き

化け猫の宿の代表、ウェンディと共に来たハツピーの”同類”、シヤルルは如何でもよさそうにしている

皆それぞれ走っている中、ティアラは一人浮かない顔をしている

「……………」

ティアラは龍士程ではないが”覇気”を扱うことが出来る  
その中でも”見聞色”は龍士に引けを取らない

だから聞いたのだろう

彼女の声を

龍士から耳にたこができるほど聞いた彼女の声を

「おわっ！！」

「？」

唐突に前を走っていたグレイの方から声が上がったのでそちらを見

ると

「……何をやってるんですか？」

ナツとグレイが地面でもつれ合っていた  
如何やらグレイの前を走っていたナツが急に立ち止まったことで  
グレイが勢い余って衝突してしまったらしい

「！！！！」

その時、今まで聞いたことのない”声”が聞こえた  
慌てて辺りを探すが近辺に不審な人物はいない

「おおっ！！！」

ふと、エルザが空を見上げて声を上げた  
ティアラもそれにつられて空を見る

そこにあっただのは集合場所で青い天馬が提案した作戦の要

魔導爆撃艇、クリステイナー

青い天馬は敵を一点に集めた所をこの爆撃艇で攻撃するというシン

ブルな作戦を  
ボブの別荘で提案してきた

確かにシンプルな作戦だが明らかに人間に対する作戦では無い  
だがその作戦が真つ先に出るといふことは敵がよほど強大だといふ  
ことだろう

他のギルドの代表たちはこの作戦はそれほど達成が困難だといふこ  
とを再認識した

それを見た皆の顔は少なくとも後ろ向きなことを考えていなかった  
だろう

ある者はその規模に驚き

ある者はその頼もしさに歓喜し

ある者は我が陣営の戦力に満足したことだろう

しかし、ティアラは違った

それを見た瞬間、皆と違って驚愕や焦り等が混ざったような顔をする

そして次の瞬間

「ッ!!!いけない!!!」

ドオオオン！！！！

クリスティーナが破壊された

「え！？」

「そんな……」

「クリスティーナが……！！」

皆何が起こったのか分からないといった様子の中、クリスティーナは墜落していく

その墜落ポイントを予測したティアラはその身に電気を纏い、急接近する

「ッ！？おい、ティアラ！！！！」

突然のことに驚き、ティアラを呼び止めようとするグレイ

しかし、ティアラはグレイを無視して落ちたクリスティーナに走り込む

そして

「千の雷”！！”」

「くくく！！！？？」くくく」

突然ティアラが爆発と墜落によって煙が上がるクリスティーナに向かって千の雷の圧縮版を放った

それにFTは驚愕する

それはそうだろう

千の雷はティアラの魔法の中で最大規模の魔法だ

それを墜落してきたクリスティーナにいきなりぶつけたのならば驚きもするだろう

放たれた魔法が物凄い勢いでクリスティーナに向かう

「おい、ティアラ！！」

「何してんだお前！？」

「あの中に何かいるのか！？」

驚愕から復帰したFTのナツ・グレイ・エルザの三人が声を掛ける  
ナツとグレイはまだ分かっているようだがエルザだけが的を射た  
質問をしてくる

だが、ティアラにはそれに答える余裕は無かった

ティアアラによって放たれた魔法は上に弾かれ、お返しにドス黒い魔力が帰ってきた

「!!!…下がってください!!!」

咄嗟に傍にいた三人を後ろに追いやり、すぐそこにまで迫ってきている魔力波に備える  
身体に電気が覆われ、辺りの空気が爆ぜる

「  
雷神<sup>ユービテル</sup>守護する雷速の盾!!!」

自身が所有する最高クラスの盾の名を開放する  
盾はその魔力波を押し止め、敗れることなくティアアラ達を守り切った

917

「ティアアラ!!!」

「ツ!!!来ます!!!」

大丈夫か

そうエルザが声を掛けようとする前にティアアラから合図が掛かる  
その声にFTだけじゃなく他のギルドの者達も警戒体制に入った

まだ煙を上げるクリスティーナから出て来たのは

「……うじどもが、群がりおって」

闇ギルド最強の六人

オラシオンセイブス  
六魔將軍

キーン、キキイーン

連合軍が六魔將軍達と対峙していた頃

樹海には龍土と桜による激しい剣戟の音が鳴り響いていた

両者の得物は鉞状の形をした双剣と二尺五寸程の打刀

どちらも相当な実力者だ

「……やれやれ、相変わらずの太刀筋だよ  
少しも懐に潜り込めない」

「それはこちらも同じよ？  
さつきから一度も決定打を与えられないし  
それなりに修行をしてきたようね？」

それなり

龍士は苦笑する

同時ににまだ彼女にとってはまだ”それなり”という括りにつけられていたことに

「……トレース投影、オン開始」

咄嗟に距離を離し、佐々木小次郎の所有していた野太刀、『備前長船長光』

通称『物干し竿』を投影する

「！」

「ふっ……！！」

いきなり戦闘スタイルを変えてきたことに桜は僅かだが動揺する  
どれ程修行を重ねていてもこれを初手で見切る者は少ないだろう  
龍士の扱う『投影魔術』の利点はそこにある

瞬時に得物を持ち替え、万能な立ち回りをする

戦闘スタイルを変更することで相手の動揺を誘う

龍士の武器は”手札の多さ”

しかし桜の武器は

「…へえ、やるじゃない」

「ツ！？」

” 並外れた才能”

桜が継承する流派、『桜刀斬神流』

その流派の中で歴代最強の実力を持つ桜の才能は想像以上だ  
その才能の前には龍土の手札など塵にも等しい

音速を超える疾さを誇る龍土の上段一振りを手元の刀の柄頭で物干し竿を側面から叩き折る

そしてそのまま腰に差してある鞘を抜き放ち、龍土に突きを放つ

「がつ………！！」

ドオン！！

腹に直撃を喰らった龍土はそのまま後ろの木を薙ぎ倒しながら吹っ飛ぶ

三本

四本

五本目の木でようやく龍土の体が停止する

突かれる直前、ほぼ反射的に強化の魔術を掛けたがほとんど意味は

無かった

「く…がはっ！！」

立つことも儘ならず、その場で吐血する  
明らかに致命傷だった

「情けない」

「！！！？？」

突然上から掛かってきた声に重い頭を上げる  
そこには先程自分に致命傷を与えた張本人  
あの頃とはすっかり変わり果てた姿となった幼馴染  
霞城桜が立っていた

「何を考えているのか分からないけど…

迷いがあるなら捨てなさい？

戦場では命取りよ」

「…………その原因が今日の前にいるのだがな」

桜の諭すような声に籠土は桜に聞こえないほどの声で突っ込む  
その様子を見た桜はやれやれと溜息を吐いた

「まあ、どちらにしてもあんたが勝つことは出来ないけど」

「…一つ聞いていいか？」

「？」

突然の質問に桜は首を傾げる

その様子を見て聞く気になったと解釈した龍士は先を進めた

「君は病弱だった筈だが……」

神に病を取り除いてもらったのか？」

だとしたら嬉しい限りだ

そう続けたいかのような口ぶりに桜はハッと鼻で笑った

「そんなことしないわよ」

私はそのままの体、前世と同じ体で転生させてもらったわ」

「なっ……」

思わず龍士は絶句した

それが本当なら今までの剣戟は不可能である

桜の剣士としてのスタイルは基本的に相手の攻撃を受けない

その流れるような足捌きで敵の懐に入る様は誰が見ても認める程だ

「彼女には才能がある」と

先ほどまでの剣戟は今までの彼女のスタイルを崩すやり方であった  
だから龍士は『病は治った』と解釈したのだ

「私は転生するに当たって三つお願いしたわ

一つ目は”そのままの体で転生”

二つ目は”オリジナルの魔法”

三つ目が……これよ」

そうしていきなり着物がはだけ、胸元があらわになる

「ッ!!???桜、それは!!!!!!」

龍士は胸元に刺さったそれを見て驚愕する

「悪刀 『鏢』

あんならこれが何か分かるでしょう?」

悪刀 『鏢』

龍土も投影経験のある”完成形変体刀”に分類される一本  
苦無の形状をしており、生命を強制的に活性化させるといふ特性を  
持つこの世で最も悪い刀である

桜はこれを心臓に刺すことで体を活性化しているのだ

「これが三つ目のお願い

態々神にお願いして宝具化までしてもらったのよ？」

はだけた胸元を戻しながらからからと笑う  
しかし現状は最悪な展開であった

桜の病弱加減は鑢七実程ではないが治る見込みはほとんどないと言  
われたこともある

それ程重い病気を患っていた桜に過度な動きは出来なかったのだ

それが無くなった今、桜はその才能を余すことなく  
いや、それ以上に使いこなすだろう

「話は終わり？」

ならこれで終わりにしましょつか

「……くっ」

そう言って桜は右手の剣を逆手に持ち、左手の鞘を剣のように持った

「 『舞刀曲 壱の型』

## 折れた剣 後編

「……ふっ、流石の電姫も一人では如何にもならんか」

「くっ……!!」

魔導爆撃艇、クリスティーナを破壊することで奇襲を仕掛けてきた  
オラシオンセイブス  
六魔將軍

闘いは本格的に始まったがその戦力は圧倒的だった  
ナツやグレイ、リオン達も倒れ、エルザは六魔の一人、コブラの蛇  
の毒に侵されている  
今現在立っているのはティアラ一人

先程から宝具の真名を何度も開放している  
いくらティアラの魔力が無限に等しい量があつたとしても尽きるの  
は時間の問題であつた

「ふん…ファイナルフェアリー最終妖精がいなければこの程度か」

「っ!!???」

その言葉にティアラは思わず身を固める

何故コイツが龍士さんの参加を知っている？

そもそもコイツは作戦を知っていたのか？

拳げれば切りがない問いがどんどん出て来る  
ティアラの困惑した顔を見て六魔のリーダー、ブレインはフン、と  
鼻を鳴らし

「ゴミどもめ……まとめて消え去るがよい」

右手に持つ杖を掲げると埋め込まれた水晶から  
闇の魔力が噴出してきた

その量はクリスティーナから打ち出されたモノの比では無い

「な……何ですの？この魔力……」

「大気が震えてる」

「まずい……」

その魔力に地面から地鳴りが聞こえてきた

「ダークロンド  
常闇回旋曲」

「くっ……」

危険と判断したティアラは皆より一歩前が出る  
なけなしの魔力を絞りだし、宝具の真名を開放する体制に入る

「なっ!?!」

「止めるティアラ!!死んじまうぞ!!!!」

だが皆の声にティアラは答えない

そうして収束された闇の魔力が

「!!!!!!」

ふしゅっ……

放たれなかった

杖の先から煙と音を上げて魔力が消失する

「如何したブレイン!!」

「何故魔法を止める!!?!」

突然の行動に六魔の方から声上がる

安堵からかティアラはその場で崩れ落ち、意識はそこで落ちた

仲間の声を無視したブレインの目は倒れ伏している連合軍の先

岩陰に身を潜めているウエンディに向いている

ブレインの顔は驚愕で満ちていた

「…ウエンディ」

「え？え？」

『舞刀曲 壱の型』

そう呟いた桜の声は何処までも透き通っていた  
声が森全体に染み渡る

その中を桜は手に持つ鞘と刀で白兵戦を仕掛ける  
といっても、刀は逆手に持っており、使っているのは柄頭のみだ

これが”舞刀曲” 壱の型

刃は使わず、鞘と柄のみを使った白兵戦がこの型の主なスタイルである

だが『桜刀斬神流』に使われる刀と鞘は普通のモノではない

まず柄頭には鉄と銀が埋め込んであり、先端を多少尖らせているこれにより、壱の型の白兵戦において絶大な威力を発揮するのだ

「くっ……」

この型の最も利点になるのは『リーチの違い』

懐に踏み込んで柄頭で敵を撃ち、離れた所を鞘で殴打する

桜刀斬神流の者達は皆総じて速度が高い

相手の懐に入り、撃退することなど簡単だろう

……元の世界ならば

「うおおおおお……！！！！！！！！」

龍士は叫び声を上げ、防御の体勢を取らずに突っ込んで行く

確かにリーチの違いで相手に有利になるのは利点だが逆に懐に入られるとこの型は

相当不利になる

なので

「『舞刀曲 弐の型』」

刃を相手の体に滑らせるように通して斬る弐の型を繰り出した  
弐の型は基本切っ先が前に出ていることが基本だが応用を聞かせ、  
逆手で行っている

「ちっ！！！！」

龍士は首を狙った一撃に舌打ちし、右手に持つ刀と同じ方向に飛ぶ  
これなら刃が届くことは無い  
それと同時に桜も横に飛ぶ

距離が離れた所で龍士は手に持つ干将・莫耶を投擲するが桜の跳躍  
により  
当たらずに終わる

と、ここで

「『舞刀曲 参の型』」

桜が空中で刀を離す

切っ先を龍士に向けた状態で離された刀は重力に従って落下していく  
しかし、丁度桜の足辺りまで落ちた所で

柄頭を蹴り飛ばした

蹴り飛ばされた刀は風を切って龍士に向かっていく

「っ!？」

無手の龍士はその場から対比して刀を避ける

が

「まだよ」

「!？」

いつの間にか後ろにいた桜がもう一度刀を蹴り飛ばす  
龍士はもう一度干将・莫耶を投影して刀を上弾いた  
上に弾かれた刀は回転しながら天に昇っていく

だが桜は既にこちらの懐まで迫っていた

「ッ！！？？」

「『無刀曲 弐の華』」

腰を低く構え、右腕で龍士の喉元に貫手、左手で胴体に手刀を入れる  
龍士左手の手刀を莫耶で、右手の抜き手を干将で防いだ  
本来破壊されるほどの威力を誇っているが足を器用に下げること  
で衝撃を和らげる

桜は自身の思惑が失敗したことに落胆することなく  
寧ろ次の手を打つためにその場で跳躍した

龍士は負傷と次々と来る手によって反応しきれない

そんな龍士を尻目に桜は空中の刀を手取る

だがその刀は使わず

「『無刀曲 肆の華』」

空中から相手に向かって震脚並みの蹴り（ぶっちゃけライダーキッ

ク)を龍土に放った

この蹴りは桜刀斬神流の中で最高クラスの威力を誇るが隙が大きい

その証拠に、龍土は危なげなく回避した

桜の動きが完全に停止したところを龍土は斬りかかる

本来ならそれが正解だろう

そう、普通の当主相手なら

「『舞刀曲 肆の型』」

その場で桜は踵を支点に大きく回転する  
刀を空中で取ったのはこの為だ

「っ！！！」

あらかじめ予想していた龍土はその回転に逆らう様に干将と莫耶を置く

回転を止めた所を莫耶で斬りかかろうとするが

「…………ツ!!」

あの時見た夢がフラッシュバックする  
その所為で龍士の動きが一瞬止まった

一瞬

それだけあれば桜には十分すぎる

「ふっ!!」

「があ…………っ!!」

抑えられた手とは逆の左手で龍士の腹部に掌底を喰らわせる  
さほど威力が込められていないのか一本目の木で龍士の体は停止した

「がはあ…………ぐっ、ゲホッ！ゲホッ！」

その一撃で激しく咳き込み、大量に血を吐いた  
この死合いで吐いた量は既に致死量を超えている  
それでも死なないのは『鞘』の恩恵を受けているのだろう

「無様ね…………」

「！」

突然前から聞こえた声に下に向けていた顔を上にあげる  
そこには既に刀と鞘を腰に差している桜がいた

「先程から思ったけど、アンタの動きに覇気が感じられない  
動きに余裕も見えないし何より見切りが遅すぎる

……この際はつきりと断言するわ

「あんに桜は救えない」

ボキッ！！

龍士の心に何か折れたような音が走った

折れた剣 後編（後書き）

何か後編とか言う割には後を引つ張る落ち

まあ大丈夫ですよね！！（おい

桜刀斬神流については近い内に別枠で全て乗せようと思います

## 殺人貴

お前に桜は救えない

昔そんなことを言われたことがある

その時はただ苦笑して受け入れた

……” あんなこと” になるなんて思ってもいなかったから

自分はその程度でしかないと本当に受け入れていた訳では無かった

そして桜が死んで

俺が死んで

この世界で英雄の真似事みたいなことをして

『正義の味方』と呼ばれ

憧れだけになってしまったことに

何の後悔も無かった

だけどいざ桜に会ってみて思ったんだ

「ああ、やっぱりこの程度か」と

分かっていたつもりだった

「自分に力は無い」と

だからこの手にあるモノで

出来る限り全てを救おうと

でも、無理だった

本当に救いたいモノを救うことが出来ない

……まったくその通りだったよ桜

俺にお前は救えない





龍士の体に僅かに込められていた力は抜け、その場で膝をつく

その様子を見た桜は唯冷たい目で見ていた

「……本当はしたくなかったけど……しょうがないよね」

鞘に仕舞っていた刀を抜き放ち

「 さようなら」

振り下ろした





キイイイイイイン!!!!!!

静寂を貫く甲高い音が鳴り響く

音の中心にいるのは薄い赤の着物を着た女と

全身黒の男

「……悪いが、そいつは俺が”殺す”と決めていてな

誰であろうと殺してもらうのは困るわけだ」

「!!…あなたは……」

男は桜の体を前方へ弾き飛ばし、手に持ったナイフを腰の後ろに着いた鞆に差した

あの頃と変わらない全身黒の服装に

後ろ腰に交差するように差されたナイフと刀

刀は桜の刀より一尺ほど短い一尺五寸程の小刀というより脇差に分類されるモノで

柄、鍔、鞆共に服と同じで黒で統一されている

あの頃と違つと言つと髪が幾分か伸びて目に包帯をしている所が目立つ

「そして再度悪いのだが…俺はコイツの全力を”殺し”たい

仮に君がコイツの重みとなるのなら

俺が君を”殺し”てやろう」

「ッ！！……カオス…デーレブレ」

その場に居合わせた者がいればこの光景をこころ呼ぶだろう

”殺人責の再来”と

## 殺人貴（後書き）

今回少し短いです

そしてナマ厨（名前厨二の略）再登場です！！  
いやぁ自分もまさかここで出すとは思わなんだ  
（おい

挫折（前書き）

タイトル付けた時げんなりしたのは一体……？（汗

## 挫折

「貴方とやるのも楽しそうだけど…」

「ここで怪我するのも嫌だから遠慮するわ」

そう言い放った桜は一回の跳躍で木の天辺まで飛び、彼方へ走って行った

ピリピリとした雰囲気を出していたカオスは

「ハア、と溜息を吐いて龍士の方へ向き直る」

「立てるか？」

白々しく手を差し出してそう聞いてきたカオス  
思わず手を掴もうとするがハツとなって引っ込めた

どうせコイツのことだ

手を借りた瞬間そこから解体バラされるに決まってる

そう考えて龍士は自分の力で立つことにした

残った力を脚にフル動員させて立ち上がる

それを見たカオスはニヤリとイジラシイ笑みを浮かべた

やることは無いと言わんばかりにカオスはこの場を去ろうとする  
それを見た龍士は慌てて呼び止める

「待てカオス、何故貴様がここにいる？」

「いやそもそも何故俺たちがここにいると分かったのだ」

前を歩こうとしていたカオスは

ハア、と溜息をついて龍士の方へ再度向き直る

「まず話す前に注意しておくが今はカオスでは無い

俺のことは黎斗と呼べ」

今の名を耳に入れた龍士は即座に記憶し、首肯する

「まあ深く説明することなど何もないがな  
お前も知っているだろう？」

”転生者の宿命”を……」

「転生者の…宿命……」

「神から聞いていないか？」

俺達転生者の性質を……」

その言葉で気が付いた龍士  
だが納得できないのか、目には少し疑いの色が見える

「神が言っていた『転生者たちは惹かれあう性質』か!？」

だがそこまで頻度は高くないし現に会っているのは二人だけだ」

「それはこの性質に抗い、未だ接触を避けることが出来ると言うだけだ  
この宿命は絶対であり、必ず接触することが約束されている」

鞘に入ったナイフの切っ先を指先に乗せて弄りながら語る黎斗  
手を組んで気にもたれながら話を聞いている龍士はかなり重症だが

……

「む？」

「ッ！！？」

突然傷が完治したことに關心のなさそうに見る黎斗と瞠目する龍士

「これは…『鞘』か？」

「成程：あの神のことだ

その場になくとも魔力だけを送るなんて容易いのではないか？」

あれでも神だしな

と付け加えて一人納得する黎斗

自身の体を見たまま固まっていた龍士は一人考え込む

「（いや、あれには師匠の魔力が必要だ

いくら神だからって他者の魔力を別世界の者の体内に入れることが出来るのか？」

……いや、実際出来ているのだからできるのだらう、な………）  
…流石神だ」

思考の末にポツリとつぶやいた一言を聞いた黎斗はその場を歩き去る

「俺はもう行く」

いつか会う時は……敵同士だ」

包帯で目は見えないが恐らく青くなっているだろう

それを見た龍士はただ一言

「ああ…また会おう」

感謝でも皮肉でもなく唯再開の言葉だけを伝えた

黎斗前回のように立ち止まらず、ただ森の奥の方へ消えて行った

「…………ふう」

溜息一つ

龍士は先程寄り掛かっていた木に再び寄り掛かりポツポツと言葉を並べていく

「……やれやれ、師匠達以外に敗北など初めて経験したが…存外にキツイなこれは………」

やれやれ

とまた溜息を1つ

此処で何故だか先程から敢えて話題に挙げなかった桜の一言が頭に流れる

あんたに桜は救えない

「……くっ…何が『正義の味方』だ」

この目に入るモノを可能な限り救ってきた

だが実際はどうだ？

その行為自体が彼女の重みになっていたのではないか？

彼女を救おうとしていたつもりが逆に苦しめていたと？

本当に彼女は救いを求めていたのだろうか？

「……………くそ」

駄目だ

そう考えていてもつい言葉に出そうになる  
此処で口にしたら今までがすべて崩れてしまっ  
たがどうしても口にしてしまっ

顔を下に向け、流れる涙をそのままに今まで封をしていた言葉を紡  
ぎだす

「……………俺に…桜は……………救えない……………!!」

挫折（後書き）

一日明けのこの駄文

いやあ申し訳ない（汗

仲間がいるから 前編(前書き)

また例にももれず前後編……orz

## 仲間がいるから 前編

side 連合軍

… あっ 何だか久しぶりな気がしますね

どうも、ティアアラです

各マスターからの推薦によって選ばれた魔導師たちによる連合軍で  
闇ギルドの頂点、六魔將軍オラシオンセイブスの討伐に向かったのですが結果は惨敗  
龍土さんは……今、手が離せない状態ですし……

そうして鬭いの途中で不覚にも気絶してしまったわけですが…

起きてみると周りが少し騒がしいみたい……  
ルーシイに話を聞こうにも蛇姫ミミアスケイルの鱗の女性の方（何処かで見覚え  
があるのですが…忘れてしまいました）と口論しているし  
天馬の男どもとは話したくないし…と言うか一頭増えてませんか？

あっよく見たらジュラさんが戻ってきてる

……カツラ取ったんですね（汗

で、ナツやグレイは……

……あるえ？

見間違いでしょうか？

エルザの右腕を切り落とそうとするかしないかで揉めてるみたいなんですが……？

…成程、大体わかりましたよ

つまりエルザが相手から毒を喰らって行動不能になってしまったのが事の発端ですね

腕を落とすか落とさないかはエルザが言ったことが始まりでしょう

彼女なら言いかねませんしね

正直こうでもしないと単純に戦力不足になるだろうしでも仲間が傷つくのは

少し心苦しい物が……

って、あ…ちょっとまだ結論出てないから落とさないでえ〜〜!!

ガキィ

「…貴様はこの女の命より腕の方が大事か？」

「他に方法あるかもしれねえだろ？  
短絡的に考えるなよ」

…ほっ

良かった

グレイが止めてくれなきゃ危ないところでしたよ

「ッ！！？…ティアラ！！お前起きてたのか！？」

今になって気づくグレイと皆  
え？今更ですか

「はい、先ほどからずっと」

「何で一言も言わねえんだよ！？」

こっちは心配したんだぞ！！？」

お、おおう

グ、グレイが相当怒っていらっしやる

「でもとても会話に入れる雰囲気では……ッ!？」

「あん?どしたティア…って、おいティアラ!!？」

後ろからみんなの呼び止める声があるがそれどころではない

この今にも消えそうな『声』は!!間違いない!!

「龍土さん!……!……!」

「……はあ」

あれから木に寄りかかって休んでいる訳だが

疲れと魔力不足でまったく動けん！！

…いや、自慢できることではないのだが（汗

あれからずっと…その……泣き続けていた俺はしばらくここで疲労  
を取る為に休息に  
ついていた訳だが……

む、マズイ

余計なことを考えているとまた崩れそうだ

「……………参ったな」

魔力が全く回復しない

『鞘』が回復してくれるのはあくまで”傷”だけで疲労その他は全く関知しない

この際神に頼んで『鞘』から魔力摂取できるような機能付けて貰おうか？

それに完全、というより大体八割だったな

見た目切り傷とかは回復していたが打撲その他内側に来るダメージはまだ回復し切っていなかった

まあ、このままでも何とかなるか……

俺のような役立たずがいなくとも「龍士さん!!」……………む？

そこに猛スピードで突っ込んできたのは

この世界に入って初めて会った人間（聞こえは悪いが…）

ティアラだった

「龍土さん!!」

龍土さんを見つけ、その姿を見た時は一瞬固まってしまった

切り傷などは既に回復が完了しているみたいだけど魔力はひどい状

態だった  
最早一割も無い状態でなぜこうも平然としているのが不思議で堪らない

「ああ……ティアラか……」

身体を動かすのも辛い筈なのに右手をヒラヒラとこちらに振って平然としている

「ど、どうして……」

こんなになるまで

そう続けたくても続けられなかった

彼女との間に何があったのか？

争ったのは分かる

でもどうして龍士さんだけこんなに傷ついてるの？

「……やれやれ」

私が言いたいことを察した龍士さんは溜息一つ吐いて話し始めた

「君の予想通り俺と桜は戦った……が……見事に惨敗したよ……この通りだ」

両腕を肩の高さまで上げてやれやれと首を振る

それならどうしてここまで平然としていられるのか尚更分からない

だって……

だって桜さんは龍土さんの……

「……どうしてって顔をしているな？」

その言葉に首を縦に振るだけで答える

このまま終わらせるべき問題ではないのは龍土さんも分かっている  
筈だ

私はこの八年間ずっと協力してきたんですから……

「……気づいたんだ」

「？」

気づいたって…何を？

「今まで生きてきて…この目に映る者全てを救いたいと願い、動いてきた

でも…それは間違いだったのだ、とね……」

「ッ！！？」

何、を……

「一人を救えば次は十人救い、その後はさらに百人救ってきた……

そこから視野が広がり、この目に入る者全てを出来る限り救ってきた

いつからか『正義の味方』と呼ばれるようになった

……だがそんなことはどうでもいい」

「！……」

自身の肩書を…

今までの行い全てを否定した龍土さん

「…以前からずっと思っていたんだ

本当は桜を守ればそれでいい…って

でも現実には違った

いくら他人を救っていかうと本当に救いたいモノを救うことが出  
来ない

いざという時に使い物にならなかったのだ俺は……

俺は…俺は間違っ

」

パチイン！！

龍土さんの声はそこで止まった

何故なら

「……本当にそう思ってるんですか？」

私が龍土さんの頬を叩いたから



仲間がいるから 前編（後書き）

ティアラの怒り……（汗

龍士の運命はいかに！？

（おい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0776w/>

---

剣製を継ぐ者

2011年12月29日12時54分発行